
名も無き小話（掌編 / 短編集）

口グ核人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名も無き小話（掌編／短編集）

【Nコード】

N1986E

【作者名】

ログ核人

【あらすじ】

さっくり読める（はず）の、いろいろなお話がある“掌編／短編集”。【毎週一話・更新】

小話：其の壱

某日。

とある用事からの帰路の途中。

空気をジメジメとさせる雨が降り荒ぶ、傘をさしていても服が湿る、そんな苛立たしい気象の夕暮に、

私は一匹のセミと出会った。

正確に言うなれば、出会った、ではなく、発見しただろうか。

そのセミは、雨にうたれて、道路を這いつくばっていた。

死んではいなかったが、もう死ぬのが秒読みだろうと推測できるほどに、そのセミは弱っていた。にもかかわらず、それは道路を這っている。

這うその先には、電信柱があつた。

そのセミは、電信柱を指しているようである。

昆虫であるセミが、電信柱を指するのは、木に止まって鳴くという行為を 細胞に埋め込まれた子孫を残すという、自然の法則にしたがつてのことである。所詮、脊髄反射で胴体を動かしているだけの、下等生命。

死にぞこないのセミを相手にバカバカしいけれど。

あるいは、雨の日だから、心身ともに湿っぽくなっていたのかもしれないが。

なんでこのセミはこんなに必死なんだろうか、とか考えた。

約七日で死ぬセミである。

寿命がそれであったとしても、鳥に食われたり、人に捕まったり、色々な理由で、七日間もたたずに死ぬだろう。

目の前で道路に這いつくばるセミは、寿命だろうか、雨に打ち落とされたのだろうか。

しかし、よくよく見れば、そのセミの尻は欠けていた。

鳥についばまれたのだろうか。

だが、運がいいのか悪いのか、それ致命傷にならずに、そいつは道路を這いつくばっている。

鳥に食われて死んだ方が、幸せだったんじゃないだろうか、と考えた。

他の生き物に、自らと同じような思考、想い、思い、気持ち、をだぶつかせて、勝手に共感したり感動したりするのは、人の勝手だと思っけれども、しかし私はそのセミを見て思う

そこまでして、鳴きたいのか。

そこまでして、存在を示したいのか。

どうして、そこまで頑張れるのだろうか。

どうして、そこまで諦めないのだろうか。

と。

尻を欠けさせてまで、身体の中身をはみ出させてまで、どうして電信柱を目指すのか。

別にそのセミになにか思考があつて、その行動をしていたとは思わない。所詮、セミはどこまでいっても、セミと言う昆虫でしかない。

自分が死にそうだという考えすらないだろう。

死という未来を見れるのは、人間の特権だ。サルだって、二日先くらいまでしか、未来をイメージすることはできないのだから。

だから、昆虫に死という概念は無いだろう。死を知らず、セミは目的の為に、死にそうになりながら地面を這っている。

それが死を知らないセミだとしても、死をイメージできる私から見れば、

そのセミは生きていた。

地べた這いつくばるその行動に、意味があるように思えた。

何故だか、自分がそのセミにも劣るように思えた。

何故だか、腹立たしくなって、歩みを再開させた。

翌日。

雨が降っていたのがウソのようなほど突き抜けた青空。

昨日の道を通った。

あのセミが居た。

アリの解体され、食われていた。

電信柱まで、小指の先つちよほどの距離だった。

私にとってはどうという事のない距離でも、死にぞこないのセミには致命的な距離だったらしい。

このセミは、きっと自分が死んだことにも気づいていないだろう。だが、その屍体はアリの食事という意味を持っている。

昨日は生きていた。

今日は活きている。

今を生きているのか、生かされているのか、わからない自分は、果たして、死んで尚、

このセミほどに、その死に意味を持たせることが出来るのだろうか……

せめて意味のある死を願うのは、

私の業だろうか……

小話：其の式へハッピーバースデー（仮題）

来る日は、僕の誕生日であった。

校内。図書室にて、なんとなく自らの誕生日を語った僕に、

「なら、誕生日祝いに小旅行しないか」

腐れ縁も更に腐った仲の悪友が、唐突な申し出をしてきた。

「行くとして、だ。資金はどうするんだよ」

無料で満喫できる旅行など、今のご時勢、存在するとは思えない。

「そりゃあ、割り勘だろうよ。当然」

「二人で？ 割り勘」

なにが悲しくて、野郎と二人、旅行代金を折半して旅をせねばならんのだ。

「いや、俺だってお前と二人きりなんて、斬新さのカケラもないからゴメンだ」

しれっと真顔でぬかしてくれるが、

「僕の誕生日祝いじゃないのかよ」

手段と目的が一致してない発言してくれるよ。まったく。

「ま、適当にメンバー見積もっておく。旅行計画もオレが立てる。

お前は金を出すだけでいい。オレからの連絡を待ってるがいいさ。

発狂しない程度に胸をドキドキさせてな」

言っと、友人は席をたった。計画を立てるために旅行代理店を巡るのだという。

僕は、彼に同行するつもりはなかった。

彼ならそれなりに楽しい計画を立ててくれるであろうと確信していたから

そんなわけで僕は、友人が計画してくれた誕生日祝い小旅行へと向かう事になった。

先に記しておこう。

今回の誕生日。

僕の人生という歴史において、絶対に忘れられないモノになったと。

そして数日後。

今は移動するワゴン車のなかである。

彼はいつたいなに考えたのか。僕の誕生日祝いは、人里離れた山岳部にある、天体観測を好む人々しか訪れない、老夫婦が営むという小さな宿にてとり行われることとなった。

僕を祝ってくれるらしいメンバーは、まあ予想通りに、いつもつるんでいる面々で。僕を含めた男が三人に、女が二人の、合計五名である。

が、宿まで向かうワゴン車には、僕を含めた四人しか乗車していない。

一人はワゴン車を運転する宿のご亭主で、他二名は女友人である。男友人の一人は都合により遅れてくるらしい。で、言いだしっぺの男悪友は先行し、宿で祝いの準備をしてくれているそうだ。

いったいどんな事を考えているのか、男悪友の考えている事は予想できないが、一つだけ彼を賞賛してもよいと思うことがある。

それは僕の隣に座る黒髪の乙女を、この小旅行に呼んでくれたということだ。いま彼女は、後部座席でダルそうに小さく横になっっている長い茶髪の女友人へ気遣わしげな視線をくれているが、果たして僕がその眼差しの先に登場できる日はいつになるだろうか。

とか、そんな感じで僕が、黒髪の乙女に見ほれているうちに、気がつけば目的地に到着していた。

宿に到着して、僕は女将さんに案内されるがままに、部屋へ向かった。

黒髪の乙女は、到着するなり胃の中身をリバーシそうになりお手洗いへと直行した長茶髪の女友人を気にしているようで、様子を

見てくるとのことだった。

僕も長茶髪の女友人を心配していないわけではないが、移動する車中にて、ガバガバとお酒をあおりまくっている図を思い返すと、苦笑いを顔面に貼り付けたくなくなってしまふ。まあつまり、自業自得だろつと。

「こちらです」

僕が思い返しに苦笑を浮かべていたら、部屋に到着したようで、女将さんが一室の前で微笑んでいた。

「ご友人さまは、既にご到着されております」

そのご友人さまというのは、言いだしっぺの悪友である。

開けてくれた扉とくぐり、ふすまの前へ。あいにくと荷物で両手がふさがっている僕なので、女将さんにふすまを開けてもらい

そして僕は、荷物を取り落としてしまった。

目の前に広がる部屋の、あまりの光景に。

手が、脚が、痙攣した。

心拍が異常をきたし、その心拍に狂わされたがように虫のような呼吸が乱れ、胸の辺りがイヤに苦しい。

僕に遅れて部屋の中を見た女将さんも、僕と同じような状態に陥る。

きつと、普通でいられる人間なんて存在しやしない。

それほどに、部屋は奇異で満たされていた。

悪友が、

腐れ縁も更に腐った仲の悪友が、

タタミの上で、大の字に寝転がっていた。

マヌケなほどに眼をむいて、口を半開きにして。

タタミを真っ赤に染め上げて

悪友は、首から血を流して横たわっていた。

反射的に、僕は悪友に駆け寄ろうとしたが、しかしそれは防衛本

能によつてはばかられた。

血を流して死んだように横たわる悪友を見下ろすように、その人物がいたからだ。

眼の部位だけ穴の開いた黒い目出し帽で顔を隠し、全身を黒いロングコートでおおった人物。その黒い皮手袋で隠された右手には、不気味な又メリをおびたサバイバルナイフが握られている。

僕は心臓をつかまれたような感覚におそわれた。

黒い目出し帽からのぞく狂気に満ちた瞳が、こちらへ向けられている。そして、その人物は動く。決して素早いわけではない。だが、見えない手に捕まっているような僕には、迫り来るソレから逃れ

数瞬の差で、僕は駆け出すことに成功した。

僕は老いた女将さんの背を無理矢理に押し、駆け足を強制しながら、その場から逃げだした。

幸いにして、狂気の人、走ってこなかった。しかし確実にこちらへ歩んできている。

逃げなければならぬ。この場から。この宿から。

僕と女将さんは玄関横にある談話場まで駆けた。

談話場にあるソファには、長茶髪の女友人がダルそうに座っている。そんな彼女に、宿のご亭主がお茶を出していた。黒髪の乙女は長茶髪女友人へ薬でもやるつもりなのか、手持ちカバンの内部を探っている。

僕は迫り来る危険を叫ぼうとしたが、あまりの事に気が動転していたのか、狂気に満ちた部屋の方角を指差したまま、息を詰らさずしまった。

だが、僕の表情が雰囲気か、を読みとってくれた談話室の面々は、なにかただならぬ事を僕が告げようとしていると理解してくれたよ
うで、

「どつ……したの？」

黒髪の乙女はいくぶんか当惑気味に、僕を見上げてきた。いまだ指差し姿勢で口をあうあう動かすだけの僕は、

「っ！ っ！ 逃げろっ！」

ツバを五回ほど飲み下したのちに、どうにか言葉を告げることに成功した。そして黒髪の乙女の手を取り、玄関口へ駆け出す

が、黒髪の乙女はその場で踏ん張って、逃走を阻害する。

「ねえ、きゅ、急にどうしたの？ なにかへんだよう」

詳しい説明を求める気持ちは、理解できないことはない。だが、今はそのヒマが惜しい。

「いいからっ！ 早く、速くみんな逃げてっ！」

わめき急かす僕を、頭のおかしくなった危ないヤツとでも判断したのか、黒髪の乙女はふるふるると首を横に振り拒絶を体現する。

真に、危ないヤツがもたらす危機が迫っているというのにつ！

「い、イタイよう」

黒髪の乙女は痛みに顔を歪める。僕は苛立ちのあまり、手に必要以上の力を込めてしまっていたようだ。

だが、たとえ黒髪の乙女に嫌われたとしても、僕は手を離すわけにはいかなかった。

失うくらいなら嫌われるほうが望ましい。当然の選択だろう。

僕は三度、逃げるよう叫ぼうと、視線を黒髪の乙女から外した

そこに、ヤツが居た。

手にしたサバイバルナイフを振り上げて。

狂気をたたえた眼は、柱にもたれてへたり込んだ女将さんへ向いている。

目出し帽に隠れているハズの口元が、薄笑みを浮かべていると思えてしまうのは、果たして僕の妄想だろうか。

「っ！」

僕は女将さんに危機を伝えようとしたが

僕は超人ヒーローではない。

救える数には、限りがある。
やれることには限界がある。

僕は最後まで見届けず、目を剥いて驚愕している黒髪の乙女を強引に引つ張り、玄関口へ。

まずは、逃げなければならぬ。

逃げ延びなければならぬ。

靴もはかずに、外へ駆け出した。

背後を振り仰ぐことなく、迅速に脚を駆動させ

その瞬間、聴覚からもたらされた情報が、僕の身体をピタリと起動停止させた。つられるように黒髪の乙女も立ち止まる。

怖くて、宿の方角を見れなかった。

でも、確かに聞いたきがする。

地獄の底から噴火しているような、壮絶な

しばらく走った。

その間、僕と黒髪の乙女は、一言も交わさない。そんな精神的余裕は、とうの昔になくしている。

掴んだ手に、ガクンと負荷がかかった。

見てみると黒髪の乙女が、もう走れないと体で表していた。

そこでやっと、僕は背後を確認する。

ヤツは居なかった。

どおっと全身から力が抜けた。へなへなと情けなく、僕はその場に尻をつく。黒髪の乙女も、息を切らして倒れこむ。

どれほどへたり込んでいたのかは、わからない。

沈黙が場を支配する。だが、静寂はない。山が木々が野生動物が、自然が発する音が、静寂を与えてくれない。

木々の間から、視線のようなものを感じてしまう。

だがそこにいるのは小動物か、幻想か。

その時、壮絶な振動が僕を襲った。

驚きで人は死ぬ。本気で僕はそう思った。心臓が止まり、息を詰らせ窒息すると、本気で思った。

しかしどうにか僕は死ななかつた。呼吸を整え、ポケットに手を突っ込む。そして振動の原因を引っ張り出す。

ケイタイ電話である。

宿へ訪れる途中の車中では、圏外となっていたはずだが？

疑問に思いつつ、僕は液晶画面を見る。そこには、遅れて到着することになっている男友人の名前があつた。好機だと思った。警察を呼んでもらおうと。異常事態だと、うったえよう。そう心に決め、通話ボタンを押す

「あーでたでた。おーい。お前なにしてんだよ。せつかく到着して、さあさあ楽しい宴だと思つたら、本日の主役が居ないって。お前が居なけりゃ、ただの飲み会になつちまうじゃないか。愛しい乙女と二人つきりになりたい、その気持ちまでは否定しないけどな。しかし俺らのことも頭の隅っこでいいから置いてくれやな。ああー、みんなもうすでに飲み始めちゃったよ。というわけで早く戻ってこいよ」

一方的に喋りまくつたあげく、

「あ、おいつ！」

僕が一言を発す間もなく、彼は通話を切った。

信じられない。そう思いながらも、僕はリダイヤルボタンを押した。

押した、のだが、通話が再開されることはなく。液晶画面を確認すると、そこには

圏外の文字が刻まれていた。

どういうことだ？

僕は不可解に思いながらも、通話相手が男友人であつたことを黒

髪の乙女に告げた。

「う、うそ……。だって、だって宿は……」

彼女は困惑したように、あるいは怯えたように、その口から漏らした。

僕も彼女と同じ気分だった。不気味な怖さを感じている。

何事も無かったかのように、宿では事が進行している。果たして本当なのか？

夢を見ていたつもりはない。

どうということなんだ……。

そして僕と黒髪の乙女は、小さな期待を懐きつつ、来た道を戻ることにした。

飲み会が始まっているなら、喜ばしい。

実に喜ばしい。

そう思う脳ミソとは裏腹に、足取りは慎重かつ懐疑的であった。

来た時の百倍は時を費やして、僕たちは宿を視界に捉えた。

隠れているようにと、僕は黒髪の乙女に提案したが、一人ではほうが恐ろしいと彼女はそれを拒んだ。

僕としても、拒んでくれてありがとうという心境であった。口でいかに言ったところで、一人では怖い。

玄関口をくぐると、そこには

なにもなかった。

変なところは、なにも。

談話場を見やっても、なにもない。長茶髪の女友人も、宿のご亭主も、女将さんも、誰も居ない。

「ウソだ」

僕は、本来はウソであったことを喜ぶたいのに、喜べずにいた。

黒髪の乙女も、自らを抱きしめるようにして、理解し難い現状を

必死に飲み込もうとしている。

いや、いやしかし僕は実際に、長茶髪の女友人、宿のご亭主、女将さん、がどうにかなる光景を目撃したわけではないのだ。過剰な妄想をしていただけかもしれない。この三名に関しては、そう思い込むことは可能だ。

だがしかし

「部屋へ行ってみよう」

あの怪異で満たされた部屋の光景が、僕の過大妄想であったなんて、そんなわけあるはずがない。あれは、あれは否定したい現実だった。

僕は黒髪の乙女の手をしっかりと握り、自分が宿泊するハズだった狂気の部屋へ向かう。

開け放たれているはずの扉は閉まっており、その封印を解くには、ただならぬ覚悟と度胸を必要とし、僕はしばらく扉の前で立ち尽くし

し
どうにか部屋の内部へ侵入し、これも開け放たれているはずのふすまを

開いたそのさきには、キレイな畳を敷き詰めた部屋があった。

「そんな……」

ありえない目の光景に、僕は畳に這いつくばって悪友の血痕をさがす。

黒髪の乙女は僕の行動を奇怪に思ったのか、なにをしているのか訊ねてきた。

僕はこの部屋で見たことを慎重に語る。

言っただけは、この理解に苦しむ状況に、発狂寸前だった。そこを狙ったかのように、振動が僕を現実に戻す。

圏外であったはずの携帯電話は、再びつながったらしい。ポケットから取り出し、液晶画面を見る。

またも男友人からであった。

僕は素早く通話ボタンを押し、

「おいっ！ いまどこにいるんだっ」

彼が話し始める前に、一方的に喋りきられる前に、言葉を発した。「な、なんだよ。いきなり怒鳴るなって」

男友人の声はいくぶん戸惑いを含んでいたが、

「宴会場だよ、宴会場。つたくさ、お前たちが遅いから、みんな顔を真っ赤にして寝ちまつてるぞ」

確かに、僕と黒髪の乙女が宿へ戻り来るまでは相当の時間を要したから、あまりお酒に強いとは言いがたい面々を思うと出来上がったままでも不思議ではない。が、いまはそんな事はどうでもいい。

「絶対に、電話を切るなよ」

伝え、

「なんだよ、そんなに俺の声が聞きたいのか？」

男友人はとぼけつつも通話を切らずにいる。

僕はケイタイ電話を片手片耳に、もう片方の手は黒髪の乙女としっかりつつなぎ、急ぎ足で部屋から出て、宴会場を目指した。

この引き戸の奥でみんなが飲み騒いでいる、らしい。

だが、楽しくも騒がしい音は、目の前にいるのに聞こえてこず。

「本当に宴会場にいるのか？」

僕はまだ通話を続けている男友人に訊いた。

「居なきやどこにいるんだよ、俺は」

彼はなかなば呆れともとれる口調でつけてくる。

僕はツバをゴクリと飲み下し、黒髪の乙女へ視線をやり、お互いに背きあってから、引き戸に手をかけ、一気に引いた

そこに、

全身を黒いロングコートと目出し帽で隠した人物が、背を向けて居た。

右手にナイフを、左手は耳にあてている。

僕はその場で固まるしかなかった。
全身黒のヤツが振りかえる。ネバっこく、ゆっくりと、みせつけ
るように。

耳にあてているのは左手ではなくケイタイ電話のようだ、という
のがわかった。

「なあ、今も宴会場にいるのか？」

僕はケイタイの向こう側にいるはずの男友人に問いかけた。

「ああ、居る」

当然のように彼は返す。

「そう……か。じつは僕も宴会場に居るんだ」

「ああ、知ってる」

目の前の黒ずくめは、ケイタイ電話を捨てた。

ナイフを構えて、こちらへと向かってくる。

「どう、して……。どうしてなんだ」

僕は固まったまま、いまだにケイタイ電話の向こう側へ、すがり
つくように訊ねた。

「どうして？ 決まってるだろう」

ケイタイ電話の向こう側で、彼はことさら陽気に答えてくれる。

「今日がお前の誕生日だから」

僕は、僕はいったいなにをしたんだろう。

黒ずくめは、ナイフを構えて、ゆっくりとこちらへと歩んでくる。

僕は必死に過去を検索した。

これを“走馬灯のように”というのだろうか？

意図せずに犯す罪ほど恐ろしい。そんな言葉が脳裏をよぎる。

黒ずくめは、目と鼻の先で。
ナイフを握った手が腕が伸びてきて。
すべてがスローモーションに見えた。
僕は　殺されるんだ、と確信した。
ただ気がかりなことがある。
いったい僕のなにが、彼を狂気にかりたてたのか。
そして願わくば、黒髪の乙女には手を上げないで欲しい。
そんなことを考えながら、僕はあきらめたよう目を閉じた。

死ぬという感覚を、僕は当然のように経験したことがない。だから、死がいかなものなのかわからず、それは案外、苦しみをともなわないのだなと思った。

「誕生日おめでとう」

死した悪友の声が聞こえた。

僕のせいで殺されたのに、祝ってくれるとは。

腐れ縁も更に腐った仲の悪友　僕は泣きたくなった。

ありがたく、申し訳なく、僕はどうしたらいいのだろう。

「それで、俺たちからの誕生日プレゼントはどうだったよ」

悪友の言うことは、しかしなんのことなのだろうか？

「おい、おーい」

という悪友の声とともに肩を揺らされて、僕は目を開けた。

黒ずくめのヤツが真正面に居た。

「ひっ！」

僕は思わずケイタイ電話を取り落とした。

「おいおい、そんなにビビらなくてもいいだろ」

悪友の声で、黒ずくめは言った

「はっあ？」

僕はわけがわからずマヌケな声を漏らす。

どういうことだ。どうして……？

「まあ、怖がられないよりはましか」

そう言って、黒ずくめは目出し帽を剥ぎ取った。

そこにあっただのは、部屋で首から血を流して横たわっていた、悪友の顔だった。

その瞬間、乾いた発破音が鳴り、

「ハッピーバースデー」

愉快そうな男女の声色と拍手の音が聞こえてきた。

なにが起きているのか。僕は全然わからず立ち尽くす。

「それで、危機的状況において、ご二人の恋の炎は燃えあつたのかな？」

悪友はしばいがかつた動作で言い。

「燃えてくれたら」

「お互いの気持ちに気づかない鈍感への」

「俺たちからの“起爆剤”ってなプレゼントは成功したことになるんだが」

素敵な笑顔を浮かべて、長茶髪女友人、男友人、悪友、が「どうなんだ？」と訊いてくる。

僕は呆けて、黒髪の乙女へ視線をやった。

彼女も僕と同じようにこちらを見ていた。

数週間後

僕はとある喫茶店でそわそわしていた。

今日、はじめて友人らをとまわずに、二人きりで、黒髪の乙女と会うことになった。

五杯目の紅茶を注文したところで、

扉が開く鈴の音が聞こえ、そちらへ視線をやると、彼女が素敵なコーディネートトの服装で居た。

イタズラを真面目に思考する楽しさに心が踊ってしまい思わず笑
みが浮かんだ。

僕と彼女が話すべくことは、実はもう決まっている。

今日は悪友の誕生日なのだ

小話：其の参へみけねこハント（仮題）

「三毛猫を狩りにいこうよう。三毛猫のオスを」

返答する言葉を、僕はとっさに考えつかなかった。

「じゃあ、駅で待つてるからねん」

そうして通話は切れる。激しく一方的な意思表示を残して。

僕はあつ氣にとられて、ワレカンセスとすまし顔な自分のケータイを見つめた。

沈黙を肯定と受け取るのは、横暴だろうと思っのだが。

「というより、なんで三毛猫^{オス}を狩ろう……いや、捕まえようと思いつくわけ？」

待ち合わせ場所な駅に到着した僕は、そんな当然たる疑問を彼女腐れ縁が更に腐った仲の友に投げかけた。

ちなみに、僕はヒマな人生を過ごしているわけではない。が、偶然にもその日その時の予定は一切なかったので、彼女の狂戯言に応える余裕があった。だから、いま僕はここにいる。

「だってさあ、三毛猫のオスってさあ、もっすごくレアリティの高い、もっすごくイイお金になる、金のタマタマなんでしょう？」

公衆の面前で、「金のタマタマ」とか素敵な笑顔で言わないでね僕が恥ずかしいから。

「珍しいっていう話なら聞くけど、お金になるかは別の話じゃないの？」

僕は、ある種の都市伝説だと思っている。

「えーそうなの？」

彼女はショートカットな黒髪のはしっこを、指先でいじくりながら、口を尖らせる。

「そもそも誰が買うのさ。クローン家畜が肉のパックになって売ら

れるいまどき、三毛猫のオスなんて」

「買うひとは……、ネットオークションにかければ世界中に居そうだけれどう？」

名案でしょう、ほめてほめて、みたいな顔で見上げてくる彼女の頭頂部に、僕はグーの拳を一発見舞った。

「いつ！ ……痛いよう」

彼女は両手で頭を抱え、身悶える。

「生き物を軽々しくネットオークションにかけるなっ！」

「冗談だよ。じょうだん。そもそもネコはネットオークションにかけられないもん。そんなに怒らないですよ」

頭頂部をさすりながら、潤みの増した目で彼女は言うが、

「冗談でも、考え方が気に喰わない」

「だって、『買い手は？』って訊くから、仮の答えとして言ってみただけだよ。売るつもりなんて、最初からないもん」

んーまあ、確かに訊いたのは僕だけだね。あんまりな答えだったからね、つい。

「ホンモノを触って見たいと思ったんだよ」

その眼は獲物を求める狩人のごとく。彼女はきよろきよろと周辺に注意深い眼差しを投げながらそういった。

駅から歩いて数分。僕たちは住宅街にやってきていた。といても、ただのご近所なわけで。日常の見慣れた風景なんだけども。

僕が住まうご近所は、都心よりちよつと離れているが、ど田舎というわけでもなく “ちよいと便利な田舎” と僕は評している

まあ何が言いたいかというと、飼いも野良も混沌として周辺には多くのネコが住まっているというわけだ。

「その好奇心を否定するつもりはないけれど、思い立つのが唐突だね、ずいぶんと」

言いつつ、僕もテキストウに三毛猫探しの視線を周囲になげやる。

「なにごととも思い立ったが吉日って言うでしよう?」

につ、と満足げな笑みを浮かべていう彼女を見ると、

「キミの前世はネコだろうね、きっと」

そう言わずにいられない。

自由気ままというか、自由奔放というか。憎めないその自己中さは、天真爛漫なネコと評して間違いない。

なんてことを思っていたらば、ご近所最大の“ねこスポット”に到着していた。

ねこ専用階段

この場所において、最初に眼差しが向かうのはそれである。

文庫本を開いたくらい幅しかないその階段は、乗用車二台分ほどの広さしかない敷地から、“とんこつラーメン屋”と“カジユアルファクションのお店”とが半々に入っている白い建築物の二階ベランダへと伸びている。どうやら、この白い建築物のオーナーさんが、なかなかどうしてネコ好きなお人らしい。駐車場を目的として設けられているハズの敷地に車はなく、代わりに、エサ茶碗、水飲み茶碗、毛布の敷かれたダンボール箱などのネコ用アイテムが置かれているし、白い壁には“寝ているときは Don't touch h ねこ!”の張り紙まである。かといって、好意的ではない噂を近所住民として聞かないから、このオーナーさんは無責任な愛好家というわけでもなく、ちゃんとやることはやっているお人なのだろう。実際、お会いしたことはないけれど。

ともあれ残念なお知らせです。

「ザ・ボス”しかないよう……」

彼女は残念そうな口調とは裏腹に、嬉しそうな表情を浮かべて、日向でふてぶてしく寝転ぶボロ雑巾のような白猫をなでなでしている。

ちなみに、“ザ・ボス”というのはこの白猫がご近所で呼ばれている愛称で、僕は“化け猫”と評している。ボロ雑巾のぼうがまだ

愛嬌ありそんなその見てくれもさることながら、軽く二十年以上その無愛想さを周辺住民にふりまいているという事実から“化けている”と思つて自然だろう。予備知識として、非常にどうでもいいことだが、“ザ・ボス”はこの周辺最強のメス猫であると記しておく。「まあ、ネコだしね」

神出鬼没が、外界で生けるネコという存在だ。こちらの都合など、むこうさんには毛づくろいするヒマほどの興味もないことだろう。「ねえねえ、“ザ・ボス”。知り合いに、三毛猫のオスいない？」サバイバルのし過ぎでぶにぶに感がまったくくない“ザ・ボス”の肉球をいじりながら、彼女はおうかがいをたててみるが、

「……………」
ちらりとバカにするような憎たらしい眼差しをくれてから、大あくびをかます。それが“ザ・ボス”のこたえだった。まったく興味がない。か、あるいは煮干しでも持つてこい。どちらにせよ、関心がないということは確実だ。

ネコからのもらいあくびを噛みしめつつ、僕は背筋をのばした。「なんか眠くなってきた」

まだ“ザ・ボス”をいじっている彼女を横目に見つつ、帰って昼寝でもしたいなあー、と来た道の方角へと視線をやった

「……………あつ」

そこに、さり行く猫の後姿を発見した。そいつは、ピンっと立てた尻尾の根元にご立派なモノをこさえているオスであり、

「みみみけみつけたっ！」

三毛猫だった。

「どうしたのう？ 突然みみい言って」

なにか触れてはいけないものにふれるような視線を“ザ・ボス”と共にくれる彼女が、ひじょうにもどかしいつ。

「どうしたのう？ じゃないっ！ 見つけた、発見したんだよ、オスをつ！」

力みすぎてどこかの血管切れたんじゃないかならうか、と不意に自分

の身体が心配になる。

「……えっ？」

言いだしっぺのくせにひどく怠慢な動作で、彼女は表情を強張らせた。

「えっ？ じゃない。えっ、じゃ」

というより、もっと喜ぼうよ。せめてボロ雑巾風白猫をなでなでしていたときくらいの表情になろうよっ！

なんで僕がジダンダを踏まなければならぬのだろうか。

もう本当に、熱されるのも冷めるのも突然だよね。

煮え切らないというかなんというのか、彼女の微妙にノリ気じゃない態度に、僕は両手の指をワナワナさせた。と、気配を察したのか三毛猫はこちらを振り返り、くだらないモノを見たともいうようにプイと首を振ったのち駆けていってしまった。

「ああっ！ 行っちゃっ！」

そして僕は彼女の手をとり、三毛猫の後姿を追って駆け出した

が、残念。

再び三毛猫の後姿を発見することなく、日は暮れた。

帰り道。

なぜだか言いだしっぺの彼女より熱してしまった僕のほうが、中途半端に後姿を見てしまったがゆえに気持ちが沈んでいた。

にもかかわらず、

「三毛猫には、見事に逃げられちゃったね」

彼女のほうは憎たらしくもある上機嫌さである。

「んー」

僕はテキストウに応えておいた。

すると不意に、彼女は僕の首根っこをグワシッと掴み、

「捕まえたっ」

憎めない無邪気な笑顔を向けてきた。

「僕は三毛猫オスですか……」

吾輩は猫でなく、

名前もすでにある　　んですけど。

共通項があるとしたら、性別だけで。

「捕まったからには、当分は私の三毛猫オスでいてもらっからねんっ」

こちらの気などおかまいなし。

自由気まま。

自由奔放。

憎めないその自己中さは、まさしく天真爛漫なネコそのもの。

「前世はネコだろうね、絶対」

こんなの間違っている。

僕は帰り道、いつもそう思う。

こんな現実、間違っていると。

しかし頭で考えたところで、なにも変わるわけがないということも、同時にわかっている。

「なんだかなあ……」

僕は気晴らしにと空を見上げてみた。

「気がきかない、お空だこと」

見事な曇天だった。僕の気持ちを代弁してくれていると、好意的に受け取ることもできるけれど。

曇天に一つだけイイところがあるとしたら、雲の切れ間から太陽の光が射し込む絵図らが幻想的で、なにかが降臨してくるんじゃないかろうかというファンタジックな思考に浸って現実から少しのあいだ逃避させてくれるところか。

不意に

幻想的な空に妙なマッチングをした音色が聞こえてきた。

音楽の知識など、なんとなく耳にする程度しかないで、まったく曲目はわからないが、聞いた感じだと音源はバイオリンじゃなからうかと思う。

染み入るような、とても言うのだろうか。

過度な主張をするわけでもなく、かといって存在感がないというわけでもなく、音色はただ身にスツと入り込んでくる。

その音に魅入られたのかなんなのか、気がつく僕はこの音色がどこから聞こえてくるのか探していた。

どれほど歩き回ったのか、まったく記憶にないけれど

気づくと僕は公園の入り口に立っていた。

公園といっても簡素な遊具が配置された小規模なモノではなく、散歩やジョギングや日光浴など様々なことができる、緑豊かな広域な自然公園である。

音色は幸いなことにまだ聞こえており、僕はそれを求めて公園内へと歩みを進めた。

キレイに刈り整えられた芝生の広場。その中心にはぽつねんと独り佇む老いた桜の樹が居て、その根元にベンチが一つだけあった。魅惑的な音色は、老桜樹の下から聞こえてきている。僕は吸い寄せられるように、そちらへ向かった。

側へ行くと、ベンチに座るその人は演奏を止めてしまった。

「やあ」

その女性は、

「こんにちは」

唐突に現れた僕に、柔らかい微笑みをくれた。

僕は軽く首を上下運動させるといふ無礼にも程がある応えかたをしてみました。とっさに言葉が出てこなかったのだ。その包み込むような微笑に魅了されてしまった。

バイオリン演奏に礼を尽くしているというような漆黒の燕尾服に身を包み、服と同色の黒髪をショートボブにした彼女は、泣きたくなるほどに優しい眼差しをこちらにくれる。

妙な間が生まれてしまった。ただ単に僕が彼女に見惚れていた、とも言えるが。

「あ、あの、音が、演奏が聞こえてきて、それがとっても聴き心地が好くて、だから気づいたら足が勝手に動いていて、今ここにいます」

普段から緊張しいな僕だけれども、なんで今この瞬間に恥ずかしいほどシドロモドロになっちゃってしまうかな。

「そう、聞こえたの」

言い、彼女はバイオリンをしまっけてしまっ。

「え、ええ。けっこう遠くまで聞こえてきました」

彼女は僕が現れたから演奏を止めてしまったのだろうか。応えっことは、とても罪深く思えるのだ。

「あの、もう演奏しないんですか？」

僕は恐るおそる訊ねた。

「うん、今日の演奏はおしまい」

彼女はバイオリンケースを膝の上に乗せる。帰る準備が整ってしまったらしい。

僕は罪深い者になりたくなかつた。それに遠くからでも音色は聴ける。

「ごめんなさい。邪魔してしまいましたよね。僕はもう行くので、このまま演奏してください」

立ち去ろうとする僕を、しかし彼女はあつ気にとられたような表情で見、最後に小さくクスリと笑った。

どういうことだろう？

「音楽は聴いてもらって初めて意味を成すモノだから、邪魔なんかでないよ。むしろわざわざ聴きに来てくれてありがとう、と言いたいの」

こちらを気づかうような言葉の後に、彼女はベンチから腰を上げる。立ち去るまで、本当にもう秒読み段階である。僕は焦った。焦っただけども、妙案が浮かばない。

「そんな顔しないでおくれよ。別に、キミが来たからやめた、というわけでないのだから。たださっきので、今日の演奏はおしまいというだけさ」

僕はいつたいどんな顔をしていたのだろう。彼女は困っているよ

うな悲しんでいるような微笑の眼差しを浮かべる。

なにやっってるんだ、僕は。迷惑をかけたくないと思っているのに、結果的に彼女を困らせてしまった。

自分勝手にも、僕は情けなくてうつむいた。芝生の刈り目がよく見える。

そよ風が頬を撫でた。

「私は毎日この場所で演奏しているから、縁があったらまた会おう」
不意な言葉に、はっとして顔を上げたが、そこに彼女の姿は無く、辺りを見回しても老いた桜の樹しか居なかった。

翌日

例の如く“間違っている”と思いながら道を歩いていた。
大切な人と会ったあと、僕はいつもそう思わずにはいられないのだ。

だがしかし、思いつつも今日の僕は急ぎ足だった。あの音色が風に乗ってささやかに耳へ届くと、心が踊り

気がつくと僕は、芝生の広場に居た。盲目的思考は驚異的な身体能力を生むことがあるようだ。

音色に誘われ視線をやると、独り佇む老いた桜樹の下は、昨日と違い静かなる賑わいを見せていた。

老若男女問わず多々の人がベンチを囲み、旋律に聴き入っている。当然だろうと思う。こんなに素敵な音色なのだから。

僕も輪に加わり目を閉じて、しばし聴き惚れ

一瞬とも思えるほどに儂く、演奏は終了した。

充実している時ほど、体感時間はあっという間である。

よいんから覚めて、目を開く。と共に聴き入っていた老若男女の姿は幻のように無く、目の前にはバイオリンしまう彼女の姿だけがあった。

「やあ」

彼女は、

「また会ったね」

昨日と変わらぬ柔らかい微笑みをくれた。

「こ、こんにちは」

どもってしまっただが、今度はまともに挨拶できた。

「あの、他の人たちは？」

この気持ちを共有してみたいと思ったのだが、

「ん？ 満足して逝ってくれたようだよ」

それはちよつと残念だ。聴いて即行去ってしまうとは、個々に事情はあるのだろうか残念でならない。

「しかしキミには満足してもらえなかったようだね。申し訳ない」
彼女はすまなそうな顔をするが、とても満足している僕としてはどうしてそんなことを言うのだろうか、ちよつと腹立たしくさえ思う。

「そんなことはありません。とっても素敵でしたよっ」

音楽をどう評価すべきであるのか、まったく知らないので、稚拙な言葉しか出てこないが、とても好い演奏であったことだけは間違いない。

「ありがとう」

彼女は申し訳なさそうなあるいは泣いているような表情をする。

どうして彼女はそんな顔をするのだろう。

どうして僕はそんな顔をさせてしまうのだろう。

「今日はまだ時間があるから、少し話しをしないかい？」

彼女の提案は唐突だったが、僕にその嬉しい申し出を断る理由はない。

次の日

結局、なにを話したのか憶えていなかった。

あまりにも舞い上がっていたからなのか、なんなのかさだかではないが、思い出せないのだからどうしようもない。

「まあいいか」

と思うことにして、僕は大切な人に会うため、とある場所へ向かった。

朝は厳粛でありつつも、夜に訪れると気味の悪い、あまり頻繁に人が訪れない、とても静かな所。そこが僕が大切な人と会える場所であった。

僕に限らず、多くの人がココで大切な人と会っていることだろう。長方形に加工された御影石が乱立する 大切な人を寝かせる場所。

簡単な言い方をすれば、ここは墓地である。

僕はいつものように、とある御影石の前へと向かった。

と、そこには先客がいた。

「どう、して？」

先客は、漆黒の燕尾服に身を包み、黒髪をショートボブにした女性の姿でそこに居た。

当惑して立ち尽くしていると、背後から歩いてきた別の人が僕を素通りし、とある墓標の前に立つ漆黒の燕尾服に身を包んだ女性へと戸惑い気味に話しかけた。

僕を素通りした人こそ、僕の大切な人だった。

「彼から貴女への伝言を」

漆黒の燕尾服に身を包んだ女性は、僕の大切な人へと語りかけた。いぶかしむように見聞きしていた僕の大切な人は、ある一線を堺に微笑みながら嗚咽を

本当は、昨日なにを話したのか憶えている。

それがただの愚痴でしかなく、それは同時に認めたくない現実を、否定しながら肯定してることではかなく、憶えていないのではなく、忘れたいだけの

僕は、生きたかったのだ。

大切な人と共に物語を紡ぎたかったのだ。

ただ側にいるというだけの幸福を実感していたかったのだ。

だから、

だからその望すべてを否定する

僕が死んでいる、という事実現実を受け入れなくなかったのだ。

こんな現実、間違っている。

僕が死んでしまっているなんて、こんな現実……

どうして死んだのか、なんて些細なことはどうでもよかった。

ただ、なにも成す前に死んでしまったということが、悔しくてしかたがなく、なにより最後の最後で大切な人へ別れの挨拶をすらできなかつたことがもどかしかった。

「それがキミをここに留めている理由だね」

漆黒の燕尾服の彼女が言った。

「だからキミは毎日、大切な人へ会いに行つて告げようとしているんだね」

でもそれは叶わぬ行為なのだ。

「なら私がキミの口になろう」

漆黒の燕尾服の彼女は、そう約束してくれた。

ほんとうは姿を見てもらい話しをしてもらえるだけでも、嬉しいことであつたのに。

そして彼女は約束を果たしてくれた。

僕は自らの死に納得はしていないが、最後の言葉を伝えることができたという事実には少なからず満足した。

でも素朴な疑問があった。

「あなたは何者なんですか？」

死者と平然と会話する漆黒の燕尾服の彼女はいったい何者なのか、不思議でしかたがなかった。

「さあ」

彼女は小首をかしげる。

「さあつて、答えになってないですよ」

「自分が何者なのかなんてわかりはしないよ。ただ私は、私にできうることをしたいと思ひ、そうしているだけだもの。だからキミの想いはちゃんと伝えたいよ」

そして約束は果たされたが、僕にはワガママな一面があるようだといまさら自覚した。

「最後に、あの音色を聴きたいんです」

そんな僕の願いを、彼女は快く承諾してくれて

そして僕は魅惑的な旋律に聴き惚れながら、

【 》 - Goodbye , good - (仮題) 》 - 終わり】

「彼から貴女への伝言を」

漆黒の燕尾服に身を包んだ女性は、彼の大切な人へと語りかけた。

「生きて、幸せになってほしい」

小話：其の五へ想う気持ちは （仮題）

神とは絶対的な傍観者／観測者であり、あらゆる事柄を静観し続ける無関心な存在である。

ゆえに“救いの神”とは、ヒトの心が産み出す“究極の逃げ道／救い”ではない。

神は肯定も否定もせず、ただ静観し続ける

とある辺境の村に男と女がいました。

二人は将来を誓っていましたが、時代の流れは時に無情です。戦争が始まりました。

戦況は過酷を極め、ついに辺境の村にまで徴兵の魔の手がのびました。

男は最前線に送られることになりました。彼と彼女は最後の日に約束を交わしました。

女は自分の父親の形見たる剣を男に手渡し、

「これは私にとって大切なものです。必ず、必ず返してください」
聞いた男は一つの花の種を女に手渡し、

「この種に花が咲く頃、私は約束を果たそう」
言い、男は戦場へ。

その日から女は毎日欠かさず花に手入れし、そして村の教会へも欠かさず祈りを捧げに足を運びました。

それから幾たびもの季節を越えて

ついに、あの種は花を咲かせました。

しかし、彼は帰ってきませんでした。

それでも彼女は彼を信じ、花の手入れと教会への祈りを続けました。

そしてまた、幾たびもの季節を越えて、あの種は花を咲かせました。

彼女が教会で祈りを捧げている時です。ついに彼は約束を果たしました。

剣を必ず返す

その約束を。

女は三日三晩、教会で涙を流し続けました。

そして、神に問いました。

「何故、何故、あなたは私から大切な人を奪うのですか。父の時も彼の時も……。何故です、何故なのでしょうか」

神は彼女を不憫に思い、問いに答えました。

「いつの時もお前の大切を奪うのはヒトの手であろう。一度でも我がヒトの大切を奪ったことがあるか？」

「ああ神よ、あなたは偉大にして無情なのですね。私はもう生きてる意味など無いというのに」

「生きる意味など個々の認識ではないのだがな。しかし、それほどまでにあの男に会いたいというのなら、一度だけ会わせてやろう」
神がいうと、彼女の剣が神々しい光を放ちました。

彼女はあまりの眩しさに眼を瞑ってしまいました。

そして、眼を開けられる程に光が弱まった時、彼女は希望を見ました。

眼の前に、彼が居たのです。

彼女は思いの限りに彼の胸に飛び込みました。

そして、彼と一つになったまま、彼女の時は止まりました。

誰かを想う気持ちは、時に想像を超える強い力をうむ
不可能を可能に変えてしまうほどの
あるいは狂気的な理解し難いほどの

教会の神父が私用から戻ってくると、そこには

祈る姿勢のまま、白銀の装飾剣に胸を貫かれている一人の女が居

りました。

彼女はととてもとても幸せそうな表情で、最後の時を迎えたのでした。

あの戦争から八十年後の春の日の出来事でした。

小話：其の六（待ち惚け（仮題））

自分の左腕を、そこにある腕時計を凝視する。

秒針の動きがこんなにも怠惰だったとは、まったく苛立たしい新発見だわ。

緩慢な時の流れから、忙しないヒトの流れに視線を移す。

目標発見と苛立ちまぎれと暇つぶしを兼ねて、人間観察なんてことをやってみる。

普段はあまり引いた視点から観察することのない駅の改札口という所は、改めて見ると、なかなかどうしてバラエティーにとんだ人々で溢れていた。

あきらかにカツラを装着しているだろうと思われる不自然な髪の毛のサラリーマンに、いつそいさぎよくバーコード頭なアロハを着たチャライオツサン。

改札にパスモをタッチさせるとせがむ男の子に、パスモを握らせたいがいいが、もたつく我が子が為に後ろが詰って若干焦る母親。

改札になんの恨みがあるのか IC カードタッチパネルにカバンを叩きつけている OL カバンの底にパスモでも仕込んであるのかしら？

きっぷ挿入口にパスモを突っ込もうと苦戦するおばあちゃんに、その背後で苛立たしげにご老体を睨む学生服 睨むくらいなら助言してあげれば手っ取り早いのに。とか何故にこういう時って隣の改札へ軌道を変えろという発想が瞬時にできないのだろうか。隣はスツカスカなのにおばあちゃんの後だけ渋滞して大人気だ。

すると不人気なお隣の改札を通過しかけていたハードロックというかデスメタルな恰好の若者が、パスモの使い方サクッとご老体にアドバイスする。おばあちゃんは明らかに若者の外見に引き気味だったが、助言を聞くと、自分の間違いを恥じるような笑みをたくさんシワと一緒に顔へ浮かべてお礼を言い、手提げ袋からラップ

に包まれた紅白まんじゅうを取り出してデスメタな若者に手渡す。デスメタな彼は、見てるとこっちの気分まで清々しくなるような素晴らしい笑顔でそれを受け取った。

ヒトはファーストインプレッション／外見で、他人の“ひととなり”を九割がた決め付けてしまいうらしいけれど、やはり人は外見だけで推し測れるほど単純ではないようだ。

見習うべくは見習い、改めるべくは改めよう。

そんな決意表明を、心の中でしてみる。

と不意に、

「おっ……ん？」

視界の隅を、駅という場所において珍しいモノがすまし顔で横切った。

しっぽをピンと天に突き立てて、気位の高い貴婦人のような足取りで改札口へと向かうのは、

「ねこ？」

それは果たして一匹の薄汚れた白猫だった。

ネコも人間文明の利器たる電車に乗って遠出したりするものなのだろうか。

というか、わがもの顔で改札を通過しているけれど、あれで電車に乗り込んだら、

「ねこでも無賃乗車になるのかしら？」

とても気になるところではあるけれど、きっと天上天下唯我独尊なネコ様には人間の法より毛づくろいの方が重要であろう。それとも実はちゃんと切符を買っていたりするのだろうか？

そのへんどうなの、と心の内で訊ねてみる。

すると白猫は改札を過ぎたあたりで立ち止まってこちらを振り返り、鬱陶しいとでも言いたげなぶつちよう面を見せてくれた。

何故だろう、むしろように白猫の後を追いたくなってきた。

この胸の高鳴りは、このソワソワした感じは、なにかこう……ジブリアニメ的な面白くて楽しいことに、あの薄汚い白猫が巻き込ん

でくれるような期待感というか予感というか。

つきに来たか私のところへ！

みたいな根拠もなく意味もわからない、自分でも謎なこの感覚はしかし抑え込み断ち切らねばならない。

約束があるから。

待ち合わせをしているから。

両手を広げて極上の娯楽が私を迎えてくれるというのに、それを無かったことにしなければならぬとは……

これは私を待たせる罪深き者に罰を与えてやらねば

そんなわけで、

「けっ！」

と唾を吐き捨てるように向き直り、駅構内へと去り行く白猫へ、

「よい旅路を」

心の声で別れを告げつつ、私を待たせる愚か者にいったいどんな刑罰を科してしんぜようかと思案を開始する。

そして暇つぶしにもあきたころ。

ヒトの流れを見やりつつ時風の経過に身をさらしていると、怒りは次第に不安へと形状を変えてゆく。

なにか事故にでも巻き込まれたのではないか、とか縁起でもないことが脳裏を過ぎる。

群集の流れから外れた形容し難い孤独感。

置いていかれるような言いようもない不安感。

その二つは私に、嫌な想像を真実であるかのように語りかけてきて、惑わし

なんかもう泣きそう　な状態に私が陥り始めたころ、救いを求めるように改札の向こう側をさまよっていた我が眼差しが、気の抜けた炭酸飲料みたいな存在をとらえた。

向こうも私に気がついて、とけかけたアイスクリームのような緩

い微笑みを浮かべてこちらへと歩んでくる。

不覚にもつられて顔面の筋肉が弛緩してしまった。いけない。私は速やかに気を引き締め、怒髪天を突くような表情を作る。

そして目前へと満を持して登場しおった“頼りない”という単語を寄せ集めて産まれたに違いない私を待たせし罪人へ、

「お・そ・いつ！」

ビシッ！ と心臓を串刺す勢いで人差し指を突きつけてやる。

我が憤怒を目の当たりにした彼は、

「えっ……」

と背後にある駅の据え付け時計を見やり、

「一応、約束の十分前だけど」

ナマイキなことに言い訳なんかしてきた。

「なにが十分前だけど、よっ！ 私は一時間十六分」

腕時計で改めて時分秒の精確さを確認してから、

「二十三秒も立ちっぱなしだったんだからねっ！」

どれほど重くて深い罪状かを宣告してやる。いろいろな想いを込めた眼光のオマケ付きで。

なにか物申したそう表情で、しかし「それは、申し訳ない」と眉尻をガツクリ下げる罪人の腕をとり、

「まったく、本当はおんぶして欲しいくらい脚が棒だよ」

歩みを開始しつつ、

「それでさっ」

と、私を待たせた制裁措置として“質問攻めの刑”を執行することにした。

とくと困り顔を見せるがいい。

「好き」と一言聞かせてくれるまで、やめてあげないから。

小話・其の七へ愛国者の喜劇（仮題）（前書き）

表現の不自由とその結果

小説：其の七〈愛国者の喜劇（仮題）〉

《愛国者の喜劇（仮題）》

彼は“喜劇の王様”と称されていました。

世の出来事をチクリと風刺して描きながらもながらも、しかし観たあとには“笑い”の残る。それが彼の“演劇／映画”でした。

人々が懐きながらも、外に発することのできない思い。それらの“怒り”を代弁するがごとくユーモアをもって表現された彼の作品は、人々に称賛絶賛され親しまれ楽しまれていました。

彼は自分が生まれ育った国を、心から愛していました。

そしてだからこそ彼は、時に“祖国／政治／主義／思想”を批判的に描いた作品を発表しました。

あるとき。

彼を訪ねて、国から使者がやって来ました。

彼は愛国者であることを“自称／自負”していましたが、発表した作品は“祖国の為に／人々の為に”と考えていました。なので今回、国から使者が訪ねて来たことに喜びを感じていました。自らの活動が、少しは祖国に認めてもらえた、と。

嬉々とした気持ちを押し殺して彼は、国からの使者を迎えました。さっそく話を始めようとする国からの使者を制止して彼は、祖国に対する敬意を払って最高の“おもてなし”をしました。

絶妙な温度で淹れた、とっておきのお茶を出しました。

甘すぎない、パサパサしていない、とっておきのシフォンケーキを出しました。

国からの使者は顔をしかめて、それらにはいつさい口を付けませんでした。

祖国から今後の活力になる言葉を贈ってもらいえる。彼はそう考えていました。

想像するだけで、その光栄さに心拍数が上昇します。けれどニヤけた顔で“言葉”を頂戴するわけにはいかないのです。彼は一呼吸置いてからぐつと表情を引き締め、心してから、改めて国からの使者に訪問の理由を訊ねました。

そして彼は

反社会的と糾弾され、祖国を追われました。

という自身の半生を、彼は作品として発表しました。

祖国の表現に対する圧力を、たっぷりのユーモアとちよっぴりの皮肉と隠し味の怒りを込めて描きました。

作品は亡命先の国で高く評価され、彼はその国で最高の“名誉／荣誉”ある芸術文化の勲章を授与されました。

人々は彼のことを敬愛の思いを込めて称します。

彼こそが“真の愛国者／真の表現者／喜劇の王様”だと。

小説：其の八〈意味の価値（仮題）〉

《意味の価値（仮題）》

ふたりの男が、これから食べる昼食について話し合いながら道を歩いていました。

「オレは今日、ガツンと胃にくる重いヤツを食べたい気分だ」

「……そうか。ボクは、胃にやさしいモノが食べたい気分だ」

「そうか。しかしオレは。おっと……」

「ん？ どうした」

「靴ひもがほどけた」

「そうか」

「結び直すから、ちょっと待ってくれ」

「わかった。……なあ」

「なんだ？」

「ヒトの一生の中で、靴ひもを結び直す時間ほど“無意味／無価値”なモノはないと思わないか」

「……まあ、否定はしない。……けどな」

「けど？」

「おかげで1000円を拾った。ほら」

「……そうか。で、昼食だけど」

小話・其の九へ“あれ”の続き(仮題)へ(前書き)

誰もが気になる“あれ”の

小説：其の九へ“あれ”の続き（仮題）

《“あれ”の続き（仮題）》

ひとりの男が、思い詰めた表情で手にあるモノを見つめていました。そこには腰から引き抜いたベルトがありました。

彼はそのベルトで適度な長さの“わつか”を作ると、それを部屋のドアのノブに引っ掛けました。そしてあらかじめそうすると決めていた動きで“わつか”に首を通し、ドアを背にするかたちで床に腰を下します。けれど腰はギリギリ床に触れません。ベルトが首に食い込みます。のどが圧されて、声の代わりに空気がか細く漏れましました。首の血管が圧迫されてうっ血し、みるみる顔が赤くなってゆきます。

これで“いままで”から解放される。そう考えたたん、男の脳裏に“いままで”がよぎりました。これが走馬灯か、と彼のどこか冷静な部分が思いました。

しばし走馬灯を見やっていたら、ふと男は、“いままで”として思い出された“あれ”の続きが気になりだしました。

誰もが気になる“あれ”の続きですから、この男だって続きが気になって当然です。

男はそのことを考えないように努めましたが、気にしないようにすればするほど、気になる気持ちは強くなってゆきます。

男は考えました。どうせ終わるのなら、“あれ”の続きを知ってからでも結果は同じではないかと。終わりを少し先延ばしにしても結果は同じではないかと。

そして彼は、ひとつの結論を出しました。

身をよじって、もがいて、男はドアのノブからベルトを外しました。圧迫から首を解放しました。

深呼吸をし、頭の活動を再開させます。

“あれ”の続きを知るために。

小話・其の巻拾へ正義の味方の味方(仮題) (前書き)

似たもの同士ほどケンカする

小話：其の巻拾へ正義の味方の味方（仮題）

《正義の味方の味方（仮題）》

ひとりの男が、人目を避けるようにひっそりとする墓標の前にたたずんでいました。その身なりは、痛々しいほどボロボロです。服は裂け、髪は乱れ、泥で汚れ、ところどころ流血したり、患部が炭化するほどの火傷を負ったりしていました。

そして彼は力尽きたように崩れ、その場に両膝をつきました。

しばし呆然と、晴れ渡る空を眺め

奥歯を噛みしめて、けれど堪えきれずに嗚咽と涙を流しました。

* * *

そして悪の親玉は倒され、世界は救われました。

正義のヒーローの活躍を、人々は心から称えました。

世界を征服せんとした悪の親玉との戦いが終わり、世界に平和が取り戻され

一台の乗用車が平和を満喫する人々の群れの中へと突っ込み、大爆発を起こしました。

悪の親玉という強大なプレッシャーから解放された、それぞれは小さな、しかし確実に平和を脅かす“小さな火種たち”の、最初の爆発でした。

正義のヒーローの、新たな戦いが始まりました。

幾多の戦場を駆け巡り、勇敢な戦士たちと共に根気強く“小さな火種たち”と戦いました。

そしてついに正義のヒーローは、“平和を脅かす火種”を殲滅しました。

これでやっと本当に、世界に平和が取り戻された。

正義のヒーローは安堵と達成感の現れた晴れやかな笑顔で背後を振り返り、共に戦った勇敢な戦士たちを見やりました。彼らの

銃口は、正義のヒーローに向けられていました。

* * *

ひとりの男が、孤独な男が、ボロボロな男が、世界を救おうとした男が、ひとつの粗末な墓標の前で泣き崩れていました。

彼が最後に

本音を、

本心を、

遠慮無くぶつけられると思った相手は、

自らの苦悩と苦痛を理解してくれると思った相手は、

自らの正義と相対した、自らが葬った、いまは墓標の、

“世界の敵”だけでした。

小話・其の拾遺へ生まれ変わったら(仮題)く(前書き)

可能性は無限大

小話：其の拾巻へ生まれ変わったら（仮題）

《生まれ変わったら（仮題）》

ふたりの男が、喫茶店のカフェテラスでお茶を飲んでいました。ひとりはカッチリとしたスーツ姿で、ひとりはカジユアルなジャケット姿でした。

「いやあ、何年ぶりだっけお前と会ったの」

「……どれくらいだろ」

「お前、この前の同窓会に来てなかったろ？」

「……いろいろ立て込んでたから」

「そうかー、それじゃあしよーがないよな」

ふたりはしばし“つもる話”をしました。

そして早々にネタが尽きました。

「なあ」

「……ん？」

「お前は、生まれ変わったら“なに”になりたい？」

「……」

「なんだよ、ヒトに訊くなら自分から先に言えってか？」

「……」

「睨むなよ。眼力あり過ぎだよ、お前」

「……」

「わかったよ、先に言うよ。だから怒るなよ」

「……いや、べつに怒ってないけど」

「そうか？ ……まあ、いいや。オレが生まれ変わったらなりたいたい

モノだけだな

「……」

「……」
「というわけだ。なかなかロマンティックだろ？」

「……そうだね」

「で、お前はどつなん？」

「……べつに、生まれ変わりたいとは思わない。……こんな壁だらけの人生、辛すぎて二度も体験したくない」

「なんだよお前……、暗いなあ。夢を持つとつぜっ！」

「……いや、夢なら持つてるよ。……ただ、来世に持ち越す予定がないっただけ」

小話・其の拾貳へ気になければ気にならない(仮題)く(前書き)

そうであることが“当たり前”は盲目

小説：其の拾貳《気にしなければ気にならない（仮題）》

《気にしなければ気にならない（仮題）》

ふたりの男が、いきつけの薄汚れた定食屋で“いつもの／定食”を注文しました。

ひとりの男は、注文の品ができるまで新聞を読むことにしました。ひとりの男は、注文の品ができるまで

「なあ」

することがなかったなので、対面にある新聞の、たまたま目に付いた一面から思ったことを、その新聞を読んでいる相手に問うてみました。

「んー、なんだ？」

「政治と宗教つてさ、分離されてしかるべきだって、そんなふうには学校で教えられたよな？」

「んー、まともに授業聞いてた記憶がねえから“教えられた”かどうかはわからねえけど……。まあ、でも、いまのご時勢、だいたいは、政と教は分離されているべきって言うな。……てか、それがどうした？ メシが待ちきれなさ過ぎて、急に“そっち方面”に目覚めたのか？」

「いや、そういうわけじゃないけどさ。ただ、その新聞に載ってる“ある国の統治者の就任式”の写真さ、思いつきり“教えの書かれた書物”に手を置いて誓ってるじゃん“統治者に就任するヒト”」

「ん？ ああ確かに」
「政治と宗教がガツチリ握手してるように思えるのは、オレだけか？」

「……いや、オレにもそう思える」

「いまのご時勢、よく騒ぎにならないよな　って、ふと思つてさ。」

「すぐ堂々と握手しちゃってるのに」

「まあ外国の新聞に載るくらいの堂々さだわな。確かに。けど、んー、べつに気にしてないんじゃない？ “この国／ある国”のトトたち。気にしなければ気にならない。気にならないければ疑問は出ない。疑問が出なけりゃ異論も出ない、みたいなの？」

「そんなもんなのかな？」

「そんなもんなんじゃない？ あ、オレのメシ来た」

「そんなもんか。 む、オレのメシ……、来ない……」

小話・其の拾参へ知らぬが楽し(仮題)く(前書き)

知らないことが“よろしい”ときもある

小説：其の拾参へ知らぬが楽し（仮題）

《知らぬが楽し（仮題）》

ふたりの若い男が、とある駅のホームで電車が来るのを待っていました。

「そーいえば今日さ」

「ん？」

「どーしてオレとお前が仲いいんだって、お前に憧れを懐いてる力ワユイ後輩女子さんたちが、あえてオレに聞こえるヒソヒソ話をしていたぜ」

「それをボクに言われてもね」

「お前みたいな自分に敵しく他人に優しい完璧人間の生徒会長が、なにを間違えたらオレみたいな全力低空飛行の残念野郎とつるむことになるのか、周りは興味津津なんだよ。あわよくば自分が“いまのオレの立ち位置”につ！て」

「自分に敵しいように見られてるボクの言動は、ただ自分に自信がないから。他人に優しいように見られてるボクの言動は、ただ他人に嫌われたくないから。そしてキミとつるんでいるのは、幼稚園からの腐れ縁だから。……真実には、しばしば“おもしろさ”が欠けている。そんな憧れと現実の違いを知ってまで、“いまのキミの立ち位置”について思ってくれる奇特なヒトは、そうそう居ないよ」

「“謎”は“謎”だから“ロマン”てか？」

「キミが素晴らしき友人ってことだよ」

「おおっ！　なんか照れるぜ。　けどなあ」

「ん？　なにかあるの？」

「真実のない憧れには“おもしろさ”が溢れまくってるらしくてさ

あ……………」

「はあ？ それで？」

「漫画研究部の一部のアホが、どうにもミスマッチなオレとお前をネタにして、“ある愛のカタチ”をマンガで描きやがったらしくてな……………」

「……………漫研の部費、生徒会長権限で八割カットすることにしよう」

小話・其の拾四へ青ためきネコ型ロボット（仮題）（前書き）

しばしば頭の中のタイムマシンで未来を見る

小説：其の拾四へ青たぬきネコ型ロボット（仮題）

《青たぬきネコ型ロボット（仮題）》

ふたりの男が、夕焼け空の下の公園の粗末なベンチに腰掛けていました。

ひとりの男は、缶ジュースを片手に、その景色を楽しむように夕焼け空を見上げていました。

ひとりの男は、缶コーヒートを片手に、その苦悩に耐えるように地べたを見つめていました。

「……もう、ダメだ。やっぱりボクには無理だったんだ。……ボクには、……“夢を現実に変える”才能なんてなかったんだ。ボクは、もうどうしたら……」

「はあ、まあ、あれだな。こうゆうときって、決まって“頑張れ”とか言うけど、オレはそもそも“頑張る”って言葉が使うのも使われるのも嫌いだから、オレはお前に“頑張れ”とは言わねえよ？　そもそもオレがお前の人生の出来事にアレコレ口出しする理由がねえし。なによりお前の“道／人生”なんだから、お前の足で歩け。もし慰めが欲しいなら、オレ呼び出さねえで、優しい彼女を作るか、お優しいママさんに電話すりゃいい」

「……そうだよ。急に呼び出してごめん」

「いいさ、いいさ、気にするな。ジュースおごってもらえたし。オレとしては、損はしてねえ」

「……そうか、ならよかった」

「ところでさ、好奇心から訊きてえんだけど」

「……なんだい？」

「お前は“ドラえもん／希望／夢”と出逢って、タイムマシンを借りたのか？」

「……え？」

「だってさ、まるで未来を見てきたかのような言いぐさだったじゃん。無理だった。才能なんてなかった。 てさ。なんでお前もうすでに“結果／未来”を知ってるんだよって、そりゃあ誰だって疑問に思うだろ？ そんなで未来を見るつつたらタイムマシンだろ？ で、タイムマシンつつたらやっぱ“ドラえもん／希望／夢”だろ？」

「ん、んん……そう、……かな？」

「そうさ。お前は“ドラえもん／希望／夢”と出逢ったからこそ、未来を見たんだ。と思うぜ？」

「……………そう、だね。確かにボクは、“ドラえもん／希望／夢”と出逢って、タイムマシンを借りて、そして未来を見たよ」

「それで？」

「それで、って……………」

「“ひとつの未来／ひとつの可能性”を見て、それでそれからお前は どうするんだよ？ せつかく“ひとつの未来／ひとつの可能性”が見れたんだぜ？ 未来は過去の“結果／積み重ね”でしかないんだ、ひとつの先が見えてるならそっちに行かねえようにすりゃあいいじゃねえか。それともなんだ、まさかこのまま自分をかわいそがつて終わるのか？ それじゃわざわざ“ドラえもん／希望／夢”にタイムマシン借りた意味がねえぞ？」

「それは、……………それは言うのは簡単だけれど、……………ボクは、……………ボクは、これからどうやって“ドラえもん／希望／夢”と“付き合い合って／向き合って”ゆけばいいんだろう、……………それがよくわからなくて」

「そりゃあオレじゃなくて、“ドラえもん／希望／夢”との付き合いかたを熟知してらっしゃる“のび太”大先生に訊いてくれよ」

「……………はっ、ははは！ 確かにっ、確かにそうだね！」

「お、おおっ……………。どうしたんだよ、急に笑っちゃって」

「いや、まさか“のび太”くんにも“とても大切な事”を教えてもらうことになるなんて考えもしてなかったからさっ。……………ふ、ははは

っ、いまさら“のび太”くんのスゴさを思い知ったよ」

小話・其の拾五へ夢見た世界（仮題）（前書き）

大半のヒトが一度は語る“夢”の

小話：其の拾五（夢見た世界（仮題））

《夢見た世界（仮題）》

河原の脇の歩道沿いに、西欧風の洒落た造りをした飲食店がありました。よろしいほうに称して“味のある”、よろしくないほうに称して“ボロい”、とても“年月の流れ”を感じる風格のあるお店でした。

このお店には、テラス席がありました。道を挟んで河原のほうに視界が開けていて、とても開放感があります。

ときおり流れるそよ風が心地好い“そこ”には、お客さんの姿がありました。

ふたりの老人が、真昼間からお酒を飲んでいました。

「いやー、しかし、わたしたちが若かりし頃に夢に見ていた未来の世界が、まさか生きている内に目の前に広がるなんて、人類の進歩に乾杯っ！」

「ははは、確かにそうですね。宇宙ステーションが当たり前のように頭上にあつて、宇宙旅行ももう幾つ寝れば現実になるんですからな、人類の進歩に乾杯っ！」

蒼い空のより高き遙か頭上にある宇宙ステーションへ捧げるように、ふたりは手の内の酒を高々とかがけてから、それをひと息に飲み干します。

「……………“SF”が夢に見た未来の世界は、確かに目の前にあります。宇宙ステーションも頭上にある。宇宙旅行も秒読み段階だ。」

しかし私は、乾杯にはまだまだ程遠いと思いますよ。」

酔っ払って楽しくなってしまうている老人たちの隣の席で辛抱強く、コーヒーを味わいつつ、“イマヌエル・カント”の著書を読書をしていた青年が、思うところある顔つきで言いました。

「なんと！これほどまで進歩して、まだなにか実現していないこ

とがありましたかね？」

「いやはや、そんなモノがありましたかね？」

老人たちは酒の酔いが醒めない程度に驚きを表し、そして酒の肴になりそうな青年に、話の先をうながす“興味深げな眼差し”を向けます。

「世界の大半の人々が夢に描いている未来が、まだあるじゃないですか」

呆れているような、失望しているような、哀れんでいるような、批難しているような表情で、青年は言いました。

「はて？」

「さて？」

老人たちは顔を見合わせ、首を傾げます。

「本当に、おわかりになりませんか？」

とても重大な問題に直面しているヒトの表情で青年は、慎重に“そのこと”を確認しました。

「いやー、ついに頭にガタがきてしまったようで。まったく思い当たりません。これは是非とも、この老いぼれに教えていただきたい」

「いやはや、お恥ずかしい。同じく、是非に教えていただきたい」
余裕のある年長者の笑みを浮かべて、老人たちは隣の席の“若者”に教えを乞いました。

「……………そうですか」

と返してから青年は、コーヒーを一口。そしてそれを味わう一呼吸を置いてから、言いました。

「……………世界の大半の人々が夢に描いている未来。この一点に限って私は、人類の進歩はとても遅いと思っています」

「ほう、それは？」

「いったい？」

青年の“語り”を盛り上げるかのように、老人たちは大仰に“好奇心”を示しました。

そんな老人たちを見やりつつ、青年はとても平坦な口調で“その

こと”を教えました。

「誰もが飲み食いに困らない、武器兵器の存在しない、平和な世界ですよ」

* * *

“なるほどこの保証は、永遠平和の到来を（理論的に）予言するのに十分な確実さはもたないけれども、しかし実践的見地では十分な確実さをもち、この（たんに空想的でない）目的にむかって努力することをわれわれに義務づけるのである。”

イマヌエル・カント著 『永遠平和のため』

第一補説 永遠平和の保証

について より抜粋

* * *

老人たちは“重大なこと”に気がついたがごとく、すっかり酔いの醒めた表情になって言いました。

「……あなたの言うとおりだ。わたしたちは、“甘い夢”を追いかけるあまり、“そのこと”を失念してしまっていた……」

「……確かに、そうですね。“甘い夢”ばかりを追いかけて、“苦さをとまなう夢”は積極的に追いかけていなかった。いや、“甘い夢”の“甘さ”を堪能するあまり、“そのこと”それ自体を忘れていた……」

老人たちは“責任ある年長者”の顔で、恥じ入るように、恥じを承知の上で、青年に訊きました。

「是非ともこの老いぼれに、“その夢”を叶えるための取り組みかたを教えていただきたい」

「同じく。どうか是非とも、教えていただきたい」
老人たちの熱心な眼差しに、

「……………」
しかし青年は“答え”を持っておらず。

追い詰められたヒトの表情で青年は、読みかけの“イマヌエル・カント”の著書を開いて、必死に“答え”を

小話・其の拾六へよくある出来事（仮題）く（前書き）

時に子どもは策略家

小話：其の拾六へよくある出来事（仮題）

《よくある出来事（仮題）》

しばしばおとぎ話で見受けられる“幸せに暮らしました”という
終わりは、しかし現実には起こりえない。

* * *

経済バランスが崩れ、国が食料を配給する時代。
しかし闇市はどこにでもあるもので。少しばかりのお金を払って
食料を買い、食卓にささやかな彩り加えることは民衆の常識でした。
これはそんなありふれた闇市での、どこにでもありうる、ひとつ
のありふれた光景

その女の子の大好きな食べ物、とっても甘いくて美味しいと評
判の“ミルクチョコレート／板チョコ”でした。なので“それ”を
発見したとたん、彼女は発作的に、

「おかーさんっ！ これかってっ！」
けれど母親は、

「はいはい、また今度ねー」
いつものことなので軽くあしらいます。

この時分、“お菓子／甘味”は、手は届くけれど少々高級なモノ
になっていた。誕生日や風邪を引いたなどの“特別な理由”が
ないかぎり購入しないのが一般庶民の感覚でした。

「こんどつて、いつ？ あした？」
母親の服の袖をぐいぐい引っ張り、
「ねえねえ、いつなの？」

明確な情報を得んとする女の子に、

「はいはい」
母親は、いつものように答えました。
「また今度ねー」

後日。

いつものように母娘は、闇市に買い物に来ました。
そしていつものように女の子は“チョコ買って”発作を起こし、
そしていつものように母親は軽くあしらいました。

けれどいつもと違うことが、なんの前触れもなく起こりました。

政府の取り締まりの手が、この闇市にも伸びてきたのです。

銃火器で武装した憲兵隊が、次々と闇市の商人たちを拘束してゆきます。売られているモノを、国旗の名の下に没収してゆきます。
ある商人が抵抗をこころみました。しかし訓練された兵士に敵うはずもなく。すぐに商人は身動きを封じられてしまいました。

そして見せしめのように、抵抗するとどうなるか知らしめるように、ひとりの憲兵が、身動きのとれない商人に暴力を振りました。
それを目にした人々は恐怖に囚われ、反射的に目をそむけました。
とぼつちりを受けないように、努めて他人であろうとしました。

同時に。

人々は憤懣に囚われ、決意するように奥歯を喰いしばりました。
たくさんの沈黙が、無意識の内に“きっかけ”を欲しました。

そして。

どこから飛来した小石が、ひとりの憲兵の肩に命中しました。
そして当然のように、その小石は地面に落ちました。たくさんの沈黙の中にあつてその小石の発した音は、とても“明瞭／明確”に人々の“耳／感情”へと届きました。

それが、合図になりました。

異常な熱が、一帯を支配しました。

異常な連帯感が、一帯を支配しました。

怒れる人々は波となって、憲兵隊を押し流すようにうねりだしました。

女の子と母親もそのうねりに巻き込まれ、強制的に波の一部となって流され進んでゆきます。母親は娘の身の危険を感じ、その手を離さないよう強く握り、どうにか波の外へ脱け出そうと試みましたが、しかしつないだ手は人々のうねりによって両断されてしまいました。母親は必死に娘の手をつかもうとしますが、その意に反してうねりによって波の外へと押し流されてしまいました。

母親は人々をかきわけて娘を探し出そうとしますが、怒りに囚われた人々に彼女の意が伝わるはずもなく、邪魔者を排除するように波の外へと押し戻されてしまいます。彼女は娘の名を叫びました。何度も何度も、声帯が壊れるほどに叫びました。どこか遠くでそれに応えるような声が シュプレヒコールの中に消えてゆきました。

個人の事情などおかないしに、人々の波は流れてゆき

いままでの出来事が目覚めの悪い夢であったかのように、殺伐とした静けさが辺りに訪れました。

そして母親は、道ばたの“ある一点”を注視したまま静止しました。

「……………」
頬をなでるそよ風に乗って、彼方から人々の感情の波の音が聞こえてきました。これが現実であることを告げるかのように。そう意地悪く、耳元でささやくかのように。

その“ある一点”へと向かう母親の最初の一步は、恐れているような、怯えているような、とても小さな一步でした。二歩、三歩と行くにしたがつて、しかしその足どりは速く荒々しくなつてゆきます。それと同調するように、表情もひつ迫したモノへと変化してゆ

きます。

そして彼女は半狂乱の勢いで“ある一点”へと到り 地べたに力無く横たわる愛娘のもとへと到り、糸の切れた操り人形のごとくその場に崩れ落ちます。

だらりと脱力しきつたその身を抱き起こして、その顔にかかった髪を優しくはらい、母親は娘の名前を呼びました。朝なかなか布団から出ようとしない彼女を起こすときの、柔らかく優しい声色で呼びかけました。呼びかけ続けました。

「……………」

溢れ出る涙で、母親は娘の顔をうまく見ることができなくなりました。物言わぬ愛娘を、言葉なく抱きしめました。

脳裏に、あらゆる場面での愛娘との“やりとり／思い出”がよぎりました。それは後悔とも同じでした。

そしてもつとも新しい“やりとり／思い出”が脳裏に映し出され、
「こんな、こんなことになるなら……………」

ひとつの後悔が、

「好きなだけ、好きなだけチョコ買ってあげるからっ！」

母親の口から溢れ出てきました。

「……………お願いよ、……………返事してよ、……………チョコ買ってあげるから、……………ねえ？」

「やくそくだよ？」

「……………へ？」

母親は、我が耳を疑いました。

「チョコかってくれるの、ぜったいのぜったいのぜえったいにだからその声のするほうを、彼女は目を凝らして見やりました。」

「やくそくだからねっ！ おかーさんっ！」

けれど涙で視界がぼやけてしまって、うまく見れませんでした。

しかし母親の顔に、もう悲愴な色はありませんでした。変わりに

あるのは、歓喜と安堵の混在する“我が子を叱る母親の表情”でした。

彼女はひとりの母親として、涙越しに目が合っている愛娘を、イタズラを思い通り成功させたふうな喜び色の表情の愛娘を

ぎゅ、と心から抱きしめました。

愛娘の生きている温もりをたつぷりと実感して、やっと落ち着きを取り戻した母親は、

「まったくもうっ！ どうしてこんなことするのっ！」
ぴしゃりと娘を叱りました。

「っ！」
チヨコを好きなだけ買ってもらえる。そのことで頭がいっぱいになっていた女の子は、いまさっきまでと一転して出現した“おこつてるおかーさん”にビックリと目を見開いて、

「……………うう」
けれどすぐに、

「……………だ、だって」
どうして怒られているのか、

「チヨコ、たべたかつたんだもん……………」

目の前にある“おこつてるおかーさん”の、“泣き過ぎてノ嘆き過ぎて”涙と鼻水とでぐちゃぐちゃに汚れた 怒り顔を改めて直視して、

「……………うう、……………おかーさん」
きちんと、正しく理解しました。

「…………………………ごめんなさい」

そして母娘は、どちらともなく手を取り合い、

「……………今日は、もう帰ろっか」
「かえるー」

家路につきました。

人々の波にのみこまれて早々に女の子は、波に参加していた顔見知りの商人らによって発見、保護され、波の外の安全な場所まで避難させてもらっていました。なので母親の心配をよそに、騒動が治まるまでヒマになった彼女は、いまもつと熱い問題である“どうしたらチョコを買ってもらえるか”について、ずっと脳内戦略会議を開いていました。

そしてそこから導き出された結果が、さきほどの　いわゆる“死んだふり”でした。

そんな“事ここに到るまで”の話を娘から聞いた母親は、まず、顔見知りの商人らに心から感謝しました。もし彼らが娘を保護してくれていなかったら。あるいはこうして娘を叱ることは二度となかったかもしれない。それを思うと

「……………」
つないだ手を、ぎうと改めて握ってきた母親を、

「どーしたの？　おかーさん？」

女の子は不思議そうに見上げました。

「ん？」

娘の声に“もしも／想像”から“いま／現実”に引き戻された母親は、もの問いげにこちらを見やる娘と手をつないでいる“いま／現実”に、そして手と手につながっている愛娘に、柔らかに微笑み、
「なんでもないわ」

どこか嬉しそうに答えました。

それからしばし無言のまま歩みは進み

「誰かを悲しませるようなウソは、もう絶対にダメだからね？　いい？　わかった？」

やんわりとした口調で、母親は改めて娘に言い聞かせました。

「……………」

女の子は反省しているのか、しょんぼりしたふうに小さく首肯し

ました。

それを見て、しかし母親もまた、ひとつ反省をしました。チヨコを欲しがる娘に、まったく買う予定などないのに、「また今度」と言っていたことをです。それが言い易い言葉だったから、この場面では“当たり前”のような言葉だったから、その意をあまり意識していませんでしたが、しかしこれもひとつの“誰かを悲しませるウソ”であることに、母親にとって都合のいい“言葉/ウソ”であったことに、いまさらながら気がついたのです。

親が言う“また今度”が、いつたい“いつ”なのか、むかしは自分も納得し切れない不満の混在する疑問を懐いていたはずなのに……。

「……………」

子の親としてそれが正しい姿勢であるのか、彼女には判断し切れませんでした。

「ちよつと寄り道してごうか？」

しょんぼり気味な娘に、ひとつ提案を試してみました。

「……………？ どこいくの？」

いきなりすることに理解が追いついていないのか、ポカンとした表情で訊いてくる娘に、

「ん？ ふふふ」

彼女はニヤリとして答えました。

「チヨコを買いに」

夢を現実に変えられるのが子どものスゴイところだとしたら、ウソを本当に変えられるのが大人のズルイところだったりします。

「しつかり“ズルさ/大人”を体得しちゃって……、私も“お年頃”かしら……………」

念願の“ミルクチヨコレート/板チヨコ”を前に興奮気味な娘の背を見やりながら、ふと母親は思いました。

そんな母親の愁いとも似た心情など、

「むー」

まったく感知することなく。女の子は規則正しく陳列された“ミルクチョコレート／板チョコ”を熱く凝視していました。

「むむー」

眼差しの熱でチョコがとけてしまうのでは、と思えるほどに、

「むむむー」

それはそれは熱い凝視でした。

「っ！」

瞬間、ある域に達した武芸者のごとき気迫を発して女の子が動きました。

「これにするーっ！」

そう言っただけかかげられた彼女の手には、いつの間にか一枚の“ミルクチョコレート／板チョコ”がありました。

これにするものにも、工場で作られた既製品なんだからどれも同じでしょうに。と母親は思いつつ、しかしあまりにも真剣に「いちばんおっきいのにするっ！」と息巻いてチョコを厳選する娘の姿には、意図せずして口元に柔らかな微笑みがあったりしました。

「はんぶんこー」

家路の途中にある河川敷の、散歩道に等間隔で設置されたベンチのひとつに母娘の姿がありました。

「あら」

いわく“いちばんおっきい”厳選されたチョコを、しかし迷いなく真つ二つに割って、喜色満面その半分を差し出す娘に、

「もらっちゃっていいの？」

次はいつ買うともわからないチョコですから、母親はあえて訊き返しました。

「うんっ」

と晴れやかな笑顔で答える娘の、その心意気だけでもうすでにお腹いっぱいな母親は、

「全部、食べちゃっていいのよ？」
と返しました。

そんな母親の“優しさ”に、しかし女の子は「むっ」としたふう
に眉根を寄せて、

「はんぶんこおー！」

半分のチヨコを頑と突きつけ、ぷくつとほっぺを膨らませます。

それがあまりにも可愛くて愛おしく、思わず母親は、ぎゅと娘を
抱きしめたい衝動に駆られました。

「……そお？」

そこは気持ちを抑えて、

「じゃあ、半分もらうわね」

突きつけられた半分のチヨコを娘の手から、もらい受けました。

「ありがとね」

半分のチヨコは、愛娘の熱い心意気でとろけてゆるくなっていま
した。

「どーいたしましてっ」

いまさっきの膨れっ面はどこえやら。女の子は嬉しそうに、にぱ
っと笑顔になって言いました。

母親はこの光景を、バツチリしっかり脳裏に焼き付けました。

“このときのこと”は確実に、“女の子／愛娘”が“お年頃”になっ
ても“昨日のこと”として語られるでしょう。

「……えへっ」

そして改めて女の子は、“自分の食べる半分のチヨコ／念願”と
向き合い

嬉々満々な笑みを浮かべます。よほど嬉しいのか、よだれが口の
端から溢れて垂れちゃっています。

それに気づいた母親に、

「むぐ」

まったく“うりふたつ”な顔がありました。

「むぐっ、むぐむぐ」

娘の口まわりにある甘いデコレーションを、丁寧にハンカチでぬぐってから、

「さあーと、そろそろ帰りましょうね。夕食の支度しなきゃ」

母親は立ち上がり、つなぐための手を娘に差し出します。

「おかーさんっ」

しかし女の子は、その差し出された手をつかむことなく、

「おくにちに、チョコっついてるよー」

母親の口元を、ピッと指差して言いました。

「……ん？」

ちよつと驚いたふうな疑問顔で、母親は指摘された箇所を軽く手で触れてみました。

「あらやだ」

そこには指摘された通り、甘くて美味しい“汚れ”がありました。

「ふいたあげるー」

ハンカチで“汚れ”をぬぐおうとする母親を制して、女の子が言いました。

母親は一瞬、思考の間を置いてから、

「じゃあ、お願いしちゃおうかしら」

ハンカチを娘に手渡し、その場に膝をついて娘と目線の高さを合わせます。

「ぐむっ、ぐむぐむ」

口のまわりにある甘い“汚れ”を、愛娘に、豪気にハンカチでぬぐわれてから、

「ありがとね」

母親は「よっ」と気合をひとつ口から発して、立ち上がります。
「どーいたしましてっ」

大きな仕事をやり終えた職人のような晴れやかな表情で女の子は
言って、

「おうち、かえろー、おかーさん」

目の高さほどにある母親の手と、自身の手をつないで　小さな
あくびを、ひとつ。

「……歩ける？　おんぶする？」

いろいろと“凝縮／濃縮”して起こった今日なので、ついにはぶ
たが重たくなってきたと思いき娘に、母親は確かめるように訊きま
した。

女の子はぶんぶんと首を横に振り、

「あるく」

眉はキリツと目は半寝という愉快的表情で、けれどキツパリ答え
ました。

「そお？　でも、すごく眠たくなったら言っのよ？」

「うん」

ほどなくして、女の子は睡魔の誘惑に負けました。

「……………チヨコ」

母親の背におぶさりながら、女の子は“まどろみ”の波間で、

「……………はんぶんこお、……………おとーさん、……………わすれてたあ」

むにやむにやと思いついたふうに言いました。

「……………あ」

ほとんど寝言な娘の言葉で、母親も夫の存在を思い出しました。
そしてうつかり失念していた夫への“わけまえ”についても、考え
が至りました。めったなことでは買うことのないチヨコですから、
せめて“ひとかけら”くらいは、夫にも“わけまえ”を残しておい
てあげるべきだった、と。　いま冷静になつて思えば、の話です

が。

「あの美味しさを味わって冷静でいられるヒトなんて、そもそも居るのかしら？」

誰にでもなく“いいわけ”めいたこと呟いて、

「……夕食は、ちよつと、ちよつとだけ豪華にしよう」

母親は今日の夕食を、チヨコの“ひとかけら”分くらいは豪華にしてあげようと心に決めるのでした。　　と言っても、いろいろ起こって今日は買い物をしていないので、言ってしまったえば“ありモノ料理”なのですが、

「久々の本気料理……」

たまに揮う主婦の本気は、とてもあなどれないモノだったりするのです。見てガツカリ食べて普通な“ありモノ料理”が、見てビツクリ食べて笑顔な“豪華料理”に格上がりしてしまうほどに。

「ふふ、腕が武者震いしてくるわ」

* * *

ひとつの困難を乗り越えて“幸せに暮らしました”という終わりは、現実には起こりえない。しかし、数知れぬ困難の中あって“それでも幸せに暮らしています”という現在は

小話・其の拾七へ気づいた時には、もう遅い（仮題）へ（前書き）

ナンセンス

小説：其の拾七へ気づいた時には、もう遅い（仮題）

《気づいた時には、もう遅い（仮題）》

振り向いたらそこに、深淵のごとき闇をたたえる銃口があった。

「え？」

乾いた発破音が、ひとつ

* * *

地上を見下ろす太陽は、ただ殺意を持って燦々とそこにあり。
憎らしいほど、空は晴れ渡っていた。

暑さ以外に意識の向く先のない、枯渴し切った荒野。ただ唯一“
なにか”の痕跡を感じえるのは、かろうじて“そう見える”一本の
道。

地平の果てから、地平の果てまでを希薄につなぐ、その道に、

「……………」

ひとりの男が、ポツリとたたずんでいた。いまは腕をまくり、胸
元のボタンを外している、白のシャツ。使い込まれて味を出しつつ
ある革のベルトに、濃紺のスラックス。本来は足元の品格を演出し
ていたであろう、薄汚れた革の靴。と荒野よりも都会が適して
いる、居場所を間違えた格好をしている。

「……………」

滴るという表現では不十分な、濡れそうだと表したほうが的確と
思われるほどに、男は汗だくだった。が着用している衣服には、
汗による湿り気はさしてなかった。殺意ある日光が、ただちに水分
を蒸発させ、衣服が湿ることをよしとしないのである。

「……………」

しかし男は、太陽の殺意など感知していないふうであった。ただ

静かに真剣に、自らの手の内にある“モノ”を凝視している。

読み潰された、と言えるくらいにシワくちやでボロボロな、手の平にちょうどよい大きさの、硬い紙で装丁されていない、一冊の書物。それを男は、自身の置かれた環境を認知するより優先して凝視していた。

ふと思い出したふうに、男は口を開いて言った。

「……………」
熱された空気を肺にやり、それを吐き出す勢いで、男は言った。

「……………」
そして、男は、いまから口に出す言葉に必要な分だけ空気を吸い込み、いまから言うべき言葉を、言った。

「……………」
ついに、男は、満を持して、その言葉を、言った。

「ん？ ああ、なんだ、もう始まったのか」

「……………」
「あれ？ ちょっとちょっと、しかるべきところに“あるべき描写”が止まっちゃったら、“言うべきセリフ”が言えないじゃないですか」

「……………」
「セリフだけの話は、小説じゃない　ってわれちゃいますよ？ いいんですか？　ねえ？」

「……………」
「そりゃあ、こつちも、書物に気をやりすぎて、話が始まっているのに気づくの遅れましたよ。だから非がない、とは言いません。けど、このままじゃ進展しないでしょ？　もう少し大人になりましょうよ、ね？」

「……………」
そして男は、
「お、その気になりましたか。いや、よかったよかった。これで役割をまっとうでき　」

乾いた地面に突如として出現した、奈落へと通じる穴に、

男は食べるのに困らない程度には売れている“物書き／小説家”
でした。　　が、しかし現在は、どうにも筆が言うことを聞かない、
いわゆるスランプという困難な状況に陥っていました。

この状況を男は、“登場人物の反抗期”と称して　けれど、と
ても四苦八苦していました。登場人物と対話を試みようにも、どう
にもうまくいかず。辛抱強く何度も何度も対話を試み続けましたが、
やはり進展はなく。当然のように“男／物書き／小説家”も“ヒト
の子”ですから、時と共にストレスが蓄積し

「だからって……」

ストレスが耐えうる限界を超え、ついにプツンした男は、その
勢いで、

「こんな超展開はないよなあ……」

物語の展開にまったく関係なく、突如として場面に“落とし穴”
を出現させ、そしてそこに“反抗期の登場人物”を落としました。

「はあ……」

冷静さを取り戻して男は、残り時間が少ないというのに、
「なにやってるんだよ……、自分……」

と、ふたつの意味で不快な頭を、容赦なくボリボリとかきむしり
ます。

「……はあ。ちょっと休憩しよう」

コーヒー飲んで、気持ち切り替えよう。両の手で軽く頬を叩い
てから、男はイスから立ち上がり、いままで背を向けていたキツチ
ンへ通じる扉の方に

「え？」

まったく見知らぬ人物が、背景に溶け込むように、恐ろしいほど
静かに、寒気を感じるほど無言で、そこに、たたずんでいました。
黒の目出し帽からのぞく眼には、深く冷たい笑みがありました。黒
の革手袋をはめた手には、右手には、よく斬れそうな大振りのナイ
フがありました。

そして速やかに、右手のナイフは振るわれました。

* * *

というところで“わたし”は、読んでいた本を閉じました。

朝の通勤の途中、バスが目的地に到着するまでの車中で、ゆつくり本を読むのが“わたし”の習慣であり楽しみでした。

そんないつもの繰り返しによって体得した感覚から“わたし”は、もう少しで目的地に到着するだろうと思いい、けれど実際、いまどあたりを走行中なのだろうかと窓の外へ視線をやり

「え？」

そこにあるはずのない、そこにあっというまにはずがない、大型トラックの顔が、とても間近に、とても致命的な勢いを保ったまま、とてもゆつくりと、けれど確実に、こちらに迫ってくる様子が、そこに、ありました。

* * *

というお話を讀んだ“あなた”は、

ました。

小話・其の拾八へいけない連想（仮題）（前書き）

絶対不可侵の領域、それは“妄想”

小説：其の拾八へいけない連想（仮題）

《いけない連想（仮題）》

星々の煌めく空に幻惑的な満月が浮かぶ、ある日の夜。

「オレ、ずっとキミと一緒にになりたいと思ってたんだ」

そこに存在感を表す満月を見上げながら、ひとりの男が言いました。

「え？」

男の隣で、同じく満月を見上げていたひとりの女は、一瞬だけ驚いたふうな顔をしてから、けれどすぐに、

「ふふ、奇遇ですね。私も、私も先生と一緒になれたらいいなっと思ってたんですよ」

心の底からの気持ちを表すように、とても素敵な微笑みを浮かべて答えました。

そしてふたりは心からの気持ちを確認合うように、どちらでもなく身を寄せ合い

満月の夜空の下で、銃器が弾丸を発射したときの乾いた発砲の音が轟きました。等間隔で計三回、それはありました。少々の間を置いてから再び等間隔で計三回、それはありました。

「それでは皆さん、本日のお勤めご苦労さまでした」

カッチリとした黒のスーツ姿の、手に分厚い書類の束を持った、過労気味を思わせる疲れた顔つきの男が言いました。

「お疲れ様です」

「お疲れ」

「お疲れ様」

撃ち終えた小銃から弾倉を外し、薬室内に弾が残っていないことを確認する作業をおこないながら、それぞれ同じような黒のスーツ姿の三人の男が応えました。

男たちの前方には、折り重なるように息絶えた男女の遺体がありました。が、彼らは遺体のことなど気にしたふうもなく、

「このあと、一杯どうです？」

「どーせ、一杯じゃすまないでしょー。行きますけどー」

「あはは、確かに。そして同じく、もちろん行きますよ」

とても気楽に、このあとの飲みについて話し合っています。

「いいですねー、私も皆さんとご一緒したいですよ」

疲れた顔つきの男が、とても疲れたふうに言いました。

「じゃあ、一緒に行きましょうよ。知らない仲じゃないんですから」

「そうですよー」

「親睦を深めるという意味でも、行きましようよ」

それぞれ男たちは好意的な意を示しますが、

「ありがたいお言葉ですが、と申しますか、本心としては是非一緒したいのですが」

疲れた顔つきの男は、疲れたふうな乾いた笑みを浮かべて、

「このあと書類と一戦交えなければならぬもので……。はは……。

お誘い頂いたのに申し訳ない」

心の底から残念そうに詫びました。

「ああ、それはそれは」

「ありやいやー」

「お疲れ様です」

いかにもそれらしく、男たちは同情めいた表情を見せました。そして残業ある疲れた男にそれぞれ労いの言葉を残して、業務を終えた男たちは飲み屋へと去って行きました。

疲れた顔に、疲れた笑みを浮かべて、楽しげに去り行く男たちを見送り、

「……はあ」

過労気味な男は、夜空に浮かぶ満月を見上げ、
「……………はあ。　つと、よし。お仕事お仕事」

努めて、というよりは無理をして気持ち切り替えました。
平均的な大人の身長より高く、横幅も長く、積み上げられた土嚢。
それを背にするカタチで、先ほどから軽視されている男女の遺体は
ありました。

疲れたふうな男は、疲れたふうな溜め息を吐きつつ、男女の遺体
に歩み寄ります。そして手に持っている書類と、遺体とを、なにか
確認するように交互に見やり、

「まったく」

あきれたふうに、そして溜まったストレスをぶつけるように吐き
捨てながら、胸ポケットから安物のボールペンを取り出し、

「……………はあ」

流れる動作の、けれど雑な筆致で、なにか書類に記入してゆきま
す。

男の手にある書類には、『違法表現者一覧』と書かれてありまし
た。老若男女を問わず“顔写真／氏名／年齢／職業／備考”が記載
されています。

そしてその一覧の中に、いまは遺体の息絶えた男女も記載されて
いました。

男の項目には、ふたつの名前が書かれていました。本名と、ペン
ネームです。男は、描くことで表現する漫画家でした。

女の項目には、いわゆる一般人のそれと異なることは書かれてあ
りませんでした。　　が、備考のところに“それ”がありました。
女は、漫画家である男のアシスタントでした。

差別的、侮蔑的、猥褻的、反社会的な、あるいはそれらを連想さ
せる“描きかた／言葉／表現”の使用が“規制／禁止”されて久し
く、表現に対して強大な権力が抑制なく発揮される世の中で、しか
しそれでも、それらに“表現することで抗い続ける者たち”は確か
に存在していました。“好ましくないモノを連想させる”という理

由で“描きかた／言葉／表現”の使用が“規制／禁止”されると、もれなく表現者は“表現者としてのアイデンティティー”を殺される。だからそれに屈するわけにはいかない、と。

遺体となった男も、そんな“表現することで抗い続ける者たち”のひとりでした。

遺体となった女は、そんな男が描いた“マンガ／表現”に魅せられたひとりでした。

「どうしてこの国には、こうも私の仕事を増やす方々が多いのだろう……」

書類への記入を終えた疲れた男は、そんなことを口にしつつ、

「まあ、でも」

漫画家とアシスタントの遺体から離れて、先ほど男たちが小銃を射撃していた立ち位置の脇にある“なにかの装置”の操作パネルの前まで移動し、

「おかげで当分は」

慣れた手つきで操作パネルに触れ、

「食べるのに困らず暮らせるのですが」

そして“なにかの装置”を起動させます。

漫画家とアシスタントの遺体があるところの地面にポツカリと、闇黒の穴が出現しました。

漫画家とアシスタントの遺体は、なんら抗うすべもなく闇黒の中へ消えてゆきました。少しの間を置いてから、闇黒の穴も消えました。

「はあ……。もう少し残業手当を厚くしてほしいですね……」

疲れた男は、愚痴をこぼしつつ、残業との戦いの場へと去って行きました。

なにもなかったふうを偽装する冷たい静けさが、そこにありました。

* * *

特別な使命感に駆られた者たちは、
究極的な“純白の理想”を追い求めた。
そしてその行為は、
やがて人間性への殺戮を開始した。

小話・其の拾九へひとつの究極（仮題）（前書き）

求めあるモノには価値が付く

小説：其の拾九へひとつの究極（仮題）

《ひとつの究極（仮題）》

全国規模どころか全世界規模の、きめ細やかなサービスに定評のある、とあるファストフード店に、

「あゝ、腹減ったわ」

ひとりの男が、そんなことを言いつつ来店しました。

自動ドアの開閉に連動して、店員に來客を知らせる機械音が鳴りました。

それを聞いたひとりの店員は、

「……………」

しかし一言も発することなく、そして無表情のまま、レジの前に立ちます。

空腹の男は、メニュー表を眺めつつ、

「じゃあ、まずは」

と“ワンコイン／五〇〇円”のセットメニューを注文しました。

“スマイルサービスセット”を、ひとつ

注文を受けた店員は、しかるべきことをレジに打ち込み、

「いらっしやいませ、お客様」

よく訓練された満面の笑みを浮かべて、

「イトメニュー／飲食のご注文”はお決まりですか？」

定評通りのサービスを提供します。

「現在こちらのセットが」

* * *

そして“気配り／親切心／思いやり／まごころ／やさしさ”は、

需要と価値のある商品となった。

小話・其の貳拾へその名はアンディーロイド（仮題）（前書き）

【突き詰めれば“それ”になる】

小説：其の貳拾へその名はアンディーロイド（仮題）

《その名はアンディーロイド（仮題）》

ひとりの男が、苦悩に満ちた表情で、

「なぜだ、なぜだ、なぜだっ！」

頭を抱えていました。

彼は究極の“ロボット／アンドロイド”を生み出さんと日夜研究している、志と熱意のある博士でした。

ヒトのような自律した行動が可能で、なおかつ情報を収集蓄積し成長してゆく頭脳。それが博士たるこの男の求める目標であり課題でした。まさしくヒトの“それ”を解明するに等しい研究開発です。そしてだからこそ彼は、頭を抱えていました。

苦悩の果てに、彼の脳裏に“ひとつの到達点”が鮮明に浮かびました。

彼は研究資金を投入して、しかるべき“モノ”を入手し、そしてしかるべき手順を踏んで

ついに、彼の“求める目標／それ”は誕生しました。

彼はただちに研究資金提供者たちを呼び集め、資金提供に感謝の意を表しつつ、

「それでは、ご覧ください。これが私の“アンディー”です！」
誇るように“それ”をお披露目しました。

集められた資金提供者たちは、そろってざわめき、そして言葉を失いました。

その様子を、彼は満足気に眺めました。

ひとりの資金提供者が、

「博士、おめでとunggざいます」

ふと気が付いたふうに祝いの言葉を述べました。

「かわいい、
“赤ちゃん／お子さん”ですね」

小話・其の貳拾巻へ彼方は近く、隣は遠い（仮題）（前書き）

【選べる繋がりのもて】

小説：其の貳拾壹へ彼方は近く、隣は遠い（仮題）

《彼方は近く、隣は遠い（仮題）》

ひとりの若い女性が、携帯電話を操作しながら歩いていました。海外に居る友人と、他愛無い話しをメールでしていました。

ふと、彼女の歩む足が止まりました。その理由を、速やかに友人へメールします。

道ばたに、ひとりの男性が倒れていました。苦しそうに、表情を歪めています。額には、脂汗が浮かんでいます。呻きながら、息を荒げています。

突然の事態に、“当惑／困惑”した彼女は、追い詰められたヒトの表情になって、どうすべきか友人にメールで問いました。

早く速くと“答え／応え”を求め、彼女は携帯電話の画面を凝視します。

永くて短い時を経て、“答え／応え”が届きました。

まずは深呼吸して落ち着こう、と書かれてありました。

そして、“どうしたのか”呼びかけてみるよう書かれてありました。

彼女は友人の言葉通りに、まずは深呼吸をしました。次いで呼びかけようとして、いまさらながらとても重大な問題に気が付きました。

倒れている男性のメールアドレスを、彼女は知りませんでした。

小話・其の貳拾貳へニンキモノ（仮題）（前書き）

【遠くより近くがよろこ】

小説：其の式拾式へニンキモノ（仮題）

《ニンキモノ（仮題）》

ふたりの男が、エアコンの効いた部屋で“ガリガリ君／暑い夏の定番の友”を食べながら、気だるげにテレビを見ていました。外は殺人的に暑いです。実際、テレビのニュースは熱中症による死者について連日のように報じています。

「……なあ」

「……ん？　なんだ？」

「お前って“このヒト”のこと、どう思う？」

ふたりの見やるテレビには、最近人気のアイドルが“視聴者／観覧者”に笑顔をふりまいていました。

「どうって……。アイドルとか興味ないし……」

「そついや、そうだったな」

「それにさ」

「ん？」

「みんなに元気になってほしいとか、笑顔になってほしいとか、言うてさ　べつに“そのこと”を否定するつもりはないけれど、目の下に疲労のにじみ出たヒトに言われたくないというかさ、ヒトのこと言うまえに、もうちょっと自分を大事にしてから活動しようぜ、って思う。疲れてるヒトから元気なんて貰えないぜ、って最近のテレビを見ていて思うわけさ」

「ああ、まあ、そうだなあ。　あっ！」

「どした？」

「アタリ出たっ！」

「おおっ、それはそれはおめでとう」

「ちよっと交換しに行ってくるぜ」

そう言って、ひとりの男はアタリを交換しに行きました。殺人的

に暑い、外へ。

「……………やっぱり」

部屋に残ったひとりの男が、ぼそりと言いました。

「“疲れたヒト／テレビの中の人気者”の笑顔を見るより、“ガリガリ君／暑い夏の人気者”のあたりが出るほうが、よっぽど元気が貰える。あ、オレもアタ……………りじゃないか……………、残念……………」

小話・其の貳拾参へ人類共通の伝統（仮題）へ（前書き）

【T O : “侵略者／支配者” 気質を忘れない方々へ】

小説：其の式拾参へ人類共通の伝統（仮題）

《人類共通の伝統（仮題）》

ふたりの男が、それぞれの前に置かれたノートパソコンを黙々と操作していました。それぞれのパソコン画面には、それぞれひとりの兵士が見ている、そして直面している、砂塵舞う市街地での壮絶な戦闘の光景が映し出されていました。

「そーいえば」

ひとりの男が、画面から目をはなすことなく言いました。

「ん？ なんだい？」

ひとりの男は、画面から目をはなすことなく答えました。

「腹へった」

「ああ、そーいえば、なにも食べてなかったね」

「なんか食いモンねえ？」

「冷蔵庫に牛丼あるよ。……コンビニのやつだけど」

「お、マジ？ 食っていいか？」

「いいもなにも、この状況に備えて昨日買ってきたやつだから」

「おお、気が利くなあ」

「食べるなら、ボクの分もレンジで温めてくれよ」

「おう、わかった」

そー言つて、ひとりの男は退席しました。

そして。

温めた牛丼を、右と左の手に持って戻ってきます。右にあるやつを相手の前に置き、左にあるやつを自分の前に置き、

「いっただつきまーす」

嬉々として割り箸を割り、まさに食らおうかというその瞬間

「そーいえばさ」

と声をかけられましたが、男は流れる動作でタレの染みた牛肉と玉ねぎとごはんを口に運びます。

「牛丼で思い出したんだけれど」

声をかけた男は、

「スペインで闘牛が禁止されたよね」

相手の聞く態度を気にすることなく言いました。

「へえー、スペインといったら闘牛ってイメージだったから、それはずいぶんと意外な話だな」

タレの染みた牛肉と玉ねぎとごはんのハーモニーを味わってから、男は言いました。

「まあ正確には、スペイン北東部のカタルーニャ州の州法で、っていうだけで国としてではないけどね。本土以外の島の一部では、以前から禁止しているところもあるようだし」

「カタルーニャ州ってバルセロナがあるところか……。てか、なんで禁止になったんだ？」

「動物虐待だっていう批判と、闘牛それ自体の人気の低落。あと、政治的なお話が背景にあるとかないとか」

「ふーん」

男は思うところあるヒトの顔で、

「昔からある伝統文化の一部を、残酷と受け取るヒトがいて、なおかつそれが世間的に不人気だったら、速やかに禁止できるっていうならさ」

けれどさして真剣さのあるふうもなく言いました。

「世界にある戦争を、なんで禁止しないんだろうな」

「戦争は、確かに不人気ではあるけれど、伝統文化じゃないよ」

「そうか？ すっごい昔から世界中で継承され続けているモノなんだから、ある種の伝統文化だろ」

「まあ、否定はしないけれど……。でも、“禁止すること”それ自体が、戦争の火種になっちゃうと思うよ」

「なんで？」

「だって、一方の価値観で“それ”を否定して禁止するってことは、相手の価値観を否定して、否定する側の価値観を相手に強要することになる。戦争の侵略と似てると思わない？」

「他の価値観の“伝統文化／戦争”に、他の価値観が首突っ込むところが、そもそも“侵略／火種”だって？」

「似てるんじゃないかな、って話だよ。異なる価値観から誕生した伝統文化が背景にある“考え／正義”を、異なる価値観から誕生した伝統文化が背景にある“考え／正義”が、相手を理解しようとする努力もなく一方的に“否定／批判”する行為が、ね」

「ふーむ。……てかさ」

なにか気づいたふうに、男は言いました。

「ボケって称されるくらい平和な国で、戦争モノのネットゲやりながら、牛丼食ってるヤツがする話じゃねえ、ってことをいまさら思うんだ」

それを聞いた男は、愉快そうな笑みを浮かべて、

「はは、確かにね」

そう答え、流れる動作でタレの染みた牛肉と玉ねぎとごはんを口に運びました。

* * *

残虐性は人間の本性の一部に確実さを持って共存している。

小話・其の貳拾四へひとつの長くて短い物語（仮題）へ（前書き）

【“つづく”で終わる世界一の物語】

小説・其の式拾四へひとつの長くて短い物語（仮題）

《ひとつの長くて短い物語（仮題）》

【注：この物語を読む前に】

まず、深呼吸をしましょう。

次に、胸に手をあててみましょう。

そしてゆっくりと目をつむって、いまこの瞬間に至るまでの“自分／思い出／過去”を思い起こしてみましょう。

思い起こせましたか？

昨日の夜になにを食べたか、答えられますか？

そうですね。

それでは準備万端のようですので、どうぞゆっくり物語をお楽しみください。

《ひとつの長くて短い物語（仮題）》

とても唐突で恐縮ですが、あなたは“作家”です。この物語の。

そういう呪いだと思ってください。すみません。

でも呪いは解けません。てへ

……………すみません。ごめんなさい。

でも呪いは解けませ

* * *

“「この書き手と、物語を信用しなさい」

そして、何よりも、読み手としてのあなた自身の感覚を信用した方がいい。この物語は、それにふさわしいものを与えてくれる。”

『マルドゥック・スクランブル

The Second Combustion 燃焼』

著 沖方 丁

S F

評論家 鏡 明 による“解説”より抜粋

* * *

そして、“あなた”は産まれました。ここにいることを宣言する
ように、産声を上げました。

111

【中略／思い起こしたことを書き込んでください】

そし

て、“あなた”はこの話を読みました。

つづく

* * *

参考資料

“あなたが誕生した日に、あなたを産んだヒトが、あなたへ贈った、長くて短い物語／最初の誕生日プレゼント”の一部。

* * *

誰だつて産まれて“自分”を認識した日から、とても優秀な作家であり脚本家であり演出家であり役者であり、とても厳格な読者であり視聴者であり観覧者であり批評家である。

* * *

“ 事實は小説より奇なり ”

イギリスの詩人 ジョージ・ゴードン・バイロンの言葉

小話・其の弐拾五へ十人十色（仮題）へ（前書き）

【個々ではわかりあえるのに集団では否定する】

小話：其の貳拾五へ十人十色（仮題）

あなたが望まれて産まれてきたということ、
どうか、忘れないでほしい。

* * *

視覚がとらえた情報を、どのように解釈するか。
その判断は、おおむね成長過程で蓄積された知識によるところが
大きい。

その花は美しい。

その花はみすばらしい。

その花は愛らしい。

その花はおぞましい。

その花は

その花は

その花は

などなど。

しかし結局のところ、その“見かた／価値観”は成長過程で蓄積
された偏見から導き出される、“ある特定の角度からその花を見る
方法”ではない。

その花を見る角度が少し違うだけで解釈の齟齬は生じ、ときにそ
れは暴力的ですらある。

* * *

だから私は、

殺されることを選んだ。

《十人十色（仮題）》

僕と彼女とでは、そもそも住む世界が違っていた。
存在としての経験も思考も 認識のされかたも。

だから、偶然がもたらす出逢いとは面白くも恐ろしいもので、
「目覚めたのなら、はやく自分の居場所へ帰りなさい」
僕は彼女と出会ってしまった。

というより、目が覚めたらそこに居たのだ。

射し込む陽の光に煌く長い純白の髪が神々しさを演出するなか、
確固たる強い意志を備えた赤い瞳でこちらに向けて、背筋をしゃんと伸ばし正座して。その姿に僕は思わず見とれて、

「ここは、黄泉の国ですか」

あきらめたように赤い瞳の女性に訊ねた。

しばしの沈黙が場を支配する。 と不意に、彼女は顔をそらし
て口元を右手で覆い隠す。 なんだか小刻みに肩が震えているようだ
けれど……。

僕の死を悲しんでくれているのだろうか

「ずいぶんととつぴな、面白いことを言いますね、あなたは」

と思ったのは自意識過剰だったようで、

「どうして黄泉の国だなんて思ったんです？」

彼女はどうにか威厳を保とうと堪えているが、顔は笑っている。
べつに僕は笑いを提供したつもりはない。

ただ最後の記憶が、川で溺れて というものだったから、てっ
きりそのまま死んでしまったのだらうと思ったのだ。 それになによ
り、

「貴女のような美しいヒトが居るんだ、この世のハズがない」

「っ！」

なにか驚いたふうに目を見開いて、しかしすぐに彼女は、

「嬉しいことを言ってくれますね」

「またも笑いを堪えているような、

「でも、残念ながら」

「柔らかい微笑み顔になる。」

「ここはこの世で現実ですよ」

現実でこんなにも素晴らしいヒトに出逢えたのだから、残念というよりむしろ“幸福／幸運”だと思える。釣りをしていて足を滑らせ溺れた自身の不注意さに、感謝してもいい。

手を貸してくれようとする彼女を、僕はいらぬ意地で制し、上体を起こした。

「どこか痛みますか？」

「訊ねてくる彼女に、

「いえ、どこも」

「答えつつ、僕は辺りを見回した。」

彼女という存在が付加価値として合わさって初めて“味のある”と言える、くたびれた木材を簡素に組んだだけの、決して広くない建築物の内部のようだ。

ぐるりと室内を一周して彼女に視点を戻す。

「吸い込まれるような錯覚に陥る、魔的とさえ言える赤い瞳がこちらを捉える。」

「問題なく動けるのなら、はやく自分の居場所へ帰りなさい」

「彼女は目覚めた時と同じ、

「ここには長居すべきではありません」

「突き放す語気で言う。」

でもどうしてだろう、僕にはそんな彼女が必死に涙を堪えている

ように思えてしまったのは。

しかし情けないかな僕は、簡単な礼を言っただけで陽の光が射す外へと出るという行動しかできなかった。

彼女の気迫に圧倒されたと言ってもいい。

ワラを編んだだけの質素な扉をくぐり外に出て、空を見上げる。陽の位置で、今がまだ正午であるとわかった。溺れたのに服が乾いているのも、この高い陽のおかげだろう。

心地の好い柔らかく暖かな光を全身いっぱい浴びて、背伸びをし、ここが何所であるのか知るために空から視線を地上に戻す。

まず目にはいるのは、轟々と神々と水の誇らしさを告辞する滝つぼだろうか。決して巨大ではないが、その美しさは果たして純白の長い髪に赤い瞳を持つある女性にひけをとらないものがある。しばしその寛大さと優美さに見惚れ

不意に、頬を撫でてきたそよ風にハッと意識を覚醒させ、葉と葉をこすり合わせてささやかに自己主張する木々の存在を知る。木々が作り出す深い濃緑は深淵にも似た恐ろしさと神秘性を兼ねていて、引き込まれそうなくしかし引き込まれたら虜にされて脱け出せなくなってしまうような、危うい魅に思わず背筋がゾクリとした。

そこでようやく、ある重要な事に気がつき、

「……………」
僕は簡素な扉を再びくぐる。

彼女は一瞬だけ即行で戻ってきた僕に目を丸くし驚いたが、すぐにいぶかしげな眼差しで抗議してきた。

なにかを言われるより先に、

「ここが何所なのかわからなくて。その……、帰りようが……」
致しかたない事実を告げる。

彼女は目をつむり何かを考え込み、しばしの間をあけてから、

「しかたありません、人里に通ずる道まで案内しましょう」

諦めたようなあるいは決意したような意思を語る赤い瞳の眼差し

を向けてきた。

木々が作り出す深い濃緑の闇の中にあって、圧倒的な純白を備える彼女は、暗黒に射す希望の光のようだ。獣道とすら呼べない雑多な地面を、ただ黙々と踏みしめて道案内役にてっする彼女の背を追いなから、僕はそんな事を思った

と、不意に彼女は立ち止まり、

「ここを道なりに行けば人里に出ます」

指し示すのは、やっと獣道と呼べるような荒々しく踏み固められた森の小さな切れ間である。

これを果たして道と呼んでいいのだろうか。なんてことを僕が考えていたら、彼女は自分の役目は終わったとばかりに元来た方向へと歩み去ろうとしてしまう。

僕はどうにか呼び止めて、

「まだなにか？」

と振り向いた彼女を見て、二の句が告げなくなる。

「え、と……その」

そして、どうにか全身から言葉を絞り出す。

「また、会えるでしょうか？」

「何故？」

彼女はいぶかしむように小首を傾げる。

……何故って、なぜだろう。

うーん。ただ会ってもつと話がしてみたいから、というのが僕の本心だろうが、

「その、えっと、ほら、助けてもらったお礼とかしたいですし」

口から出たのはそんな言葉だった。

「私は何もしていませんよ。あなたがひとりで助かっただけです。ですから助けにお礼がしたいのなら、強い生命力を授けてくださったご両親にするべきですよ」

どこかつっぱねるような彼女の応えに、

「だとしても、ほら、貴女に出逢わなければ森の中を彷徨っていたかもしれないですし、やっぱり助けてもらってます」

僕はどうにか食い下がった。

「そうですか。では、そのお気持ちだけ受け取っておきます」

言つと彼女は拒絶するように、

「ですから、私のことはお忘れなさい」

深い濃緑の闇の中へと歩んでいってしまふ。

「……忘れる、だなんて。どうして」

僕にはその言葉の真意が理解できなかった。

ただ去り行く彼女の背中が、ひどく小さく寂しそうに見えてしまったのは、どうしてだろう……。

水に浸かっても問題のない品として思い浮かんだのは、果物と釣りたての川魚くらいだった。僕はそれらを布袋につめると、昨日足を滑らせて溺れた川に身を投げて意図的に流される。

本当は帰りを通った獣道から行きたかったのだが、時を経て見ると、いったいどこが道なのか、まったく見分ける事ができなかった。いたしかたなく荒っぽいが確実な手段で彼女の元へと行くことにした。

が、もう少し深く物事を考えておくべきだったなあ、と轟々高らかに咆哮をあげる川の終着点を前にして気づく。

自分で選んだ事だから後悔はしないけれど、時すでに遅しとは思ふ。

ただ流されるだけの身体が、ジリジリと、しかし確実に川の終わりへと近づいてゆき

いつそ清々しく、水しぶきと共に僕は空中へ舞った。

数瞬の間だけ面白可笑しい浮遊感を味わい

次瞬、強烈な平手打ちを同時多発的に全身へみまわれたような感覚に襲われ、耳は水を引つ掻き回す忙しい音を聞きつつも、身体はあらゆる方向からの力にもてあそばれ、頭ではどっちが上でどち

らが下なのかさえわからなくなる。ただ僕に可能なことは、手にした“お礼の品入り布袋”を手放さないよう必死になることだけだった。

日の光に頬が温められていることで気がつく、波打つ水面に浮かんでいた。

どうやら、溺れ死なずにすんだようだ。

手の内には“お礼の品入り布袋”の感触もある。とりあえず、結果は良し。

岸に上がり、大の字に寝そべる。濡れた衣類を日光で乾かすためだ。

滝つぼの発する轟々という意外と耳触りの好い音を聞き、ささやかに肌を撫でる風を感じ、太陽の温もりのなかに居たら、意図せずしだいに目蓋が重たくなってきた……

……草を踏むささやかな音が近づいて来る。どこか曖昧な場所でのことを知った。

しだいに近く鳴るその音に合わせるが如く、僕はまどろみから現実に取り戻されてゆき

「あなたは、どういっつもりなのですか」

当惑気味に、しかし責めているような声を聞いて急激に意識が覚醒した。

「おはようございます」

挨拶を先に済ませてから、目を開く。視覚が一番に捉えたのは、柳眉を逆立てる彼女のお顔だった。麗美な表情は、ともしれば半ばあきれているようでもある。

「なにが“おはようございます”です。どういっつもりなのですか、と問うているのですよ」

怒りの口調で言いながらも彼女は、僕が身を起こすのに手を差し伸べてくれる。ありがたく、その手を借りて起き上がり、

「ええつと」

頭の回転が決して速いとは言えない僕は、“どういつつもりなのか”という問いかけに対して、

「その……、助けてもらったお礼を」

と“お礼の品入り布袋”をかかげて見せた。

「……」

彼女は口を真一文字に硬く結んでから、

「私のことは忘れなさい、と言いましたよ」

圧殺するような重たい口調でとがめてくる。

「確かに言われました。そのこと、よく記憶してます」

「では、どうして、いま、あなたは、ここにいますか」

彼女は己が心情を言霊にのせるがごとく、語を強調しながら言う。

「いや、その、一言一句をよく記憶しているからこそ、まったく忘れられなくて 貴女のことを」

そのあと僕は、酸欠を起こすのではないかと心配になるくらい長いながい溜め息を吐いた彼女に、睨みという無言の圧をかけられ帰宅をよぎなくされた。

彼女のくれる鋭い眼光に背中を押されるようにして、件の人里へ通ずる道まで追いやられ、しかし最後の最後に“お礼の品”を手渡すことに成功する。それを彼女が返してくる前に、僕はそそくさと帰路につく。

次の日。

陸路で行こうと思うも、やはり帰りに歩いた獣道は判別することができず、結果的に昨日と同じ水路で行くことに。

そして出会った彼女は、一瞬だけ驚くと、速やかに呆れの態に移行し、とつと僕を追い返す。

その次の日。

翌日の映しえのようなやりとりがあり、そして終わる。

またその次の日。

あるいはただの嫌がらせと思われても仕方がない事を僕は繰り返
し

日々は巡って。

彼女の僕に対する呼び方が、距離感のある他人行儀な“あなた”
から、少し距離の近い“キミ”に変化したころ。

またも滝から落っこちて現れた僕を発見した彼女は、魅惑的な赤
い瞳のある眼球をこぼしそうな程に目を見開くと、これでもかとい
うくらいの空気を肺に吸い込み

いったいどこまで続くのか、奈落の底より深々とした溜め息を吐
くと、

「キミは……いい加減にしないと、いつか命を失くしてしまいます
よ」

「冗談まじりの注意だろうと思ったのだが、しかし言う彼女の眼差
しと表情には、真に迫るような不安めいた色がうかがえた。

そんな事を言われた次の日。

現実として、僕は死にそうな状況に陥った。

滝を落ちるまではいつも通りだったのだが、滝つぼで渦に揉まれ
てしまい上下左右の感覚を失い、冗談じゃなく溺れてしまったのだ。
濁流の音を最後に、意識は暗黒に包まれ

目を開けると、そこには僕をのぞきこむ彼女の顔があった。

安心しているような、しかしそれでいて悲しんでいるような、触
れたら崩れてしまいそうな儂げな表情で、

「身に染みてわかったでしょう？ もう私の所へ来るのはおやめな

さい。私にかかると、不幸にしかねませんよ」

赤い瞳でこちらを捉え、真摯な眼差しで、

「私は、疫病神なのですから」

彼女はそう口にした。

反射的に僕は言葉を吐こうとしたのだが、しかしそれは頑強な城壁のごとく総てを隔てる彼女のまとう雰囲気に拒まれてしまう。

彼女はすっと立ち上がると、

「……道まで送ります」

こちらの反応など意とせぬ有無を言わせぬ態度で、簡素な扉の向こう側へと行ってしまった。

僕は慌てて後を追う。

歩む途中で、何度かその背中に声をかけようと試みたのだが、言葉は喉に引っかかったイガのごとく口から出てこない。口腔内に手をつ突っ込んで強引に引き出したい衝動に駆られるが、しかしそんな事をして、果たしてその言葉は彼女に届くだろうか。

けれど結果的に僕は、彼女の疫病神という言葉の意味を知ることになった。

翌日の早朝 突然に、僕は同じ村に住む男たちに拘束され、理由もわからないままに村長のもとへと強制連行された。

村長は森の精霊たちや神々の声を聞くことのできる特別なヒトで、この村においては絶対の存在だった。

そんな彼いわく。

僕は悪い“あやかし”に魅入られ、そして利用され、この村に“不幸/悪い流れ”を運んできているという。

最近、よくない虫が大量発生して農作物が全滅してしまったのも、僕が運んできた“不幸/悪い流れ”によるものだ。

そんなことを早朝、突然に言われても、さっぱり僕の理解は追いつかなかったが、しかし注意深く村長とその他の者たちの話を聞い

て、次第に自分が置かれている状況がわかってきた。

どうやら昨日、イノシシ猟に出て森に入っていた者に、運悪く偶然にも、彼女の所から帰る僕の様子を目撃されてしまったようである。そして目撃者たる彼には、純白の髪に赤い瞳を持つ彼女の姿が“恐ろしいモノ／この世ならざるモノ”に映ったらしく。それが村で暮らす者なら誰もが頭の片隅に記憶している、村長が言い伝えるところの、山に住まう“あやかし”だと思いつたようだ。

僕が毎日のように川へ流されに行っていることは、公言せずとも狭い村であるから話は誰にでも伝わっており、それだけでも僕の行動は奇行と思われ奇異の眼差しを向けられていたのに、そこへきて目撃者いわく“恐ろしいモノ／この世ならざるモノ”と一緒に居たそんな姿を目撃されては、目撃者からの報告を受けた村長が僕を捕らえに来るといふ現状は不本意ながらに呑み込めた。

そして同時に、僕の村長に対する認識が一変した。

いままで“そうだ”と教え込まれ教育されてきたから、村長は森の精霊や神々の声が聞ける特別なヒトだと“思っていた／思い込んでいた／思い込まれていた”が、それがどうだ

僕が悪い“あやかし”に魅入られ、そして利用され、この村に“不幸／悪い流れ”を運んできていたって？

最近、よくない虫が大量発生して農作物が全滅してしまったのも、僕が運んできた“不幸／悪い流れ”によるものだって？

そもそも会った事もない彼女を悪い“あやかし”だと決め付けて語っている時点で、僕には村長の言葉がとても稚拙な場当たり的で幻想に満ち溢れた妄言にしか聞こえなかった。

僕が元々、森の精霊や神々の存在を熱心に信奉していなかったから、余計にそう聞こえたのかもしてないが。

でもだとしても、森の精霊や神々が、彼女を悪だと、果たしてそんなこと言うだろうか？

実際に会って話して少なからず彼女を知っている僕は、彼女から悪なモノなど感じたことなどないというのに。

この極短い時間の内に、僕の村長に対する“信頼／信用”の念はめっきり失われたが、しかし他の者たちが村長に向ける“信頼／信用”の眼差しは揺ぎ無く、だからこそ村長の下した命に反を唱える者は僕しか居らず、ゆえに僕へ向けられる“奇異の／気持ち悪いものを見る”眼差しは決定的となった。

村を、村の者たちを、未来を、守るために　不幸をもたらす“あやかし”を退治する。

こんな馬鹿げた、一方的で身勝手な負の責任の押し付け。

それに勇んで賛同する村の者たち見て僕は……いままで苦楽を共にして暮らしてきたけれど、申し訳ないけれど、その姿が酷く矮小なモノに思えてしまった。

知らないヒトを、知ろうともしないで、一方的な偏見の言葉を吟味せずに受け取って、そこからの想像だけで相手の存在を決め付けるなんて。まさかそんなことをするヒトたちだったなんて、考えたこともなかった。

村長の言葉を従っていれば幸せになれると信じて疑わず、意思決定を外部に委ねて、“意志／自己／わたし”が稀薄になってしまっている　そして、そうであるがゆえに“集団／集合体”としてはとても強力で、“集団／集合体”としての規範に外れる個を、その圧倒さで排除しようとする、自らを正義として行動する絶対的盲目心。僕にはいままで共に暮らしてきた村の者たちが、矮小であると同時に不気味なうねりをもった危険なモノに見えた。

けれど僕も、この不気味なうねりの一部だったのだ。

彼女と出逢うまでは　。

村長の一方的な話が終わると、僕は両脇を抱えられて外に連れ出された。そして、村の外れに在る、悪さをしでかした厄介者を懲らしめるために存在する牢屋に容れられた。

なにもできないまま時間だけが経過し、格子窓から射し込む光が

夕刻色に染まったころ。

僕に、思わぬ来客があった。

背後から見ると一瞬、首がないように見えてしまうほど腰の曲がった、ボサボサの白髪頭をした老婆である。

最初、誰なのか見当がつかなかった。

が、ふと、この老婆が誰であるのかを思い出した。

村の外れにある竹林に住む、いわゆる村の偏屈者である。

僕との接点は、まったくない。

なのに、どうしてここに現れたのか？

村長いわく、悪い“あやかし”に魅入られたという僕を、冷かしのでも来たのか。

そんなことを考えていたら、牢の前まで来た老婆がフトコロからなにやら取り出して

牢の施錠がはずされた。

いまいち状況がのみこめず呆ける僕に、老婆は無言のまま手招きをし、踵を返して歩み始める。

「……………」

数泊の間を置いてから、

「ま、待ってください」

理解が現状に追いつき、僕は慌てて老婆の背を追った。

牢のある小屋から外に出ると、出入り口の所で、ふたりの男が地べたに寝そべり騒々しいイビキをかいて眠っていた。この村で牢屋番を仕事にしているヒトを僕は知らないの、きつとこのふたりは貧乏くじを引いてしまった間に合わせの牢屋番だろう。まあ、すでに役割は放棄しているようだが。

「さしいれの酒に、いっぶく盛ってやったのさ」

鼻先でせせら笑うように言って、老婆は歩みを止めることなく先へ行く。

なかなかどうして僕には度胸が足りず、

「…………あの」

だからその背に疑問を投げかけるまで、たつぷりの時を要してしまった。

「どうして僕を、牢から出してくれたんですか？」

その問いかけに、老婆は歩みを止める。しかし、なかなか言葉は返ってこない。

その間を埋めるように、川の流れる力強い音が耳に流れ込んでくる。

そこで疑問のことから少しだけ意識がそれて、いま自分がどこに居るのかを知った。いつの間にか、彼女の所へ行くのに使っていた川の、橋の上まで来ていたようだ。

「お前さんに」

老婆は振り返り、懇願するヒトの表情で僕を見やりながら、

「救ってもらいたいのだ」

心の底から発せられた言霊特有の、深く重みのある音声で言ってきた。

「…………救う？」

老婆が冗談を言っているわけではないということは、その雰囲気から十分に察することができるのだが、しかしだからこそ僕には、その言葉の意図が正しく理解できなかつた。

いまさつきまで接点のなかつた僕に、そんなことを頼む理由が見当たらない。

それにどう考えても、牢屋から出してもらった僕のほうが救われている。

どうということなのか、もう少し具体的に説明してもらおうと、問いの言葉を口にした瞬間、

「あの子を」

鬼気迫る勢いで老婆は僕の腕をつかみ、

「あの子を」

言葉に込めた想いと比例するがごとく、そこにある老体からは想像もつかない強い力で腕をしめつけてきた。

「どうか、救っておくれ」

ひとまず状況整理も兼ねて、老婆の話を聞いた。

老婆の、決して愉快ではない事情を知った。

だから僕は

川に飛び込み流される。

いまさらながらに、彼女の所へ向かう方法をこれしか知らないことに気がついた。

* * *

老婆は自身が、彼女の祖母であることを明かしてくれた。

そして老婆の背負う罪の、告白を聴かされた。

彼女の家族でありながら、その当時は村長の言葉を信じて疑わず、彼女と彼女の父母を村から追い出すことに抗うことなく、むしろ率先してそのことを推し進めたことを。なにより村の内部の自分の居場所を保守するために、そのことを推し進めたということ。

自分の居場所を確保するために行動することが、それが家族を見捨てることだとしても、そのことそれ自体の善し悪しに関して、いまの僕は意見する言葉を思いつけなかった。自らが属する内部から疎外される“恐ろしさにも似た形容し難い気持ち”は、牢屋に容れられるに至る先刻、少なからず経験していたから。

困難な状況に追いやることは、できる。

それが自分の認知できうる範囲内の、ひとつの出来事だとしても、けれど死へ追いやることは、できない。

それが自分の認知できうる範囲内の、ひとつの出来事であるがゆえに。

それは家族であるからこそ、あったからこそ、ひとつの非情さの、ひとつのカタチ。

だから老婆は、僕を牢屋から出した。かつて困難に追いやった家族を、迫る死から救わせるために。

けれどこの際、老婆の事情はとても些細なモノでしかない。老婆の語ったことで、僕にとってもっとも重要で有益だった情報は、この老婆が彼女の祖母であるということだ。

やっぱり彼女は、村長がうそぶく“あやかし”なんかじゃなかった。彼女も、僕と変わらない“ヒトの子”なのだ。

やっぱり彼女は、彼女が自称する“疫病神”なんかじゃなかった。彼女は、僕と同じ村出身の“ヒトの子”なのだ。

しかし、この村にあるべき彼女の居場所は
一方的で身勝手な偏見ある理由によって奪われ、存在していない。

* * *

「……………」
彼女は無言のまま、滝つぼからはい上がる僕に手を貸してくれる。
「ありがとうございます……………」
地べたに両手をつけて呼吸を整えながら、見上げるかたちで彼女の様子をうかがう。

そこには、とてもあきれているふうな表情があった。

「っ」

なにか言おうとした言葉をのみ込み、彼女は溜め息を吐きつつ首を横に振り、

「……道まで送ります」

そう言って先へ行こうとする。

僕は反射的にその手をつかんで、その歩みを阻止した。

「……………」

美しく幻惑的な赤い瞳の訝る眼差しが、僕を見る。

「いえ……、あの、その」

いまさつき滝つぼからはい上がるまでの出来事を、僕は言葉を選びつつ簡潔に話した。

「だから言っただでしょう」

つかむ僕の手をほどいて、彼女は滝つぼの水面へと視線を移し、

「私は、疫病神なのです」

なにか諦めてしまったヒトの表情になって言う。それは僕にではなく、自身の内側から内側へ向けて言っているように思えた。

「……父さんも、……母さんも、……私と関わったヒトは、みんな、みんな不幸になってしまう」

そして彼女は、どこか間違った決意を秘めた顔になる。

言葉を発することなく小屋の中へと消えていった彼女は、しかしすぐに戻ってきた。

その手に、よく使い込まれて刃の短くなった包丁を持って。

これから夕食の準備をする　という雰囲気ではなく。

なので現状における包丁の用途を考えていたら、

「……私を」

彼女は切っ先が自身に向くよう逆手に持った包丁を、僕の方に差し出し、

「……お願い、私を殺して」

まったく理解できないことを申し出てきた。

「なにを、こんなときにヘンな冗談は」

「冗談じゃない」

とても切実な、とても鋭い眼差しで、彼女は口から言の葉を発する。

「私を殺して、“私／あやかし”を“殺して／退治して”、キミは潔白を証明するの」

反射的に僕は、彼女の頬を叩きそうになった。けれど、ただ生きて。キミに、生きていてほしい」

言の葉を発する彼女の、

「だから……、私を殺して……」

けれど口から出てくる“それ”とはチグハグな、

「キミは生きて」

その赤い瞳の奥にある“彼女”の存在に気づいたことで、

「お願い」

頬を叩こうとした僕の手は、向かう先を失った。

だから僕は、

「……………わかりました」

その手を差し出した。

彼女から、包丁を受け取るために。

* * *

自分達と違う、髪の色をしているから。

自分達と違う、瞳の色をしているから。

自分達の基準から、外れているから。

私を見た誰もが、私を“自分達の基準から外れている不気味な、

この世ならざる者”として拒絶する。

そして“そんなモノ”の親であったがゆえに、父さんと母さんは村から外に追いやられてしまった。私が追いやった。“私”という誕生が追いやった。

いつそのこと産まれてすぐに、この世から私を消し去ってくればよかったのに。そう思ったけれど、それができなかった理由も、風に乗って流れてきた話で知っていた。

村の人々は“自分達の基準から外れている不気味な、この世ならざる者”を殺したら生ずると信じて疑わない“厄／禍”が恐ろしくて、だからこそ私を生かして両親と共に村の外に追いやった、と。

誕生しただけで自分の両親に不幸をもたらす、もたらした。

だから私は自分の、この白い髪も、この赤い瞳も、好きじゃなかった。

好きになれる理由がなかった。

けれどキミは、こんな私のことを拒絶することなく接してくれた。

嬉しかった。自分でも驚くほど、嬉しかった。

そしてキミはこんな私のことを、美しいと、そう言ってくれた。

自分の耳を疑うほど嬉しくて、嬉しすぎて、キミと面と向かって話をするのが、ちよつと恥ずかしくなった。産まれて初めての、とても温かくて熱い気持ちだった。

初めて、いまここにいることを肯定してもらえた。

キミの言葉が、キミという存在が

それだけで、それだけで私は

私には、キミだけでいい。

キミとの出逢い。キミとの思い出。キミという存在。それだけでいい。

だから私は、いかなる手段をもちいても、それを護る。護りたいと思う。

そつという気持ちを懐けるようになった。キミが、そつしてくれた。

だから私は、キミに、

「私を殺して、“私／あやかし”を“殺して／退治して”、キミは潔白を証明するの」

殺されることを選んだ。

私と出逢ってしまったから、私と関わってしまったから、これからキミには不幸が、困難が、待ち受けているかもしれない。けれどここで身の潔白を証明すれば、それは、少しは軽減されるかもしれない。

潔白が証明されても、私と関わったという事実から、それでも困難が待ち受けているかもしれないけれど、最期にわがままが許されるのなら、

「ただ生きて。キミに、生きていてほしい」

困難に勇敢に立ち向かわなくても、格好悪くても、ただ生きて、生きていてほしい。それが、それだけが、私の願い。

「だから……、私を殺して……」

そう強く、頭では思うのに、

「キミは生きて」

けれど、どうしてだろう、

「お願い」

まだここに存在したいと、

もっとキミと一緒にありたいと、

そう強く、心から願ったしまうのは

決意を秘めた眼でキミは、

「……………わかりました」

手を差し出してくれた。

だから私は、

……………その手に、包丁を託した。

* * *

僕が包丁を受け取ると、彼女は“そのとき”を心するかのよう
に目を閉じ、身体から無用な力を抜き、すべてを受け入れる姿勢を整

える。

そして僕は、流れる動作で受け取った包丁を

* * *

最期の時になって

まだここにいたいと願った。

そう思える理由を与えてくれた存在が、現れたから。まさしく“降って湧いた”を体現するように

ある日、突然に、滝つぼに落ちてきた。

あるいは迷惑と、普通は思うのかもしれないくらいに、けれど私を拒絶することなく、私に会いに来てくれる、初めての存在。

初めて私のほうから対面を拒んだ、けれどそれでも私に会いに来てくれる、初めての存在。

すべてを賭してでも護りたいと、生き続けていてほしいと願う初めての“ヒト／居場所”。

けれどだからこそ、そう思えるからこそ、強く願ってしまう

まだここにいたい、と。

もつと一緒にありたい、と。

死は恐ろしかった。だから死ねなかった。しかしそれは生への執着ではなく、ただの恐れでしかなかった。

そしてその惰性で私は、いままでここにあり続けた。

けれど、いま感じる、この死への恐怖は

生きたいと願う、ウソ偽りのない私の心だとわかる。

だからこそ私は、殺されることを選んだ。

でも、選んだからこそ私は、まだ生きたいと願ってしまう。

強く、そう願ってしまう。

どんなに制しようとしても、

心から溢れ出てくる“それ”は、

どうしても抑えきれない

なにか水面を叩くような、小石を水面に投げ入れたときのような音が聞こえた。

私は反射的に目を開けてしまい

* * *

この場にある張り詰めた空気感の糸を、ポチャンという間の抜けた音が配慮なく切った。僕が流れる動作で滝つぼへと投げ捨てた包丁が、最期に発した存在感の音である。

包丁の最期を見届けてから彼女のほうへ視線を戻すと、そこには、
「……………」
事態がのみこめず、目を見開いて固まっている彼女の姿があった。

「……………」
やっと理解が状況に追いついたららしい彼女は、

「どうしてっ！」

驚きと怒りが混在する強い語気で言い、そして一転して、

「……………」
「どうして」

追い詰められたヒトのような表情になって、

「どうして……………」

すべての感情が納得できうる説明を求めて、詰め寄ってくる。

だから僕は、ウソ偽りのない言の葉で答えた。

「貴女／誰か」を殺してまで、僕は“僕の居場所／村での立ち位置”を確保しようとは思わないからです
「でもっ」

辛抱強く必死に説得するヒトの表情で、

「でもそれではっ、“私／あやかし”と関わってしまったキミまで、最悪、命を奪われてしまう」

彼女は目元に涙まで浮かべて、訴えてくる。

「そんなの、そんなのイヤです……。私のせいで“誰か／大切なヒト”が不幸になるのは、もう……。イヤ……」

それが彼女のウソ偽りのない本心であることは、理解できた。けれどだからこそ、僕は述べた。

「貴女を殺して、僕が幸せになれるわけがない。むしろ、貴女を殺してしまつたら、それこそ僕は、“貴女のせい”で不幸になつてしまふ」

「へ？」

いまいち理解できていない物問ひ顔で、しかし彼女は、なにか驚いたふうに固まる。

「貴女が僕に生きていることを望むように、僕だつて貴女に生きていてほしいんです。僕は、貴女と一緒に生きていたいんです」

「……私だつて、……私だつて！」

なにか抑えていたモノが爆発したように、

「私だつて、キミと一緒に生きていたいっ！」

彼女は怒つたふうに言い、

「でも、でもそれは」

困難に直面して仕方ないと諦め、そしてそれを悔しがるように表情を曇らせる。

「人生の選択肢は、選ぶ項目それ自体を、自らの意志で“選択する／作る”ことができるんですよ。知ってましたか？」

「え？」

なにを言わんとしているのかよくかわらない、と彼女の顔には書かれていた。だから僕は、参考までに、僕が自らの意志で“選択した／作った”ひとつの選択肢を提示してみた。とても自分勝手な僕の、ひとつの意志を。

「一緒に、世界を見に行きませんか？」

なにも“現在の居場所／いまの立ち位置”で完結しなければなら

ない決まりは、ない。そんな“決まり/制約/誓約/契約”は、どこにもない。勇者のごとく孤高に戦って、こちらの存在を否定してくる“現在の居場所/いまの立ち位置”を守らなければならない必要はない。あるいは“現在の居場所/いまの立ち位置”をなにをしても守らなければならない“理由/家族”を、僕が持つていないから、そう“思う/考える”のかもしれないけれど。でも、僕はそう思うのだ。

「……へ？」

僕の突然の提案に、どうやら彼女は理解が追いついていないらしい。不思議と疑問の混在する幼子のような顔を浮かべ
そして。

徐々に理解が追いついてきたのか、雪が解けるように、眉が、眼が、頬が、口が、表情が、感情を表し

* * *

僕と彼女の物語に、“未永く幸せに暮らしました”という終わりはない。

* * *

考えの甘さを思い知るまでに、さして時は要しなかった。

閉ざされた空間から、開けた世界への、未知への憧れは、輝かしい希望は、盲目とも同義だったと

情け容赦なく思い知るまで。

世界は、ヒトは、必ずしも優しくはない。奇妙なモノ、理解できないモノ、気に食わないモノ、自らの利にならないモノ、それらることごとく疎外し排除しようとする。耐え難い困難と苦痛と苦悩が、ときに善を装って襲ってくる。

けれど、それでも

「どうしたの？ 真面目な顔をして」

からかうような口調でそう言われて、

「それだと、まるで僕が真面目な顔をしないヒトみたいに聞こえるよ」

僕は喜びを噛みしめながら抗議した。

「ふふ、間違いじゃないと思うけど？」

彼女はいたずらっぽく笑みを浮かべて、言い返してくる。

「はは、まったく否定できないのが辛いところ」

「それで？ 珍しい真面目な顔で、いったいなにを考えていたの？」

魅力的な赤い瞳を好奇心色に染めて、彼女は訊く。

「ちよっとした物語を思い出してね」

なぜだかちよっぴり気恥ずかしくなって、僕は頬をかきながら、

「感慨にふけていたんだ」

彼女の眼を見れないで答えた。

「物語って？」

彼女は譲歩するつもりのないヒトの表情で問う。

「……出逢った頃の、……」と

「あらっ」

と彼女は愉快そう笑って、

「あらっ！」

次瞬、驚きと喜びのある顔になって、

「すぐに“せんせい”を呼んでっ！」

大きくなったお腹を愛おしそうになでながら

「産まれそうっ！」

喜びの声を聴き終わるより早く、僕は喜びを噛みしめながら速くに駆け出していた。

* * *

感動という言葉は、きつと“こういうとき”の形容し難い心からの気持ち、無理矢理に言葉という形状に形成して作られた言葉なんだろうと思った。決して“他者の困難な状況を物語として観て”懐くモノではないと、そんなヒトの“残酷性/残虐性”と表裏なモノではないと、そう思った。

ここにいることを高らかに宣言する、いまから“ここ/自分自身/居場所”を専有することを高らかに宣言する、その産声を聞いたとき

僕は感動のあまり気絶した。……してしまった、……らしい。

「まったく、男は肝心なときに限って役に立たない」

と“せんせい/助産師”にはあきれられ、

「まったく」

彼女には愉快そうな苦笑を浮かべられてしまった。

感極まってしまった、というか極まり過ぎてしまったわけだけだ

喜びを抑えるなんて器用な真似は、僕にはできない。

なにより、そんな器用さは欲しくない。

* * *

しばしの時を経て。

僕と彼女と我が子は家族で散歩に出かけた。我が子はまだよちよち歩きもできないので、彼女の胸に抱かれている。必然的に、僕は荷物持ち。いまなら家でもなんでも担げそうだ。

見晴らしのよい小高い丘の上で独りある老樹の、その足元に座らせてもらうことにした。そして開放感と景色とただ一緒に居るという時を楽しみながら、軽い食事を味わう。

そよ風に流れる純白の長い髪を、そつと手で押さえて。彼女は荷物の中から一冊の本を取り出す。

その姿に、その光景に

僕は改めて、彼女の美しさに見惚れた。

のろけと揶揄するヒトや、のろけとうんざりするヒトもあるかと思いが、いま僕は間違いなくのろけているので、どうぞ思い思いに言いたいことを言っつてうんざりしていただきたい　と、平然と平静と公言できる“心境／心情”だ。

「なあに？　じつと見て？」

彼女は不思議そうに赤い瞳をこちらに向ける。

「え？　ええつと、その本はなんなのかなあーって」

見惚れていた、と堂々と本人に言うことができななのが僕である。残念というか、情けないことに。

「これは……」

彼女は表情に影を落として、

「これは、母さんがつけていた日記なの」

どこか遠くを見る眼差しで手にある日記を見やり、

「ずっと怖くて見れなかった……」

胸に抱く我が子を見やり、

「けれど」

表情から影を消し去り、柔らかに微笑んで、

「いまなら見れると」

決意あるヒトの、

「そう思えるようになったの」

ほがらかな顔で、そう述べる。

「でも」

と困ったふうな微笑を浮かべて、彼女は言う。

「いざ見ようと思うと、やっぱり怖い」

そして彼女は、なにかひらめいたふうにはつと笑みを浮かべて、

「お願いっ」

と日記を僕のほうに差し出してきた。

お願いされると、とくに彼女にお願いされると、否と断れないのが僕である。情けないことに。

日記に書いてある内容を先んじて確認してほしい、というのが彼女のお願いだった。

正直に言えば、あまり気乗りしないのだけれど、それでも否と断れないのが僕なのだ。残念なことに。

彼女から日記を受け取り、読む。

書かれてあったのは

彼女の誕生と成長についてだった。

彼女が産まれた日のこと。彼女が笑ったこと、怒ったこと、泣いたこと、日向で居眠りしたこと、遊んでいて滝つぼで溺れてしまったこと、木陰に生えていたキノコを食べてお腹をくだしてしまったこと。

そして。

彼女のお母さんの気持ちが、書かれてあった。

最期が近かったであろうと推察できる、希薄な筆致で。けれどもそこにこめられた強い気持ちは確かに伝わってくる言葉が、書かれてあった。

だから僕は、彼女に日記を返して読んでみることを薦めた。

* * *

あなたが望まれて生まれてきたということ、
どうか忘れないでほしい。

小話・其の貳拾六へ“まさか！”を懐く物語（仮題）（前書き）

【願わくば、創造を超える想像を】

小説・其の貳拾六へ“まさか！”を懐く物語（仮題）へ

《“まさか！”を懐く物語（仮題）》

「え？ おい、うそだろ？ “***”が“*****”だなんてっ！」

最低文字数制限の関係上、
書いているヤツの意図する範囲内の文字数で投稿でないので、
あえてこの文章を書いているので、
上記の“え？”で始まり“っ！”で終わる文章が、
書いているヤツの意図する“本編／本文”であります。
なので決してこの文章は“本編／本文”に関係ありません。
深読みは厳禁であります。素直に受け取ってください。この文章に限っては。

正直に申しまして、

《まさか！》を懐く物語（仮題）《投稿しようとして、
結果的に書いているヤツ自身が、
「まさか！」と懐いてしまいましたわ。

小話・其の貳拾七〈御国自慢〉(仮題)〈(前書き)〉

【鏡に映った“自身”を嫌悪する】

小説：其の貳拾七〈御国自慢（仮題）〉

《御国自慢（仮題）》

ある国の、ある街の、ある道の、ある交差点に面した場所にある、ある喫茶店のテラス席の、ある円卓で、違う“祖国／文化”を持つふたりの男がお茶を飲んでいました。ふたりは今日たまたま“この国”に訪れていて、ある偶然の“ドラマティックな出来事”をきっかけに知り合い、そしてお互いをより知るためにお茶を一緒することにしたのです。

と言つても、やることはただの“お国自慢”なのですが。

「なんといつても私の国の自慢は、ご存知の通り、表現豊かで多様な“マンガ／文化”ですね。あなたの国には、こんなに豊かな“マンガ／文化”はないでしょう?」

そう言つてひとりの男は、多機能携帯端末を操作して、電子版のマンガを相手に見せます。

「あなたの国はとても“コミック”が豊かだということは、とても有名なので知っていました。けれど私は、実際にあなたの国の“コミック”を見たことはありません」

「おや? そうだったんですか。じゃあ、これもなにかの縁です。ぜひ読んでみてください」

「では、読ませていただきます」

そう言つてひとりの男は、相手の多機能携帯端末を借りて、マンガを読み始めました。

それを、ひとりの男はどこか誇らしげな気持ちで眺めつつ、お茶を一口すすりました。

しばしの時を経てから。

「なるほど……。ありがとうございました。ウワサ通り、あなたの国のコミックは“とても多種多様多彩な表現”ですね」

そう言って、ひとりの男は多機能携帯端末を相手に返しました。ひとりの男は、誇らしげに返された多機能携帯端末を受け取りました。

ひとりの男は、思うところある顔つきでお茶を一口すすつてから、「では、私の国の誇るべきところを話させていただきましょう」語り始めました。

「ご存知の通り私の国は、世界最強の軍隊で、世界の平和維持に貢献しています」

そう言ってひとりの男は、多機能携帯端末を操作して電子版のニュース記事を相手に見せます。

「あなたの国の軍隊が強いということは、とても有名なので知っていました。けれど私の国は、憲法で“戦争／軍隊の存在も含む”を放棄しているのです、そうゆう“世界情勢／平和の為に戦い／正義の戦争”に関してあまり報道がなく、軍隊が実際どのような活動をしているのか知りません」

「おや？ そうなのですか。じゃあ、これもなにかの縁です。お教えしましょう」

「是非、教えてください」
そう言ってひとりの男は、相手の多機能携帯端末を借りてニュース記事を見つつ、相手の語りに耳を傾けました。

ひとりの男は、とても誇らしげに、自国の“軍隊の活動／歴史”と武勇伝を語ります。

しばしの時を経てから。

「なるほど……。とても興味深いお話を聞かせていただき、ありがとうございました。ウワサ通り、あなたの国の軍隊は“世界平和のために、正義のために、とても素晴らしい貢献をなさっている”の

「ですね」

そう言って、ひとりの男は多機能携帯端末を相手に返しました。ひとりの男は、誇らしげに返された多機能携帯端末を受け取りました。

それからしばらくふたりは語らい

「またいつか」

「またいつか」

最後にガツチリ握手を交わして、別れました。

そして。

ひとりの男と、ひとりの男は、遠く離れた別々の場所で、

「あの国の連中は、なんて野蛮なんだ」

「あの国の連中は、なんて野蛮なんだ」

まったく同じ言葉を、それぞれ口にしました。

自国の“マンガノ文化”を誇った男は、

「いくら綺麗に聞こえる大義を掲げたって、やっていることは“人殺しノ破壊ノ戦争”じゃないか。それを誇るなんて」

と吐き捨てるように言い

自国の“軍隊ノ歴史”を誇った男は、

「いくら表現が自由だからって、描かれているのは“エロノグロノナンセンス”じゃないか。それを誇るなんて」

と吐き捨てるように言い

そして。

ひとりの男と、ひとりの男は、遠く離れた別々の場所で、

「まったく、あの国の連中の人間性を疑うね」

「まったく、あの国の連中の人間性を疑うね」

まったく同じ言葉を、それぞれ口にしました。

小話・其の式拾八へ後悔は先に立たず（仮題）（前書き）

【“大きな実感”は遅れてやってくる】

小話：其の式拾八〈後悔は先に立たず（仮題）〉

《後悔は先に立たず（仮題）》

ふたりの男が、公園のベンチに座っていました。ふたりとも決して明るいとは述べられない表情をしています。

「……なあ」

「ん？」

「どうしてさ、年を取るとき、大人になるとさ、素直に“

”って言えなくなるんだろっな。ガキのころは、あっさり言えたのに”

「それは、あれだよ、子どものころは“ネガティブな未来”なんて想像すらしないからだと思うよ。“ ”と言ったあとの、好

くも悪くも変わる人間関係をさ」

「どうして大人になっちゃったんだろっ……、オレ」

「………」

「もう“ ”って本人に会って言えないって意識したらさ……

……」

「………」

「もう会って話せないって、アイツは居ないって、実感しちゃってさ……」

ひとりの男は、うつむき、努めて抑え込もうとしながら、けれど嗚咽を漏らし、ボロボロと涙を落とす。

「………」

ひとりの男は、黙したまま、曇天の空を見上げる。隣でなにもおこっていないかのように。隣に座る旧知の男のプライドを守るために。

ふたりの男が、ふたりの喪服姿の男が、公園のベンチに座ってい

ました。ふたりとも決して明るいとは述べられない表情をしています。

そんな彼らを見かねたふうに。

そんな彼らの肩にそつと手を置くように。

曇天の空に小さな穴が開いて、そこから射す一筋のやわらかな光が彼らを優しく包みました。

小話・其の貳拾九へ私の宝物（仮題）へ（前書き）

【誰にも譲れない私だけの】

小説：其の式拾九へ私の宝物（仮題）

《私の宝物（仮題）》

午後の日光が射し込み暖かい、庭に面した窓際。そこに置かれた安楽椅子で、ひとりの老婆が日向ぼっこしていました。

老婆はときおり、なにかを確認するように自身の左手を午後の日の光にかざし

とても嬉しそうに、素晴らしく幸せそうな微笑みを浮かべます。

それを見た老婆の孫娘は、不思議に対する好奇心に駆られて、

「ねえ、ねえ、おばあちゃん」

スケッチブックから床に壁にと彩色が到る“壮大なお絵描き”を中断して、

「なにを、みているの？」

安楽椅子まで駆け寄って訊ねました。

この世でもっとも愛おしい声の問いかけに、老婆はシワだらけの顔をよりいっそうシワだらけにして答えます。

それを聴いた孫娘は、嬉々として“それ”を見やろうと老婆の左手に熱い視線をやって、

「……………？」

けれどお目当ての“それ”は発見できず。なので彼女は、状況を理解せんと眉根を寄せて思案顔。

そして、しばしの考える間を置いてから、

「……………!!」

とつても重大な事柄に思い当たり、そのあまりの重大さに彼女は大きく目を見開いて

「ママあー！ おばあちゃんがボケちゃった！」

なにか奇抜なことを叫びながら慌てたふうに駆けて来た愛娘に、

「ねえねえ、ママ。どうしよう」

グイグイと、

「ねえねえ」

グイグイとエプロンの裾を引っばられて、

「どうしたの？」

台所で洗い物をしていた母親は、作業の手を止めることなく訊きました。

「おばあちゃんがねっ、おばあちゃんが、ボケちゃったのっ！」

そんな愛娘の言葉に、しかし母親は愉快そうな苦笑いを浮かべます。携帯電話どころかスマートフォンやパソコンを自在に使いこなす自身の親が、いまさっきの短時間で“そのようなこと”になるとは思えなかったからです。

なので母親は、

「どうして、そう思ったの？」

柔らかい口調で、理由を問いました。

「だってねっ、だって」

という愛娘の危機迫る必死の説明を聴いて、しかし母親の顔には微笑みがありました。それは、いわゆる思い出し笑いというやつでした。母親もまた幼い頃に、いまの愛娘と“うりふたつ”なことをしていたのです。

母親は洗い物をする手を止めて、愛娘に、おばあちゃんの“それ”を見やる方法を教えました。より正確に述べると、おばあちゃんとおじいちゃんがまだ若かった頃の“のろけ話”のひとつを話して聞かせたのです。

ほかんと口を開けて話を聞いた愛娘は

転瞬、嬉々満面の笑みを浮かべて、瞳を燦々と輝かせて、おばあちゃんのもとへ駆けて行きました。

「じい」

「

ドタドタと音を発てて駆けて来た孫娘が、くりくりとした愛らしい目を見開いて、瞳を輝かせて、なにも言葉もなく自分の左手を凝視してきたことに老婆は最初は少々驚いて、けれどすぐに優しい微笑みを浮かべます。

「じい」

じっくりと確かめるように、しばし孫娘は“おばあちゃんの左手の薬指”を見つめ

「うう〜」

と悔しそうに呻いてから、

「やっぱり、みえないっ!」

けれどいつそ清々しいくらいにスツパリと言って、

「でも」

と花咲くような笑みで、

「とおつても、とおつても、すてきな“ゆびわ”だねっ! おばあちゃんっ!」

* * *

戦後間もない、物を得るのも、食べるのにも苦勞する時代
ひとりの青年は、愛するひとりの女性へ、そのときの彼にとって
精一杯の“贈り物”をしました。

焼け野に咲いた花を編んで作った、それは“指環”でした。

そしてその“指環”は

青年がいなくなってしまうたあとも、

いつまでも、青年の愛する女性の薬指で咲き誇っています。

小話・其の参拾へぎもん(仮題)◀(前書き)

【率先して“それ”を知ろうとする姿勢が、大切なこと】

小話：其の参拾へぎもん（仮題）

《へぎもん（仮題）》

あなたは、この村で一番の物知りさんです。知らないことはなにもないと称される、この村で一番の物知りさんです。

あなたのところには、日々疑問でいっぱいの子供もたちが、
「ねえ、ねえ、おしえて！ おしえて！」

と疑問の答えを求めてやってきます。

今日もまた、ひとりの小さい子どもが疑問を抱えてやってきました。疑問で頭がいっぱいなのか、眉をハの字にしています。

「ねえ、ねえ、おしえて！ おしえて！」

あなたは、この村で一番の物知りさんです。知らないことはなにもないと称される、この村で一番の物知りさんです。

「どうして？」 【はいけないっていうのに、】 【の

ためっていつて？】 【をするの？ おなじ】 【なの

に。ねえ、ねえ、どうして？ どうして？」

あなたは、この村で一番の物知りさんです。知らないことはなにもないと称される、この村で一番の物知りさんです。

さあ、この子の疑問に答えてあげてください。教えてあげてください。

小話・其の参拾巻へ些細なこと（仮題）へ（前書き）

【いまも“どこか”で起りつてゐるよ】

小説：其の参拾巻《些細なこと（仮題）》

《些細なこと（仮題）》

彼らは、とくに贅沢をするでもなく、その日その日を精一杯に生きて暮らしていました。

ある日、そんな彼らの集落に

突然、ヤツらはやって来ました。

ヤツらは、彼らの力ではどうあがいても敵わない強力な武器で身を固めています。

彼らの大半は、本能的に“いのち／生命”の危険を察知して、物陰に身を隠しました。見つからないように息を潜めて、物陰からヤツらの様子をうかがいます。

そして彼らの中の少数の者たちは、血の気の多い若者たちは、勇敢に、無謀に、ヤツらに挑みかかりました。自らの“産まれた場所／居場所／故郷”を、ヤツらに奪われまいとして

勇敢で無謀な少数の彼らは、じつにあっさりとおっ気なく、ヤツらの武器によつてその“いのち／生命”を散らしました。

彼らの大半の半数は、その光景をなすすべもなく物陰から見ることしかできませんでした。残りの半数は、目をそむけて見ることもできませんでした。

ヤツらは、彼らの集落の中央まで進むと歩みを止め

そこに、円筒形をした“なにか”を置きます。

ヤツらはそれが終わると、それ以外になにもすることなく集落から出てゆきました。

彼らには置いていかれた円筒形の“なにか”が“なに”であるのかわかりませんでした

張り詰めていた空気が、ふっと、ほっと、ゆるみました。散って逝った者たちに対する想いもありましたが、いまはこの瞬間は安堵

に対する想いのほうが大きくありました。

そんな彼らの中であって“それ”は

影から忍び寄るように、

さしたる音もなく、

煙を発生させる。

* * *

「ただ静かに、我々は“我々の価値観”で生きて暮らしていただけなのに……。ただ、それだけなのに……」

苦痛に襲われながら絶命しれゆく仲間を見やりながら、自らも苦しげに横たわって彼は、

「どうして……、どうして……、どう……し……」
苦痛と苦悩と憎悪と悲しみを最期に懷いて、
息を止めました。

* * *

「すげえ、うじゃうじゃ居やがったぜ」

ひとりの男が、吐くように言いました。

「まあ、そのおかげで、オレらは美味いモノが食えてるんだがな」

ひとりの男が、口にくわえたタバコに火をやりながら言いました。

「殺して、掃除して、依頼主が快適に使える下準備をする簡単な御仕事 だが、少し食欲が失せる御仕事だぜ」

「まあ、な」

「ところで」

「ん？」

「“バルサンノ殺虫装置”がおさまるまで、メシ食い休憩しないか

「？」

「食欲が失せるんじゃないの？」

「あくまでも、少しだ。生きてりゃ、なにもしなくたって腹は減るもんだぜっ」

「さいですか」

害虫駆除と背に書かれた揃いの作業着に身を包んだふたりの男は、「そついえば、街外れの廃校の体育館を使ってなににするんだろう？」

「なにかのイベントって話だったような」

作業着と同じように害虫駆除とドアの部分に書かれた軽自動車に
乗車し、

「で、なに食べる？」

「んー」

食事休憩をとるために、一時この場を去り行きます。

* * *

そして先に居た者の居場所を奪って、
自らの居場所を確保する。

小話・其の参拾式へ探求心（仮題）（前書き）

【しばしば最初のきっかけは、くだらない】

小説：其の参拾貳（探求心（仮題））

《探求心（仮題）》

その男の子が最近もつとも楽しくカツコイイとお熱なことは、三時のおやつに“かりんとう”と“ちよつと濃い目のお茶”を“嗜む／たしなむ”ことでした。その時刻に目覚ましアラームをセットするほどの、徹底したお熱ぶりです。

目覚ましアラームをセットした時刻が近づいてくると彼は、まるである域に達したヒトのごとく目覚まし時計の前に鎮座してその瞬間、アラームが鳴ったと同時に瞬間にびしゃりとそれを止め、

「……………」

彼は三時のおやつタイムを指し示す時計を持って母親の前へ行き、無言でそれを見せて知らせます。“嗜む”時刻である、と。

母親は愛らしい我が子に愛着ある苦笑を浮かべつつ、“かりんとう”と“ちよつと濃い目のお茶”を用意します。ちなみに、お茶は市販されているカフェイン抜きモノです。

男の子は母親から“嗜むための必需品／かりんとう／ちよつと濃い目のお茶”を受け取ると、それらを持って、夕刻に傾く日射しの当たる庭に面した縁側へ移動し、そこに腰を落ち着けます。ここが彼の“嗜む”定位置なのです。

と、その縁側には先客が居ました。

一匹の三毛猫が、なにか悟ったふうな顔つきで寝ていました。しかし男の子は、そんなこと知ったことではないと“かりんとう”を口に運びます。味わいます。そして一口、お茶をすすり

ちらりと、三毛猫のほうに視線をやります。

けれどすぐに、気にしてなどいらないと言い張るように、次の“かりんとう”を口に運びます。味わいます。ちよい、と空いた手

で三毛猫を軽く突いてみたりしました。

三毛猫は薄っすらと目を開けて男の子を見やり、しっぽをひよいとつつとおしいと言うふう揺らして、また目を閉じます。

男の子は努めて気にしてないふうを装ってお茶をすすってから、またちよいと突きました。

今度は目を開けることなく三毛猫は、しっぽをひよいと揺らしま

す。
そして男の子は“かりんとう”を味わいつつ、またまたちよいと突き

そんなやりとりと繰り返して。“かりんとう”を口に運び、それを味わおうかという瞬間に、男の子はふと思いました。思いつきま

した。
しばし食べようとした“かりんとう”を眺め

そして三毛猫を見やり

男の子は手にある“かりんとう”を、

そつと三毛猫のお尻の後ろに置いてみました。

小話・其の参拾参へがくしゅう(仮題)く(前書き)

【その“背中”を見て、子は育つ】

小話：其の参拾参へがくしゅう（仮題）

《がくしゅう（仮題）》

彼には、生徒会総会長という肩書きがあつた。彼の通う私立の学園は、いまだき珍しい総生徒数が三千を超える大所帯の規模の大きな小・中・高等学校の一貫校で、生徒会総会長という肩書きは、その三千人超の生徒の先頭に立っていることを意味している。

いま彼は、困難に直面した悩むヒトの表情をしていた。各部活動へ支給される部費の割り当てを決める会議が、難航してしるのだ。

生徒数が多ければ、当然に部活の数も多くなる。部活の数が多くなれば、相応して部費の額も大きくなる。そうなると必然的に生徒会の運営は責任の重いものとなり、なおかつ、なかなかどうして困難を多々抱えることになる。

部活の数があまりに多く、“生徒会／総会長／副会長／会計／書記”だけでは部の活動内容を把握しきれないので、この学園には“文化系部活動連合会”と“体育系部活動連合会”という生徒会とはべつの部活動を管理管轄する会が存在している。各部活の部長が、各部活に所属する者に推薦投票され、それによって選ばれた十五名から構成されている。

そして部費の割り当てを決める会議で、このふたつの会は、より“自らたち”が充実するためになみなみならぬ心血を注ぐ。

ゆえに。

なかなかどうして話が進まず、まとまらない。

「そもそも、先に“数字／予算”を決めて、その決められた“枠内／予算内”で部活動するつてというのがおかしいと思うんだな。数字に合わせて、それを使い切ろうとするカタチでヒトが“活動／行動”するなんてさ」

ぼそりと、小さめの声で愚痴るように彼は言った。

「それを私に言われても、困ります」

ショートカットの黒髪をした、活発そうな印象の女の子が応えた。彼女には、生徒会会計という肩書きがあった。その印象的に、肩書きについて「ちよつと意外」との声が多々ある。

「でも、なんとなくわかる気はします」

セミロングの薄い茶髪をした、どこか気だるげな印象の女の子が意を示した。彼女には、生徒会書記という肩書きがあった。その印象的に、肩書きについて「かなり意外」との声が多々ある。

「はあ」

疲れきつたふうには彼は、息を吐いた。

「なにかを参考に見たらどうだろう?」

オールバックの黒髪をした、小柄で小太りな男子が提案した。彼には、生徒会副会長という肩書きがあった。その肩書き的に、「で、なにしているの?」との声が多々ある。

「どゆこと?」

「会議を円滑に進めるための運営方法の参考を、求めてみたらどうだろうって」

「……例えば?」

「え? んー、そうだなー、例えば」

生徒会総会長は、副会長の提案を受け入れてみようと思った。なかなかいいかもしれない、と。この場に居る全員にその旨を伝え、いまの会議は翌日にまわして、本日は終わった。

そして。

会議室には、汚い言葉のヤジが飛び交っていた。一部の武闘派を自称する者たちが、椅子をぶん投げる。

会議は、とても酷く荒れていた。

騒ぎを聞きつけた教師たちが、駆けつけてきた。けれど彼らは会議室の扉を開いて中を見て、あ然ぼう然と固まり立ち尽くす。

ひとりの教師が、ふと我に返った。彼は、扉の脇に座って我聞せずと本を読んでいる生徒会書記の女の子に気づき、事情を問うた。生徒会書記の女の子は本を見やっただけ、ただ淡々と述べました。

「大人／国会」から学んだ結果です」

小話・其の参拾四へいろどり（仮題）（前書き）

【けれど、“無色”ではない】

小説：其の参拾四へいろどり（仮題）

《いろどり（仮題）》

彼の頭の中には、いつも、いかなるときも、鮮やかな極彩色が溢れて煌めいて輝いていた。

彼が見る世界は、つねに楽しさや喜びで満ちていた。

「 遠い、過去の話だ」

誰にでもなく、彼は独り小さく言葉を吐いた。そして。

見上げた空は、見わたす限り灰色だった。ほんの数分前まで雨を地に落としていた雲たちが、まだそこに居座っているから。

せめて太陽の“煌めき／輝き”くらいあってほしかった、と彼は思った。けれどそんな些細な救いすら、ここにはなかった。

彼がそのことに気が付いたとき、もうすでに頭の中から色彩も煌めきも輝きも失せていた。

彼の頭の中は、いつの間にかモノクロ写真のような白と黒だけになっっていた。

彼の見る世界に、いまや楽しさも喜びも満ちていない。

そうなったのがいつたい“いつ”のタイミングだったのか、記憶がない。大概の“それ／問題”がしばしばそうであるように、気が付いたときには、もうすでに手遅れだった。

そして。

大概の“それ／事故”がしばしばそうであるように、
「あだっ」

後頭部に衝撃を感じたときには、もうすでに痛みがあった。

地べたに、なにか硬質のモノが落ちた音がした。見ると、そこには石ころがあった。

どうやらこれが後頭部に当たったらしい。石ころが自ら飛ぶわけではないから

彼が視線をやった先に、とても居心地悪そうにしている男の子と女の子の姿があった。どうやらこのふたりが、石ころが飛べた理由らしい。

「お兄ちゃんっ！ちゃんと謝らないとダメだよっ！」

叱りつける口調で女の子が言った。

「あー、んー、わかった」

なにか逡巡してから、渋々といったふうになんか男の子が同意を示した。そして困り果てたふうに、

「わかったから、足踏むのやめてくれよ」

と付け加えて言った。

女の子が手を引いて先導し、男の子は手を引かれ重そうな足取りでやってきた。

「あのっ」

女の子が、つないでいる男の子の手を一度ぎゅっと握ってから言った。緊張しているのか、声が少し上ずっている。

「ごめんなさいっ」

ぺこりと頭を下げる。そして、

「ほらっ、お兄ちゃんもっ」

男の子が明後日の方向を眺めていたことに腹を立て、その足を思いつきり踏む。

「イテッ！ だから足踏むなよ。イテッ！ わかったよ、わかってるよ」

男の子は降参したふうに言っつて、女の子をなだめてから、

「ごめんなさい。石は、オレが蹴って飛ばしました」

しっかりと頭を下げて、謝る。

「……………」

謝罪を受けて彼は、思考した。まったく知らぬ他者との関わりに“リスク/損得”を考えるようになったのは、いつからだっただろう。他者と関わっている場面を、関わっている以外の他者が“どのような眼で見ているのか”を気にするようになったのは、いつから

だっただろう。他者は、いまこの場面を見てどう思うだろう。いい歳した男が、子どもに頭を下げさせているこの場面を見たら。

「大丈夫です。平気です。あまり気にしないでください。でも、今度からは注意してくださいね」

人造物のような愛想のいい表情を浮かべて、彼は言った。“リスク／問題”とは、できるだけ関わりなくなかった。早く流してなかったことにしたかった。

「……………」
不安そうな、怯えているような、不気味なモノを見るような表情を浮かべて女の子は、黙したまま男の子の手をぎゅうと握った。

「んー」
残念そうな、悩んでいるような、不思議なモノを見るような表情を浮かべて男の子は、

「なんか、曇り空とおんなじような顔してる」
鋭利さを秘めた純粹な眼差しで見やりながら、述べた。身長差から必然的に見上げる視線になり、意図せずして自然と“その顔”と“その空”を見比べる結果になったのだ。

「え？」

彼は余裕ある大人を装った表情を浮かべつつ、しかし胸の内できくりとした。なにを言われているのかわからないのに、なぜだか見ないようになっていることをズバリ指摘された気分になった。

最後にまた頭を下げてから、女の子がまるで逃げるように男の子の手を引いて歩を進めた。

急に手を引っぱられたことに男の子は一瞬ビクツとしてから、やれやれと言うふうにな女の子の後を追う。

「……………」
なにも言葉も思いつけずに、彼は去り行くふたりの背を眼で追った。

男の子は水溜りを見つけると、いっさいのためらいなくそこへ跳び込んだ。楽しそうな音を発して、しびきかはねた。女の子の服に、

ちよつとそれがかかった。

女の子は抗議する鋭い眼光を男の子に向け

助走を付けて思いつきり水たまりへ跳び込む。爆笑するような音を発して、しぶきがはねた。男の子に、浴びるようにそれがかかった。

どちらともなく笑って、バチャバチャと足踏みして水たまりを楽しむ。いまさっきの出来事など、もうキレイさっぱり忘れていた。うだった。

雲の切れ間から射してきた光が、ふたりを照らす。男の子と女の子は、煌めき輝きの中で遊び楽しんでいた。

とても遠い、自分とは別世界の光景だ。そう感じて彼は、それが自分らしいと表現するようにうつむく。と、そこに先ほどの石ころがあった。

彼にはその石ころが、別世界から飛来した未知の隕石めいた、とてもカラフルなモノに思えた。

「……………」

しばし眺めて彼は、ちよいとそれを蹴ってみた。

小話・其の参拾五へ終わらない(仮題) (前書き)

【あなたなら“どじする?”】

小話：其の参拾五〈終わらない（仮題）〉

《終わらない（仮題）》

とある小さな国に、あなたは訪れていました。“あなたの大切なヒト”と楽しむ旅行です。

とある小さな国は、街並みがとても綺麗なことで有名でした。どこを見ても絵になるとの評判通り、どこを見ても絵になる街風景です。

あなたと“あなたの大切なヒト”は、いい思い出になると嬉し楽しそうに笑みを浮かべました。

ちよつと休憩しようということになりました。とある喫茶店の車の通れない大通りに面したテラス席で、あなたは“あなたの大切なヒト”とお茶を飲むことにしました。

まるで映画の一場面に出てきそうな風景だと“あなたの大切なヒト”は言つて、嬉々満面はしゃいでいました。

* * *

とある小さな国は、その街並みからは想像がつかないことですが、かつて民族間の価値観の違いの問題で内戦になったことがあります。

内戦は、ひとつの民族の勝利でいちおう終わりました。勝利した側の民族の人々は戦後、負けた側の民族の人々の多くを殺しました。やっと“勝ち得た平和”を脅かす可能性を減らすために、“悲劇を繰り返さないために／平和のために”殺しました。このような過去を持つがゆえに、民族間にはいまでも相手の民族に対して強い嫌悪感が根付いています。

ひとりの子どもが、死にました。

かつて虐殺された側の民族の子どもでした。死因は、かつて虐殺した側の民族の子どもが「近寄るんじゃないっ！」と言って投げた石が頭部に当たったことでした。

あと少しでも刺激があつたら爆発してしまうまでに蓄積されていたモノが、ひとりの子どもの死を起爆剤に爆ぜました。

かつて虐殺された民族の人々は、銃を手にしました。彼らはかつて虐殺した民族の人々に向けて、その銃の引き金を引きました。男も女も老人も若者も子どもも差別することなく、平等に銃弾をあびせました。

かつて虐殺した人々も黙ってはいませんでした。彼らも、銃を手にしました。

銃撃戦が始まりました。

かつて虐殺された民族の人々は、かつて虐殺した人々を殺すたびに蓄積されていたモノを吐き出すように声を上げて笑いました。

* * *

あなたと“あなたの大切なヒト”は、とても悲惨な事態に遭ってしまいました。

目の前で、ヒトがヒトを殺しています。

あなたと“あなたの大切なヒト”は、喫茶店に隠れました。身を縮めて、早く銃声が鳴り止むことを祈りました。

けれど銃声が鳴り止むことはなく、銃を手にした人々が増えました。銃撃戦が始まりました。

銃声が鳴り止む気配は、まったくありませんでした。ここに留まっていたら危険と判断したあなたと“あなたの大切なヒト”は、銃声が沈静した一瞬を合図に、逃げ出しました。

転瞬。

あなたの目の前で、“あなたの大切なヒト”が糸の切れた人形のように力なく地に崩れ落ちました。倒れている“あなたの大切なヒト”の身の下から血が湧いてきました。それはあつという間に血だまりとなりました。

笑い声がありました。“あなたの大切なヒト”に向けて銃の引き金を引いたヒトが、声を上げて笑っていました。歡喜するように笑っていました。

あなたの側らに、“あなたの大切なヒト”と“そうではないヒト”の亡骸がありました。“そうではないヒト”は、先ほどの銃撃戦で死亡したヒトのようでした。その亡骸の側らに、銃が落ちていました。

銃声と笑い声を聞きながら立ち尽くすあなたの側らには、銃がありません。

あなたは【

】しました。

小話・其の参拾六へおいしくいただきました(仮題) (前書き)

【面倒臭いモノにはフタをする】

小話：其の参拾六へおいしくいただきました（仮題）

《おいしくいただきました（仮題）》

子どもが、好き嫌いを言って食べ残しをしました。

「世界には食べたくても食べられないヒトがいるんだ。食べられるのに好き嫌いを言って食べ残したりしたら、ダメだろう」

父親が叱りました。

「そうよ？ だから好き嫌いを言って食べ残したりしたらいけないのよ」

母親も言いました。

「……でも」

と子どもは言い返そうとしますが、

「でも、じゃないだろう」

威圧感ある語気で父親が“それ”を封殺しました。

「……………」

子どもは素直すぎるほど“嫌々”のにじみ出た表情で、食べ残しを口に運びます。口に入れます。

そして。

吐きそうな顔をして咀嚼し、ありったけの気合を動員してやっと“それ”をのみ込みました。

* * *

テレビの画面の中で、いま人気のあるタレントや俳優や女優が集まって、自身の料理の腕を競っていました。そうして作られた料理を、これまた人気の芸能人が“できばえ”を批評します。

ある若手のタレントが作った料理を“一口”食べた瞬間、批評する側の芸能人が口をおさえて“番組セットの裏”へ消えてゆきまし

た。カメラがその背を追い、その姿を捉え、その姿をテレビに映しました。

批評する側の芸能人は、青のゴミ箱を抱え込むようにしていました。

そこで、画面が切り替わりました。

批評する側の芸能人が“番組セットの裏”へ消えていったことに、料理を作った若手のタレントが“本気さのない抗議”を述べていました。それを見聞きしている他のタレントや俳優や女優は、喜劇を楽しむように笑っています。

そして。

青のゴミ箱を抱え込んでいた批評する側の芸能人が、口元を拭いながら戻ってきました。カメラがその姿を捉えると同時に、若手のタレントの作った料理のあまりの不味さを猛然と言い連ねます。

若手のタレントが、それに対して言い返します。

他の批評する側の芸能人が、「どれどれ」と言って話題の料理に口をつけました。

若手のタレントが、期待する眼差しで見やりながら「どうですか？」と訊きました。

言葉は返ってきませんでした。その代わりに、またひとり“番組セットの裏”へ消えてゆきました。

テレビ画面の中に笑い生じました。

* * *

「せいかいにはたばたくてもたべられないヒトがいるのに、たべられるのにすききらいをいつたべのこしたりしたら、いけないんでしょっつ。」

子どもが、テレビを見やりながら問いました。

「どうして、このヒトたちは“いけないこと”してるのにおこられないの？ どうして、わらっているの？」

それに対して父親は、テレビ画面の右下を指差して答えます。

「ここに書いてあるだろう？ “使われた食材は、あとでスタッフ

がおいしくいただきました”って。あとでちゃんと食べてるんだよ」

「でも、あのヒトはすごくまずいっていつてるよ？ ぐちにいれた

やつをこみばこにはいてるよ？ なのに、どうしておいしいの？」

「それは、あのヒトは不味いと感じたけれど、スタッフのヒトは美味しく感じたんだ」

「でも、まずくても、すききらいをいつてたべのこすのはいけないことなんでしょう？ どうして、あのヒトはおこられないの？ どうして、まわりのヒトはわらっているの？」

「……………」

父親は、どう言えばいいものかとしばし思考しました。

そして。

ひとつの画期的な答えを導き出しました。

テレビのリモコンを手に取り、チャンネルを変えました。

小話・其の参拾七へめっせーじ(仮題) (前書き)

【それもまた“本性”の一部】

小説：其の参拾七へめっせーじ（仮題）

《めっせーじ（仮題）》

映りの悪いブラウン管テレビの中に、ひとりの人物の姿がありました。大勢のヒトに囲まれています。

そのヒトは、テレビの中で“ご意見番／大御所”と称される歌手でした。今回は、新曲の発表なのです。

囲んでいる大勢のヒトは、記者でした。新曲に関する取材と引き張って、最近の芸能界や政治や社会に対するご意見番の言葉を拾おうと狙っています。

テレビの中のこの場で中心にある歌手のヒトが、真摯な表情をして“歌／新曲”へ込めたモノについて語り始めました。

「いま私たちが生活している“この国”は、とても幸いなことに、当たり前のように平和を謳歌しています。しかし、世界に目を向けると、いたるところでいまだに“戦争／紛争”という悲劇が繰り返されています。……無力な私には、歌うことしかできません。しかし私は、歌の力を信じています。歌は、歌に込められた想いは、国や人種や宗教に関係なく届くと」

いまも遠い場所で起こっている“戦争／紛争”が終結してくれるように。差別や偏見のない、争いのない、平和への願いが込められた一曲である、と述べて歌手のヒトの語りは終わりました。

囲んでいる大勢の記者から、次々とその姿勢を称賛する言葉が送られます。それはしばしば続き

ピタリと、そうすると予定が組まれていたかのように称賛する言葉は止まりました。

そして。

大勢の記者の口から次々と、最近の芸能界や政治や社会に対するご意見番の言葉を引き出すための、新曲に引っかけたりした問いか

けが開始されました。

* * *

映りの悪いブラウン管テレビの中に、ひとりの人物の姿がありました。複数のヒトと一緒にあります。

そのヒトは、テレビの中で“ご意見番／大御所”と称される歌手でした。先日、新曲の発表をおこなったばかりです。

そのヒトは歌手であると同時に、現役を退いた方々に絶大な人気を誇る休日お昼の情報バラエティー番組の司会者でもありました。いまは、ボードに貼り付けられた各社の新聞紙のまえに立っています。

新聞の記事を指して、副司会のアナウンサーのヒトが流行の話題に関して“ご意見番／司会者”にご意見をうかがいました。流行の話題は、いま“町興しの素／地域産業”にもなりつつある、アニメやマンガやラノベやゲームが好きで好き過ぎるヒトたちの文化に関するものでした。

話を投げられた歌手であり司会者であるヒトは、じつに苦いふうな表情を見せます。それでも、とりあえずテレビ的に当たり障りのないことを述べました。

そして、“それ”を“より理解するため”に作られた映像が流されました。アニメやマンガやラノベやゲームが好きで好き過ぎるヒトたちの暮らしぶりが、とても“それらしく”強調された映像でした。

それを見た歌手であり司会者であるヒトは、不気味なモノが目の前にあるかのごとく自分の腕で自分の身を抱いて、述べました。

「私には、どうにも理解できない世界ですが……。んー、まあ、…その、………なんとというか、情熱が熱すぎて正直ちよつと不気味で気持ち悪いというか、………うん、ちよつと理解できませんねえ。…お好きにどうぞ、としか言えません」

*
*
*

音は、心に響く。

だからこそ、音には“国境という線引き”がない。

しかし、“それ”を創り出すヒトの頭の中には

しばしば“価値観という線引き／文化という線引き／言語という線引き／自覚なき線引き／努力なき無理解／偏見的な視点／差別的な視点”が存在する。

*
*
*

戦争は、いまだ続く。

小話・其の参拾八へかぞくのいちいん（仮題）（前書き）

【せめて最低限の敬意を】

小説：其の参拾八へかぞくのいちいん（仮題）

《かぞくのいちいん（仮題）》

彼女のお腹は、とても大きいことになっていました。歩くのが、ちよいとばかり大変そうです。辛そうでもありません。

しばしば自分に甘くなって食べ過ぎてしまうことは、誰しも少なからず経験することではありますが、けれど彼女の“それ”は“そのような事柄”によるものではありませんでした。現に、彼女の表情に忌避の色は一切なく、むしろ喜びに満ち溢れています。

それもそのはずです。だって彼女はもつすぐ、我が子に出逢えるのです。

いまから“この場所”を専有すると宣言する産声を、彼女の耳はしっかりと聴きました。

彼女は、我が子と対面しました。

しかし。

別れは、一切の予兆なく訪れました。

とてつもなく強大な力ある手によって、彼女は我が子を奪われてしまいました。

彼女の持ちえる力では到底抗えない、とても強大な相手でした。彼女とて無抵抗で我が子を差し出したわけではありません。ありつたけの力を振り絞って立ち向かいました。抗議の声を張り上げました。

でも、彼女は我が子を奪われてしまいました。とてつもなく強大な力ある手に。

* * *

そこは、とてもとても息苦しい部屋でした。時と共に、息苦しさが増してゆきます。本当の意味で、密室でした。

彼女の子の姿は、そんな部屋の中に取りました。光源のない、暗い暗い部屋でした。

彼女の子は、彼女の温もりを求めて声を上げました。とても息苦しい場所ですから、とてもか細い弱々しい泣き声でした。

その部屋に、ふっと“熱のある灯り”が点きました。“それ”は部屋全体を例外なく包み込み、彼女の子も包み込みました。

それからもしばらく彼女の子の泣き声は続きました。そして、あるところを堺に。

それは、ふっとロウソクの火を吹き消すように。

泣き声は聞こえなくなりました。

* * *

「まったく」

ひとりの老婆が、うんざりしたふうに言いました。そして、

「ウチの茶トラ」が、またガキを産みやがってね。だからほら、また頼むよ」

と“産まれて間もない子猫”を“空のペットボトル”を扱うような軽率さで差し出します。

「勘弁してくださいよ」

白のシャツに紺のネクタイをした、ひとりの男性が言いました。どこか泣きそうな、参ったふうな顔をしています。

「なにが“勘弁”だい。こっちの血税でメシ食ってるくせに、職務放棄しようつてのかい？」

老婆は責める口調で言い、詰め寄ります。

それでも男性は根気強く“言うべきこと”を言い伝えますが、老

婆は聞く耳を持ちませんでした。

そして老婆は強引に子猫を男性に押し付けると、早々に家へ帰ってゆきます。

子猫を受け取ってしまった男性は、殺意にも似たモノがある眼差いで老婆の背を見届けました。それから手の内にいる子猫に向かって、

「ごめんなさい。本当に、ごめんなさい……」

とても深いところからの言葉を、述べました。

男性の背後には、白が主色の鉄筋コンクリートの建築物がありました。その外壁にそうようにして、“なにか”の詰められた土嚢がびっしりと置かれてあります。その中から、あらゆる生き物の泣くような声が、あるいは激怒するような声が、漏れ聞こえてきました。「ごめんなさい」

子猫を手に立ち尽くす男性が、いまへ到るまでの“いま”を含めたすべてに対して懺悔するふうに述べました。

* * *

とある町の、とある商店街の、とあるペットショップの、その店内の、ある一角に。

父・母・娘という構成の一組の家族の姿がありました。

「このコ」にするー」

女の子が嬉々とした表情で言いました。その胸に、小さな子猫を抱いています。

「きょうから“このコ”は、“かぞく”の“いちいんな”の。あたしの“きょうだい”なの」

家族が増えることの喜びを、“買う／飼う”ことの喜びを、女の子は無邪気な満面の笑みで表しました。

* * *

とある町の、とある商店街の、とあるペットショップの、その前
にある道の、電信柱の影に。

ペットショップの店内で無邪気な笑みを浮かべる女の子を、じい
と見ている目がありました。

その目は、茶色にトラ柄の毛皮を身にまとっていました。

その目は、ただじいと見ていました。

小話・其の参拾九へえいゆうのはなし（仮題）（前書き）

【認識する側の“目”によって】

小説：其の参拾九へえいゆうのはなし（仮題）

《えいゆうのはなし（仮題）》

黄昏色の空の下、ひとりの男がコンビニを目指して歩いていました。丸刈りにされた頭に、ヒトを近づけない鋭利な目をしています。身なりは、上下共に黒のジャージ。足には、使い込まれて汚い灰色の運動靴。

彼は、盗みや恐喝やその他諸々の悪意ある手段で老人や無防備なヒトから多額の金品を騙し取る常習者でした。悪知恵に関しては無類の才があるらしく、逮捕されたことはありません。

信号に差し掛かりました。タイミングのよろしくないことに、表示が赤に変わりました。

男はそれが当然のことなので、足を止めました。が、しかしすぐに舌打ちをひとつとして歩き出してしまいます。彼は、とても短気でした。

* * *

黄昏色の空の下、ひとりの男がコンビニを目指して歩いていました。七三にきつちり分けられた髪をし、目元にはインテリジェンスを演出するメガネがあります。その下には、他者に対して自己主張が希薄そうな目がありました。身なりは、上下共に濃紺のスーツ。足には、使い込まれた味ある革の靴。

彼は、社会の歯車と呼ばれてしまうような人物でした。これとつた個性や意志や特徴はなく、積極性もありません。

信号に差し掛かりました。タイミングのよろしくないことに、表示が赤に変わりました。

男はそれが当然のことなので、足を止めました。不意に、苛立ち

ある舌打ちの音が聞こえました。彼は反射的に身を縮め、音の聞こえたほうへ目をやりました。

丸刈りの頭をした人物が、苛立たしげに赤信号を横断して行きま

* * *

男は丸刈りの頭をポリポリとかきながら自動ドアをくぐり、コンビニに入店しました。そして迷いのない慣れた足どりで酒類売り場へと向かいます。

子どものはしゃぐような声が聞こえました。どうやらお菓子を買いおと選んでいる子どもが先客として居るようでした。

男はうざったそうに舌打ちをしました。彼は心の底から“子どもノガキ”が嫌いでした。

男が酒を選んでレジに向かうと、狙ったようなタイミングでお菓子を手にしたふたりの子どもがレジにそれぞれ品を置きました。罵声が反射的に口から出そうになったのを、男はどうか舌打ちひとつに堪えました。ここで子ども相手に“なにか”をやらかして、最悪、警察を呼ばれてしまつては、とても都合が悪いのは自分だからです。

ひとりの子どもが、手をすべらせて支払いの小銭を床にばら撒きました。焦ってそれを拾い始めます。もうひとりの子どもも、それを手伝います。店内にひとりしか姿のない店員も、それを見かねて拾うのを手伝います。

決して気の長いほうではない男の苛立ちは、時計の秒針が進むのと連動して増してゆきます。爆発しそうになるのを、彼は奥歯を噛みしめて堪えました。

* * *

男は七三の髪を手でなでつけてからひとつ深呼吸をしました。そして片手をポケットに突っ込み、そのまま自動ドアをくぐってコンビニに入店します。

そこには、床に這いつくばるふたりの子どもとひとりの店員、それを苛立たしげに見ている丸刈りの頭の男の姿がありました。子どもと店員は、どうやら床に散らばった小銭を拾い集めているようでした。

男は意を決したふうにポケットから折りたたみ式のナイフを取り出し、不慣れな手つきで刃を出現させました。彼は歩みを進め、ちょうど手前に居た子どもの首にナイフの刃を当てて言いました。

「か、金を出せっ！　いますぐにっ！」

突然の事態に対して理解が追いつくまでの間を置いてから、店員は慌ててレジに向かいました。

* * *

早く酒を飲みたい男の苛立ちは、もうすでに限界を超えています。だというのに、これ以上さらに余計な時間を喰う強盗が出現してしまいました。

「ぶざけたことしてんじゃねえぞ、コラ！　おい、このクソ野郎っ！」

どうにか堪えていたモノが爆発し、彼は手にしていた酒の缶を強盗に投げつけました。

強盗は、酒の缶の直撃と、男の気迫ある鋭利な眼光に怯みました。その拍子に、ナイフが子どもから外れます。

子どもは、その隙に強盗の拘束から脱出しました。

苛立ちと怒りの収まらない男は、一発と言わず二発、三発、ぶん殴ってやるうと強盗に詰め寄りました。

ナイフという凶器によって優位な立場にあると思っていた強盗は、まったく臆せず迫ってくる男に、恐怖にも似たモノを懐きました。

それは強盗の精神を容赦なく追い詰めます。恐怖心を振り払うように、強盗はめちやくちやにナイフを振り回します。

「え？」

男の腹部に、いつの間にかナイフが突き刺さっていました。

「え？」

強盗は、いつの間にかナイフを突き刺していました。

「……………」

「……………」

刺した者と刺された者が互いの顔を見合っ、奇妙で静かな間が生じました。

「そ、そんな、本当に刺すつもりなんて、そんな、そんな、そんな

」

強盗は刺してしまったことに動揺し、

「そんな、違う、そんな、違う、そんなっ！」

錯乱し、現実逃避するかのように逃走します。

刺された男は、苛立ちと怒りからくる舌打ちをして倒れました。

* * *

その日の、夜のテレビのニュースで

ひとりの男の、英雄の“死”が報じられました。

子どもの首にナイフを当てて金を要求する狂人に臆することなく勇敢に立ち向かい、子どもを救うも、自らは死してしまった男を、英雄を称える内容でした。コンビニの監視カメラの衝撃的な映像に、気持ちを盛り上げる効果音を合わせた、編集された映像が流されました。それだけでした。

英雄を殺した狂人に関しても報じられました。

通報を受けて駆けつけた警察官が迅速に逮捕したこと。物静かな人物だったこと。朝に会えばちゃんと「おはようございます」と挨拶する人物だったという、かつての近所住人の証言。まさかこんな

ことをするヒトだなんて、という知り合いの言葉。数ヶ月前に会社をリストラされて職を失い、同時に住む家を失っていたこと。逮捕されたときの所持金が二十三円だったこと。ひとりのヒトの“いのち／生命”を奪ったこと

そして。

話は、いまの社会が抱える問題点に関する、ニュースキャスターとニュース解説者の“思うところ”に移行します。

「現在のネット社会が」

「やはり、ヒトとのつながりが」

小話・其の四拾へサービス(仮題)へ(前書き)

【さーびす、さーびすう〜】

小説：其の四拾へサービス（仮題）

《サービス（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある場所の、とある会議室に、会議机を囲むようにして座っている多数の人影がありました。

「では、今後さらなる“顧客”の獲得を目指して売り出す“商品”についてですが」

この場において進行役と思われるひとりの中年の男性が、ホワイトボードの前に立ち、手にある書類に目をやりつつ言いました。きつちり七三に分けられた頭に、カッチリしたスーツを着ています。左の手首には、実用性とファッション性を兼ね備えた“いやみのない”ブランド物の腕時計がありました。

「“集団生活”においてしばしば生ずる“諸問題”から“購入者／顧客”を優先的に保護し、問題の優位的な解決に取り組む、“集団生活ニコニコ安心プラン”」

進行役の中年の男性はホワイトボードに必要事項を書いてから、手にある書類の次のページを開き、

「次に、“購入者／顧客”に対して“優先的／優位的”に既存のサービスを提供し、なおかつ“購入者／顧客”の要望に応じて出張し既存のサービスを提供する、“ガンバレ！ 努力応援プラン”」

そう述べてから、またホワイトボードに必要事項を書き込みます。「なるほど、なるほど、なかなかいいんじゃないですかね」

会議机を囲んで座る人影の中の、ひとりの初老の男性が言いました。オールバックにされた白髪に、堅苦しさのないジャケットを着ています。左の手首には、実用性やファッション性よりも高級品色を重視した“いやみある”ブランド物の腕時計がありました。

「今後は、このふたつのプランをぐっと押し出していきましょう」という初老の男性の言葉に、ホワイトボードの前に立つ中年の男

性と、会議机を囲む多数の人影はそれぞれ「ではその方向で」と首肯して応じました。

ホワイトボードの前に立つ中年の男性と、会議机を囲む多数の人影は、それぞれ同じ呼称で呼ばれていました。“先生”と呼ばれていました。

この場に居る面々から首肯を得た初老の男性は、ふたつの肩書きを持っていました。“理事長”と“校長”というふたつの肩書きを持っていました。

とある時代の、とある国の、とある学校の、とある会議室に、会議机を囲むようにして座っている多数の先生たちの姿がありました。“学校教育”というサービスに関するビジネスの話をしている先生たちの姿がありました。

とある時代の、とある国では、学校の教育は“顧客”に提供する“サービス”という“商品”になっていました。

* * *

学校の教育がサービス業になったとき、果たして、ヒトは育つのだろうか？

あるいは、どのように育つのだろうか？

小話・其の四拾巻へひとりひとり(仮題)へ(前書き)

【表面と内面は、しばしば一致しない】

小説：其の四拾巻へひとりひとり（仮題）

《ひとりひとり（仮題）》

まどろみに囚われそうになっていた意識が、金属をこすり合わせる不快で耳障りな大きな音によって、とても好ましくないカタチで覚めた。

どうして地下鉄って、普通の電車みたく程好い感じで走ってくれないんだろう。地下鉄の最後尾の車両の座席に腰を落ち着けて、私はそんなことを思った。

閉鎖的な空間を走行しているのだから、騒音が外へ逃げれずうるさくなってしまうのは仕方がない。頭では理解しているのだけれど……。だけれど……。

どうにもむっとした気持ちが消し去れず、私は密やかに“かかと”で床をグリグリしてやった。決して、休日の夕方に急用を頼まれて駆け出された不満をやつあたりのにぶつけているわけではない。決して、断じて、違う。……。ちよつとは、本当にちよつとだけ、あるかもしれないけれど。

車内に人影はまばらで、まだ余裕を持って座れるほど空いていた。曜日的な理由からか、時間的な理由からか、進行方向的な理由か、あるいはそのすべてか。

そんなことを考えていたら、列車が停まった。いつの間にか、駅に着いたようだ。駅名を確認する。私が下車する駅は、まだまだずつと先だった。

ドアが開く。数少ない人影の中に、下車しようとするモノはなかった。乗車してくる人影もなかった。いや、あった。発車のベルが鳴る中、ひとり乗車してきた。まさしく転がり込むように、ひとり転がり込むできた。

その瞬間。

車内にある数少ない人影が、驚くほどの一体感で、まったく同じ空気を発した。察するに、まったく同じことを思ったに違いない。転がり込んできたそのヒトは、周囲に対する配慮のない大きな声で悪態を吐いた。それから、“なにか”をブツブツ言っている。

そのヒトは、どうやら酔っ払いのようだった。

正直、隣に座ってほしくないと思った。けれど、“そう”思ったときに限って、“そう”なるもので……。

そのヒトは世の中に対する愚痴のようなモノを吐きながら、ドカリと、私の隣に腰を下した。

ドアが閉まった。列車が走り出した。呼応するように、隣のヒトが大きな声で歌い始めた。「なにはともあれクリスマス！ メリー、メリー、クリスマス！」と歌い始めた。ワンマン運転の地下鉄なので、最後尾の車両に車掌さんの姿はなく、なので義務的に注意してくれるヒトは存在しなかった。

不幸中の幸いというのか、不快中の幸いというか、地下鉄の走行する金属をこすり合わせる不快で耳障りな騒音が、隣の歌声と相殺しあってくれて、まだ耐えられる状況ではあった。けど、決して好ましい状況ではないので、気を紛らわせるために、対面上部にある広告へ意識をやることにした。電車の広告の重要な存在意義に、いまさら気がついた。

一駅、二駅と過ぎることに、隣の歌は調子を上げていった。「この辺で争いは無しにしないか？ まあ、なにはともあれクリスマス！ クリスマスだ！」と調子を上げていった。

六駅目を過ぎた辺りで、私の忍耐にも少々限界がきた。でも真正面から注意するような度胸は備えていないので、正面は正面でも対面にある窓ガラスの反射越しに睨みをやることにした。地下鉄の窓ガラスは、向こう側が闇なので、ちよつとした鏡のようによく反射する。

それでも、ガツツリとはできないので、チラリと渾身の睨みをやった。

窓ガラスの反射越しに、目が合った。
隣の歌も、列車の騒音も、いまここにあるすべての音が消え去った。

「助けて」

真摯さのある“それ”が、いまここにある唯一の音だった。

あまりの意外な“それ”に、私は自分の耳を疑いつつ、隣に目を向けた。

そこには、周囲に対する配慮のない大きな声で歌っているヒトの姿があった。歌い続けているヒトの姿があった。

終わるための言葉が思い出せないのか、同じところを繰り返し、繰り返し歌っているヒトの姿があった。

列車が停まった。ドアが開いた。

繰り返し歌いながらそのヒトは下車した。

ドアが閉まった。列車が走り出した。

走行時の騒音の中に、奇妙な静けさが生まれた。

いまさっきまでヒトの座っていた私の隣に、人影はなくなった。

しかし“ひとつの言葉”という存在は、確かにそこに残留していた。

そして。

帰宅したいまままだ、

私の隣に残留している。

小話・其の四拾式へ贅美と誇張（仮題）（前書き）

【ウソも偽りもある作り話】

小説：其の四拾貳《贅美と誇張（仮題）》

《贅美と誇張（仮題）》

冷静さを失った言動は、
しばしば自らの首を絞める。

* * *

とある時代の、とある国の、とある街の、とある路地裏に、“なにか”から逃れるように走っているふたりの人影がありました。

ひとりには、けっして清潔とは言いがたい風貌の男性でした。背中に、大きくはないけれど重量感のあるリュックを背負っています。

ひとりには、けっして清潔とは言いがたい風貌の女性でした。胸の前で、雑誌ほどの大きさの封筒を大事そうに抱えています。

ふたりは、路地裏から表の通りに出ました。目前に、中規模の書店がありました。ふたりは互いの顔を見やり、会話するよりも意が通じ合っている目で見つめ合い、そして真摯な表情で、ひとつ首肯し合いました。ふたりは、目前の書店にその歩みを向けました。

* * *

とある時代の、とある国の、多彩な表現がおこなえる自由ある文化の、その一部から生まれたモノの中に、とあるマンガがありました。読んだ者をときどきわくわくさせて感動させる、夢と友情と熱い戦いの描かれた、ロマン溢るる作品でした。

そのマンガの主人公は、“夢／ロマン”を追い求めて大海原へと乗り出した“海賊”でした。“海賊”たちでした。様々な出会いと別れを経験して成長してゆく彼らの姿は、多くの人々に支持されま

した。
いつしか、歴史に名を残すほど売れた世界的人気作品となりました。

* * *

とある時代の、とある国際社会は、とある深刻な問題と戦っていました。国際社会の経済活動に不可欠な交易海路の安全を脅かす、国際社会の経済活動に大きな打撃を与える、“海賊”と戦っていました。

* * *

とある時代の、とある国で、青少年の健全な判断能力の形成と育成に関する事柄を理由に公権力が“表現／創作／意の発信”に対して力を行使できる“決まり”が作られました。賛成派と反対派による突っ込んだ意見交換も議論もなく、それがどういことなのか民衆が詳しく理解することもなく、ぬるつと作られました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある街の、とある書店の、マンガコーナーのいつかくに、ふたりの人影がありました。

「そつえばさー」

ひとりの、いくぶん幼さの残る若い男が言いました。

「ん？ なあに？」

ひとりの、いくぶん幼さの残る若い女が応じました。

「いつの間にか、あの海賊のマンガさ、新刊なかなか出ないなあと思つたら、最近じゃあ既刊も見なくなつたよね」

「ああ、そつえば……。結局、あのクライマックスな展開の続き

は、どうなったんだろっね」

そんなやりとりをするふたりの背中に、

「続き、読みたいかい？」

少々息切れしたふうのある音声がありました。

「「え？」」

ふたりが驚いたふうに振り返ると、そこにはけっして清潔とは言い難い風貌の男性と女性の姿がありました。

「じつは、いまここに“その続き”があるんだ」

サプライズするヒトの微笑みある表情で男性が言っつて、それに呼応するように側らに立つ女性が胸の前で抱えていた封筒を差し出しました。

若い男と若い女は、訝りつつも“それ”を受け取り、中身を見ってみました。そこには、マンガの原稿がありました。いましがた話していたクライマックスな展開の続きが、描かれてありました。ふたりは、当たり前前の疑念を懐きました。が、いつしか描かれてある内容に引き込まれて“それ”を読んできました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある街の、とある路地裏に、“なにか”を追うように走っている複数の人影がありました。

黒のサングラス、黒のスーツ、黒の革靴、という黒で、それぞれ全身を潔癖的に固めています。

複数の黒は、路地裏から表の通りに出ました。目前に、中規模の書店がありました。複数の影の中のひとりが、スーツの袖のところに隠された小型の無線機で“どこか”と短いやり取りをしました。それから他の複数の黒に、言葉なく“手信号／ハンドサイン”を示しました。複数の黒は、目前の書店にその歩みを向けました。

* * *

しっかりと読み終えてから、若い男と若い女は、率直な疑問を口にしました。どうしていまここに“続き”があるのか、と。

問われた男性は、なんでもないことのように、じつにあっさりと答えました。自分が“それ”の作者だから、と。

しばし無言の間を置いてから、

「へっ？」

若い男と若い女は声をそろえて、

「ええっ！」

とても素直に驚きを表しました。

その反応に、作者の男性と、その側らに立つ女性は、愉快そうな微笑を浮かべました。

「……あの」

若い男と若い女は、少々ためらいつつも再び率直な疑問を口にしました。どうしても売れていたのに新刊どころか既刊の姿すら見れなくなってしまったのか、と。

作者の男性と、その側らに立つ女性は、互いの顔を見合い、苦そうな微笑を浮かべました。

「もしかしたら知っているかもしれないけれど」

作者の男性は、そう前置きをしてから、ある“決まり”が作られたことを述べました。そして、その“決まり”に、“自分の描いた作品／海賊のマンガ”は引っかけたってしまったのだと教えました。

悪質な犯罪である海賊行為を賛美し誇張するような描かれかたのされた表現物である“海賊のマンガ”は、青少年の健全な判断能力の育成に悪い影響を与える、という公権力側が述べるところの理由によって。また、国際社会の一部から、国際社会が団結して“海

賊の問題”と戦っているのに、海賊行為を賛美するような“モノ”を世界に広めるのは不謹慎である、と批難されたことも少なくとも影響している。

「……………それって、……………つまり」

若い女は軽い頭痛を堪えるヒトの表情をして、

「あたしたちが“あのマンガ/作り話”の影響を受けて、“海賊”は“いいものだ”って考えるようになって、“海賊”を本気で志すようになってたりして、もしかしたら“海賊”になっちゃう“危険性/可能性”があるから、ってことですか？」

確認する口調で言いました。

「んな！ どれだけ“青少年/ボクたち”を“無知/バカ”だと思っっているのさ、それ。 それぐらい、善し悪し判断できるよ。」

「というか、そもそも“モノ”を強制排除するまえに、判断できるよう学校と家庭で教育したらいい話じゃん。 なんかヘンだよ。 というか取り組む順番を間違えてるよ。」

若い男が、不満そうに言いました。

「いまここにいるキミたちは大丈夫、“かもしれない”。

けれど“どこかにいる誰か”は大丈夫じゃない、“かもしれない”」
作者の男性の、その側らに立つ女性が落ち着きある口調で述べました。

「え？」

若い男と若い女は、そろって問うように眉根を寄せました。

「“決まり”を作ったヒトに、あなたは“このマンガ/作り話”の影響を受けて“描かれている好ましくない行為”を実際にやってみたいと思いましたが？ っって訊くと決まって返ってくる言葉です。」

“自分”はやりたいたいなんて思いません、でも“誰か”はやりた
いと思う、“かもしれない”。 だから、“決まり”で律する必要があるって」

「それって、もうただの疑心暗鬼じゃないですか……。 そもそも、
どうして、こんな“決まり”が作られちゃったんですか？ 誰も反
対しなかったんですか？」

若い女が、心の底から不思議そうに問いました。

作者の男性と、その側らに立つ女性の顔には、そろって、また、
苦そうな微笑がありました。

「もちろん、反対する意見はあったよ」
作者の男性は疲れたヒトの顔をして、

「でも、“決まり”は作られた」
深い後悔の念が滲む音声で、

「反対するヒトも、賛成するヒトも、お互い“自分”が“正義”だと信じて疑わなかったんだ」

経験者としての意を、どこか“希望のようなモノ”を込めて話します。

お互い自分こそが“正義”という考えが先にあり、ゆえに対する“意”との対立は、“敵／よくわからない怪物”と戦うというような空気を持つようになり、次第に冷静さを欠いて、時に汚い言葉を用いて叩き合って、ネガティブキャンペーン的なことになり、結局まともに話し合うこともなく、その結果、この状況を作ってしまったこと。それでも一部の反対派と賛成派は話し合った、話し合おうとしたこと。そしてその一部のヒトたちを、反対派も賛成派も“裏切り者”と行って叩いたこと。

反対派の中にも温度差があったこと。なにより、“そのことに熱心な一部のヒトたちの問題”とされて、まったく一般民衆の関心を得られず、一般民衆と致命的な温度差があったこと。

「同時期に起こった“芸能人が酒の席でトラブルに遭った話”のほ
うが、よほど熱心な関心を集めて過剰なまでに報じられていたから
ね……」

そんな中で、関心を得るために効果的な行動がとれなかったこと。
“表現／創作／意の発信”が致命的なダメージを負い、“表現／創作／意の発信”が致命的な衰退へ傾いてしまった、“表現／創作／意の発信”が瀕死になってしまった日、けれど“それ”を深く認識したヒトは少数でしかなかったこと。

「でも、もっとも致命的な問題は、一度“決まり”が作られて
しまうと、“それ”に対して熱心に思考するということがなくなっ
てしまう、思考しなくなってしまうた、この“やり直せない状況／

現状”にあるんだ。もし“これ/いま/現状”が作り話だったなら、タイムマシンでも登場させて、せめて冷静になつて話し合おう、ネガティブキャンペーンみたいなことはやめて、ちゃんと議論しよう、って伝えに行けるんだけどね”

作者の男性は、諦め切れていない諦めたヒトの表情をと言いました。

そんな男性の肩に、そつと手が置かれました。男性の背後に、黒のサングラス、黒のスーツ、黒の革靴、という黒で全身を潔癖的に固めたヒトの姿がありました。複数、ありました。

作者の男性と、その側らに立つ女性は、静かに現れた黒に、その身を拘束されてしまいました。

黒の中に、手に書類を持ったひとりの姿がありました。その手にある書類には、『違法表現者一覧』と書かれてありました。老若男女を問わず“顔写真/氏名/年齢/職業/備考”が記載されています。

そしてその一覧の中に、いま黒に拘束されている男性と女性も記載されていました。

男性の項目には、ふたつの名前が書かれていました。本名と、ペンネームです。男性は、描くことで表現する漫画家でした。

女性の項目には、いわゆる一般人のそれと異なることは書かれてありませんでした。が、備考のところに“それ”がありました。女性は、漫画家である男性のアシスタントでした。

「間違いない。よし、連行しろ」

書類を手に持つ、黒の中のひとりが言いました。

男性と女性が、発言することも許されずに連れて行かれました。複数ある黒の姿も、静かに去ってゆきました。

それを、若い男と若い女は見送りました。

書店のマンガコーナーのいつかくに、ふたりの人影が残されませんでした。

とある時代の、とある国の、とある街の、とある住宅街の、とある公園のベンチに、ふたりの座っている人影がありました。“危険だから”という理由で遊具が撤去された公園に、子どもの笑い声はいつさいなく、じつに静かで殺風景です。

「あたし、ガチでマンガを描いてみようと思うの」

ひとりの、いくぶん幼さの残る若い女が言いました。ベンチから立ち上がって、決意を表明するようにぐっと右の拳を握ります。左の手には、スマートフォンが握られてあります。

「……………は？」

ひとりの、いくぶん幼さの残る若い男が応じました。状況に対してまったく理解が追いついていないのか、口が半開きです。

「あたしね、じつは」

若い女は、恥らうようにもじもじとしてから、これから重大な秘密を告白するかのようにならためらってから、

「けっこう、マンガとかラノベとかアニメとかゲームとかフィギュアとか大好きなのっ」

頬をほんのり朱に染めて言いました。

「ええー、いまさら“それ”言うのー」

ある意味で意表を突かれた若い男は、

「というか、いままで秘密にしていたみたいなのその態度に驚きだよ」と少々引き気味に返しました。それから一呼吸して冷静さと呼び戻し、

「なんでまた急に、ガチでマンガを描こうと思ったのさ？」

率直な疑問を口にしました。

「べつに、急じゃあないよ。発表していなかっただけで、ちょいちょい描いては、いたよ」

若い女は、少し拗ねたふうに言いました。

「……………そうですか」

若い男はそうサラリと流して、

「それで？」

改めて問いました。

若い女は一瞬、なにか不満そうな膨れっ面をしてから、仕切り直すように「コホン」とひとつ咳払いをして、

「現実の犯行為」と“犯行為を描くこと”とをゴツチャにしているのが、どうにも、あたしには納得できないの」

左の手にあるスマートフォンを差し出し、その画面を若い男に見せます。その画面には、“決まり”に関する文章が表示されておりました。

「でね、“決まり”には、“青少年／あたしたち”が“決まり”の中で“ダメ”とされているモノを作ることに關して明記されていないの。　　というか、“決まり”を作るとき、そのことそれ自体ちゃんと話し合われていないのね」

「……つまり、どゆこと？」

「あたしがその“ダメ”なモノを作ること、 “それ”を問題として話題沸騰させて、“決まり”に關する話題を再燃させて、“決まり”の“ありかた”について意識を向けさせて、今度こそしっかり“決まり”について議論してもらおう！」

若い女は力を込めて語り、それから少し勢いを静めて、

「まあ、“諸刃の剣”的などころはあるけれど……」

と冷静なふうに述べてから、

「それでね、ついてはお願いがあるの」

また勢いを戻して、若い男に言葉を投げます。

「ちなみにどんな？」

若い男はイヤな予感に頬を引きつらせつつ、いちおう訊いてみました。

「アシスタントをやってほしいの」

若い女は真摯な顔で言っつて、

「“はい”か“イエス”で答えて」

これが二択であることを改めて強調するように、人差し指と中指を立てた右の手をずいと突き出します。

「おお、言語の種類しか選べないねこの二択」

若い男はあきれたふうに言いました。

そんな反応に、若い女は耐えかねたふうに片眉をピクリと動かし、

「思い立ったが吉日！」

あまり乗り気ではない若い男の手をむんずとつかみとり、

「さあ、アシスタントくん！これからあたしの家で創作活動開始よ！」

強引に進む一步を踏み出しました。

「ええー！まだなにも返答してないんですけど」

若い男は引っぱれるカタチで、進む一步を踏み出しました。

ふたりの“歩み”が、

始まりました。

小話・其の四拾参へ背負つべきモノ（仮題）へ（前書き）

【重くても投げ出してはならないモノ】

小説：其の四拾参〈背負うべきモノ〉（仮題）

《背負うべきモノ（仮題）》

とある時代の、とある街の、とある学校の、とある教室に、複数の子どもの姿がありました。いまは休み時間で、好き勝手に遊ぶ姿もあれば、火事場の馬鹿力を発揮して友の宿題を複写している姿もあります。

そんな中に、ひとりの男の子の姿がありました。ある一点を、じいーと見つめています。その視線の先には、ひとりの女の子の姿がありました。男の子は、どうやら正確に自覚していないようですが、人生初の恋を経験中なのです。

「ん？」

恋を経験中の男の子の友達が、男の子のおかしな様子に気づき、

「あー！」

当の本人より早く“そのこと”を正確に把握し、

「おまえー」

当然の洗礼として“そのこと”をちやかします。しかも大きな声で。

男の子が恋した女の子とその友達の耳にも、当たり前のようにその声は届きました。女の子は顔を赤くしてうつむき、女の子の友達はニヤニヤしながらこの状況を観覧しています。

「な、なななな」

自分の置かれている状況を認識し、男の子は顔を沸騰するようにみるみる赤くし、

「ち、ちげーよ！」

顔を真っ赤にして声を荒げました。

あまりにも恥ずかしくて、この状況をなかつたことにしたくて、男の子は自分が恋した女の子に対して酷い言葉を口から吐きました。

「こんなやつ好きになるわけねーだろ」と。難儀なことに、どうにも素直になれない不器用なお年頃なのです。

酷い言葉をぶつけられた女の子は、様々な要因もあいまって泣き出してしまいました。

それを見た女の子の友達が、女の子のことをよく知っているがゆえに怒りました。

そしてこの状況をよく理解していないクラスメイトの誰かが、「いーけないんだーいーけないんだー“せえーんせー先生”に言うてやろう！」

男の子が女子を泣かせたことを批難するように言いました。

「ん？ どーした？」

そろそろ休み時間が終わるので早めに教室にやってきた教師が、なにか絶妙なタイミングで呼ばれたので、そう返しました。

教師の側に居たクラスメイトの誰かが、とてもざっくりした状況説明をしました。それを聞いた教師は、

「そうかー」

男の子と女の子を見やって、

「ふたりともあとで職員室な」

そう告げ、

「じゃ、授業始めるぞー」

休み時間が終わるチャイムが鳴るより先に、授業を開始しました。

職員室に、男の子と女の子と教師の姿がありました。

教師は、とりあえず当人の口から事情を聴きました。最初は断片的なハッキリしない言い回しでしたが、教師は辛抱強く聴きました。事情を把握した教師は、男の子に、「酷い言葉を言うのはよくないこと」と気づかせる言葉遣いで話しかけました。

男の子は、そもそも自分でもわかっていることなので、

「う、ごめん」

それでも素直になりきれれていませんでしたが、謝りました。

女の子はコクリと背いて、それを受け入れました。

職員室から教室へ戻る途中で、

「あ、あのさ」

男の子が明後日の方向を見やりながら、振り絞るように、

「きよ、今日さ、一緒に帰ってやつてもいいんだぜ！」

言葉のチヨイスを間違えました。

女の子は一瞬きよとんとしてから、ちよっぴり大人びたふうに、

「今日、一緒に帰ってくれる？」

ほんのり頬を赤くして言いました。

「え！ う、うううん、うん！」

男の子は、

「帰ってやるよ！」

素直な満面の笑みで応じました。

* * *

とある時代の、とある街の、とある学校の、とある教室に、複数の子どもの姿がありました。いまは休み時間で、好き勝手に遊ぶ姿もあれば、火事場の馬鹿力を発揮して友の宿題を複写している姿もあります。

そんな中に、ひとりの男の子の姿がありました。ある一点を、じいーと見つめています。その視線の先には、ひとりの女の子の姿がありました。男の子は、どうやら正確に自覚していないようですが、人生初の恋を経験中なのです。

「ん？」

恋を経験中の男の子の友達が、男の子のおかしな様子に気づき、

「あー！」

当の本人より早く“そのこと”を正確に把握し、

「おまえー」

当然の洗礼として“そのこと”をちやかします。しかも大きな声で。

男の子が恋した女の子とその友達の前にも、当たり前のようにその声は届きました。女の子は顔を赤くしてうつむき、女の子の友達はニヤニヤしながらこの状況を観覧しています。

「な、なななな」

自分の置かれている状況を認識し、男の子は顔を沸騰するようにみるみる赤くし、

「ち、ちげーよ！」

顔を真っ赤にして声を荒げました。

あまりにも恥ずかしくて、この状況をなかつたことにしたくて、男の子は自分が恋した女の子に対して酷い言葉を口から吐きました。「こんなやつ好きになるわけねえーだろ」と。難儀なことに、どうにも素直になれない不器用なお年頃なのです。

酷い言葉をぶつけられた女の子は、様々な要因もあいまって泣き出してしまいました。

それを見た女の子の友達が、女の子のことをよく知っているがゆえに怒りました。

そしてこの状況をよく理解していないクラスメイトの誰かが、

「いけないんだーいけないんだー“ぎょーせい／行政”に言っつてやろう！」

批難するように言いました。

「ん？ どーした？」

そろそろ休み時間が終わるので早めに教室にやってきた教師が、なにか絶妙なタイミングで呼ばれたので、そう返しました。

教師の側に居たクラスメイトの誰かが、とてもざつくりした状況説明をしました。それを聞いた教師は、

「コラッ！」

自分の座る椅子を確保するために、適切な指導をおこなったというカタチを作るために、頭ごなしに男の子のおこないを否定する言

葉を吐きました。自分が適切な指導をおこなったと証言させるかの
ように、クラスメイトの眼差しがある教室で、いつさいの配慮なく
言葉を吐きました。

男の子と女の子は、公開処刑されるヒトの顔で、眼つきで、お互
いと騒ぎ立てた周囲を批難するように見やりました。

以後、男の子と女の子が会話することはいつさいありませんでし
た。

* * *

行政による物事への規制などの介入が、
教育と保護者が背負うべき責務の放棄であってはならない。

その責務は、ひとりの人間の人生の道筋に関わる“とても重いモ
ノ”であるから。

小話・其の四拾四へ野放し（仮題）へ（前書き）

【なにごとにもバランス感覚は重要】

小話：其の四拾四（野放し（仮題））

《野放し（仮題）》

とある時代の、とある国の、とあるショッピングモールのいつかくに、とあるモノが販売されていました。そのいつかくは、他のモノとそのとあるモノを区分して販売するための専用コーナーでした。子を連れた母親が、とあるモノの専用コーナーを横切りました。そして整然と大量のとあるモノが販売されている光景を目の当たりにして、ある思いを懐きました。そして行動しました。

子どもが健全に育つために、とあるモノが野放しにされ氾濫しているこの惨状をどうにかしなければならぬ、と近所のヒトや母親友達に芝居役者のごとく感情豊かに語ってまわりました。

とあるモノを所有することは憲法によって国民に保証された権利である。そもそも今現在だってきちんと厳しく区分販売されている現場を見てから本当に氾濫しているのか判断してほしい。という意見もありましたが、子どものためですから彼女は屈しませんでした。

そしてついに、彼女の訴えはカタチとして実りました。

とある時代の、とある国の、憲法によって国民が所有する権利が保障されていた“銃器”の販売が厳しく規制されました。

とある時代の、とある国の、とある港の、とある倉庫の中に、“銃器”の販売が厳しく規制されることを心待ちにしていたヒトたちの姿がありました。

「いやー、まさにビジネスチャンスだ」

ひとりが嬉しそうに言いました。

「ああ、まっただ」

ひとりが嬉しそうに同意しました。そして、側に置いてある木箱を愛おしそうになれます。その木箱と同じようなモノが、倉庫の中に大量に積まれてありました。

「どんなに厳しく規制したって、規制した瞬間と同時に欲する者が根絶されるわけじゃないんだ。むしろ、厳しい規制のおかげで規制対象の価値が上昇する。欲する者が存在する限り、こりゃあいい商売だよ。本当、規制を厳しくして需要と供給の管理のバランスを崩してくれたヤツには心から感謝するよ。おかげで規則を破る“うま味”が増したんだから」

小話・其の四拾五へ吾輩と脇役のお話（仮題）（前書き）

【ウソの世界は親切で優しい】

小説：其の四拾五《吾輩と脇役のお話（仮題）》

《吾輩と脇役のお話（仮題）》

* * *

これは吾輩のお話である。しかし同時に、まごうことなき“彼”のお話でもある。

このお話の主役は、いつさいの揺るぎなく吾輩である。このお話における“彼”の役回りは、いわゆる脇役だ。いちおう名前はあったから、名前持ちの脇役、という脇役の中においては比較的目立つ役回りを演じていたことになるだろうか。

繰り返しになってしまふことをご容赦願いたいのだが、これは、吾輩が主役のお話である。とても長いお話だ。その長さたるや、主役を演じている吾輩自身、しばしば嫌気がさして幻想的空想世界へ逃避したくなるほどである。……いま、とてもどうでもよいところで偽りを語ってしまった。申し訳ない。お詫びして訂正させていただく。“逃避したくなるほど”ではなく、“逃避するほど”が事実 に即した文言である。閑話休題。これは長いお話だ。読者諸賢の中には、いまこの一文を長いと感じて嫌気がさしているヒトもあるつかと察するところであるが、それとは比べ物にならぬ長さであることを、その卓越した明晰たる脳みそでご想像ご推察いただきたい。そして願わくば、吾輩がしばしば幻想的空想世界へ逃避するに至るいかんともし難い心情をお察しいただきたい。

あるいはこれも、そんな幻想的空想世界への逃避と同義的な行為なのかもしれない。気分転換。または気まぐれ。

若干前後してしまって申し訳ないが、これというのは、今現在進行しているこの文字の羅列のことである。吾輩のお話の中から、“彼”に関する部分を抽出してみようという試みだ。

本来ならば、名前持ちといえども脇役である“彼”にスポットライトが当てられることは、まあ、ない。それに嫌気がさすほど長い吾輩のお話であるが、その中における“彼”の登場期間は、初期の頃に限定されており、極々短い。短いが、確かに登場したこともまた、揺るぎない事実である。

前置きが長くなってきたので、端的に述べよう。つまるところ、幻想的空想世界へ逃避するようになり、思い出を嗜んでみようということだ。

ここで冒頭の一文を持ってこよう。いかげんしつこい、というお気持ちは重々お察しするところであるが、そこをどうにか、煮干しなどでカルシウムを摂取するなどして堪えていただきたい。

これは吾輩のお話である。しかし同時に、まごうことなき“彼”のお話でもある。

願わくば、読者諸賢には寛容寛大な御心でお付き合ってください。

* * *

吾輩は小中高一貫の私学で勉学に勤しんでおり、“彼”の存在を知ったのは中等部一年の頃であったと記憶している。“彼”は転校生であった。

吾輩が“彼”に対して懐いた最初の印象は、“気に食わぬ”、であった。“彼”はなかなか整った面をしており、制服のない私服登校である我が学び舎であったから、その衣装センスの良さだっ望まずともよく知れた。そんな良くてきた“彼”であったから、自己紹介のときなど、同級生女子諸君の一部がとても元気よろしく耳障りであった。

吾輩の“彼”に対する興味は、自己紹介のときにはもう皆無となっていた。およそ吾輩とは相容れぬ世界の人間であろうと予想できたからだ。

だというのに、だというのに、である。どうして世界は望まれぬ
気配りばかりお上手なのであるうか。世界の最高責任者はしつかり
と説明責任を果たしていただきたい。どうしてよりにもよって吾輩
の目の前の席に、そこがこれからの居場所だとても宣言するような顔
で“彼”が着席しているのか！ 世界さんマジ KY ! ……………
………まったく使い慣れぬ言語は安易に使用するべきではないと、いま
悟った。時代の流れに乗ってみようかと試みたのだが、乗るべき時
流をどうやら間違えたようだと思っすらジワリと感じている。
話を戻そう。“彼”は、吾輩の前の席となった。

このとき、吾輩はミスを犯した。どうして吾輩の前の席なのだ、
と納得いかぬ気持ちを眼光で表現していたがために、着席しようと
こちらへ歩んできた“彼”と目が合い、いらぬ誤解を生んでしまっ
たのだ。じいと呪うように見やっていた吾輩の姿は、どうやら“彼
”には転校生に話しかける好機を探っている在校生に映ったらしい。
「これからよろしく」

嫌味なく爽やかに“彼”が声をかけてきた。

初対面だというのにクソ馴れ馴れしい好青年野郎である、とか。
どうしてお隣さんではなく真後ろの吾輩に話しかけるのだ、とか。
まま思うところはあつたが、

「うむ、こちらこそよろしく」

吾輩とて最低限、礼節を重んずる人間性は持ち合わせているから
そう返した。

これが、吾輩と“彼”との間で交わされた初の言葉であつた。

* * *

吾輩は必ずしも社会的な人間ではなかつたけれども、だからとい
って“彼”と不仲ではなかつた。どちらかと言えば、親しかったほ
うであるうと吾輩は思っている。相容れぬ世界の間人であるうと予
想していた吾輩であつたが、意外な接点で、“彼”とあつたのだ。

吾輩の目の前の席に座って、“彼”は苦悩するヒトのように眉根を寄せてうんうんうなっていた。“彼”と初の言葉を交わしてから、およそ七日が過ぎた月曜日の朝のことである。

ウソ偽りなく正直に述べて、不快極まりなかった。なにが嬉しくて新たな一週間の始まりの朝っぱらから他者のそんな顔を見ねばならんのだ！ 吾輩は抗議の意を込めた鋭い眼光をくれてやった。そうしたら“彼”は吾輩の存在に初めて気づいたふうにごちらを見やうって、

「あ、おはよう」

なんとも気に食わないことに、嫌味のない健やか好青年的な朝の挨拶を放ってくるではないか。そんなことをされてしまった日には、「うむ、おはよ」

最低限は礼節を重んずる吾輩であるから、そう返す。なんだこの健全で健康的な絵に描いたがごとき朝の学校風景は。どうしてよりもよって気に食わぬこの好青年とそんな望まぬ風景を描かねばならんのだ。まったく。遺憾極まりない。 ニュースの記事でしばしば目にする言葉であるから使用してみたが、どうも遺憾の使いどころを間違えた気がする。……遺憾なことに。

「ところでさ」

ヒトが遺憾の使いどころについて思考しているというのに話しかけてくるとは、なんとも凶々しい好青年である。本当ならば無視してしかるべきなのだが、転校早々この学年内において確かな立ち位置を獲得した“彼”である。ここで無視すると吾輩が困った事態に陥ると容易に想像できるので、「なにか」と応じてやることにした。「この名前、知ってたりする？」

知らぬわっ！ と一喝してやろうと前もつてのどの奥に言葉を用意しておいたのだが、“彼”が問いかけと共に差し出したモノを正しく認識して、吾輩は出かけたそれをのどの奥に押し戻した。

問いかけと共に差し出されたのは携帯電話であった。そして“彼”は、その携帯電話の待ち受け画面を指して問うている。

携帯電話の待ち受け画面にあったのは、名作映画である『バック・トゥ・ザ・フューチャー』シリーズの第二作目であるところの『バック・トゥ・ザ・フューチャー？』において未来世界で改造が施され飛行能力が追加されたスーパー・カー型タイムマシンであるところのデロリアンが空に軌跡を引いていままさに時空旅行へ飛び立たんとしている図画であった。

「デロリアン」

吾輩がそう口にする、

「あー！ あー！ そうだ！ そうそうデロリアン！」

長年の苦悩から解放されたヒトのように“彼”は歓喜した。

「自分のケータイの待ち受けなのに名前ど忘れしちゃってさ。一度気にしたら、もうずっと気になっちゃって、五日間の悩みがやっと解消されたよ。いやー、助かった」

五日間もこんなことで苦悩していたとは、ご苦労なことである。

だが吾輩にも似たような経験があるので、まったく理解できないわけではない。お役に立てたならなによりだ。

「ところでさ」

一件落着一段落して吾輩がやや油断したところに話しかけてくるとは、なんとも忙しい好青年である。もう面倒臭いので、「なにか」と応じてやった。

「おもしろいよね、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』シリーズ」

「うむ、激しく同意する」

しばしば幻想的空想世界へ逃避する吾輩であるから、それとなく映画への造詣は深く。なかでも『バック・トゥ・ザ・フューチャー』シリーズは、何度も繰り返し鑑賞するほど愛している屈指の作品であった。

相容れぬ世界の人間であろうと予想していたが、それは吾輩がよく知りもしないで一方的に懐いていたモノであり、事実と多少異なるところがあるようなので、これを機に“彼”に対する認識を少々改めることにした。

国語・英語・数学という教科がある。よほど専門的な学び舎でない限りは、誰しも学業に勤しむ課程でかじることになると思う。

これらに関して、吾輩にはどうしても納得いかぬことがある。この三大教科の成績が優れていれば、他の教科の成績がダメでもその人物を優秀とみなし、逆にこの三大教科の成績がダメだと、他の教科の成績がどんなに優れていても問答無用でその人物は否優秀とみなす、もはや疑念すら懐かぬほど“当たり前”として定着しているかんのある風潮。まったくもって納得できぬ、というよりは理解できぬ。

勉強に勤しむことがとても重要なことであるとは重々承知しているが、しかしだからといって筆記試験において高得点を獲得することが必ずしもより人間を育むとは思えないのだ。自分のために勉強に勤しみ高得点を獲得するだけなら言うことはないのだが、しばしば低得点を獲得してしまったヒトを見下すような言動をする者がいる。果たしてそれが優秀な人間のすることだろうか？ 点数によって差別し、それによって競争させて進歩をうながし、下が上を志し、上は下に追いつかれまいとさらなる上を志す、という本来の意味での競争なら

はっ！ ……少々熱くなってしまった。申し訳ない。改めて、単純明瞭に述べさせていただく。

吾輩は、国語・英語・数学が超特大が付くほど苦手であった。

中等部一年、最初の期末試験が終わり、新たな学期が始まった。テストの返却があり、それにとまなう喜怒哀楽があった。数日後、吾輩は担任教諭殿による呼び出しを喰らった。三大教科の期末試験の獲得点数がずば抜けて危険水域を下回っており非常に危ういから特別補修を受けよ、という用件であった。頼まれたわけでもなく、一生徒のためにわざわざ給与の出ないサービス残業的な特別補修を開催してくれるとは、なかなか素晴らしい担任教諭殿である。吾輩

は、担任教諭殿の恩義に報いるためにも、心して特別補修を受けるむねを伝えた。

特別補修を受けるのは、どうやら吾輩だけではないらしい。放課後、特別補修が開催される教室に足を運ぶと、そこには先客の姿が二者あつた。親しくしている我が友と、“彼”である。親しくしている友が吾輩と同等の獲得点数水域であることは承知していたが、まさか“彼”も、とは、正直、驚きであつた。話を聴いてみると、しかし“彼”は吾輩らとは違つのだな、ということが判明した。

吾輩の通う私学は、他と比べて独自色の濃ゆいところがあつた。配布される教科書はすべて独自で製作した物で、だというのにほとんどの教諭が教科書を使用することなく自作のプリントを使用して授業を進めたりする。教科書の購入費用が無駄になつていと思わなくもないのだが、まあそれはそれとして。転校生であるところの“彼”は、転校生であるがゆえにまだこの独自色に慣れておらず。よつて最初の期末試験では、どうにも本領を發揮できなかったらしい。

もう帰るがよろし！　ここは貴様の来るところではない！　と心の底からズバリ宣告しようとしたところで、

「お、そろつてるな。じゃ、始めるぞー」

担任教諭殿がやってきた。

これ以後、学期と学年が変わつても、どうしてだか吾輩だけが、まことに不本意ながら特別補修の常連となつてしまつわけだが、それはまたべつのお話。

* * *

そもそも吾輩は、繋がりを脅迫的に強制する感のある携帯電話をあまり好ましく思つていなかった。電子メールをコミュニケーションと称することに極大なる違和感を覚える部類の人間なのだ。でも、だからと言って、べつにそれを否定する意があるわけではない。個

人的な価値観の話だ。それに好ましくないとはいつつ、吾輩も携帯電話はいちおう所有している。好ましくはないが、所有していないと不便であることも揺るぎない事実だから。

あるとき、“彼”が吾輩の携帯電話の番号と電子メールのアドレスを訊ねてきたことがあった。それなりに親しくしているのだから、まあ不自然なところはない、とても自然な事柄だ。そのときの吾輩が、たいそう不機嫌であったことを除けばだが。

不機嫌であること理由は、これといって思い当たらない。ただただ不機嫌であり、ただただ理不尽であった。虫の居所が悪い、というやつなのだろうと思う。ただこの虫はどうにも日本人の好いところでもある察しと思いやりに欠けるヤツで、じつに空気の読めないヤツであった。この虫を即刻早急に駆除する殺虫剤を開発してくれる頭脳が出現することを、吾輩は渴望してやまない。

「話しかけてくれるな」

親しき仲にも礼儀あり、という先人のありがたい教えに真っ向から反する言葉を吾輩は吐いた。じつに不快極まる態度で。

「ん？ …… ああ、そう、わかった」

吾輩の中に不法居住している虫と違って、“彼”は日本人の好いところでもある察しと思いやりを有していた。とくに語気を荒げるでもなく、ただ事実を理解したふうに言葉を発して、“彼”は自らの携帯電話をポケットに収納し、静かに去っていった。

そして一切の交友が絶たれた、ということとは、けれどなく。次の日には、それまでと変わらぬ付き合いがあった。本当ならば前日の非礼を詫びねばならなかったのだが、“彼”の変わらぬ対応にあぐらをかいて、吾輩は詫びなかった。以後、“彼”が吾輩の携帯電話の番号と電子メールのアドレスを訊ねてくることは一切なかった。

* * *

時は流れて、吾輩は高等部一年となった。これから勉学に勤しむ拠点となる高等部の校舎は、無計画な増築を重ねた結果、“一年四組の教室は中二階と三階の間にある図書室の前／二年四組の教室は中庭に面した一階で、一組と二組と三組は二階／三年四組の教室は屋上の階段の脇／三年三組の教室は一階にある食堂と職員室と階段の間”といった具合に教室の位置が規則性なくバラバラになってしまっていて、じつにおもしろかった。ただ、吾輩が腰を落ち着けることとなった一年二組の教室には前方にひとつしか扉がなく、消防法的に限りなくアウトなのではなかるうか、なんてことを考えたりした。

そんな非常時には生命の危機が多分に増す教室には、“彼”の姿もあつた。

この頃、吾輩のお話的には“人生における羅針盤的な存在”を喪つたという重大な事柄が起きたりしたのだが、しかし“彼”に関するようなお話はとくにない。いや、強引になにか述べることもあるとしたら、“彼”に彼女ができたということだろう。まあ、さしたる欠点のない好青年な“彼”であるから、彼女ができるのも自然なことであり驚くほどのことではない。ない、のだが、ナメクジのごとく地べたをヌラヌラ這いつくばるような生き様の吾輩からして、優雅に空を飛ぶような生き様の“彼”は、じつにうらやましくあつた。

また時は流れて、吾輩は高等部二年となった。高等部は単位制なので、吾輩としてはとても危ういふうがあつたのだが、どうにか問題なく進級できた。しかし、気づいたときにはもうすでに、小等部の頃から知っている悪友的な立ち位置だった脇役の姿がひとり分なく、周囲の話では“進級に関する諸事情”で学び舎から去つたとのことだった。……なんというか、……人生色々である。なむなむ。

そして、クラス替えがあつた。“彼”とは別々になつたのだが、選択科目で同じモノがあつたので、“彼”と彼女の姿をしばしば目撃することはあつた。けれど積極的に会話することはなかつた。恋

仲のふたりの間に割って入るような不粋なマネ、できようはずがない。

この頃も、“彼”に関するようなお話はとくになかったが、ある意味で吾輩のお話的に重大な事柄が起きたりした。ある同級生女子のアタックを喰らったのだ。以後、吾輩は苦しいくらいきゅんきゅんしまくりである。主に胃と腸がつ！吾輩は密やかにラヴ・ロマンス的なアタックを渴望していたのに、どうして精神的にネガティブな意味でのアタックが容赦なく放たれるのか！世界の最高責任者は吾輩の前にその面を出すがよろし！人類史上最上級の土下座をするので吾輩に関する世界の文脈を書き直してください心からお願いします。

願いも虚しく、きゅんきゅんしっぱなしで時は過ぎ去った。

吾輩は高等部三年となった。クラス替えはなく、二年の時と同じ顔面の同級生諸君と勉強に勤しむことになった。またも“彼”とは別々なのだが、またも選択科目で同じモノがあったので、いつかと同様の絵図らを目撃することとなった。

この頃は、吾輩のお話にも重大な事柄が起こり、そして“彼”に関するお話でも重大な事柄が起こったりした。まず吾輩のお話的には、吾輩の胃と腸をきゅんきゅんさせてくれ続けた同級生女子が、まさしく掌を返したように、いままでの文脈を完全に無視して、「べつに嫌いじゃないの。どちらかと言うと、好き。むしろ、好き」などと意味のわからないことを告げてきたというのがある。いままでこちらに対してミジンコの存在感ほど好意的な振る舞いを見せたこともないのに、だ。不意打ちとはこのことか！吾輩には新手的精神的にネガティブな意味でのアタックにしか思えなかった。あるいは世界の最高責任者さんが吾輩の願いをくんでくれたのかもしれないが、察するに、世界の最高責任者さんはご多忙すぎてお疲れなのだろう。でなければ、こんないろいろと間違えていることをやらかすわけがない。まあ、その辺りを論じたところで揺るぎない答えがあるとは考えられないので、端的に結果だけ述べよう。乙女心

はさっぱり理解できない。そして吾輩は、ただただ人間不信に陥った。“彼”に関するお話をしよう。高等部三年の最後の学期が中盤を過ぎた頃の、あるときを堺に、まったくもって静かに、地べたにしみた雨水が消え去るように、“彼”と彼女の姿を学び舎で目撃しなくなった。

なんと充実した青春だコノヤロー！ 吾輩はうらやましすぎて狂い悶えながらそう思った。彼女と姿を消すとか、どこの青春映画だよと声を大にして苦情を述べたい。胃と腸をきゅんきゅんさせたあげくに人間不信に陥った吾輩との、この圧倒的すぎる扱いの差はなんなのだ！ まったくもう！ お幸せに！

* * *

想像と創造によつて生み出されたモノは、最後の一線、“それ”を生み出したモノに対して配慮ある優しさを持っている。

吾輩がいつたいなにを述べたいのか伝わり難いところがあるかもしれないので、単純に明瞭に言い表そう。

現実の世界なんぞ、極めて醜悪なクソゲーに等しい。

* * *

なんの脈絡もないことだが、どうやら“彼”は、いつの間にか死んでいたらしい。吾輩がその事実を知ったのは、学び舎への登校が残り七日で終わろうかという頃のことである。担任である中年の女教諭が、じつにあっさりさっぱりきっぱりと事実のみを告げてくれた。「“彼”が急死しました」と。「高等部三年の最後の学期が中盤を過ぎた頃のことです」と。

なるほどそれなら姿を目撃しなくて当然だ。冷酷と思うヒトもあるだろうが、ウソ偽りなくそれがそのときの吾輩の素直な反応であ

った。涙を流す同級生女子の姿もあつたのだが、どうにも吾輩には、それが“ある個人の悲劇的な人生を描いた映画”を見て感動したと公言して泣く者の涙のように感ぜられてしまった。あるいは、涙を流せるその素直さがうらやましかつたのかも知れない。

教諭の方々は、高等部三年といういろいろと考えなければならぬ時期であることに配慮して、“彼”についての事実を吾輩ら同級生に告げるか告げないか議論していたらしい。事実があつた時期と事実を知つた時期に、時間差があるのはそのためである。

告別式は翌日とのことだった。各自、自分の意で行つたらよろしいとのこと。

そして。

翌日の放課後、吾輩は“彼”の告別式に出席しなかつた。式場へ行くまでには電車を利用せねばならず、それには吾輩の懐から切符代である百六十円が旅立つ必要があり、懐の事情や様々な要因をかんがみるに、いま切符代である百六十円が旅立つのは賢明ではないと決断し、出席を辞退したのだ。

そもそも、吾輩と“彼”は、最期に別れを告げねばならぬほど特別に親しいという仲ではない。だから吾輩は、切符代の百六十円をケチつたのだ。

それはヒトとしてどうなの、と親しい友に言われた。否定はしない。でも、吾輩は思うのだ。よく知りもしないのに同級生だからという理由で形式的に出席する多数の面々よりは、いくぶんマシだろう、と。

死因に関しては、風にのっけているいろいろ聞こえてきた。それによつて同級生諸君が“彼”に対してどのような心象を持っていたのかがよくも悪くもよく知れた。

吾輩としては、うらやましいほど充実しているように見えた“彼”が、どうして死ななければならなかつたのか、その理由がいまだによくわからない。世界の最高責任者は、是非とも説明責任を果たしていただきたい。死は、むしろ吾輩のよき隣人だと思つてい

たのに。どうしてそれすら“彼”のモノなのか。切に教えてほしい。

* * *

ナメクジは地べたを又ラ又ラ這いつくばるしかなく、鳥は空を飛ぶしかない。そうする以外、ゆるされていないから。ナメクジと鳥が互いを完全に理解し合えることは、おそらくないだろう。でも、地べたを這いつくばるには這いつくばるなりの、空を飛ぶには飛ぶなりの、二者二様の“思うところ”があるから、ふと気まぐれ的に相手の胸の内を察してみたりすることがある。そして自分勝手な思いを懐くのだ。こっちもまあ苦しいが、あんたもまあ苦しいよ。うだな、と。お互いボチボチ前に進もうじゃないか、と。

* * *

吾輩のお話はまだまだ先へと続くのだが、“彼”に関するお話はここで終わる。所詮は、気分転換であり、気まぐれなのだ。デロリアンの名前を覚えていなければ、携帯電話の番号と電子メールのアドレスを覚えていれば、あるいは“これ”とは異なるお話になったのではないか、なんて、そんな“たられば”、べつに考えていない。繰り返しになってしまつて申し訳ないが、所詮これは気分転換であり、気まぐれなのだ。そして、これが吾輩のお話であり、同時にまごうことなき“彼”のお話なのだ。

これは余談、というか真実どうでもいいお話なのだ。

キング・オブ・ポップと称され、世界の人々から愛されすぎたマイケル・ジャクソンというヒトがいた。そして彼は突然に急死した。彼を愛する人々の中には、彼はまだ生きていと述べるヒトがいる。馬鹿げた話と嘲笑うヒトもあれば、同情的な目をするヒトもあるが、吾輩はそうかもしれないと経験から由来する共感的同意を懐く。

街の中を歩いていると、いまでも時々すれ違うことがあるのだ。

名前持ちの脇役と、その彼女の、楽しそうに談笑する姿と

* * *

小話・其の四拾六へすくい（仮題）（前書き）

【安全圏からは、しばしばその矢を射る】

小説：其の四拾六へすくい（仮題）

《すくい（仮題）》

ある国の、ある街の、ある小規模な映画館で、悪党に母親を殺されてしまった十一歳の女の子が父親と共にガチでヒトを殺しまくる場面の描かれた映画が上映されていました。その映画は、好みが大きく分かれるところですが、なななかの高評価を得ているコメディ寄りの作風の作品でした。

「……はあ」

その映画を観た、ひとりの女性客が暗い顔をして溜め息を吐きました。

「おもしろくなかったですか？」

女性客の隣にたまたま座っていた、まだ幼さのある少年が、訊きました。

「……いいえ」

と女性客は首を横に振ってから、

「評判通り、なかなかおもしろかったわ」

その表情からして、どうにも信憑性に欠ける返答をしました。

「そうですか？ こう言ってはアレですが、おもしろいと思ってるヒトの顔には見えませんけど」

少年は遠慮がちに述べました。

「映画全体というか、映画自体は、とてもおもしろかったわ。でも「でも？」

「まだ幼い十一歳の女の子がヒトを殺しまくるのは、そうせざるおえない状況に追いやられて、そうしてしまうのは、救いがなくて、見ていて複雑で、ね」

「そうですね……。ですが、最後は、父親と、途中で出来た仲間と、笑い合える平穏な暮らしを手に入れた場面が描かれていたじゃない

ですか」

少年の意見に、女性客は納得できていないヒトの苦い表情を浮かべます。

「ひとつ、言わせていただいてもいいですか？」

少年が、至極真面目な顔をして言いました。

「なにかしら？」

「じつは、ボク」

少年は言い辛そうに口を数回、言葉なく開閉してから、

「とある国で、ヒトを殺していたんです」

「え？」

「ある日、ボクの住む村に反政府組織のヒトたちがやってきて、銃を撃って、ヒトを殺して、ボクの家族を殺して、ボクを連れ去って、ボクを革命戦士にしました。ボクは革命のために、革命の邪魔をするヒトたちを銃で撃って殺したんです。男も、女も、老人も、お腹に赤ちゃんがいるヒトも、ボクと同年くらいの子も、ボクより年下の子も、いっぱい殺したんです」

少年はそう述べて、女性客の目を見やりました。

「そ、そうなの」

女性客は血の気の引いたふうな顔をして、

「なんというか……その、大変だったんでしょねえ」

理解あるヒトの引きつった微かな笑みを浮かべ、

「このあと、約束があるから」

まるで待ち合わせの時間を気にするヒトのように、なにもない左腕を見やっつて、

「そろそろ、失礼するわね」

そそくさと手荷物をまとめ、足早に去ってゆきます。

「そうですか、それは残念。では」

少年は女性客が扉の向こう側へ消えるのを見届けてから、

「あなたが救いがなかった映画ほどの救いも……。ボクの知る現実にあるのは」

女性客が座席に残したモノへ手を伸ばし、つかみとり、

「食べ残しのポップコーン」

それを口に放り込み、

「むぐむぐむぐむぐ」

食べました。

小話・其の四拾七へ笑い話（仮題）へ（前書き）

【 “笑” と受け取るかは 】

「たも、お気づきになられたでしょう？」

「……………なにをです？」

「ヒトの“理解／解釈”に“絶対的な同一／完全な一致”なんてない、と」

小話・其の四拾八へれんしゅう(仮題)◀(前書き)

【よしゅう、ふくしゅう、明日の自分のために】

小説：其の四拾八へれんしゅう（仮題）

《れんしゅう（仮題）》

ふたりの男の姿が、とあるカフェのテラス席にありました。

ひとりの男が、新聞を手に不満そうな顔をして言いました。

「まったく、おい、見ろよこの発言。ふざけやがって！ この野郎、オレたち国民から“表現の自由”を奪っておきながら、子どものためとか、害あつて一利なしとかぬかしやがる！」

新聞には、ある“表現の規制”に関する最高責任者の発言が書かれてありました。

「なあ、おい、聞いてんのか？ お前だつて納得いかないだろ？

頭ん中じゃ、この野郎のこと八つ裂きにしたいくらい気に食わないだろ？ 聞いてんのか？ なに悟った坊さんみたいに穏やかな顔してやがんだよ」

「いやー、だつてさー、その内さー、犯罪行為を“そうぞう”しただけで逮捕されるような世の中になりそうだからさー、いまからどんなに気に食わない野郎がいても八つ裂きにしようなんて“そうぞう”しないよう練習しとこうと思つてさー」

「マジかよ……。お前、スゲエな」

「いやー、まあー、“表情／おもて”に出さないようにするだけで精一杯なんだけどさ」

小話・其の四拾九へおそるべきもの（仮題）（前書き）

【いつだって“それ”をおこなうのは、“わたくし達”】

小話：其の四拾九へおそるべきもの（仮題）

《おそるべきもの（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある街の、とある道を、“あなた”は歩いていました。“しかるべきところ”で“しかるべきこと”を済ませた、いまは帰路の途中です。

突然に。

不意打ち的に。

薄汚れた身なりをした男が、進路をふさぐようにして“あなた”の前に出現しました。“あなた”は華麗なる動作でスルーしようとしましたが、

「なあ、オレの話聞いてくれよ」

男は意思を持って、“あなた”に道をゆずろうとしません。どうにか回避しようと、“あなた”は無音無動作の攻勢に打って出ます。

しばし、静かな戦闘が繰り広げられました。

が、男には一切の隙がありませんでした。

結果的に、“あなた”はいたしかたなく耳を貸すことにしました。「こんな身なりしてるから、きつと察しているだろうけれど、オレ、なにも食べてなくてさ、もう三日以上でさ、ものすごく空腹でさ」

男は、けれどさして悲壮感もなく言っつて、

「そうしたらさ」

歡喜するように、

「核兵器よりも強力なモノ」をさ」

満面の笑みを浮かべて、

「所持することになっちゃってさ」

優越感に溺れているヒトの雰囲気で、そう述べました。

そんな話を聞いた“あなた”は、意を理解できていないヒトの表

情をします。“核兵器より強力なモノ”がいつたい“なに”であるのか。そもそも“そんなモノ”を、この“なにも持っていないふうな身なりの人物”が所持しているのか。

と、“あなた”が懐いた疑念は、じつに一方的で唐突な“まったく歓迎できない事態”によって解消されます。

男が、一本のナイフを取り出しました。

男は、不特定多数のヒトと共存するための価値観を持ち合わせていないヒトの顔をしています。

“躊躇わないナイフ”の切っ先が、“あなた”を捉えます。

小話・其の五拾へ題名は文末に（仮題）（前書き）

【節操なく、“意味／価値”を見出す】

小話：其の五拾〈題名は文末に（仮題）〉

《題名は文末に（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある寂れた公園に、ひとりの男の姿がありました。頭部にあるべき髪の毛はキレイに剃られており、代わりに『！』の形をした“のり”がひとつ後頭部に貼られてあります。身体に衣服はなく、隠す役割を果たしているのは、乳首のところにそれぞれ貼り付けられたピース・マークのシールと、股間のところにある束ねられた彼岸花だけでした。

男は走っていました。滝のように汗を流し、苦しそうに息を切らせています。多分に肌の露出した身体からは、湯気が立ち上っています。

必死の形相で、男は走っていました。しかし、男の身体は、その場からまったく移動していませんでした。

男は、ルームランナーの上で走っていました。青空の下、心地好いそよ風の流れる公園で。わざわざ“それ”を持ち込んで。

公園という場所なので、もちろん男以外にも多数のヒトの姿がありました。そしてそれもなく、その多数のヒトの目は、男を眺めています。

ともすれば、ともしなくても、とても目立つ男は、警察に通報されてもおかしくありません。ですが、そうするヒトの姿はありませんでした。通報するどころか、感慨深そうな表情をしているヒトの姿があります。

ルームランナーの前に、スケッチブックが置かれてありました。そこには、太い文字で大きくわかりやすく、“題名【 】”と書かれてありました。

空が青色から黄昏色に変貌する頃になると、眺めるヒトの姿が徐々に減ってゆきました。そして街灯に灯りがともる頃には、眺める

ヒトの姿はなくなっていました。けれど男は、まだ走っていました。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを知った眺めるヒトのひとり、ルームランナーの前にあるスケッチブックの前に空のお菓子の缶を置きました。そしてお財布をひっくり返し、ありったけの小銭をそのお菓子の缶に入れました。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを聞きつけたマスコミが、男を取材しに訪れました。そして「あなたは、なぜ走っているのですか？」と問いました。

男は黙って走り続けます。

「争いをやめない者たちへの抗議ですか？」

男は黙って走り続けます。

「平和への訴えですか？」

男は黙って走り続けます。

「貧しい子どもたちへの寄付金を集めるチャリティー・パフォーマンスですか？」

男は黙って走り続けます。

男は、その日のトップ・ニュースに取り上げられました。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを聞きつけた知識人たちが、こぞつて意を述べました。男のやっていることの意味や価値を、各々好き勝手に、さもそれが唯一無二の正解であるかのようにマスメディアを通じてうそぶきました。

流行に影響されやすい鋭敏なヒトたちが、知識人が意を述べるようなスゴイ人物を一目見ようと公園に殺到しました。

それに比例して、スケッチブックの前に置かれたお菓子の缶に投入されるお金が増えてゆきました。ついには缶から溢れてしまい、見かねた誰かが新たにいつと缶を設置しました。

しかし男は目の前で増えて溢れるお金に一切の興味を示さず、ただその場で走り続けます。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを聞きつけた感化されやすいヒトたちが、男の真似事をやりだしました。崇高な“なにか”を魂で感じたんだ、と感化されたヒトのひとりが神妙な顔をして、マスコミの取材に返答していました。

知識人たちは、新たな宗教の誕生を目の当たりにしていると述べました。

男はどんどん有名になってゆきました。それに比例して、生たまごを投げつけたりという、男のやっていることを否定する意も出てきました。

しかし男は生たまごで身体が汚れたことになど一切の関心を示さず、ただその場で走り続けます。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを聞きつけた男を知るヒトたちが、真偽を確かめるように訪れました。そして走っている男がまぎれもなく自分の知っている男だと確信を得て認識すると、各々とても驚いたふうを顔面を使って表現します。

男を知るヒトたちであると知ったマスコミが、彼ら彼女らに喰い付きました。男はいつたい何者であるのか。男はどうして走っているのか。いまの男を見て、どう思うか。

数多くのカメラや好奇の目を向けられた男を知る彼ら彼女らは、まるで有名芸能人になったかのような高揚感に囚われました。振る舞いまで、どこかそれっぽく高慢です。男がスゴイことをやる大変優秀な人物であると以前から見抜いていた、と口をそろえてかたり、さも自分がそんな男と同等の人物であるかのように言葉の裏で主張します。

しかし男は好き勝手に言葉を吐く彼ら彼女らになど一切の意識を向けず、ただその場で走り続けます。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを聞きつけた近所の子どもたちが、学校帰りの途中、見

物に訪れました。保護者や学校からは、公園の走る男・見物禁止令なるモノが発せられているのですが、それで子どもの好奇心を抑制することはできないようです。

有名な芸術作品を鑑賞するような顔をしている大人たちの間から、子どもたちは話題の公園の走る男を見やりました。そして、

「マジかよ……」

子どもたちはいちように落胆したふうに、

「……ぜんぜん、おもしろくないね」

感想を述べました。それから周囲の大人たちの顔を見やっつて、走る男を見やっつて、

「くだらない……」

じつにきつぱりと批評します。

それを聞いた周囲の大人たちは、いちように自分より下の“わかっつてない”存在を見やるような目で子どもたちを見やりました。

それを聞いたルームランナーの上で走る男は、その場で走り続けた脚を、止めました。

あまりにも不意の出来事だったので、数泊遅れてざわめきが起こりました。一部の大人たちは単純に驚き、一部の大人たちは責めるような視線を子どもたちに向けました。

ついに走るのを止めた男は、周囲の反応に一切の感慨を示さず、けれど歓喜するヒトの笑みを満面に浮かべて、

「ありがとう！」

感謝の言葉を大きく発しながら、批評した子どもに抱きつきます。抱きつかれた子どもは、心の底からイヤそうな顔をして、拘束から逃れようともがきます。

ハゲ頭の後頭部に『！』の形をした“のり”が貼られ、乳首のところにそれぞれ貼り付けられたピース・マークのシールと、股間のところにある束ねられた彼岸花だけという、ほぼ全裸の姿をした男が。滝のように汗を流し、苦しそうに息を切らせ、多分に肌の露出した身体から湯気を立ち上らせている男が。イヤがる子どもに抱き

ついている絵図らが、そこにありました。

大人たちはどうするでもなくその光景を眺め、抱きつかれた子どもと共にこの場に來た子どものひとり慌てたふうに携帯電話を取り出して“しかるべきところ”へ電話しました。

権力の象徴の制服に身を包んだ方々が、権力の象徴たる彩色のされた自動車を駆り、子どもからの通報を受けて、迅速に参上しました。

数多くのヒトの目があるので、とりあえず詳しい話は“しかるべきところ”でということになり、走っていた男は、権力の象徴たる彩色のされた自動車に押し込まれました。その間も、それ以後も、男は歓喜したままでした。

男に感化されて真似事やっていたヒトたちが、まるで信仰の対象を失ったヒトのような表情を浮かべて、男に乗せた自動車の去りゆく後姿を眺めていました。

奇妙な熱気と賑やかさのあつた公園内に、妙な静けさが生じました。

男が走っていたルームランナーの前に置かれていたスケッチブックが、不意と倒れました。

スケッチブックの前に置かれていたお金の溢れている缶が、倒れてきたスケッチブックに、不意と小突かれました。

不意と衝撃を受けたお金の溢れている缶から、お金がこぼれました。

妙な静けさのある公園内に、お金の落ちる音が明瞭に響き渡りました。

公園内にある数多くの耳に、その音は明瞭に響き渡りました。

公園内にある数多くの目が、無抵抗主義者のごとく置かれてある溢れるお金を見やりました。

公園内にある数多くの利巧な獣の目が、愛想笑いを浮かべて、互いの間合いをはかります。

とある時代の、とある国の、とある街の、とある人通りの少ない路地裏に、ひとりの男の姿がありました。愛想の悪い顔をして、身には上下揃いの黒のジャージを着ています。いまは、コンビニで缶ビールを買った帰路の途中です。

男の進路を作為的にさえぎるように、“なにか”が落ちてきました。男は「チツ、あぶねえーなっ！クソ！」と黄昏色の空に向かって悪態と吐き、それからなにが落ちてきたのか気になって、道ばたにある“なにか”をよくよく目を凝らして見やります。

そこには、一冊の黒いノートがありました。外装が真っ黒という以外は、いわゆる大学ノートのそれと同じです。

男は、空から黒いノートが落ちてきた不自然さに、深い疑念を懐きました。　　が、考えたところでなにがわかるわけではないので、とりあえずその黒いノートを手にとってみます。当然のように、ページを開きます。表紙の裏面も真っ黒で、そこには白色で文字が書かれてありました。

顔を思い浮かべながら名前を記入すると、その人物の命を奪うことのできる、あの有名な黒いノートか、これは。　　と、男は直感的に思いましたが、白色で書かれてあることをよくよく読んでみると、まったくそうではないことがわかりました。

これは、“誰か”の願いをひとつだけ叶えるノートです。叶えられる願いは、このノートの使用者につき、ひとつだけです。願いは、どんなことでも可能です。下記、このノートの使用方法。願いを叶える対象となる人物の氏名・年齢・生年月日を記入してください。その人物の身に起こってほしい願いを記入してください。このノートを使用する、あなたの氏名・年齢・生年月日を記入してください。このノートを使用する本人照明として、あなたの血判を押してください。このノートの使用方法是以上です。

そんなことが、そこには書かれてありました。

「は、そりゃあいい」

男は、まったく信じていませんでしたが、お遊び的に黒いノートを持ち帰ることにしました。

そして。

帰宅した男は、まずなにより優先して買ってきた缶ビールに口をつきました。それから冷蔵庫をあさり、きゅうりの浅漬けとキムチというなかなかよろしい感じのお供を酒の席に迎え入れます。ビールを嗜む勢いが、ぐぐつと増します。

六本目を飲み干して、なんとなく愉快的な気分になってきた男は、「ん？ なんだこのノート？」

ふと気まぐれ的に、ほっぼられてあつた黒いノートに意識を向けました。どうやら、自分で拾ってきたことは、すっかり忘れてしまっているようです。

男は愉快的気分には導された好奇心から、黒いノートを手にしました。当然のように、ページを開きます。

「んー？ なになにに？ 願いを叶えるなあ？ ずいぶんとまた気前のいいことぬかしてくれるなあ、おい！」

酔っ払いのノリで言いながら、男はボールペンを取り出して、黒いノートに必要な事項を記入してゆきます。

「ああん？ 血判なあ？ おもしれえこと要求してくるなあ、おい！」

愉快的気分によって冷静な判断力が低下しているのか、男は台所から包丁を持つてくると、なんの迷いもなく親指の腹を浅く切りました。当たり前のように出血します。

「ほらよっ」

と掛け声を発しながら、男は出血した親指を、ぐいと必要事項を記入し終えた黒いノートに押し付けました。そして血によってべたりと紙面に密着した親指を離すと、そこには指紋の形がよくわかる

血色の印がありました。

「……………」
男は客人の来訪を歓迎するヒトのように“それ”を待ちましたが、
……………なんにも起こらねえじゃねえかこのク
ソが！」

結局、男が願った“それ”が起こることはありませんでした。男は悪態を吐いて黒いノートをぶん投げると、それと一緒に意識までぶん投げてしまったらしく、電池の切れたおもちゃのようにそのままガツクリと寝てしまいました。いびきが室内に轟き、来るべき静寂の訪れを阻害します。

翌日。

扉と一体化した郵便ポストに“なにか”が投函された音と、バイクの去りゆくエンジン音に、男は起床をうながされました。薄く目を開くと、カーテンの隙間から射す朝の光に目を焼かれ、

「っ！」

反射的に手をやって影を作り、

「クソ、もう朝か……………」

どうにもスッキリしない目覚めに苛立ちつつ、あくびを噛み殺して、だるい身体を叱咤し、起き上がります。そして朝の習慣として、緩やかな動きで新聞を取りに向かいます。

新聞を持って戻る途中、男は台所に立ち寄って水を二杯ぐびぐびと飲んでのどを潤しました。

戻り、腰を下して。男は新聞を広げました。不景気な顔をして、不景気な言葉の躍る紙面を見やります。

「ん？」

あるページを開き、男の思考が一時停止しました。

「……………どゆこと？」

そこには、この国で一等賞金が最高額の“くじ”が一枚、潰した

米粒で貼り付けられてありました。その“くじ”の横には、この国で発行されている“くじ”の当選情報が書かれてあります。

「……まさか、な」

謙虚さのような理性で否定しつつ、男は貼られてある“くじ”と当選情報を見比べました。まったく根拠のない期待に由来する下品な笑みが、その顔に滲み出ています。

「おっと……」

その瞬間、男の思考が完全に停止しました。

そこにある“くじ”と、

そこにある当選情報が、

完全に一致していました。

一等のところまで。

その瞬間から、男の生活は一変しました。

男は成功者がステータスとして住む一等地にある高級高層マンションに居を移し、ブランド物の衣服に身を包み、実用性のない豪華な腕時計をして、希少で高級な酒を水道の水がごとく胃に流し込み、豪華で高価な食事をコンビニ食品がごとく胃に詰め込み、そして知り合いのヒトたちにお金のある贅沢な苦惱をとつとつと語って聞かせました。

そして時は流動し、一ヶ月後。

男が大型の最新テレビで映画を鑑賞していると、インターフォンが鳴りました。懐が潤っているヒトが多く住むマンションなので、外部の者がエントランスホールに入るためには、住人に許諾を貰って扉を開けてもらわなければならず、エレベーターも許諾がないと使用できない仕様なのです。

「ん？ 誰だ？」

男は懐が潤っているヒトの余裕ある寛容な態度でテレビのリモコンを操作し、画面を分割に切り替えました。右には無音で映画が流れ、左には黒いスーツ姿の男が映し出されます。テレビとインターフォンが接続されており、テレビのリモコンにマイクが内蔵されているので、座り心地のよい高級ソファから重い腰を上げることなく呼び出しに応じることができるのです。

「はい、はい、どちら様ですか？」

「あ、どうもー。わたくし」

画面の中の黒スーツは、

「あなた様から、契約に対するしかるべき“返済”を受け取りに参った者ですー」

よく訓練された営業スマイルを浮かべて、述べました。道化師じみた仄暗い得体の知れなさが画面から滲み、伝わってきます。

「契約？ 返済？ なんのことだ。そんな覚え、こつちには一切ないぞ」

「おやおやー、まさかしらばっくれて踏み倒すおつもりですか？」

「踏み倒すもなにも、憶えがないと言ってるだろう！」

男は不快感を隠すことなく言ってから、はたと状況を見抜いたヒトの表情になり、

「いや、なるほどなるほど。この悪徳業者め、因縁をつけて金を奪い取るうというこんたんだな！」

ズバリ指摘しました。

が、指を向けたテレビ画面の左に黒スーツの姿はなく。

「まったく、ずいぶんとまた失礼なことを言ってくれますねー」

音声は、テレビのスピーカーからではなく、

「わたくしは、正当に交わされた契約に対する“返済”を受け取りに参ったというのに」

男の左耳のすぐ隣から聞こえてきました。

「なっ！」

突然の理解し難い事態に、男は冷や水を浴びせられたような怖気

を感じて、

「なななぜっ！」

けれど腰が抜けてしまい、高級ソファアの上から動けず、

「どどどうしてここにっ！」

気力を決死総動員して、その言葉を投げつけるのがやっとでした。

「ですから、先ほどから申しておりますとおり」

黒スーツは忍耐力のあるヒトの営業スマイルを浮かべて、

「わたくしは、正当に交わされた契約に対する“返済”を受け取りに参ったのです」

高級ソファアに座して動けない男の両肩に、そつと手を置きます。

「ひいつ！　だ、だからさっきから言ってるだろう、こっちにそんな憶えないんだ」

男は身をすくませながらも、こんなことに至る記憶が本当にならないことを訴えました。

「ひ、人違いじゃないのか？」

「いいえ、確実にあなた様です」

黒スーツは言い聞かせる柔らかい口調で言い、それから手品のような一瞬さで、すつと男の目の前に一冊の黒いノートを出現させます。

「これに、見覚えがございますでしょうか？」

「こんなの」

男は、脳みそではまったく心当たりのない“ドキリ”を、

「どこにでも売っている、ただの、そうただの、ノートじゃないか」

胸の内を“ドキリ”と懐きながらも、

「これが」

口先に限って、強気にチャレンジャー精神を發揮しました。

「これが、なんだと言っただあ」

発音は内心に忠実で、尻つぼみにか細く消えてゆきました。

黒スーツは余裕あるヒトの営業スマイルを浮かべたまま、

「では」

と、黒いノートを開いて、

「ごちらは、記憶にございますでしょうか？」

突きつけるように、文字の書き込まれたページを男の視界に置きます。

「だからっ」

男は反射的に“知らぬ”と言おうとして、

「っ！……………これは……………まさか」

しかし視界に置かれてある“それ”には、どうしようもなく、憶えがありました。

「おお！ 思い出していただけましたか」

黒スーツは、やっと話を進められることに「ほっ」と微笑を浮かべてから、

「では」

と、事務的な作業を処理するヒトの顔になります。

「ここに書かれてあります、あなた様のあなた様に対する“いまより金持ちになる”という願いは叶えさせていただきましたので、契約の取り決めに基づきまして、“いまより金持ちになる”という願いと相応の“返済”を、お納めください」

「は？ ちょっと待って待って」

「はい？ ありがとうございます？」

「確かに、確かにあの黒いノートに“いまより金持ちになる”と書いた。そこは潔く認めよう。だが、だがしかし、だ！ あの黒いノートの使用方法に、“返済”なんて言葉、一文字も書いてなかっただろ！ これは明らかにそっちの不正請求だ！」

男は一変して勝利を確信したヒトの表情になり、そう言い切りました。

「いいえ」

黒スーツは、想定範囲内の事態を冷静に処理する熟練者の営業スマイルを浮かべて、

「“返済”に関することも、しっかりと記載させていただいており

ます」

黒いノートの裏表紙の裏面を開いて、男に提示します。そこには、表紙の裏面と同様に、白色で文字が書かれてありました。

「こんなの、気づくわけないだろ！ 不正だ！ 不当だ！」

男は保身するヒトの勢いで抗議しました。

「と、申されましたも。とくに小さな文字を使用しているわけでもなく、黒地に白字という読みやすい配色でありますし、こちらと致しましては、課せられた責務はきちんと果たしております。不正だ、不当だ、と責められるゆわれはございません」

黒スーツは、冷気の滲む不動さで言葉を返し、

「そもそも、一度交わされた契約は、いかなる理由があろうとも、一切の例外なく破棄することができません。これは一方的なモノではなく、お互いに“そう”なのです」

余地も猶予も容赦もないという、いまここに横たわる揺るぎない事実を淡々と告げました。

「……………参考までに」

男は迷路からの脱出路を模索するネズミのような慎重さで、口から言葉を発しました。

「これはあくまでも参考までに、だ。決して承知したわけではないぞ。いいな」

「はい。参考までに、ですね」

「そうだ。参考までに、だ。で、訊くが、その願いと相応の“返済”というのは、いったいどういうモノなんだ？ なにを“返済”しろと要求しているんだ？」

男も多少は鋭さのある脳みそを持ち合わせていたので、“金持ち”にした相手から“金”を要求することはないだろうと考え至っており、そしてだからこそ、いったい“なに”を“返済”として求められているのか、想像できない怖気を感じていました。

「願いと相応の“モノ”である、としかお答えすることができません」

黒スーツは、苦慮するヒトの表情をして言いました。

その曖昧さに、

「なんなんだよ！」

男は“形容し難いモノ”が足元からヌラヌラと這い上がってくるような不安を覚え、

「なんだよ、おい！ ハッキリしろよ！」

追い詰められたネズミがネコを噛むような勢いで、

「臓器かつ？ え、臓器なのか？ 臓器が目当てなのか？」

と、大量の唾液と共に、言葉を口から吐き出しました。

黒スーツは首を横に振り、上品な静かさで“その可能性”を否定します。

「まさか」

男は息をのみ、

「“いのち”か？」

ウソ偽りを渴望するヒトの眼をして、訊きました。

黒スーツは、アメリカン・コメディイを見て義務的に笑うヒトのように乾いた音声を口から出しました。

男は、不安そうに唾液を嚥下します。

「いただけるのでしたら」

と黒スーツが口にした瞬間、男はこの世の終末を悟った賢者の顔をしてうつむきました。

「いただきたいところですが、“相応の”という決まりに忠実であることが、こちらの誇るべき流儀ですから、おや？ どうされたのですか？ 熱心に床を凝視なさって」

「へ？ あ、いや……」

「“いのち”と“あんなモノ”が相応であるわけがないじゃないですかー。これであなた様の“いのち”を“返済”としていただいてしまったら、あまりにも過請求で、わたくしが同志に肅清されてしまいますよー」

黒スーツは、親しいヒトのくだらない冗談に応じる碎けた姿勢で

述べました。

「じゃあ！　じゃあなんだってんだ！」

男は苦惱することに胸の内が参ってしまった悲痛さの滲む音声で、なにを“返済”しろって言うんだよお」

赦しを請うふうに言葉を吐き出しました。

「んー、ですから、“相応の”としか言い表しようがないのですよー。決まった“カタチ／名称”があるモノとは限りませんので」という黒スーツの言葉に、男は悲愴な表情をします。

「百聞は一見にしかずと申しますし」

黒スーツが、“やっと”というふうな少々の疲労と少々の喜びがある顔で発言し、

「では、さくつと試ってみましょうか」

パチン、と指を鳴らしました。

「へ？」

部屋の電灯を消すように、

世界が暗転しました。

男が肌感じていた辺りの空気感が豹変しました。嗅覚にくるモノも、自室の“それ”とはまったく異なります。

暗転から、急速に光が再来しました。

「っ！」

男の“視覚／脳みそ”が“眼のくらみ／思考の停止”から復帰し、“いまそこにある風景／いまここにある現状”をざっくりと把握するまでには、しばしの時を消費しました。

「……………どゆこと？」

そこには、まったく見憶えのない公園の風景がありました。他者の姿は、いまのところ見あたりません。

「あなた様には」

黒スーツはその表情に一切の驚きの色なく、冷然と当然のことの

ように“これから男がおこなわなければならないこと／返済”について説明します。

いまから“返済”としての“おこない”として、この公園でなぜかルームランナーの上で走らなければならないこと。そして七日以内に、“金持ちになる”という願いに対する“返済”としてのその“おこない”の“本性”を誰かに言い当ててもらわなければならないこと。もし仮に言い当ててもらえなかった場合、期限を一日過ぎる毎に寿命の半分が利子として徴収されてしまうこと。“返済”が終了するまでは、肉体が疲労を訴えることはなく、食欲・睡眠欲・性欲・排泄衝動とも無縁でいられること。 などなど。

男は戸惑いながらも話を聞き、そしてその話の流れから、今現在の自分の身なりに初めて意識が向きました。さきほどまで確かに着ていたブランド物の衣服がまったく見あたらず、いま確かに見えるのは、なぜだかよくよく見えずぎている自らの肌色と、なぜだか胸部にある円形の黄色がふたつと、なぜだか股間にある彼岸花の色だけです。

「……………どゆこと？」

到底、理解できぬが起こり、男の脳みそは焼き切れようとしていました。

「お、お前はいったい何者なんだよお」

現状の元凶であろう黒スーツに対して、男は底知れぬ怖気を覚えました。

「自分が何者であるのか。果たしてその問いに正しく答えられる存在はあるのでしょうか？」

黒スーツは、男の混乱具合を正しく認識していましたが、わざわざ“それ”を解消するための助け舟を出すということはせず、

「ああ、それから」

と、ただ事務的な口調で述べます。

「あなた様がこれからおこなう“返済”に関しましては、一切の例外なく他言禁止でございますから、ご留意くださいませ。禁を破つ

た場合に関しましては、まことに心苦しいところではございますが、あなた様の“生命／いのち”の保証が一切なくなります」

「え、え？」

男は混乱したまま、けれど身体が“そうしなければならぬ”と勝手に動いてルームランナーの上に乗りました。そして男の脳みそを無視して、男の手は勝手にルームランナーを起動させ、男の脚は勝手に走り始めます。

黒スーツは“ようやく”といったふうには息、吐いてから、つかの間の達成感を味わう表情を浮かべます。

思い出したふうには、黒スーツはパチンと指を鳴らして手品的にペンとスケッチブックを出現させました。ページを開き、流れる動作で“なにか”を書き込みます。そして“それ”を、男が走るルームランナーの前に置きます。

「んー、これはなかなか」

黒スーツは少し距離を作って遠目から“走る男”を見やり、言いました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある寂れた公園に、“なにか”に熱狂する人々の群れる姿がありました。そしてその脇に、なぜかルームランナーがぼつりと置かれてありました。

「不法投棄はいけないことだから、そういたしかたなく、“これは私が処理しましょう”

誰に対するモノなのか定まりのない言葉を発しながら、誰かが“それ”を持ち去りました。

しばしの時を経て。

公園からヒトの影が消え去りました。もうこの場に居る“価値／

意味”はないと吐き捨てるように、缶やペットボトルや吸い殻やスケッチブックなどのゴミがちらほら置き土産されています。

いままで通りの“寂れ”を取り戻した公園に、どこからともなくヒトの影のような存在が現れました。黒いスーツを着たヒトのような姿をしています。

黒スーツは、足元にあったスケッチブックを拾い上げました。それには、“題名”【】と書かれてありました。パチン、と指を鳴らして手品的にペンを出現させます。流れる動作で“なか”を書き込みます。そして書き終えると、そのスケッチブックをゴミ箱へ捨てました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある寂れた公園のゴミ箱に、スケッチブックが捨てられました。

題名【くだらない】

と書かれたスケッチブックが、
捨てられてありました。

小話・其の五拾巻へさかな（仮題）（前書き）

【美食家は“美味”を欲す】

小話：其の五拾巻へさかな（仮題）

《さかな（仮題）》

ひとりの男が、ギターをかき鳴らしていました。整った見てくれをしていたので、ギターを鳴らすその姿は、なかなか栄えています。そんな男の前に、ひとりの女性の姿がありました。度数の強い酒を何杯も飲んだあのような表情をしています。

そして。

男はギターを鳴らし終えました。全力をそそいでいたので、全身から汗が噴出していますが、煌めく“それ”は、この場においてはカツコよさを演出する要因でしかありませんでした。

「キミにい！ 言いたいことがあるう！」

男が微妙にイントネーションのずれた言い回しで、目の前の女性に言葉を投げました。

女性は、なにかを期待する煌めく眼差しで肯き、それを受け取ります。

「キミもお！ このギターのようにい！ オレのゴッドフィンガーに鳴らされてみないかあああ、いっ！」

終止符を打つように、男は「いっ！」の最後にギターを鳴らしませす。

女性は、頭から冷や水を浴びせられたヒトのように、煌めきの失せた醒めた眼差しで男を見やり、

「……………」

言葉もなく去ってゆきました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある町の、とある小汚くて狭い居

酒屋に、店主を除いてふたりの男の姿がありました。整った見てくれをしている男と、整っているとは言い難い見てくれをした男です。「ちくしょおおお！」

つい数時間前までギターをかき鳴らしていた整った見てくれの男が、叫びと共に酒をかつ喰らいました。速やかに空になったジョッキを、胸の内の代弁者としてガツンとテールブルに叩きつけます。

「どおおおしてっ！ どおして、どいつもこいつも女はオレに振り向かないんだあ！ ちくしょおおお！」

と嘆く男の“本日の出来事”を聞いた、整っているとは言い難い見てくれの男は、

「まあ、まあ、ほら、飲もう飲もう」

と、なだめるように肩をポンと叩きつつ、どうして彼が女性に振り向かれないのか、だいぶ前から容易に心当たりがついていました。場の雰囲気に対する“言葉／＼ユーモア”の選択を間違えている。しかし、あえて教えることはしていません。

「くそおおお！」

と叫び一発、また酒をかつ喰らう男を見やりながら、

「お前と一緒だと」

心当たりを持つ男は、

「じつに“うまい”酒が飲めるよ」

そよ風のような微々たる音声で述べ

最高級の酒の肴を嗜む美食家のような上品さで、安価な蒸留酒をなめました。

小話・其の五拾弐へ毎日と突然（仮題）（前書き）

【意外と大切なモノだったり】

小説：其の五拾式（毎日と突然（仮題））

《毎日と突然（仮題）》

毎朝、私は時間厳守で行動します。朝六時きっかりに起床し、その五分以内にお手洗いへ向かい、それから五分以内に手と顔を洗い、朝六時半までには朝食を食し、軽くシャワーを浴びてから、朝七時半までに家を出ます。

そして。

休日を除く毎朝、朝八時二分前、私はその横断歩道で、前方からやってくる“迷惑な事態”とすれ違います。

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー・マイスー」

カッチリとした黒のタキシードに身を包み、頭には洒落た黒のシルクハットをかぶり、手にはステッキの代わりにビニール傘を持ち、背筋をしゃんと伸ばした、いかにも紳士然としているナイス枯れ具合の老いた男性。見てくれだけなら、そつとずつと“愛でていなくなる／眺めていたくなる”ほど申し分なくよろしいかんじの彼が、哀しいかな毎朝の“迷惑な事態”の元凶でした。

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー・マイスー」

意味のある言語なのか、意味のないただの音なのか、わからないし知る気もないのですが、

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー・マイスー」

この見てくれだけナイス老紳士は、

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー・マイスー」

と、周囲に対する配慮の一切ない大きな音声を口から発しながら、

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー・マイスー」

毎度「マイスー」と発声し終わると同時に、手にあるビニール傘をぐるりんと一回転させるのです。

不幸中の幸いにしてヒトの往来が激しい横断歩道ではないので、

最悪の事態が発生してしまったことはありません。　　が、大声だけならまだしも、ビニール傘の一回転は迷惑なうえにとても危険な行為です。やめていただきたい。

そう思いつつも、私を含めたこの時間この横断歩道を利用する“誰も”が、いままで彼に対して注意を述べたことはありません。彼が近寄りがたい雰囲気的人物であること、朝の忙しい時間ですからそんなことをしている余裕がないこと、なにより“誰か”が注意を述べてくれるだろうという“誰か”に対する根拠なき信頼感がありますから、どうにも“誰か”に対する謙虚さのようなモノが生じてしまい、“あえて自分が述べること”が躊躇われるのです。

雨の日も、雷の日も、雪の日も、暑い日も、寒い日も、彼は寸ぶんの狂いなく“迷惑な事態”の元凶をしていたので、もはや私は諦めというか無関心の境地に移行していて、もう“それ”が当たり前とを感じるくらいになっていました。なので本日も、迷惑だなあという意を毎朝の恒例行事的に懐きつつ、毎朝と同じように一回転するビニール傘のない彼の右側を通行しました。沈黙と傘は回転させるものではないことを覚えてくれたら、本当にとってもとても嬉しい“おじさま”なのに、じつにもつたいない、　と、しみじみ思いながら、すれ違いました。

翌日。朝八時二分前。いつもの横断歩道。

なんら脈絡もなく突然に、じつにあっけなくあっさり、毎朝恒例の“迷惑な事態”は終了しました。前方からやってくるはずの見てくださいナイス老紳士の姿が、どこにもありません。

私を含めたこの時間この横断歩道を利用する“誰も”が、「え？」という不意打ちを受けたような気分になり、“誰も”が誰にでもなく「どうということなの？」と問うような薄い愛想笑みを浮かべました。もちろん、答えが返ってくることはありませんでしたが。

せいせいしたような気分を味わえたのは、けれどその最初の日だ

けでした。どこかで翌日になればまた毎朝と同じに戻ると信じていたから、一時の違いをよろしいふうに感じられたのでしよう。

不意打ちのような事態から一夜明け、翌朝。朝八時二分前。いつもの横断歩道。

「ノン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー」

という迷惑な音声を耳にすることも、一回転するビニール傘を避けて通行することもありませんでした。見てくれだけナイス老紳士の姿は、影も形も気配も兆しすらありませんでした。

その翌朝も、そのまた翌朝も、そのまたまた翌朝も

いつの間にか、彼と再会することを切望している自分が存在することに気がつきました。やめてほしいと変化を求めているのに、“そう求めていられる変わりない毎朝の風景”を求めている自分が存在しているのです。確信を持って、変わりない毎朝を求めている自分がウソ偽りなく本心であるとわかるまでには、さして時を消費することはありませんでした。

けれど。

いくら時を消費しても、彼と再会することは叶いませんでした。

そして気がついたときには、本当の本当に不本意ながら、ついに私も他者から“老”と称される存在になっていました。

そうなってやつと、あの騒々しい“迷惑な”毎朝を味わうことはもう二度と出来ないのだと意識しました。そうしたら、とたんにどうしようもない喪失感に襲われました。それは“会話できることが当たり前”だと確信していた家族を亡くしたときの“どうしようもない感”と、不思議なことにとても似ていました。

脈絡もなく突然に。

私は“そのこと”を思いつきました。そして一切の迷いなく、そ

の思いつきを実行に移しました。

懐かしいあの頃のように。

時刻は、朝八時二分前。

場所は、あの横断歩道。

カッチリとした黒の衣服に身を包み、

頭には洒落た黒の帽子をかぶり、

手にはステッキの代わりにビニール傘を持ち、

背筋をしゃんと伸ばして、

いかにも“それっぽい”雰囲気を感じながら、

意味のある言語なのか、意味のないただの音なのか、わからない
しもう知れない“それ”を、

周囲に対する配慮の一切ない大きな音声で口から発して、
手にあるビニール傘をぐるりと一回転させるのです。

「ソーン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー」

小話・其の五拾参へわるいこと(仮題)く(前書き)

【巡り巡って“誰の”ため?】

小説：其の五拾参へわるいこと（仮題）

《わるいこと（仮題）》

とある時代の、とある国を、ひとりの旅人が訪れました。頭に麦わらの帽子をかぶり、その下に耳と首の後ろを覆い隠すようにして白のタオルをはさんでいます。灰色の袖の長いシャツを着て、濃紺のジーンズをはき、足には黒のアサルトブーツがありました。背に、あまり大きなない深緑色のリュックがあり、それを包み込むようにして黒のフード付きロングコートが、伸縮性のあるロープでぐるぐる巻きにされて留めてあります。それぞれども“使い込まれた味”という銘の汚さがありました。

「……………」
旅人は、目の前に広がるウソ偽りのない現状を認識して言葉を失いました。訪れた国は、国としての体裁を保っていないであろうほどに荒れ果てていました。家屋や商店が存在していたであろう街と思われる場所は、廃品置き場より混沌とした様相です。

「……………あの」
どうしたものかと歩んでいた旅人の視界に、“なにか”を探すように家屋や商店だったであろう場所をあさっているひとりの男性の姿が映りました。かなりの長時間、身体を洗っていないことがわかる見てくれをしています。

「ん？ あんたは……………見たとこ、この国の者じゃあないな？」
男性はあさる手を休めて、とてつもない“疲労／心労”の滲む顔に、生来の人懐っこさが垣間見える笑みを浮かべて訊きました。

旅人は自分が旅をしていることを話しました。そして、この国の現状が、話に聞いていたモノとだいぶ異なっていて驚いたことも伝えます。

「ああ、そりゃあ、独自の文化で情緒溢れる楽園って謳い文句を聞

いて来てみたら、こんなことになってるんだから、まあなんて言うか、旅人さんには申し訳ないなあ……」

男性は“どうしようもないこと”に直面して困り果ててしまったヒトの微笑みを浮かべて、それでも旅人に説明してくれます。

数ヶ月前に、史上最大の自然災害がこの国を襲ったこと。数ヶ月も経過しているのに、被害が甚大過ぎてまったく復旧が追いついていないこと。清潔な飲み水を確保するのが非常に困難なこと。どうにか食べ物だけは、他国の人道支援組織が定期的にプロペラ飛行機から投下していつてくれること。排泄物などがどうしようもなく、医療機関も機能していないから、衛生環境が悪化していること。“政府／行政／軍隊／国家”が正常に機能していないから、治安がとも悪化していること。

「悪い連中に襲われるまえに出国することをオススメするよ、旅人さん」

男性は至極真摯に出国を推奨しました。

旅人は、いちおう護身用として半自動拳銃を所持していることを伝えてから、

「 ですが、滞在しても皆さんの邪魔になってしまうだけでしょ
うから、夜が明けたら早めに出国します」

そう告げました。

「ああ、それがいい」

男性も強く同意しました。

旅人は一夜を過ごすためのテントが設置できる最適な場所を探して、“直視することが躊躇われる場面／瓦礫に押し潰されて絶命しているヒトがどうしようもなく放置されている場面”もすっかりと見やりながら歩みを進めます。

「お願い、お願いよ！ 助けて！」

ひとりの女性が心の奥底からの叫びを口から吐き出して、旅人を呼び求めました。

旅人も当たり前のようにひとりのヒトですから、助けを求められれば駆けつけます。そこには、叫びを上げた女性と、その側らに横たわる男性の姿がありました。

「お願い、お願いよ！ 夫を、私の夫を助けてっ！」

女性は側らに横たわる男性にすがりつきながら、容赦のない悲痛さのある音声を、容赦なく旅人にぶつけます。

しかし。

旅人は、女性の夫であるらしい男性へ助けの手を差し伸べることはできませんでした。旅人が助けの手を差し伸べられるのは、どんなに尽力しても“生者／生存しているヒト”に限られてしまうからです。

「残念ですが」

旅人は努めて淡々と事実を告げました。

「ウソ吐きっ！ いえ、そう、お金、お金が欲しいのね。でも、いま手元にはないの。でも待って！ 助けてくれたら、絶対に絶対に言い値を支払うわ。だから、お願いよ、このヒトを、夫を、助けて」

女性は根気強く説得するヒトの顔をして言いました。

「残念ですが」

旅人は努めて淡々と事実を告げました。

「ウソ吐きっ！ いえ、そう、そうなのね。身体が目当てなのね。わかったわ。それで助けてくれるなら、好きにして。だから、お願いよ、このヒトを、夫を、助けて」

女性は切望あるヒトの顔をして懇願しました。

「残念ですが」

旅人は努めて淡々と事実を告げました。

「ウソ吐きっ！ なによっ！ なにが欲しいのよっ！ 教えなさいよっ！ 教えて、ください……。あげるから……。あなたの欲しいモノをあげるから……。だから、お願いよ」

「残念ですが」

旅人は努めて淡々と事実を告げました。

「……………」

女性は地べたを凝視したまま、口を開きませんでした。

旅人は寢覚めが少々悪くなることを承知しつつ、その場から立ち去ることにしました。親身になって話を聞いてあげること、なにか救いになるような話をしてあげること、旅人は旅人自身の心を保持するために意を持って選択しませんでした。

翌朝。

旅人は出国するために、来た道らしきところを足で踏みながら先へ歩み進みました。

そして。

来た道らしきところを進み、それが正しく来た道らしきところだったかゆえに、旅人はそこで会ったヒトたちと再会することになりました。

限りなく同一に近い既視感を覚えるカタチで、彼女と彼はそこにありました。

「おや、旅人さん。出国するのかい？」

声の聞こえたほうを見やると、そこには旅人がこの国で最初に出会った男性の姿がありました。

旅人は出国することを伝えました。そして、ふと、彼女と彼のほうへ視線を流します。

男性は誘われるようにして旅人の視線の先を見やり、それから、

「ああ、彼女か……………」

速やかに自らの繊細な部分を保持するために視線を外して、地べたを凝視します。

「どれくらいだろうな…………、気づいたときにはもう“ああいう状態”だったんだ。飲まず食わずですと“ああいう状態”だから、そろそろ強引にでもどうにかしないと、彼女自身の生命に関わってく

るんだが。最初はまあ、みんなどうにかしようとして手を差し伸べたんだが、彼女自身がその手を払いのけてしまって、みんなも自分のことがあるから、ついには、ね」

「そうですか」

旅人は、男性の話を淡々と聞き受けました。それからしばし沈黙の間が生じ、旅人は旅人自身のために“あること”を思いつき、“それ”を実行することにしました。

「彼女の旦那さんは、極悪非道の悪人から彼女を守って死んでしまつたんです」

旅人が言いました。

「は？」

男性が理解が追いついていないヒトの顔をして、旅人を見やりま

す。旅人は男性に対して一切の説明もなく、歩を進めました。

「お願い、お願いよ！ 助けて！」

女性は心の奥底からの叫びを口から吐き出して、旅人を呼び求めました。昨日の旅人に関することをまったく記憶していないような初対面のヒトに接するふうがあります。

「お願い、お願いよ！ 夫を、私の夫を助けてっ！」

女性は側らに横たわる男性にすがりつきながら、容赦のない悲痛さのある音声を、容赦なく旅人にぶつけます。

「なるほど。確かに、あなたの旦那さんはまだ息をしているようですね。適切な処置を施せば、きっと助かるでしょう」

旅人はそこにある事実を淡々と告げる口調で述べました。

やっとわかつてくれるヒトが現れた、と女性は救世主を見やるような眼差しを旅人へ向けます。

「しかし残念です」

旅人は背腰から護身用の半自動拳銃を引き抜き、

「私は医療関係者でも救世主でもなく、極悪非道な悪人なのです」と告げて、女性の隣で横たわる息なき男性に銃口を向けます。

そして、

「あなたの大切なヒトは確かに、生きています。けれど、いまこの瞬間」

旅人は手にある半自動拳銃の引き金を迷いなく絞りました。

乾いた発破音がひとつ、鳴りました。

空の葉莢がひとつ、地べたに落ちました。

「あなたを殺そうとした極悪非道な私から、勇敢にも身を挺してあなたを守り、私に殺されてしまいました」

小話・其の五拾四へ信頼の証(仮題)へ(前書き)

【“空論”と“信頼”は】

小説：其の五拾四（信頼の証（仮題））

《信頼の証（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある町の、河原に面した喫茶店のテラス席に、ふたりの男の姿がありました。

「なあ」

ひとりの男が言いました。

「なんだ？」

もうひとりの男が応じました。

「いまオレたちが暮らしているこの国は、銃火器の所持携行が法律で原則禁止されているよな？」

「そうだな。おかげで、どっかの国みたいに銃火器を使用した犯罪もほとんどない。まあ、銃火器を所持携行することは国民が有する権利だつていうどっかの国の銃火器に関する団体からは、警察権力が変態的に強力なオカシナ国って言われてるらしいけど」

「でもさ、犯罪がないわけじゃあないよな」

「そうだな。銃火器を使用した犯罪はほとんどないけれど、刃物を使用したたりした犯罪は、まああるよな」

「そこで、だ。オレはひらめいたわけだよ」

「……なにを？」

「最強の防犯を、さ」

「ほう。どんな？」

「ふふふふつ。教えてやるから、いまからオレの家に来い」

「じゃあ、行かせてもらおうかな。この紅茶を味わい終わったらな」

* * *

とある時代の、とある国の、とある町の、とある住宅地の、とある一軒家の前に、さきほどまで喫茶店のテラス席にあったふたりの男の姿がありました。

「で、最強の防犯て？」

教えてやるからお呼ばれた男が、訊きました。

「これだよ、これ！」

教えてやると言った男は、家の扉の横に貼られたシールを指差します。

「……んん？ “包丁あります”？ 刃物屋にでもなったのか？」

お呼ばれた男は、難問にぶつかつたヒトのように眉根を寄せて言いました。

「なんでオレが刃物屋になるんだよっ！ これが、この“包丁あります”が最強の防犯なんだよ」

「……なぜ？ どうして“それ”が最強の防犯なんだ？」

「もうっ、バカん！」

最強の防犯をひらめいた男は、するつと理解してくれぬ相手の鈍さに足踏みをして、けれどキチンと述べます。

「誰だつて、“奪う”のはまだいいけど、“奪われる”のは絶対にイヤだろっ？ オレはそこに着目したつてわけだよ」

「それがこの“包丁あります”のシールだと？」

「あなたが私から“奪う”なら、私もあなたから“奪います”よ、つて告知さ。誰だつて自分のモノを奪われたくないから、自分のモノも奪われるとわかつて奪いに来たりしないだろっ？」

「やり返されるのが怖いから、やらない。 つてこと？」

「そう。そうだよ。やっとわかつてくれたか、このオレの素晴らしきひらめきを！」

「ん、んん……。まあ、言いたいことはわかつたけど……」

「けど？ なんだよ、なんか物申したそうだな」

「お前の言ってることは、まあ、わかつたけどさ」

「なんだよ？」

「それって、奪いに来る相手が、最後の一线、自分と同じ“怖れを
知っている人間”だったことを“信頼しているから成り立つ考え”
だよな」

* * *

相互の“相手に対する信頼”なくして、
相互確証“望まぬ事態”の抑止論は成り立たない。

小話・其の五拾五へそういうもの（仮題）

《そういうもの（仮題）》

とても凄惨な事件がありました。それを知った人々は、とても心を痛めました。

そして、それを凶行した犯人が、ついに捕まりました。

そのことが、あらゆるメディアを通じて報道されました。

犯人が捕らえられている警察署に、人々が集いました。

集った人々は、奇妙な熱気と共感と連帯感と“ある感情に由来する衝動”に突き動かされ、警察署になだれ込みました。人々は、凶行した犯人の姿を、獣の眼をして探します。

しかし犯人の姿は、もうすでに警察署にありませんでした。“なにか”が起こりそうな空気を敏感に察した警察署側が、裏口からこっそり安全な場所へ護送していたからです。

人々が警察署になだれ込んだことを聞かされた犯人は、

「ほら、やっぱり。誰だって“気に喰わない存在”があつたら“そう”するのですよ」

憎たらしいほどの訳知り顔をして言い、

「わたしのことを“人間じゃない”とおっしゃる方々がありましたけれど、これで証明されました」

そして、ある“小さな輪”に帰属できたことを喜ぶヒトの微笑みを浮かべます。

「わたしは、まぎれもなく人間だ」

小話・其の五拾六へどちらなのか（仮題）（前書き）

【“人”は、自らの脚で自立しているゴトの】

小話・其の五拾六へどちらなのか（仮題）

《どちらなのか（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある街の、とある喫茶店のテラス席に、ふたりの男の姿がありました。コーヒーとミルクティーを、それぞれ味わっています。

「人」という漢字は、“ヒト”と“ヒト”とが支え合っていることを示しているんだ。あれだよな、支え合いが大切だっことを、昔の“ヒト”は知っていたんだな」

コーヒーを味わっていた男が、学があることを誇るがごとく得意げに言いました。この男は新しく知ったことを得意げに語りたがる癖があるのです。

「へえー」

ミルクティーを味わっていた男は、友人である男の癖のことをよく知っていたので、その話が“いまさら”だとはあえて言わず、「じゃあ、お前は“どっち”なんだ？」

という問いを、“いまさら”という言葉の代わりに投げました。いいことを語ったたとコーヒーを味わっていた男は、

「……………どゆこと？」

口内に広がる苦味と酸味に眉をしかめるがごとく、眉根を寄せて訊きました。

男はミルクティーを味わうのをいったん休止し、ふところから手帳を取り出すと、それを開いて付属のボールペンを手にし、そしてまだ予定の書き込まれていないページに“人”という漢字を書きま

す。
そして。

右の短いほうに寄りかかっている左の長いほうと、左の長いほうに寄りかかられている右の短いほうを、それぞれ指差して、改めて

問います。

「左の長いほうか、右の短いほうか、支え合っていると云うのなら、自分を“どっち”だと思おう？ “どっち”でありたいと思おう？ 相手が“どっち”であることを望む？」

小話・其の五拾七へ美しき（仮題）へ（前書き）

【“それ”は売っている】

小説：其の五拾七（美しき（仮題））

《美しき（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある街の、とある駅の前の広場の木製のベンチに、数歩引いた地点から“それら”を観察するようにしている男の姿がありました。まったく清潔とは言えない身なりをしています。

「うわあ、やだあ、見てよ“アレ”、やだ、やだ、ばっちい」

駅の前の広場で待ち合わせしていると思しき若い女が、ベンチのほうを指差して言いました。最新の流行を敏感に取り入れた見目麗しい身なりをしています。

「うわあ、ホントだあ、なに“アレ”。あ、やだあ、こつち見た」

一緒に待ち合わせしていると思しきもうひとりの若い女が、一瞬だけベンチのほうに視線をやって応じました。最新の流行を敏感に取り入れた見目麗しい身なりをしています。

そして。

ふたりの若い女は、それぞれ手に持っている携帯電話を忙しなくいじりながら、お互いに目を合わせることなく言葉を交わして、駅の前の広場から去ってゆきました。

ベンチに座って“それら”を観察するようにしていた男は、自分になにか言われていることに関して認識していましたが、とくに気にしたふうもなく“流れ”を見やっていました。

高級そうな黒のスーツを身にまとったひとりの男が、ベンチに座る男に近づき、

「“先生”、またそんな汚い身なりをして……」

感心とあきれの混在する音声で言いました。

ベンチに座る“先生”と呼ばれた男は、

「こつすると“モノ”がよくよく見えるようになるからな」

言つて、愉快そうな笑みを浮かべます。

「先生”には“なに”が見えているんでしょう」

黒のスーツが、素朴な流れで訊きました。

「見目を麗しく演出する美しい装飾品は、金で買える。しかしいくら“身なり／外見”を整えたところで、そこにある“中身／本性”は“そのまんま”。いやはや千里眼も度肝抜かれるほどよく見える。見えすぎてもはや興奮すら覚えるくらいだ」

ベンチに座る“先生”と呼ばれた男は、

「どうだい？ キミも一度やってみるといふのは？」

面白いと感じた“映画／書物／遊び”を薦める気さくさで述べました。

黒のスーツは、満面の笑顔を浮かべて応じます。

「確かによさそうではありますが、私は“先生”の作品に触れることがなによりの、そりやあもう興奮を覚えるくらいの楽しみですから。 “先生”がいますぐ速やかに次の作品の制作に戻ってください」

「されば、もう言うことなしですよ」

小話・其の五拾八へいちりゅう（仮題）（前書き）

【 “ に帰属” と “ になる” は違う】

小説：其の五拾八へいちりゅう（仮題）

《いちりゅう（仮題）》

とある時代の、とある国の、とあるホテルの会場で、とある高校の同窓会が開かれていました。適度に設置されたテーブルの上には、高級で上品な大人の料理やビールやワインといった酒類が惜しみなく並べられてあります。

同窓会に参加しているかつての高校生たちは、それぞれお酒や料理を片手に、それぞれ積もる話に花を咲かせています。雰囲気が変わったとか変わっていないとか、結婚したとか子どもができたとか、太ったとかやせたとか、とかとかとか

会場の隅っこのほうに、そこそこのスーツを着て、そこそこの整った身なりをしている、ひとりの男の姿がありました。誰と会話するでもなく、料理を味わいお酒をたしなんでいます。

そんな男に、

「おお、久しぶり」

と声がかかりました。

「ん？ ああ、久しぶり」

そこそこの男が視線をやった先には、一流のスーツを着て、一流の身だしなみをしている男の姿がありました。

「最近どうよ？」

一流な男が言いました。　　が、そこそこの男がそれに対してなにか言うまえに、一流な男が話し始めます。

一流の大学に進んだこと、一流の企業に就職したこと、そこで重要な案件を任されていること、そのことの責任の重さに関する苦悩のこと、などなど

どこか誇らしげに一流な男は話し、それから気がついたように、
「そういえばお前」

と、理解あるヒトの顔を装って、

「進学しなかつたんだっけ？」

あえてそのことを口にします。

「ん、ああ、まあ、そうだよ」

そこそこな男はビールを一口、飲んでから、応じました。

「……そうか」

一流な男は言っておいて気まずそうな表情を作り、

「いま、なにやってるんだ？」

チャリティー活動する余裕ある人物の顔をして、そう言います。

困ってるなら助力するぞ、と。

そこそこな男は、料理を咀嚼して胃に流し込んでから述べます。

「まあ、いろいろあつたけど、やりたいことやるために会社を作つてね。順風満帆とはいかなかつたけれど、いまはそこそこゴハン食べられるくらいにはやれてるよ」

「へえ、そうなのか」

「うん。あ、そうだ。お前の大学の後輩たちさ、さすが一流の大学を出てるだけあって、みんな優秀でさ、すごく助かってるんだ。本当、雇って正解だったよ」

小話・其の五拾九へ四月一日（仮題）へ（前書き）

【*****です】

小話：其の五拾九（四月一日（仮題））

《四月一日（仮題）》

とある時代の、とある世界が、その日、とても穏やかになりました。

世界中で叫びを上げていた銃火器はその口をつぐみ、ヒトの怒号も、ヒトの嘆きも聞こえてきません。

お腹を空かせて声を上げることすらできないヒトの、訴えかける無言の眼差しも一切、見あたりません。

その日、世界から一切の例外なく争いの火種が霧消しました。

その日、世界から一切の例外なく空腹がなくなりました。

満腹になった世界で、昨日まで殺し合いをしていた人々は、お互いを理解するための食事をとおこないました。最初はぎすぎすした空気もありましたが、いっぱい食べて、いっぱい飲んで、満腹になる頃には、そこにいるみんなが、相手も自分とそう変わらないヒトであると気がつくことができました。

「どうしてオレたちは、必死になって“あんなこと”をしてたんだらう」

食事会に出席したひとりの男が、昨日まで兵士であったひとりの男が、ぼそりと呟きました。

「本当、どうしてだらうな……」

隣に座っていた、昨日まで戦士であったひとりの男が応じました。重たい空気がそこに落ち　そうになった刹那、お酒を飲んで酔っ払ったひとりの男がおもむろに服を脱ぎました。

食事会の会場にある人々の眼差しが、その男に向きます。

「ふおのすふあらふいいふおばしゅぶしてっ！」

酔っ払いの男は、宣誓するように手を上げてなにかを大きな声で述べてから、いきなり腹踊りを始めました。

それを見て。

昨日まで兵士だった男は困ったふうな笑みを浮かべ、昨日まで戦士だった男はくだらないもつとやれと声を上げて笑います。

そしてひとしきり笑ってから、昨日まで戦士だった男はふつと真面目さのある笑顔を浮かべ、手に持っている酒の入ったグラスを高らかに掲げて、言います。

「今日が昨日じゃないことに、乾杯っ！」

* * *

想像した“嘘”は、
創造して“真”にすることができ。
少なくとも確実に、
そうしようと努力することはできる。

小話・其の六拾へゆめのきかい（仮題）（前書き）

【巨大な壁は、けれど思いのほか薄っぺらい】

小話：其の六拾へゆめのきかい（仮題）

《ゆめのきかい（仮題）》

“今すぐ洗面所に行つて鏡を見てください。
魔法使いはそこにいます。
魔法をかけられる相手も、そこにいます”

『お茶が運ばれてくるまでに』 A B
O o k A t C a f e 』

文 時雨沢 恵一

絵 黒星 紅白

より抜粋

* * *

人影よりも野生動物の影のほうが多い街外れに、廃材を組んで作られたトタン屋根の、家というよりは秘密基地と呼んだほうがしっくりくる建物がありました。大型車両が余裕を持って格納できる倉庫並みの規模があります。

そんな秘密基地めいた建物の中に、ひとりの人物の姿がありました。疲労の色濃い顔に、地肌に見える頭頂部を囲むようにクセのある白の混じった黒髪が生えているという頭髪事情を抱えた、中年の男でした。

「ついに、ついに完成した」
疲れたヒトのしわがれた音声で、中年の男が言いました。

彼の目前には、一台の自動車がありました。実生活での利便性を考慮しつつ、疾走感が堪能できるよう設計された市販の自動車です。が、いまここにあるモノは、市販されているモノとは少々異なる部分がありました。

「これで、これでやっと」

中年の男が解放される喜びを噛みしめるヒトの表情をして、自動車に乗り込みました。エンジンを始動させます。

「過去の間違えた自分を殺しにゆける」

中年の男が乗り込んだ自動車には、市販されているモノとは少々異なる部分がありました。中年の男が短くない時を費やして発明開発した“時空間を疾走する機能”が、この自動車には搭載されているのです。

「目的の時間は」

中年の男は、“時空間を疾走する機能”を管制できるよう改造したカーナビを操作して、

「忘れもしない」

これから向かう“時”を設定し、決定します。

「いまも鮮明に思い出せる“あの”誕生日」

* * *

その少年は、映画に取り憑かれています。行動範囲圏内にある“パラダイス・roman座”という名の小規模で小汚い映画館に好奇心からこっそり忍び込んだ、その日以来。その日の、ふたつの出逢い以来

ひとつは、心を奪う映画との出逢いでした。“パラダイス・roman座”は小規模な映画館であるからこそ、経営者の趣味趣向によって選ばれた映画が、客の入りをまったく気にすることなく上映され

ていました。世間で話題の最新技術と莫大な制作費を投入して作られたいわゆる流行の映画が上映されたことは、過去一切ありません。なので彼が出逢った映画は、新しい流行のモノではありませんでした。彼が出逢った映画は、“ニュー・シネマ・パラダイス / Nuovo Cinema Paradiso” という題名のイタリアの映画でした。ヒトと人生と映画への愛に満ちた映画でした。観始めのときは、退屈な、悟ったふうな大人の映画かと思った彼でしたが、しかし気づいたときにはエンドロールが流れており、そのとき彼は自分でも意外なくらい「いいな」という“形容し難い温かな感覚”に包容されていました。彼は、映画に好意を懐いていました。そして。

このとき、もうひとつの出逢いがありました。空席の目立つ、余裕を持つて座ることのできる環境にあつて、わざわざ彼の隣に座っている人影があつたのです。彼はエンドロールを視聴しながら、ふと、隣にある“その気配”に気がつきました。そこには、ひとりの女の人が居ました。黒の長い髪をした、色の白い肌の顔の中に、映画を観る燦々と輝く黒の瞳を持つ、麗しく美しいヒトでした。彼は、その“美”ある姿に見惚れました。それと同時に、「おや？」と不可思議さを懐きました。彼女の身体の向こう側にあるはずの座席や劇場の壁などが、本来なら彼女の身体で隠れて見えないはずのそれらが、透けて見えるのです。映画に集中し過ぎて目が疲れてしまったのだらうと思つた彼は、ぎゅっと目を閉じて、しばしそうしてから再び開いて、隣の席を見やりました。そこには、誰も居ませんでした。これが、彼と彼女との最初の出逢いでした。

翌日。

少年の姿は“パラダイス・ロマン座”の昨日と同じ座席にありました。昨日と同じく、料金を払わぬ忍び込みです。映画を観るのが楽しくなつたという理由と、あるいはまた彼女に会えるのではない

かという理由から發揮された行動力でした。

映画の上映が開始されました。けれど少年の意識は、ときどきわくわくな心待ちにする気持ちは、映画からそれたところにあります。視線を、チラリとスクリーンから隣の座席へやります。

そこに、彼女は居ました。

少年は嬉しい気持ちになりました。同時に、話しかけたい衝動に駆られました。が、それは映画館のマナーに反するのでどうにかぐつと堪え慎みました。

エンドロールが流れ終え、映画の上映が終了したタイミングで彼は話しかけようと試みましたが、話しかける第一声を考えている間に、彼女の姿はなくなっていました。

それから少年は毎日のように“パラダイス・ロマン座”へ足を運んで忍び込み、映画を楽しみ、彼女と会話しようと尽力しました。

しかし、彼女との会話に成功したことは一度もありませんでした。

ある日。

一切の前触れなく、少年の悪事がばれました。料金を支払うことなく忍び込んでいたことが、“パラダイス・ロマン座”の経営者であり近所で偏屈者として有名な老人に知られてしまったのです。

「このクソガキ、ふざけたマネしおつてからに」

老人は、少年の行為がいかに映画と“映画を製作しているヒトたち/映画を愛するヒトたち”に対して失礼なことであるかを、たっぷりの時を費やして言い聞かせました。そして最後に、

「ところで」

素っ気ないふうを装って問いました。

「映画、好きか？」

少年は熱狂ある声で即答しました。

その日から、少年は映画館の掃除などの雑用を命じられました。いままでの悪事に対する罰ですから、もちろん“タダ/無給”働きです。　　と言っても、少年には学業という至極重大な仕事がありますから、朝から晩まで毎日というわけではありません。学校が終わってからの夕方や、休日に限っての“働き”です。

雑用は悪事に対する罰でしたが、しかし当の少年は嬉しく楽しい気持ちで胸いっぱいでした。手際よく雑用をこなして、「よし」の言葉がもらえれば、そのままそのとき上映されている映画を観てもいいという話だったからです。

映画館で雑用をこなすことが少年にとっての日課となった、ある日。あるとき。

ふと、少年は、経営者の老人に話してみました。　彼女について。

「そうか、お前さんも彼女に会ったのか」

老人はさして驚いたふうもなく応じました。その口ぶりには、旧知の友に関して話すような親しみがありました。

なにか知っていそうな老人に、少年は問いの言葉を投げました。彼女はいったいどの誰なのか、と。返答を急ぐ口調で。

多大な関心のある異性に関して情報収集することは、ある種の盲目に囚われた者ならばしばやっってしまう、じつに健全で普通なことです。　少年も、例に漏れることなくじつに健全で普通な男の子でありました。

「古い客でな、　ま、“パラダイス・ロマン座”の常連さ」

少年はそこから継ぐ経営者の老人の言葉を待ちましたが、しばし経ても継ぐ言葉はなく。

堪らず、少年は話の先を要求しました。

「ただの経営者が普通、客のことをアレコレ知っているわけがないだろう」

じつにあっさりとした返答に、少年はガツクリとうな垂れました。まったくその通りだとは、彼も思います。しかし彼女がそもそも普通とはちよっと異なっているのもう少しなにかあってもいいだろうとも思ってしまった、どうにもすんなり受け入れられないのです。経営者の老人は、そんな“少年の若さ”を娯楽のように楽しみつつ、

「まあ、熱烈な映画好きであることは間違いないだろうから、まったく意図もなく、至極ただの思いつきとして、」

「映画を通して彼女に語りかけたら、もしかしたら応えてくれるかもな」

そんなことを言いました。

少年の中で、“なにか”がカチリと音を発てて漸進を始めました。

そんな“彼女に関する話”をした、翌日。

「……………はあ？」

経営者の老人はまったくの不意打ちで起こった“その愉快的事実”を、

「いまなんて言った？」

慎重に確認するように訊きました。

それを受けて少年は、けれど一切の揺るぎない姿勢で、再び“そのこと”を述べます。

「映画監督になって映画を撮って、それを“パラダイス・ロマン座”のスクリーンで上映して、彼女と話す！」

再び“そのこと”を聞いて、経営者の老人は清々しく声を上げて笑いました。

少年はむっと眉根を寄せ、抗議する視線で経営者の老人を射ます。経営者の老人はまったく悪びれたふうもなく、

「だったら、それまでこの“パラダイス・ロマン座”のスクリーンは維持しといてやろう」

まるで歓喜するがごとく、最高の笑顔を浮かべて、

「せいぜいあがいてもがけよ、クソガキ」

そう、少年に告げました。

しばしの時を経た、ある日。

もはや当たり前になっていく雑用から解放された少年は、経営者の老人の私室も兼ねている休憩室で“あるモノ”と出逢いました。お茶のおともにお菓子でもないものかと、経営者の老人の用務机の引き出しを探っていたら偶然、発見したのです。

その“あるモノ”というのは“八ミリフィルム・カメラ”でした。しばしば映画作品の中に登場するので、少年は憧れの気持ちを懐きながらよく知っていました。胸が高鳴るのを抑えきれず、瞳を煌めかせて、それを手に取ります。

少年は、経営者の老人が私室兼休憩室に入室したと同時に、“八ミリフィルム・カメラ”を使わせてほしいと申し出ました。

経営者の老人は最初、状況がよくわからないという顔をしましたが、少年の前のテーブルの上に丁寧に置かれてある“八ミリフィルム・カメラ”を見て、すべてを理解したようです。

「机の引き出しを勝手にあさっておいて図々しいヤツだな。盗人なんとやらだ」

経営者の老人は、少年をまったく相手にしませんでした。置かれてある“八ミリフィルム・カメラ”を手に取ると、元あった机の引き出しに戻します。

それから連日、ことあるごとに、少年は“八ミリフィルム・カメラ”を使わせてほしいと述べました。経営者の老人の対応は、いつも同じです。

少年は使用許可を求めると同時に連日、図書館などで“八ミリフィルム・カメラ”に関するモノから雑学まで、映画製作に役立ちそうな知識を頭に叩き込むようになりました。

さらにしばしの時を経た、ある日。

少年が毎度の雑用をこなしていると、

「ちよつと来い」

と経営者の老人に呼ばれました。

なにか呼び出されるようなへまをしたかどうか？ と思いつつ、

少年は呼び出しに応じます。

経営者の老人の私室兼休憩室、件の用務机を挟んで、ふたりの姿はありました。経営者の老人はさほど高級でもない革張りの椅子に腰掛け、少年は用務机の前に立たされています。

経営者の老人は、用務机の引き出しからおもむろに“八ミリフィルム・カメラ”を取り出すと、それを机の上に置きます。そして、

「これは今日からお前のモノだ」

と言いました。

少年は最初、この老人がなにを言っているのか正しく理解できませんでした。

そんな少年の無言の反応に、

「なんだ？ いらなのか？」

経営者の老人は“八ミリフィルム・カメラ”に手を伸ばす。

それより先に、少年は“八ミリフィルム・カメラ”を手に取ります。

「なんだ？ やっぱりいるのか？」

と訊く経営者の老人に、少年はコクコクと肯いて応えました。

それから少しの間を置いて少年は、ふと疑問を懐き、訊きました。どうして急に“八ミリフィルム・カメラ”をくれたのか、と。

「誕生日なんだろう、今日」

経営者の老人はあっさり述べました。

言われて少年は、そういえば今日は確かに自分の誕生日だったと思い出しました。そうしたら、さらなる疑問が湧いてきました。ど

うしてこの老人は、自分の誕生日を知っているのだろうか、と。

経営者の老人は、痛いところを突かれたように居心地が悪そうな顔をします。それからボソボソと聴き取り難い音声で、「映画を観に来たお前の学校の友人に聞いたんだ」と述べました。

使い方などの知識の予習は万全でした。あとは実践あるのみ。少年ははやる気持ちに従って“八ミリフィルム・カメラ”を手に持ち、黄昏色の空の下、近所の公園へ向かい、そこで初の撮影を開始しました。

しかし時間的に人影は公園からは去ってゆくモノばかりで、撮れるのは去りゆく後姿ばかりでした。公園にあつた人影の最後、母親に手を引かれて去り行く幼子を撮り終えようとしたら、新たな人影が公園に入ってくるのを捉えました。その人影は、確たる意思があるかのようにカメラのほうへ歩んできます。

* * *

中年の男は、ここまで想定通りであることに安堵しつつ、ここからが重要だと気を引き締めて、自作した“時空間を疾走する機能”のある自動車から降りました。目前には、“あの日”の公園が一切の変わりなくありました。公園には、“あの日”の“自分”が一切の変わりなく“八ミリフィルム・カメラ”を手に持ってそこにいました。そちらへ歩みを進めます。

しかし。

いざ“過去の自分”の前にして、その輝かしさを前にして、中年の男はすぐに行動できませんでした。

そんな中年の男に、“過去の自分”は好奇の“眼差し/カメラ”を向けながら、いったい何者なのかと警戒心ある問いの言葉を投げました。

中年の男は、少し言いよんどから、正しく告げます。“未来の

自分”である、と。

それを聞いて“過去の自分”は、当然のように自称“未来の自分”を不審者だと思いました。けれど、心のどこかで、“未来の自分”が真実であることを期待していたりもします。だから、訊きます。どうして未来から過去へ来たのか、と。

その言葉が耳に入り込んできた瞬間、いまここへ至るまでに蓄積したモノが、中年の男の口から溢れ出しました。いまこの場をまつたくの他者が傍観したら、大人が子どもに個人的感情を理不尽にぶつけているだけにしか見えません。

自分がいかに映画を撮る才能がないか、いかに望んでいないことしかこなせないか、“やりたいこと”と“やれること”の現実的な違い、それを容赦なく突きつけられたときどれほど苦しいか、それを中年の男は口から吐きました。

それから中年の男は、大切なモノを喪失してしまったヒトの表情をして述べます。もうすぐ経営者の老人が約束を守らず“逝ってしまふ”こと、“パラダイス・ロマン座”がなくなってしまうこと、それと共に彼女の姿もなくなってしまうこと　輝かしかつた光源を喪ったあとに訪れる暗闇は、とても暗いこと。

中年の男は切実に説得するヒトの顔をして、あんな思いはもう二度としたくないと“過去の自分”に伝えました。

それを受けて、“過去の自分”は肩を震わせて言います。

「自分が諦めたからってそれを押し付けるなっ！　一緒にするなっ！」

怒りに肩を震わせ、意志あるヒトの揺るぎない瞳で“未来の自分”を射る。

「パラダイス・ロマン座”で待ってるよっ！　“パラダイス・ロマン座”のスクリーンで絶対に上映するからっ！」

そう言い放って、“過去の自分”は公園から出て行きました。

中年の男は“過去の自分”の揺るぎない姿勢に圧倒されてしまい、結局なにもできませんでした。

そんな“自分”を情けないと思いつつ、中年の男は久々に“まだ健在”の“パラダイス・ロマン座”とその経営者の老人と、彼女に会いたくなって、会いに行くことにしました。

その日の“パラダイス・ロマン座”での上映作品は、憎らしい演出のように、“ニュー・シネマ・パラダイス／Nuovo Cinema Paradiso”でした。とりあえず観ていくことにします。

チケットを購入するとき、経営者の老人と会うことができず、思わず涙が溢れそうになってしまいました。というか、ちょっとばかり溢れました。名乗り出たい衝動に駆られましたが、グツと堪えましました。

そして“ニュー・シネマ・パラダイス／Nuovo Cinema Paradiso”を観て。あわよくば、と思っっていました。だが、彼女に会うことは叶いませんでした。

なにをしに来たんだろう、と“パラダイス・ロマン座”から出て中年の男は思いました。

そんな“なんとも言い難い気持ち”を胸に懐きつつ、駐車場に停めておいた“時空間を疾走する機能”のある自動車に乗り込もうとして、ふと、中年の男はとて重大な事実に気がつきました。

記憶にないのです。今日、この日、自分の誕生日に、公園で“未来の自分”を自称する男と出会ったという、いまさつき起こった事実の記憶が。今日この日をすでに経験しているはずの、“未来の自分”なのに。

中年の男は多大な疑念を懐きつつ、けれどひとまず、“自分の時代”へ戻ることにします。

そして“自分の時代”へ戻り、中年の男は愕然たる思いでそこに立ち尽くしました。

いままで確かにこの場に存在していた、確かに自分が住んでいた

秘密基地めいた建物が、影もカタチも残骸もなく、さっぱり存在しないのです。

状況に対して理解が追いつかず、中年の男は混乱して頭をかきむしりました。頭の髪の毛に諸事情を抱えていることなどおかまいなしに。

一通り、頭をかきむしってから中年の男は、ふと、なにかに呼ばれるかのように、“自分の時代”ではもう跡地でしかない“パラダイス・ロマン座”へ向かうことにしました。

そして。

中年の男は、歓喜の感情にも似たモノを懐いて驚愕しました。跡地でなければならぬそこに、ウソ偽りなく確かに、“パラダイス・ロマン座”が存在していたのです。信じられないという気持ちを懐きつつ、入館します。

そこは、それは、“自分”以外に客の姿はありませんでしたが、まぎれもなく“パラダイス・ロマン座”でした。

感慨に浸ろうとしたら、上映開始の合図が鳴りました。身体が憶えているのか、中年の男は近くの座席に腰を下して、映画を観る体勢になります。

薄暗かった館内が、非常灯以外の光源なく闇になりました。スクリーンに、最初の光が映し出され

上映された映画は、まったく“知らないはず”の映画でした。だというのに、すべてを知っているような、妙な既視感を覚える映画でした。やられた、という悔しさをなぜだか懐く映画でした。

「なかなかいい映画だったわ」

隣から、落ち着きと清楚さといいい映画を観たあと清々しさある女性の声が聞こえました。

中年の男は、まさかと思いつつそちらを見やりました。

そこには、しっかりとこちらを見ている彼女の姿がありました。

彼女の声を聞いたこと、彼女に見られていること、驚きと喜びに中年の男の胸の内はお祭り騒ぎでした。けれどそのとき彼がもつと

も気になつて思わず口から発した話題は、上映された映画に対する妙な既視感についてでした。

「当然のことだわ」

と、彼女がすっぱりと断言するふうに言いました。

なぜ、と中年の男は訊きます。

「だって、この映画を撮ったのは、監督である“あなた”ですもの。彼女は“ある一点”を指差して、そう教えてくれました。

そんな記憶はない、と思いつつ、中年の男は彼女が指差す先を見やりました。そこには、「パラダイス・ロマン座”で待つてらよう！ “パラダイス・ロマン座”のスクリーンで絶対に上映するからっ！」と言い放つてきたあのときの“自分”が座っていました。

この状況がもうよくわからず、

「……これは、……どういうことだ？」

そんな素直な言葉が、中年の男の口から漏れました。

「簡単なことよ」

彼女が言います。

「“あなた”は諦めなかったのよ」

その言葉に、しかし中年の男は追い詰められたヒトの表情をして頭を抱え ようとして、彼は“そのこと”に気がつきました。身体が、彼女のように透けていることに。

ふと、「ああ、なるほど」と、なにかがわかったような気がして中年の男は、言葉もなく、すべてを受け入れる余裕さのある顔をして、座席に深く腰を落ち着けました。

「これはとても純粋な疑問なのだけれど、いいかしら？」

彼女が投げかけてきました。

中年の男は、

「どうぞ」

と気さくに応じました。

「諦めてしまった“あなた”は、諦めなかった“あなた”に出逢つて、なにを思つたのかしら？ なにを感じたのかしら？」

そんな彼女の問いかけに、中年の男は“諦めなかった自分”のほうを見やって、そして恥ずかしそうに微笑んでから、
「なんだ、やればできるじゃないか、って」
一切の悲壮感のない清々しい表情で、
「もっと自分を信じてあげればよかった、って」
迷いのない言葉で答えます。
「そう、思いました」

暗転。

「ちよつと館長っ！ 起きて下さいよっ！」
耳の至近距離、大音量で叩き込まれたそんな言葉に、彼は目を覚ましました。
「おおっ！ どうした？」
「どうしたじゃないですよ。あなたが決めた閉館の時間です。まったく、自分で撮った映画を観ながら寝ないでくださいよ」
「雇用主に臆することなく文句を垂れるとは、まったくいい従業員を雇ったよ」
「そうでしょう、なかなかいい目をお持ちのようですね」
そんな従業員の言葉に、彼は愉快そうに微笑を浮かべます。
それから背伸びをして、
「自分で撮った映画を、自分の映画館で上映して、そして寝る。これほど贅沢なことはないな」
彼は感慨深げに言いました。
「はいはいわかりました」
従業員はあきれたふうに首を横に振ってから、
「贅沢を堪能するのは結構ですけど、“あなた”の映画の新作を待っているファンがいるということを忘れないでくださいよ 目の前にもいるんですから」
と切望するヒトの顔で述べます。

「もちろん忘れてないさ。明後日からその新作の撮影だから、英気を養っていたんだよ。自分にとつてすべての始まりたるこの映画を観て、撮るぞー超撮るぞー、ってさ。ま、儀式みたいなモノさ」

「はいはい、期待してますよ」

従業員は本当に期待しているヒトの笑顔で言つて、先に外へ出ます。

それに続いて出ようとする彼の背中に、

「私も期待しているわ」

そんな女性の声が、誰も居ない館内のほうからかけられました。

けれど彼は振り返ることなく、歩み行きます。

期待に応えるために。“やりたいこと”を“やれること”を“やるため”に。

小話・其の六拾巻へすばらしい(仮題)く(前書き)

【 “そんな空気感” だから 】

小説：其の六拾巻へすばらしい（仮題）

《すばらしい（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある街の、とある美術館に、鑑賞した人々から必ず絶賛される“ある作品”がありました。

そしてふたりの男が、その“ある作品”の前に立っていました。美術館ですから、作品を鑑賞するヒトの姿があるのはなんら不自然なことではありません。ただ、いまは、閉館時刻をとつくに過ぎた頃合いです。

「さて、じゃあいただくとしようか」

ひとりの男が言いました。

「ああ、いただくとしよう」

もうひとりの男が応じました。

ふたりの男は、目前にある“ある作品”に魅せられ、それを独占したい欲に囚われた者たちでした。ネットを通じて知り合い、“ある作品”を自分たちだけのモノにしようと意気投合し、いまに至ります。

そして。

ふたりの男は、“ある作品”を盗み出しました。ふたりが念入りに計画した結果であり、美術館の警備が予想外に“お粗末”だった結果でした。

ふたりの男はアジトへ戻り、ついに独占した“ある作品”を贅沢に鑑賞します。

が、ふたりの男は「あれ？」という“ある奇妙な感覚”を味わいました。それはどうやらお互い同じようなモノであると確認し、どうしたものかと首をひねります。

しばしの時を消費して。

ふたりの男は、“ある奇妙な感覚”を解消するための方法を考案

しました。

速やかに、それを実行します。

* * *

とある時代の、とある国の、とある街の、とある駅の前で、ふたりの男が“あるモノ”を道行く人々に見せてまわっていました。

その“あるモノ”を見せられたヒトたちの反応は、様々でした。あるヒトは不快そうに眉をひそめ、またあるヒトは吐き気を堪えるように眉をひそめ、またまたあるヒトは不快そうにしつつも鼻の下を伸ばして、またまたあるヒトはしげしげと興味深げに眺めます。

ふたりの男が見せてまわる“あるモノ”というのは、一糸まとわぬ“裸のヒトたち”が水遊びをしている“絵ノイラスト”でした。

「だんだん自信がなくなってきた。この“絵ノイラスト”に、盗み出すほどの価値はあったのかな？」

ひとりの男が言いました。もうひとりの男がそれに応じます。

「んー、むしろオレは、この“絵ノイラスト”そのモノの価値というより、この“絵ノイラスト”に対する“ヒトの価値観”の価値がよくわからなくなってきたよ」

小話・其の六拾弐へとくへつではないこと（仮題）へ（前書き）

【“それ”は自分の一部でもある】

小説・其の六拾式へとくべつではないこと（仮題）

《とくべつではないこと（仮題）》

とある時代の、とある町の、とある小綺麗なカフェのテラス席に、ブラックのコーヒーと甘いミルクティーをそれぞれ味わっているふたりの人影がありました。

「なあ、どうしても、“こっち”に移り住む気はないのかい？」

コーヒーを一口、飲んでから、ひとりの恰幅のいい中年の男が訊きました。

「ええ」

ミルクティーを味わっていたきちんとした身なりの初老の男は、「氣遣つてくださるお気持ちはとてもありがたいのですが、その気はありません」

きっぱり返しました。

それを受けて中年の男は、コーヒーに口をつけるのを中断して、「どうしてなんだい？ どうして、“あんなところ”に住むことにこだわるんだい？ あ、いや、失礼。ただ、あなたが心配なんだよ」

相手のためを思って辛抱強く説得するヒトの表情で述べます。

「町から離れた山の中腹に住んでいて、あなたが町へ下りてくるまでの道は非常に険しい。それだけでもアレなのに、それに加えて“あの山”の至るところには、過去の戦争の負の遺産たる地雷と不発弾がいまだ大量に埋まっっていて危険だ。これだけで、町へ移り住む理由は充分だろう？」

それを受けて初老の男は、ミルクティーに口をつけるのを中断して、静かに首を横に振りしました。

「どうして？」

納得できないと声を少し荒げて、中年の男は言います。

「べつに金銭的な問題はだろう？　あなたはとても優れた創造力を
持っていて、あなたの創造した物語のファンは至るところにいて、
その物語を販売した収入がある。正直な話、あなたは私よりよっぽ
ど金持ちだ。それに人柄だって、ちよつと自己主張は苦手なようだ
が、真面目で礼儀正しくて、困っているヒトがいたら見返りを求め
ずに助けの手を差し伸べられるヒトだ。町のみんなだって、そんな
あなたのことを好いている。迎え入れられないなんてことには絶対
ならない。」　町のみんなだって、あなたを心配しているんだよ」

初老の男は、心の底から申し訳なさそうな顔をして、

「みなさんには、本当に心から感謝しています」

「じゃあ」

「でも、移り住むことはできません」

「どうしてっ！　“あそこ”から離れられない特別な理由でもある
のかい？」

「特別な理由はありません。ただ、“私の暮らせる場所／私の帰れ
る場所”は、“私の家”だけなのです。生まれ育った愛着ある“そ
こ”が、どうしようもなく“私の居場所”なのです」

小話・其の六拾参へアイゆえに（仮題）（前書き）

【周りなんか知ったこつちやないもん】

小説：其の六拾参へアイゆえに（仮題）

《アイゆえに（仮題）》

その“彼ら”のための“愛情／正義”は、しかし“彼ら”以外のための“愛情／正義”ではない。その“彼ら”に優しい“愛情／正義”は、しかし“彼ら”以外には優しくない。

* * *

とある時代の、とある国の、とある街の、とあるオフィスビルの一室に、複数のヒトの影がありました。それぞれ“ある一点”を注視し、とても悲痛な表情をしています。

その“ある一点”には、古いブラウン管のテレビがありました。テープ式のビデオデッキと接続されています。テレビの画面には、“あるビデオ”の映像が再生されていました。

その“あるビデオ”には“ある食材”を食材たらしめている工程が包み隠さず記録されており、複数のヒトの影はその記録映像を視聴して悲痛な表情を浮かべているのです。

その“ある食材”とは、この国では古くから食されている“ある動物”のお肉のことです。ですから、“ある食材”を食材たらしめる工程とは、その“ある動物”をシメてさばくという血生臭さあるモノでした。

そのシメられてさばかれている“ある動物”とは、他の国に限らずこの国でも“愛玩用”としての人気を獲得している動物でした。

「……………どうして」

複数のヒトの影の中のひとりが、嗚咽を堪えるようにしながら口を開きました。

「どうして、“彼ら”を食べるんです。かつての食糧難の時代ならまだしも、いまは飽食の時代ですよ。“彼ら”を殺してまで食べる必要が、どこにあるんです」

複数のヒトの影の中のひとりが、部屋にある冷蔵庫から“あるモノ”を持ち出してきました。そしてその“あるモノ”を裁判における揺るぎない証拠品のように示し、述べます。

「そんなに肉が食べたいのなら、“彼ら”以外の肉を食べたらいいんですよ。いまの世の中、どこでだって簡単に買えるんですから

」

そう述べる、そのヒトの、その手には、加工されて“もう動物の形をしていない”大量生産の家畜の肉のパック詰めの特売品がありました。

小話・其の六拾四へちようじん（仮題）（前書き）

【自分の道を信じて歩くヒト】

小説：其の六拾四へちようじん（仮題）

《ちようじん（仮題）》

ふたりのヒトがいました。ひとりのヒトは、流行の最先端をとり入れた身なりをしていました。ひとりのヒトは、流行の“り”の字も感ぜられない身なりをしていました。

「どうです、今年の流行の最先端をとり入れた、私のファッション。自分で言うのもアレですけど、なかなかとてもよろしいでしょう」
身なりを誇り見せつけるふうにして、最先端のヒトが言いました。
「そうですね。とても素晴らしいと思いますよ」

お世辞ではなく素直に、流行の“り”の字もないヒトは応じました。

「でしよう？ それで、その、あえて述べさせてほしいのですけれど」

「はい？」

「私のファッションを素晴らしいと感じれるのに、どうしてあなたは、その、あえてハッキリ述べますけれど、どうしてあなたは、そんなに独創的過ぎる。その、ダサイ身なりをしているんです？」

流行の“り”の字もないヒトは、しかしとくに怒るでもなく応じます。

「今年の流行の“共通の”最先端も、来年の今頃にはきつと流行遅れの“共通の”ダサイ身なりと言われてしまうでしょう？ ですから私は、流行遅れの“共通の”ダサイ身なりではなく、流行遅れじやない“私だけの”ダサイ身なりをしているのですよ」

小話・其の六拾五へおはようございまして(仮題)へ(前書き)

【甘い飴だけでは味覚は洗練されない】

小説：其の六拾五へおはようございました（仮題）

《おはようございました（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある町の、とある家に、朝がとてつもなく苦手な親とその子どもがいました。親は夕方から深夜までの仕事をしており、朝は疲れて夢の中なのです。子どもは、ただ単によく寝すぎただけでした。

この国は義務教育という制度があるので、子どもは学び舎へ行かねばなりません。しかし親子そろって朝がとてつもなく苦手でしたから、結果的に子どもは遅刻の常習者になってしまいました。

それをよろしくないと考えた学び舎の担任教師は、その子の親にどうにかならないかと告げました。親は深刻な顔をして、なにか思案するようにしばしの時を消費し、そして、

「わかりました」

と、ひらめいた子どもの遅刻の解決策を担任教師に示しました。

担任教師は当惑しましたが、最終的には担任教師自身のためにその解決策を実行することにしました。

後日。 早朝。

朝がとてつもなく苦手な子どもの寝ている枕の頭上、無意識によつて止められた目覚まし時計の横で、電話機が呼び出し音を鳴らしていました。数回、子どもは目覚まし時計を止めるようにして手を伸ばし、さらに数回それをおこなってから、いっこうに鳴り止まないそれに嫌気がさして、薄目を開けました。そして寝ぼけたまま、受話器を手に取り、

「……はい、もしもし」

と、気だるげな音声で言いました。

それに対して、

「はいっ！ おはようっ！ さっ、目を覚ましてくださいっ！ 学校に行く時間ですよっ！」

努めて元気ハツラツとした音声が続きました。

「ああ……、おはようございます………」

子どもはそれでも気だるそうに応じます。

「先生………」

遅刻の解決策とは、担任教師が遅刻する子どもにモーニングコールをするというモノでした。

本来はそんなことするべきではないと担任教師も承知していましたが、あまりに遅刻の多い生徒があり、改善が見られないと、学習舎での担任教師自身の評価にも関わり、それは生活にも関わる事なので、いたしかたなくそうすることにしたのです。

そんなこんなで。

時は消費されてゆき。

子どもも成長して、大人と呼ばれるようになり、ある会社に就職しました。朝にとても弱いことを除けば、優秀な成績を有していたので、多数の会社から求められるほどあっさりと職につくことができました。

しかし。

出社というものをするようになってから数日後、大人と呼ばれるようになったかつての子どもは、上司に呼び出されました。

呼び出した上司は、とても不機嫌でした。そしてその感情を多分に反映した音声で言います。

「お前は どうして遅刻が多いんだ！」

大人と呼ばれるようになったかつての子どもは、上司の感情を読み解くことなく、まったく反省の色のない態度で応じました。

「だって、モーニングコールしてくれないじゃないですか」

小話・其の六拾六へしゆみ（仮題）（前書き）

【リアリティー溢るる至上の娯楽】

小説：其の六拾六へしゅみ（仮題）

《しゅみ（仮題）》

とある時代の、とある国で、ある凄惨な事件が起こってしまいました。

それを起こした犯人である可能性が濃厚なひとりの男が、容疑者として速やかに確保されました。

各メディアは、迅速にそのことを報じました。そして同時に、容疑者の“個人情報／人物像”が公開されてゆきます。

マンガが好きなこと、アニメが好きなこと、ゲームが好きなこと、ヒトと話すことが苦手なこと、小・中・高校生時代の卒業文集に書かれた将来の夢、 などなど。

各メディアも、それを視聴した人々も、誰もが、この容疑者こそが真犯人であると確信している暗黙の空気が生じていました。

一週間ほどが経過しました。

そして誰もが、「ウソだあ」と胸の内では言いました。容疑者の潔白が、一切の揺るぎなく証明されたのです。

その日を堺に、各メディアはパタリと“ある凄惨な事件”に関することを報じなくなりました。

容疑者とされた男は、まったく歓迎されていないとわかるご近所からの空気を肌を感じながら、久しぶりの我が家の扉をくぐりました。

男は一息ついてから、蓄積した鬱憤を解消するために、“もっとも好きなこと”に興じることにしました。

その興じる過程で、男は自分がご近所の方々からどのように見られ思われていたのかを知りました。

そして。

「やっぱり、か」

各メディアが、自分の“暇つぶし程度に好きなこと”に関しては熱心に報じているのに、自分の“もっとも好きなこと”に関しては一切報じていないことを知りました。

「各メディアの“よくできた”報道を知るのが、人生最高最上の、生き甲斐と言ってもまったく過言じゃない“好きなこと”なんだけれどなあ……」

* * *

他者に対してそれなりに面白味があるふつを装って物語ることに、必ずしも“絶対の真実”は重要ではない。

いかに良心的に“向こう側の人々”をだますか、あざむくか、

いかにそこから“面白さ”を創出するか、

しばしば“それ”を重視し、

“そこ”に注力する。

小話・其の六拾七へ見ぢやダメっ！（仮題）（前書き）

【鏡を見よつ】

小話：其の六拾七へ見ちゃダメっ！（仮題）

《見ちゃダメっ！（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある町の、とあるスーパーマーケットの入り口の横にある駐輪場を兼ねた駐車場に、夕飯の買い物を終えた親子の姿がありました。母親は右手で我が子の手を握り、左手に大きく膨らんだ買い物袋を持ち、そして買い物という戦いからの解放感を味わうように、器用に口の端でタバコをくわえて紫煙を吹かしています。子どもは、買ってもらった風船ガムをくちやくちやしています。

あとは自転車に買い物袋と子どもをのせて帰るだけなので、母親はさして急ぐこともなく、我が子の手を引いて、自らの愛機が停めるところまで歩を進めました。

ほどなくして、愛機のところにとどり着きます。

自転車の後部のカゴに買い物袋を積み、子どもを前カゴ兼子供用座席に乗せようとしたとき、母親は我が子が妙におとなしくしていることに気がつきました。ガムをくちやくちやししながら、ある一点を凝視しているように見えます。なにか子どもの興味を引くモノでもあるのかしら、と考えながら、母親もそちらへ視線をやってみました。

転瞬。

「見ちゃいけませんっ！」

はっ、として母親は我が子の視界を手でさえぎりました。視線をやった先に、停めてある車の中で若干淫らな雰囲気を漂わせていやついている若い男女の姿があったのです。

なんてモラルのないっ！と頭の中で怒りながら、母親はくわえていたタバコを吐き捨てて足で踏み消しました。そして、子どもの教育によるしくない、汚らわしくすらあるこの場から速やかに去る

ために出発の準備を急ぎます。我が子を自転車に乗せようと抱っこしようとしたとき、おとなしく“こちら”を見ていた我が子の口から風船ガムが地べたに“落ちてしまいました”。やれやれと思いつつ、母親はかまわずに子どもを自転車に乗せます。

そんな親子の姿を見ている眼差しが、ありました。

「見ちゃいけませんっ！」

はっ、としてその親は我が子の視界を手でさえぎりました。視線をやった先に、停めてある自転車の横で、子どもの目の前だということにタバコを吐き捨てて足で踏み消す女性の姿があり、そしてその女性の行動をマネるように口からガムを吐き捨てる子どもの姿があったのです。

小話・其の六拾八へよくほう(仮題)◀(前書き)

【究極的に純粹な想いは】

小説：其の六拾八へよくぼう（仮題）

《よくぼう（仮題）》

その場には、ふたりの人影がありました。

ひとりには、とくにぱっとしない普通そうな男でした。

もうひとりには、“絶世の”と称して異論ないほど魅力的で、麗しく美しい若い女でした。

ふたりは、とても至近距離で向かい合い、お互いの表情を見やっています。

麗しく美しい若い女は、愛着の情熱が滲む微笑みある表情で。

普通そうな男は、それでも信じたいという悲哀の滲む苦しげな表情で。

「どうして……、どうしてこんなことを………」

普通そうな男の口から、そよ風にすらかき消されてしまいそうな、か細い音声が発せられました。

「どうして？」

麗しく美しい若い女は、普通そうな男とのやり取りを心の底から喜ぶように口の両端を薄く吊り上げ、

「あなたを、もっともっともあーっとよく知るためよっ」

精巧な造形の顔にある双眸を、まるで夜空に煌く星々のように輝かせ、

「だって、あたしは」

口を相手の耳元へ寄せて、

「あなたのことが、とあーっても大好きなんですものっ」

まるでとっておきの秘密を告げるかのように、しかし一切の躊躇いなく、述べます。

そしてその気持ちのあらわれごとく、お気に入りの“ぬいぐるみ”をぎゅうと抱きしめるような愛着ある自然さで、普通そうな男

の首をさきほどからずっと“触れている／絞めている”両の手に少し力を加え、普通そんな男の首を少しだけ“深く触れます／絞り上げます”。

「こ、こんなことしなくたって……、言葉で会話すれば」「言葉なんて簡単に偽れるモノなんかでヒトを知れるわけないじゃない」

母親が小さな我が子に言い聞かせる柔らかな声音で、

「そうでしょう?」

麗しく美しい若い女は断言しました。

「だから、あたしは、こうして、この手で、あなたの“いのち／生命”に“触れる／干渉する”のつ。だって、言葉なんて不完全な道具をわざわざ使うより、直接あなたの“いのち／生命”に“触れる／干渉する”ほうが、よっぽど確実に、深く“あなた”を感じて知れるんですものっ」

それはとてもとても素敵なこと。

麗しく美しい若い女は信じて疑わないヒトの純粹な双眸をして言
い、

「だから、ね」

恥じらう乙女のように、おねだりする小悪魔のように、

「あなたにも」

片方の手で器用に、普通そんな男の手に果物ナイフを握らせ、

「あたしのことを」

そのナイフを握った手の上に自らの手を重ねて、

「もっともあーっと深く深く深く」

自らの“心”があるほうへ、

ゆっくりと、しかし確実に導いて

小話・其の六拾九へ正義のお話（仮題）（前書き）

【 を誤らないでほしい 】

小説：其の六拾九〈正義のお話（仮題）〉

《正義のお話（仮題）》

とある時代の、とある死刑制度のある国の、とある私学の高等学校の教室で、とあることに関する授業がおこなわれていました。教室には、眠そうなモノや退屈そうなモノから熱心なモノまで様々な表情がありました。

一部の生徒にとつてみたら上質の寝物語である教諭の今現在のお話は、人間の生命の尊さについてでした。家族とあれる幸せ、友人と語らえる幸せ、ご飯を食べられる幸せ、 などなど、教諭は熱心に語ります。

そして。

人間に生命の尊さについて授業時間の九割を割いて語ってから、教諭は本日の主題を生徒に告げます。

果たして、国家が合法的に人間の生命を奪う死刑制度は必要か？ 必要か、必要でないか、どうしてそう考えたのか、 自分の意見を書いて提出しなさい。教諭は、生徒に指示しました。

生徒たちは各自、自分の考えを書きます。人間の生命の尊さについてよくよく知った直後ですから、生徒たちは人間の生命を尊重する選択と意見を書いて提出します。

いかなる事態があつても、国家が人間の生命を奪っていい理由にはならない。

そもそも惨たらしいことをした者に、“死”という永遠の逃げを与えるべきではない。生かして償わせるべきだ。

言い回しはそれぞれ異なりますが、中身としてはだいたいそのよくな選択と意見ばかりでした。

「なあ、お前はなんて書いた？」

ひとりの生徒が、隣に座る友人に訊きました。

「ん？ オレ？ まあ、なんて言うか、惨たらしいことをしたヤツは赦せないけれど、だからってそいつと同じようなことをしていい理由にはならないから、生命は尊重するべきだって、生かして償わせるべきだって書いたよ」

「やっぱり、そうだよなー」

ひとりの生徒は“意を共有できたこと”を認識して喜ぶように微笑んでから、

「お前はなんて書いた？」

自分の側であることが当然であると確信しているヒトの音声で、後ろに座る友人に訊きました。

「ん？ オレ？ まあ、なんて言うか、惨たらしいことをされたヒトの家族とかの気持ちを考えてみたり、そもそも国家が法律で惨たらしいことをしたヤツを守って国民の税金を使って養うとか、なんか殺し得みたいない感じになるから、まったくなくしてしまうのはどうかなのかなと思うなあ。でも、生命は尊重するべきだとも思うから、なんていうか、惨たらしいことをしたヤツに最高刑として“死”で償うか“生”で償うか選ばせたらいいんじゃないかなあ、って考えてみたりもしたよ。でも、まあ、結局、難題すぎて、オレにはよくわからなかった」

「……………ん、あ、え、あ、そうですか」

ひとりの生徒は“意を共有できなかったこと”を認識するや、後ろに座る友人の話の途中から一切の関心を失くしたヒトの微笑みを浮かべていました。そして話が終わったと同時に、次の話へ迅速に移行するための言葉を準備していました。

「でき、昨日発売されたゲームのことなんだけど」

小話・其の七拾へ自称善玉菌(仮題)へ(前書き)

【 “あなた” のために 】

小話：其の七拾へ自称善玉菌（仮題）

《自称善玉菌（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある町の郊外に、時の流れを感じさせる小さい雑貨店がありました。初老の独身男が個人で経営する雑貨店で、朝は出勤の“おとも”に新聞を買うスーツ姿のヒトを、昼はただ喋りたいだけの近所の顔馴染みを、夕方は学業を終えてから週刊マンガ誌やお菓子を求めてやってくる近所の子どもたちを、夜は酒やその肴を求めてやってくる近所の酒飲み連中を、それぞれ相手に商売をして、そこそこ安定的に売り上げています。

雑貨店は、経営主である初老の独身男の自宅を兼ねていました。誇張しても大きいとは言えない店舗兼自宅です。誰かが入店すればすぐに気がつけるので、客があまり来ない時間帯はリビングでお茶を飲んだりしながら過ごすこともしばしばありました。

その日も、リビングでお茶を飲んだりする間をはさむ、いつもと比べて変化のない一日を経て、雑貨店は営業時間を終了しました。いま、時計の針は、午後の十時を六分ほど過ぎたところを指しています。

経営主の初老の独身男は、店舗の戸締りを確認してから消灯し、今日も一日終わったという達成感のような解放感を味わいつつリビングへ移動。のまえにキッチンへ寄り道し、あらかじめ冷蔵庫で冷やしておいた“輸送の途中で凹んでしまい売り物にならない缶入りの酒”を取り出して手に持ち、改めてリビングへ移動。そしてリビングにあるソファアに腰掛けつつ缶入り酒の口を開け、よく冷えた発泡酒を喉の奥に流し込みます。グビグビと満足するまで流しこんでから、「ぷはー」と一息つくついでにテレビのリモコンを操作してテレビを点けます。画面の中では、人気急上昇中の若手芸人が持ちネタを披露していました。面白いかどうかはべつにして、お酒

はすすみます。

はっ、として尿意に気がついたとき、テレビ画面の中に人気急上昇中の若手芸人の姿はなく、代わりに最近とんと見ないなあという懐かしさすら覚える顔の芸人が懐かしいネタを混ぜて聞いたことのないメーカー製の商品を紹介していました。初老の独身男は、胡散臭く映る深夜の通販番組を流し見ながら、頭の片隅で飲みながら寝てしまったかあとを思いつつ、事故を起こすまえに己が膀胱の訴えに従ってトイレへ向かいます。

トイレでの用事を済ませて、けれど眠気は飲んだ酒と一緒に便器の向こう側に流れてゆかず。初老の独身男はあくびを噛み殺しつつ、とりあえず寝るまえにつけっ放しのテレビを消そうとリビングへ向かおうと一歩を踏み出したと同時に、なにか物体が床に落下したときのような音がしました。薄っすらと漏れ聞こえてくるテレビの音とは異なる、機械的ではない生のその独特の気配をともなった音で、どうやら店舗のほうから聞こえてきたようでした。

初老の独身男はその音に関する心当たりを考えて、胸の内では大きく、口の内では小さく舌打ちをしました。最近、近所で古いビルの建て替え工事を行っているから、そこに居住していたネズミが望まれぬ引越しを断行してくれおったか、と。

苛立ちを覚えつつ、確認のために店舗を見にゆきます。そして店舗の照明を点灯すると

果たしてそこには、巨大なネズミの姿がありました。

理解が状況に追い付かず、初老の独身男は一度、目をつぶって深呼吸をしてから、改めてそこを見やります。

黒いスーツで身を包み、黒が主色のデフォルメされたネズミの被り物を頭にした人物が、レジのところ立っていました。

のっそりとした動作で、「ハハッ」という笑い声が聞こえてきそうな笑顔で固定されたネズミの顔が、レジのほうから呆けて立つ初老の独身男のほうに向きます。

「どうも、こんにちは」

落ち着いた渋みある男の音声で、ネズミが言いました。

初老の独身男は反射的に“こんにちは”と返しそうになりましたが、どうにかそれを喉の奥に押し戻して、「警察を呼ぶから“おかしなマネ”はしないでじっとしている」と告げました。

対してネズミは、

「おやおや、警察とはまた穏やかじゃありませんね」

不気味なほどの平静で応じました。

お前が言うな、と初老の独身男が指摘しようとするど、

「あ、ああ、安心してください」

ネズミは察したふうな態度でそれをさえぎって、黒いスーツの内に手をつ込み

初老の独身男は“凶器のようなモノ”が出てくるのではと身構えます。

取り出されたのは、スーツの内から出現しても一切の違和感ないアルミ製の名刺ケースでした。

ネズミは“大人の挨拶”の動作で名刺を一枚、差し出します。

初老の独身男は警戒しつつもそれを受け取り、

「……………“善良な”……………強盗？」

氏名の脇に記載されている肩書き　で、あろうそれに、思わず眉をしかめました。強盗という言葉のまえに、“善良な”という言葉が付いている不自然さを、正常な認識能力がよしとしないのです。

「ええ、そうです。“善良な”強盗です」

ネズミは紳士が一礼するような芝居がかった動きで自身の胸もとに右手をそえて、

「強盗は強盗ですが、あなたから“一方的に”奪うなどという野蛮なことはいたしません」

通販番組のプレゼンターを思わせる断言口調で述べます。

「……………は？」

困惑を通り越して意味がわかりません。初老の独身男の反応は、

じつに素直でした。

ネズミは“それ”も想定範囲内といった平然さで、発言を続けます。

「いま私がこうしてあなたと対面していられるのは“なぜか”、おわかりになりますか？」

「お前が不法侵入してきたからだろう」

初老の独身男の即答に、ネズミは、

「そうです、その通りですっ」

クイズ・ショーで問題に正解した解答者に賛辞を贈る司会者のような軽さで応じてから、

「つまり“こちら”には」

相手の関心を最大限、引き寄せようとする、充分が過ぎてもはや腹立たしい溜めを間に置いてから、

「こうして私が侵入できてしまうセキュリティの脆弱性が、あるわけですよ」

まくし立てるふうに、セリフを一気に吐き出します。

「だから？」

初老の独身男は極めて純粋な言葉を、端的に返しました。だからどうした、と。

そして思わず、こんな状況だというのに、彼は頭の片隅でくくつと笑ってしまいました。この小さい雑貨店に“セキュリティ”なんて小洒落た言葉、ずいぶん不似合いだな、と。ネズミの力のこもった言い回しとあいまって、じつにおかしいです。

「お互いに“うまみ”のある取り引きをしましょう　と、そういうわけですよ」

商談でプレゼンをするビジネスマンのように、固定された笑い顔の奥で“欲”をギラつかせながら、ネズミは述べました。

「強盗に入られてまさか“うまみ”が発生するとは、想像もしなかつたよ」

初老の独身男は想像力の斜め上をゆくネズミの発言に、文字通り

“好奇心”を懐き、
「それで」

ギャンブルに片足を突っ込んでしまっただけの危うさで、しかし訊いてしまいます。

「その“うまみ”というのは？」

「それはですね」

と答えるネズミの顔は、声を上げて笑っているようでした。

そんなネズミ、いわく。初老の独身男にある“うまみ”というのは、この小さい雑貨店のセキュリティ強化とのこと。強盗として侵入してきた自分は、この雑貨店の弱点を正しく認識しており、強盗として“強盗の攻め方”をも熟知しているから、それに対する“的確な守り方”を助言することができる、と。

「なるほど」

初老の独身男は流すように自分の“うまみ”について受け取ってから、

「で？」

気さくなふうを装って、問います。

「そんなふうに手の内を明かして得られるお前の“うまみ”は？」

「あなたが支払ってくれる助言に対する“正当な”報酬　清潔なお金です」

ネズミは“お金でまわる社会”を生きるヒトの礼儀正しい率直さで、さっぱりと答えました。

「助言してやるから顧問料を支払えって？」

ズバリ言う初老の独身男に、

「“商品／サービス”に対する“正当な”報酬　“正当な”対価ですから」

ネズミは最初から一切の変化ない「ハハッ」笑いの顔で、そう応じました。オウム返しのおもちゃを相手にしているかのごとく、これ以外の返答が聞ける“気配”は感ぜられません。

「なるほど」

初老の独身男は真剣に思案するヒトの顔をして、
「ちなみにその“正当な”報酬とやらを数字で表すと、どれくらいなんだ？」

と、まるでネズミの述べたことに興味があるかのようです。

ネズミはスーツの内から電卓を取り出すと、なにかぶつぶつ呟きながら数字を入力し、足したり引いたりをおこなってから、

「今回は”これくらいになります”

言って、結果の打ち出された電卓を提示します。

そこには、強盗が“正当な”と主張して要求してくるには図々しい数字が並んでありました。

初老の独身男は吟味するふうにその数字を眺めてから、

「ちよつと真面目に検討したいから」

と口を開きます。親指と小指を立てた手を耳に当てて。

「一本、電話をしいいか？」

「ちなみに“どちら”に？」

「この店の共同経営者に」

「こちらは個人経営のお店だったかと、記憶しておりますが？」

ネズミは居合い斬りを放つような鋭さで、指摘します。

「え、ああ」

初老の独身男はネズミが目と鼻の先に迫ってくる姿を幻視してしまい、一瞬たじろいでしまいました。二度、三度とまばたきをして、ネズミが一切その場から動いていないのを確信してから、

「確かに個人経営だが、個人経営であるからこそ、友人に金銭的援助をお願いしたりもしるわけさ　わかるだろう？」

察してくれ、と困ったふうに寄せた眉根で語ります。

「お店の運営に関わることはそのご友人に相談してから決めたい、と」

ネズミは確認するように訊きました。

「そうだ」

「なるほど、わかりました」

「それは、電話をしていいと受け取っても？」

初老の独身男の言葉に、ネズミは、

「ええ、かまいません」

それが“正当な”報酬を正しく頂戴するための“正当な”対応である、と述べるように、言葉を返しました。

「じゃあ」

初老の独身男は、電話をするために奥に引つ込みます。

しばしの間を置いてから戻ってきた初老の独身男は、

「じかに会って説明を聞きたいから、こっちに来る　だとさ」

と、電話相談の結果をネズミに報告しました。

それからさらにしばしの間を置いてから、店舗の出入口ではなく自宅の玄関のほうで呼び鈴が鳴りました。

初老の独身男は「友人が到着したらしい」とネズミに断ってから、自宅の玄関のほうへ。

そして待たされるカタチのネズミのところへ、ふたりの人影がやってきました。しかし、そのふたりの中に、初老の独身男の姿はありません。

「おやおやこれはまた物騒な」

ネズミは自らに抵抗の意思がないことを表すために両の手を上げて、ポソリと漏らしました。

拳銃を構えたふたりの警察官の姿が、そこにはありました。

ネズミは速やかに逮捕されました。

翌日の朝の新聞に、ネズミの逮捕に関する記事が極々小さく書かれてありました。“善良な”強盗が逮捕された、と。その内容は、ネズミが成人そこそこの若者であったことから始まり、ネズミの犯したことはまったく肯定できるモノではないが、しかし将来有望で優秀な“セキュリティ・アナリスト/セキュリティ・コンサルタント”たりうる若い人材がこれで失われてしまった、という、どこかネズミを擁護するような気配のあるモノでした。

初老の独身男は、“新聞社／新聞記者”の仕事の速さに感心を懐きつつ、どうにも釈然としないモノを覚えました。けれど、気にしないことにしました。もう過ぎたことだ、と。

気持ちを新たに今日という一日を過ごそう、という想いを懐いてレジ・カウンターのところに置いてある椅子に腰を下ろした　とたん、

「おいおいおいおい雑貨屋あー！」

やかましい酒焼けした声が、朝の清々しい空気をだいなしにして入店してきました。

「雑貨屋じゃない、雑貨店だ。酔っ払い」

初老の独身男は訂正しつつ、

「なんだ？　今日は朝から酒か？」

付き合いの長い常連な中年男に、馴染みの特権たる軽い口調で訊く言葉を投げました。いつもは夜に見る顔を朝から見やるといっのは、どうにも不思議なもので。いつもと異なる理由が知りたくあるのです。

「遅げえよっ！　酒なんぞ飲んでる場合じゃねえから、こうしてここに來てるんだろっがよ！　察しろよ雑貨屋っ」

「雑貨屋じゃない、雑貨店だ。酔っ払い」

初老の独身男は再び訂正しつつ、

「で？」

と訊きます。

「酔っ払いが酒を飲んでる場合じゃないって、なんだ？　ついに内臓が壊れたか？」

「遅げえよっ！　飯にそうだったとしても、なんで俺の内臓事情を雑貨屋に報告しなくちゃならねえんだよっ！　しかもこんな朝っぱらからっ！」

という常連な中年男の言葉に、

「さあ」

初老の独身男は軽く肩をすくめて、興味なさそうに返します。

「こっつのヤロウ……」

常連な中年男はしかしグツと堪えて、ポケットから多機能携帯端末を取り出してそれを操作し、ある画面を表示させて、

「機械音痴の雑貨屋に教えてやるために、わざわざ来たんだよっ！」
と、初老の独身男に見せます。

多機能携帯端末の画面には、ネット上で自らの発言を制限内の文字数で書き記すツールのサービスを利用している“どこかの誰か”の発言が表示されてありました。

我らの“善良な”同志たる優秀な若い人材からの魅力的な提案を蹴り、我らの“善良な”同志たる優秀な若い人材から“これから”の選択を奪った愚かな雑貨屋に、我ら“善良な”同志は有する能力を惜しみなく発揮して“わからせる”ことを、ここに宣言する。

その文面を読んで、初老の独身男は、

「……で？」

泥酔した友人に辛抱強く付き合うヒトの表情をして、言葉を投げます。

「だからなんなんだ、酔っ払い」

「で、じゃねえよっ！ 昨日の今日だぞっ？ 明らかに雑貨屋のとだろっ、これ！」

常連の中年男はケンカを吹っかけるような勢いで肉薄し、語気を強めて指摘しました。

「確かに間違いなく雑貨屋のことを言っているんだろっ、 が、
うちは雑貨屋じゃない、雑貨店だ」

初老の独身男は再々訂正して、

「まったく、どこかの雑貨屋はお気の毒なことだな。同じく雑貨を扱う者として、そのどこかの雑貨屋にはお見舞い申し上げるよ」
他者に対する同情の色が浮かぶ顔で、そんなことを述べます。

「こっつの、頭の固い老人めっ」

常連の中年男は額に薄っすら血管を浮かべ、奥歯を噛み締めてか

「もう知らんっ」

唾を飛散させてそう宣言し、バンツとレジ・カウンターのの上に勢いよく拳を叩きつけ、

「いつものっ！」

と、常連の特権たる要求をします。叩きつけられた拳が開かれ、“いつもの”を得るのにピッタリな金額の硬貨がレジ・カウンターの上に控えめに落とされました。

「朝から酒かよ、酔っ払い」

初老の独身男からのそんな苦言を、しかし常連の中年男は「ふんっ」と鼻を鳴らして受け流します。それから常連の中年男はレジ・カウンターから離れて冷蔵陳列棚の前まで移動し、一切の迷いない拳動で冷蔵陳列棚の扉を開き、ハーフサイズのビン・ビールを取り出します。そして小慣れたかんじで奥歯を栓抜きのように使ってビン・ビールの口を開け、そのままグビツと一口、喉の奥に流し込みます。

店の中で飲むな、と初老の独身男が注意することはけれどなく。

夜はだいたいちよつとした立ち飲み屋のようになるので、いまさら気にならないのです。

「まあ、仮に、酔っ払いの言う通りだったとして」

初老の独身男はいちおう閑話休題して、

「こんな堂々と“やらかす”って宣言しているヤツらを捕まえられないほど、この国の警察は無能じゃあないだろうさ」

さしたる真剣さもなく述べました。

「はっ」

常連の中年男は鼻で笑って、

「この国に有能な権力があつたら、禁酒してもいいぜ」

と言い、グビツと一口、ビールの苦味とつま味と炭酸が喉の奥に流れていくのを味わいます。

数日後、常連の中年男が禁酒を断行する理由のひとつがなくなり

ました。

一夜にして、小さい雑貨店の商品すべてが消失したのです。

初老の独身男がいつも通りの決まった時間に目を覚まし、毎朝の習慣となっている開店の準備をおこなおうと店舗に足を踏み入れたら、異常にキレイさっぱりしていたのです。販売するべき商品が、ひとつも見当たらないほどに。

初老の独身男はすぐさま警察を呼びつけました。そしてどうにも収まらない気持ちのままに、言葉を投げつけます。「あなた方がこれほど無能だとは思わなかった！ この税金泥棒めっ！」と。

いつこうに落ち着く気配の見えない初老の独身男に、現場担当の警察官は対応しきれず。その日の内に、“そちら”の処理が専門の部署の人材が派遣されることになりました。

カッチリとしたスーツに身を包んだ、いかにも頭脳労働担当といった風貌の男がふたり、どこか小慣れたふうな所作で、今回のことに対するお詫びなどの言葉を口にしながら、それぞれ名刺を差し出してきました。

初老の独身男は、いちおうそれを受け取ります。

スーツ姿の男のひとは改めて今回のことに関する“定型文”を口にし、それから恥を告白する深刻な顔をして、「我々も完璧ではないのです」と一定の理解を求めました。

「あなた方が完璧ではないことは、今回、身を削ってよくよく知ることができた。そこには理解を示そう」

初老の独身男は厳しく眉間にシワを刻んで、腹の底から重々しく音声を吐き出して言います。

「しかしそれで、はいわかりましたと言って、あなた方にお茶をふるまえるか？」

スーツ姿の男のふたりはかしこまった顔をして肅々と、初老の独身男の言葉を受けます。そして絶妙な一拍の間を置いたところで、

「こちらと致しまして」

と述べます。

今回のことは重く受け止め、犯人を逮捕することに全力を尽くす所存です、と。

それから「しかし」と言葉を継ぎ、

「しかし現状、犯人はいまだ捕まっております。で、ありますので、再び“こちら”が狙われる可能性があります。“こちら”が営業を再開する際の安全、警備に関しまして、お話をさせていただきたく」

そこで瞬と相手の顔色をうかがい、話を先に進めて大丈夫そうだと判断し、述べます。

「今回は外部から“今回のこと”に関して優秀な能力を発揮する“セキュリティ・アナリスト/セキュリティ・コンサルタント”を呼び、参加していただき、より万全な警備プランを提示させていただきます。ちょうど先日、とても優秀な人材と“契約/取り引き”を交わしたところなのです」

初老の独身男はあまり期待していないヒトの目でふたりを見やりながら、口を開きます。

「その外部から呼ぶのは、いったいどんなヒトなんですかね？」

「はい、ええ、じつは同行しております。いま呼んできます」

そう言ってスーツ姿の男のひとりが席を外し、

「呼んできました」

すぐに戻って来ました。かたわらに、新たな人影をともなって。

初老の独身男は吟味するヒトの目を、そちらに向けました。

そこには、固定された笑い顔がありました。

「ハハッ」

小話・其の七拾巻へゆびパッチン（仮題）へ（前書き）

【魔法のパッチン】

小説：其の七拾巻へゆびパッチン（仮題）

《ゆびパッチン（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある町の、とある公園のベンチに、ふたり分の人影がありました。ひとりは大量生産のハムと野菜のサンドイッチを、ひとりはお弁当さんのからあげ弁当を、食していました。五〇〇ミリリットルのペットボトルの、甘さひかえめの紅茶と、濃いめの烏龍茶が、それぞれ脇に置いてあります。

「なんだかなあー」

からあげ弁当に箸をつけているひとりが、やや日射しの強い青空を見上げながら、ポソリと呟きました。

「んー？ どうしたー？」

サンドイッチをもしゃもしゃと咀嚼していたひとりが、サンドを嚙下して、紅茶を一口ごくりと飲んでから、応じました。

「なんかさ、こう」

からあげのヒトは、箸を持っていないほうの手の、親指と中指をうまく使ってパチンと音を鳴らし、

「これで世界がガラリと変わったりしないかなあーと、思ってみたりしてさ。心情的にというか、ご時世的にというか、ね」

青空の中をチマチマと横切る飛行機の影を熱心に見やりながら、

「ま、変わるわけないんだけどさ」

そう述べました。

「ふーんむ」

サンドイッチのヒトは神妙そうに話を聞いてから、親指と中指を不器用に使ってペチンと気の抜ける音を鳴らし、

「ほうほう、なるほど、なるほど、なんとなくわかった」

いまだ飛行機の影を目で追っているからあげのヒトを、横目でチラリとうかがってから、

「確かに変わらないね　受け身だと」

ニヤリ顔で言います。

「でも、いまので、ひとつ変わったことがある。いや、変えることができた、と表現するべきなのかな。能動的に」

「んん？　なにを言ってるんだ？」

からあげのヒトは疑問顔で、飛行機の影からそちらへ視線を移し

「ああっ！」

自分のからあげ弁当の主役たるからあげを、いままさに喰らわんとするサンドイッチのヒトの姿を発見しました。

サンドイッチのヒトはイタズラを成功させた子どもみたいな顔をして、言います。

「サンドイッチが主役の私の食事に、からあげという一品が加わった。これは間違いなく、“世界ノ私の食事”が変わったと表現できるだろう？」

小話・其の七拾弍へそつせん(仮題)く(前書き)

【時と場合によりけり】

小説：其の七拾式へそっせん（仮題）

《そっせん（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある街の、とある商店街の、とある電気店の展示してあるテレビの画面の中で、

「ええ、はい」

質のよいスーツを着た初老のヒトが、

「で、ありますから」

努めて真摯ふうな顔をして、

「国民のみなさんには、省エネをお願いしたいわけでありませう。わたくしも、この国の一員として、一国民として、そっせんして取り組んでゆく所存であります」

そう述べました。

テレビの場面が切り替わり、テレビ局のスタジオが映し込まれます。

そこにいるニュースキャスターとコメンテーターが、初老のヒトの発言に対する意を異口同音で述べました。いまのご時世、省エネはとても重要なことだ、と。

それからしばし経過した、ある日。

テレビ画面の中で、質のよいスーツを着た初老のヒトが、ペンとメモ帳やボイス・レコーダーやマイクを持った複数のヒトに囲まれて詰め寄られていました。刺々しい熱のある雰囲気、画面を通してても伝わってきます。

複数のヒトの中の誰かが、憤怒と切実さと情けなさに対する嘆きの混在する音声で言いました。

「この大事なときに、この国の運営の責任者である“あなた方”が省エネ・モードになってどうするんですかっ！」

それを受けて、しかしこの国の運営の最高責任者である初老のトは、

「ええ、ですから」

まるでそれが知的な振る舞いであるかのような稚拙な冷静さで、応じます。

「わたくしも、この国の一員として、一国民として、そっせんして省エネに取り組んで」

テレビ画面が暗転しました。

省エネのために、テレビの電源が落とされました。

小話・其の七拾参へ気軽な計画（仮題）（前書き）

【“ 簡単便利 ” には慎重に】

小説：其の七拾参へ気軽な計画（仮題）

《気軽な計画（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある町の、とある喫茶店のテラス席に、ふたりの若い男の姿がありました。ひとりはブラックのコーヒーを、ひとりはミルクと砂糖がたっぷりのミルクティーを、それぞれ味わっています。

「お前、身体壊すんじゃないかというくらい、異常なほどバイトをしているけれど、そこまでして手に入れたいモノでもあるのか？」
パリっとしたスーツに身を包んだ男が、訊きました。言葉を発したあとの口で、コーヒーを一口、味わいます。

「もちろん。それはそれはすごいモノを手に入れるために、ぼくは干からびちゃうほどの汗を日夜びちゃびちゃ流しているのさ」
着古したシャツにジーンズという軽い身なりの男が、応じました。言葉を発したあとの口で、ミルクティーを一口、味わいます。

「ふんむ。車、は、たぶんもう五、六台、買えるくらいは稼いで貯め込んでいるだろうから……、一等地の一国一城の主にならうとしているのか？」

「いや、そんな小さいモノじゃあないよ」
「ほう。じゃあ、その小さくないモノとは？」

スーツに身を包んだ男は興味深げに、「ぜひとも教えてほしい」とやや身を乗り出して問いました。

軽い身なりの男は焦らすように、自称セレブ的な優雅さでミルクティーを深々と味わってから、「手に入れたいのには」と口を開きます。

「世界、さ」

「画材と額縁の専門店を？　なんでまた？」

「違う！　違うよっ！　ぜんぜんまったく違うよっ！」

軽い身なりの男は、慌てたふうに訂正を入れます。

「“世界”のあとに“堂”って言ってないでしょっ。違うよ、ぼくが手に入れたいの“この世界”であって、画材と額縁の専門店の世界じゃあないよっ！」

「……コノセカイ？ 聞いたことないなあ。どういうところなんだ？」

スーツ姿の男は眉間に“疑問のシワ”を刻みつつ、コーヒーをすすります。

「なんで片言なのさ。知らないわけがないだろう。“この世界”だよ。英語で言うところの、ザ・ワールド」

「……………んん？ いまなんて？」

「だ・か・ら！」

軽い身なりの男はどうにか辛抱強さを発揮して、教えます。

それから、同じようなやり取りをウンザリするほど繰り返し返して。

「それはそれはまた……お前、身体を休めたほうがいいんじゃないか？ 疲れているんだよ」

スーツ姿の男が、他者を気遣う声色で言いました。とてもとてもとても優しさある眼差しと表情をしています。

「疲れて妄言を吐いているわけじゃあないっ。ぼくは正気だし大真面目だ！」

「大真面目に、“この世界”を手に入れようとしていると？」

「うん」

軽い身なりの男の子どもみたいな素直さある返事に、

「そうかー」

スーツ姿の男は全面降伏してすべてを受け入れる構えのヒトのフランクなノリで応じて、とりあえず一口、コーヒーをすすります。

そして意外な事実を知ったというふうに、

「それにしても、まさか“この世界”が、バイトで貯めた金で買えるモノだったとはね」

大根役者の芝居のような“驚き”の音声で、言いました。

「いやいや、なにをおっしゃる」

軽い身なりの男は、一発屋芸人の“一発芸ノインスタントなお笑い”を見たヒトのような笑みを浮かべて、

「“この世界”が、お金で買えるわけないでしょ」

しかしキツパリと冷静に、そう指摘します。

「……………“この世界”を手に入れるために、バイトして金を貯めているんだろ？」

「いや、確かに、“この世界”を手に入れるために、お金を貯めているけれども。お金で直接、“この世界”を手に入れるわけじゃないよ」

「……………どゆこと？」

「“この世界”を手に入れるために必要な複数の“道具ノツール”を買うために、ぼくはお金を貯めているんだよ」

「まさかそんな“道具ノツール”が売っていたとは、驚きだ」

「いやいや、キミも日常的に使っていると思うよ。ヒトによっては、依存しているとも言えるかもしれない」

「パソコンとか、携帯電話とか、か？」

「ほぼ正解」

「ほぼ？　じゃあ、大正解は？」

「パソコンとか携帯電話とか、ネットに接続できる機器で使用する、実名なり匿名なりで登録して制限以内の文字数で発言を吐くコミュニケーションのサービスのサービスタか、実名で登録して実在の個人の意見やステータスを発信するコミュニケーションのサービスのサービスタとか、キーワードを入力してそれに関連する情報をネット上から検索してその関連情報を生成する検索のサービスのサービスタか」

「……………それが、“この世界”を手に入れるために必要な複数の“道具ノツール”？」

「そうだよ。だから、バイトをしてお金を貯めているんだ。そのお金で株をやって資金を増やして、それで“それら”のサービスの主軸の会社を自分のモノにする。だから株に関することも現在、独学

だけれど猛勉強中さ。キミの勤め先が、いつの間にかぼくのモノになっっている日も遠くないかもね」

「そうだったときは、社員の待遇向上をお願いするよ。ところで、どうして“それら”のサービスを自分のモノにすることで、“この世界”が手に入れられるんだ？」

「呟きとか発信の情報の関連の方向性や、検索したワードに関する情報の関連の方向性を、利用者には自覚できない程度の些細さで意図的に形成、生成したら、どうなると思う？」

「さっぱりわからん」

「下降にある大きな流れの河の、山奥にある小さな源流を握ったら、それはもう下降にある大きな流れの河を握っているということにもなるでしょう？ 事後である“いまある流れ”に手を加えるのではなく、事前に“流れそのもの”を自分の好きなカタチに形成、生成してしまう。検閲や規制による“支配”ではなく、形成と生成による“誘導”で、“この世界”を手に入れるのさ」

「んんー。わかったような、わからないような……」

「今日なんとなくキミは、ぼくに一千九百八十円のスーパー・デリシヤス・グレート・チョコパフェをごちそうしたい気分になる。そういうシチュエーションに違和感なく自然と陥る。って、ことさ。ぼくが“それら”のサービスを自分のモノにしたら、ね」

「ふんむ……。お前に一千九百八十円のスーパー・デリシヤス・グレート・チョコパフェをごちそうしたくなる世界、か。まったく歓迎できないな」

「阻止したいなら、手がないわけでもないよ？」

「ほう。参考までに、ご教授願おうか」

軽い身なりの男はメニュー表のある一点を指で示して、

「この、五百円の普通のチョコパフェをだね、キミは取り引き材料とするわけさ」

と提案します。

「五百円の普通のチョコパフェで、一千九百八十円のスーパー・デ

リシャス・グレート・チヨコパフェをごちそうしたくなる世界を阻止するか、それとも一千九百八十円のスーパー・デリシャス・グレート・チヨコパフェをごちそうしたくなる世界を受け入れるか、どちらにする?」

「そりゃあ、どちらにすると訊かれたら、五百円の普通のチヨコパフェをお前にごちそうするよ」

「なるほど、よくわかった」

軽い身なりの男は大仰にうなずいてから、スツと右手を頭上に掲げます。

「店員さんっ！ チヨコパフェ追加でお願いしまーすっ！」

小話・其の七拾四へとても小さな輪の内側で（仮題）（前書き）

【裸のような王様のような のような 】

「そうかー」

もうひとりの男は、乗車するバスの到着は「まだかなあー」とい
うふうに道路の先へ視線をやりつつ、

「頭の中で天才なのはよくわかったよー」

鼻をかむような気さくさで、

「その勢いのまま、次は頭の外でも天才になるんだねー」

頭を抱える知り合いの男の肩を、ポンと軽く叩きました。

* * *

特定の輪の中で頂点に君臨し、

その椅子の座り心地に満足しては、

その椅子の地点より先へ進むことができない。

小話・其の七拾五へなるほど（仮題）（前書き）

【戦略的コミュニケーション】

小説：其の七拾五へなるほど（仮題）

《なるほど（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある街の、とある学園にある家庭科調理室に、授業の一環として炒め物を調理している生徒たちの姿がありました。

「熱っ！」

ひとりの女生徒が、悲鳴のような声を上げました。負傷したヒトのように、顔を押しさえています。

他の女生徒たちが、それぞれ心配するような言葉を口から出しました。そう言うことが“お約束”であるような、どうにも奇妙な空気感です。

ひとりの女生徒が声を上げたのは、どうやら炒め物の油が、極々微量、顔にはねたことが理由のようでした。日常的に料理をおこなうヒトに、「どう思いますか？」と意見をうかがえば、ほぼ満場一致で、「とくに声を上げるほどのことではない」という言葉が返ってくることでしょう。

だというのに。女生徒は、念のために病院へ行くことになりました。

女生徒がいつこうに負傷者然とした態度を終了しないことと、学校側が“顧客”の機嫌を損ねかねないリスクを負いたくないという姿勢による、ひとつの結果でした。

「マジかよ！あの程度で病院のお世話になるとか、どんだけ弱いんだよ」

ひとりの男子生徒が場の空気を察することなく、素直な感想を口にしました。

家庭科調理室にある“意思”のほとんどが、胸の内で意図せず首肯します。

「サイテー」

声を上げた女生徒とよく一緒にいる顔のひとりが、憤怒の滲む音声で言いました。男子生徒を、軽蔑の眼差しで見やります。

男子生徒はどのように対応したらよいのか考えつかず、とりあえず微笑んでおきました。

声を上げた女生徒が、病院へ行くために家庭科料理室から退室しました。よく一緒にいる顔のひとりも、その付き添いとして退室します。

家庭科調理室が、「ふう」と息を吐いたような雰囲気になりました。

さきほどの男子生徒が、

「なるほど」

なにか“わかった”ふうに言いました。

「なるほど、つてなにが？」

男子生徒の友人が、訊きました。

「ん、いやー、いまさらながら、夏場にパンツ一丁で油はねに耐えながら料理していたオレが、じつは救急車を呼ぶ権利を獲得していたんだあということに、いまさっきのおかげで気づいて」

と、しみじみ述べる男子生徒に、「なにが？」と訊いた友人と、彼の担当の教諭が、そろって深刻そうな顔をして言います。

「頼むから、お前までメンドウにならないでくれよ」

「頼むから、お前まで“あんなふうに”ならないでくれよ」

小話・其の七拾六へありえないこと（仮題）（前書き）

【あなたのは違うのです】

小説：其の七拾六へありえないこと（仮題）

《ありえないこと（仮題）》

とある時代の、とある国で、とある事故が起きてしまいました。そのとある国の政府は、そのとある事故を責任の所在を明確にしないまま速やかに処理してしまいました。

政府のその対応には、国の内外から批判的な意見が相次ぎました。

という外国の事故とそれに対するその国の政府の姿勢に関する、テレビ番組の街頭インタビューが、とある時代の、とある国の、とある街でおこなわれていました。

「我々の国ではありえないことです」

インタビューのマイクを向けられたヒトは老若男女問わず皆、口をそろえて、そう述べました。それから同情的な苦い笑みを浮かべて、これまた老若男女問わず皆、口をそろえて述べます。

「しかし“あの国”は国民に政府を選ぶ権利がありませんから」

という街頭インタビューの模様を流す外国のテレビ番組を、ソファーに身体を沈めて見ていたラフな身なりの男は、ピン・ビールを一口、喉の奥に流しこんでから、

「あんたたちも、“我々の国ではありえない”ってことになってるぜっ」

と、テレビ画面に向かって、ゲップと一緒にそんな言葉を吐きま

した。
「ちょうどさっき、ビール買いに行った帰りに、あんたたちの政府の姿勢に関するテレビ番組の街頭インタビューを受けたから、オレがそう言ってやったのさ」

男はそこでさらにビールを飲んで上機嫌に顔を赤くしてから、お

もむろにタバコを取り出します。そして一本、口にくわえ、マッチを擦って火をおこし着火。深々と吸ってから、紫煙を吐き出し、その次にやっと言葉が継ぎます。

「祖国が困難に直面しているってえのに自分の座る椅子の質ばかり気にして責任の所在をなすりつけ合って、祖国が直面している困難だけはとりあえず一丸となって解決しようとしやしない、“あの困難”に対してあんな対応をするなんて。我々の国ではありえないことだ　ってな」

というふうにお酒を飲んでタバコを吸ってテレビに向かっていろいろ言えるある外国の風俗を耳にした、とある時代の、とある国の、とあるヒトは、

「我々の国ではありえないことだ」

と、閃光が煌く夜空を見上げながら、言葉を漏らしました。

「そんな優雅な余裕は、とっくの昔に失われてしまったのだから……」

土砂降りの雨がごとく夜空に注ぐ対空砲の曳光弾の明滅を見やりながら、自分の生まれ育った街のどこかに爆弾が落ちた破壊の音を聞きながら、その言葉を漏らしました。

小話・其の七拾七へいんたびゅー（仮題）（前書き）

【 “それ” を扱うのは 】

小説：其の七拾七へいんたびゅー（仮題）

《いんたびゅー（仮題）》

理想と現実の表情は、時に似ている。

* * *

「本日は、よろしくお願い致します」

その男は、やや緊張した面持ちで、対面に向かって一礼しました。

「こちらこそ」

向かって右から、厳格さを感じる鋭い音声が応じました。

「こちらこそ、よろしくお願いしますね」

向かって左から、温厚さを感じる穏やかな音声が応じました。

その男は一度、手にしているペンとメモ帳を握り締めてから、

「それでは」

この場における自らの使命を果たすために、口を開きます。

* * *

“カノちから”について、どのようにお考えですか？

「わたしが、“カノちから”そのものだ。それ以上でも以下でもない
「い」

右にある音声が、とくに主調するでもない平坦な口調で述べました。
た。

「わたくしは、ご存知のように元が“空っぽ”ですから、自らに
カノちから”そのものが備わっているとは考えていません」

左にある音声が、“自ら”を正しく理解している“わきまえた”

落ち着きと余裕ある口調で述べてから、

「わたくしにとつての“カノちから”とは、様々なヒトたちから“気持ちノ少しずつ”分け与えてもらうものであり、その結果です」「大切な“それ”に対する感慨と愛着のある言葉遣いで、

「ですから」

と、継ぎます。

「Petit a petit, l'oiseau fait son nid. / 小鳥は数日をかけて巣を作るノちりも積もれば山となる” これこそが“カノちから”であると、わたくしは確信しています」

* * *

“不要である”との声が一部からありますが、そのことについては、どのようにお考えですか？

「昔から投げられる言葉ではあるが、本当にそうであるなら、いまの世まで残ることなく、とうに廃れているだろう」

右にある音声は、わかりきっていることへのあえての問いに努めて応じる、若干の嫌を滲ませて、そう述べました。

「本来はわたくしも含めて“不要である”べきだと、そう思います。しかし現状が“それ”をよしとしないのです」

左にある音声は、歯がゆさを噛み締めるように述べてから、

「いますぐにでも“あるモノ”が廃れてくれたら、事は漸進するのですが」

と、極めて意図的に、右のほうへそんな言葉を投げます。

「まるで、わたしが、その“漸進”を妨げている要因であるかのよくな物言いだな」

「そう聞こえてしまう“思い当たり”が、あるのでは」

「なにを言う。“こちら”は、“そちら”に対しては莫大な出資を

し、ときには“カノちから”をもちいて、“そちら”の活動を援助している」

「確かに、それは事実ではありません。しかし、さきほど述べたように、本来は“不要である”のがわたくしなのです。“あるモノ”がもたらす“ひとつの結果”を根絶するために、わたくしは活動しているのですから、そもそも“あるモノ”がなければ、“そちら”の援助も不要となります」

「“そちら”の解釈、認識、意見を、否定するつもりはない。ただ、その“あるモノ”を必要とする存在があるのも“ひとつの事実”であり、結果的に救われる存在があるのもまた“ひとつの現実”だ。“そちら”を必要とする存在があるように。それが“現状”だ」

* * *

“正義”について、どのようにお考えですか？

「神がどこの誰であるのか」と信仰ある者に問う、“勇敢さ／不礼さ”だな。……まあ、わたしそのものに信仰はないが」

右にある音声は、やや慎重な姿勢でそうこぼしてから、

「“どこかの誰かの正義”が、“わたしの正義”。それ以上でも以下でもない」

と、主調する感のない平坦な口調になって述べました。

「信念」と言いたいのですが、正直、もう、よくわかりません。

“ある信念”が、“不要である”べきものを必要とってしまうことを知っていますから」

左にある音声は、その言葉をこぼしました。困難に挑み続けたことによる疲弊の色が、滲んでいます。

「ただ」

と、左にある音声は、諦め色の一切ない口調で続きます。

“Petit a petit, l'oiseau fait

t s o n n i d . / 小鳥は数日をかけて巣を作る / ちりも積もれば山となる” “わたくしの正義” はそこにあると、そう思っています”

* * *

「本日は、ありがとうございました」

無駄に力んだ手でペンとメモ帳を持っていたその男は、対面に向かって一礼しました。

「ふんむ」

右にある音声はそう感じました。

「いえいえ、こちらこそ、貴重な経験ができました。ありがとうございました」

左にある音声はそう感じました。

* * *

ヒトが去ったあとの温もりがまだ残っている椅子の、対面にあるソファーに、ふたつの影がありました。

ソファーの右側にある影は、最も多く流通し、最も多くの生命を奪った兵器とされる突撃銃でした。

ソファーの左側にある影は、一定水準に達した文明文化を有する国では至るところで目にできる募金箱と称される箱でした。

小話・其の七拾八へ浦島太郎は鏡をのぞいて真を知る（仮題）へ（前書き）

【ヒトのふり見てなんとやら】

小説：其の七拾八（浦島太郎は鏡をのぞいて真を知る（仮題））

《浦島太郎は鏡をのぞいて真を知る（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある街の、とある駅まで続く道を、ふたりの男が喋りながら歩いていました。

「てさ」

ひとりの男が、多機能携帯端末を操作しながら言いました。

「へえー、そうなんだー」

もうひとりの男は、そう応じつつ、ふと聞こえたジェットエンジンの音に空を見上げて飛行機の影を目で追います。

「それでさ あっ」

手元の端末から目を上げて隣に話しかけようとした男が、

「クソ、腹立たしい」

突然、悪態を吐きました。

「ん？ どした？」

空の機影が“なにであるか”を脳内検索していた男は、不意と隣から聞こえてきた“それ”に、空から隣へ視線を移して訊きました。
「ほら、あれ、“パクリの国”のヤツらだ」

悪態を吐いた男が顎で示した先には、“こちらの住人”ではないとわかる異文化を身にまとった複数の人物の姿がありました。

「“世界共通の規定”を守らずに、“こちらの国”の“優れたモノ”を“マネノコピー”した拳句、悪びれも恥じらいもせず“これは”“わたたくしのオリジナル”と言い張る まさに盗人猛々しいヤツら。よくも陽の下を歩けるものだ」

「まあ、キミの気持ちは理解できるけどさ」

「けど？ お前はヤツらの肩を持つのか？」

「いや、それはない」

「じゃあっ」

「猿真似を一步に、アイデンティティへ至る」。ワガママな子どももの成長を見守る母親の境地で接しよう、というだけさ。“彼らの国”はまだ幼いのだから

「んー」

「まあ、それはそれとして。さっき、なにか言いかけていたけれど？」

「ん、ああ」

ひとりの男は思い出したように多機能携帯端末を操作して、言います。

「昨日、“動画投稿共有サイト”で“いい音楽”を“発見”したんだよ。ちよつとまえに発売されたやつらしい。アップロードした“どこかの誰か”には感謝だな。あまりに“いい音楽”だったから即行でダウンロードして　いま聞かせてやるよ」

小話・其の七拾九へここに存在していたのです（仮題）（前書き）

【ヒトは疑問の答えを知りたがる】

小説：其の七拾九へここに存在していたのです（仮題）

《ここに存在していたのです（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある場所に、複数の人影がありました。円卓を囲むように座しています。

「これは……その、なにか“この形状”に意味があるのですか？」
影のひとりが、遠慮がちに訊きました。その眼差しは、円卓の上に向けられています。

円卓の上には、“なにか”の設計図と思しきモノが置かれてありました。

「見てくれに意味など、ないっ！」

ひとりの影が、断言する口調で言いました。

「……では、……あの」

影のひとりはおずおずと手を挙げて、
「意味のないモノに、この莫大な費用を投じることでしょうか？」

相手に畏れを懐いているヒトの口調で、しかし最後の視線、退くことなく指摘します。

「……その、違うところに“莫大な費用”を投じるべきではないかと思うのですが」

「“意味がない”ことに意味があるのだ」

畏れを懐かれているひとりの影は、
「より具体的に言うなら、“いまの我々にとって意味がない”ことにな」

これからを見据えているヒトの揺るぎない姿勢で、そう述べました。

* * *

とある時代の、とある場所に、複数の人影がありました。揃って、同じほうを見やっています。

複数の人影の眼差しの先には、“あるモノ”がありました。

「じつに形容し難い……“アレ”は、いったいなんなのでしょう？」

影のひとりが、ポソリと疑問をこぼしました。眼差しの先には、かろうじて建築物であろうと推察できる“あるモノ”があります。

「なにか儀式を執りおこなう神殿とも推測できますが……いえ、それを知るために私たちはここにいるのですから、憶測で論を広げられません、調べましょう」

と言つて、影のひとは、プレゼントを目前にした子どものごとき輝きある瞳を“あるモノ”に向けました。

「そうですね」

影のひとは首肯して同意を示し、真摯な眼差しで“あるモノ”を見やりながら述べます。

「なぜ“彼ら”の“国ノ文化ノ文明”が滅んだのか。それを知り、そこから学ぶことで、いまの私たちが抱える困難を解決できるかもしれない。少なくとも確実に、ヒントはそこにあるはずですから」

とある時代の、とある場所　かつて国が栄えていた、いまは意味不明の遺跡群がそびえる場所に、過去を知り、過去から学ぶために集まったヒトたちの姿がありました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある場所で、
「いまの我々にとって意味がない”このことは、未来に対する叫びなのだ”」

国の運営の最高責任者たる人物が、一切の疑念を持っていないヒ

ト特有の妙な説得力がある言葉遣いで述べました。

「未来の者たちに、我々が確かにここに存在していたと知ってもら
うための」

小話・其の八拾へ夢の国（仮題）（前書き）

【幻想、現実、どちらの“ユメ”を】

小話：其の八拾（夢の国（仮題））

《夢の国（仮題）》

木々の葉々の間から切れ切れと光の差し込む森の中の、道なき道を意志ある足どりで歩む、ふたりの人影がありました。

ひとりは、まだ幼さの残る少年でした。ボロを着ていて、清潔とは言えない身なりをしています。

もうひとりは、さらに幼いふうのある少女でした。ボロを着ていて、清潔とは言えない身なりをしています。頭には生花を編んで作ったと思われる綺麗な髪飾りがありました。乙女の嗜み、意地が、そこから感ぜられます。

ふたりは、少年と少女は、血の繋がった兄妹でした。とある貧富の格差が激しい国の、とある貧民街で生まれ、そして育った、いまはふたりだけの家族です。いちおう両親はありましたが、わずかばかりの生活資金を得ようとふたりを売ろうとし、けれど人身売買人のところへ行く途中で悪い連中に襲われ “たぶん” 死んでしまいました。“たぶん” とはつきりしないのは、両親が襲われている隙にふたりが逃げ出したからです。悪い連中からではなく、自分たちを売ろうとしている両親から。

いま、ふたりは、目的を持って歩んでいます。まだ両親があつて貧民街で暮らしていた頃に耳にした、楽しみ溢れる誰もが笑顔の“夢の国”があるという話。そのときはどうせただの夢物語と信じていませんでしたが、偶然にも実際に行ってきたというヒトの自慢話を聞き、どうやら実在するらしいと確信を得たふたりは、両親から解放されたという勢いに強く背中を押されたのもあつて、“夢の国”を目指すことにしたのです。進むべき方向は、実際に行ってきたというヒトの自慢話から知れました。あとは一步を踏み出し、また一步を踏み出し、踏み出し続けて、歩みを進めるだけなのです。

道のりは決して楽ではありませんでした。しかし、貧民街で暮らし生き抜いてきたふたりには、音を上げてしまうほど致命的に苦しいというモノではありませんでした。なにより夢を懐いて一步を踏みしめているので、期待に胸が高鳴るばかり。もうふたりの中には“止める／諦める”という発想それ自体が存在していませんでした。そして。

深い森の長い道なき道をついに抜けたふたりの目の前に、“それは現れました。”

見上げた空との間に真一文字引くような高い石の壁が、不動の構えでそこにありました。右に左に目を凝らしてみても、壁の終わりは見えません。

少年と少女は、期待を込めた眼差しで石の壁を見やります。しかし、これが“夢の国”であると教えてくれるようなモノは見あたりませんでした。

ふたりの胸の内に、不安めいた焦燥感が生じました。それに先導されるがごとく、ふたりは壁に歩み寄ります。そして可能性を妄信しているヒトの必死さある顔をして、壁に手をやります。探るように。かきむしるように。

すると。

ふたりの正面、石の壁の表面に、書物を開いたくらいの大サイズの厚みのない白い“光の窓”が出現しました。

突然の出来事に、少年はビクツと身体を震わせ、少女は驚きのあまり体勢を崩して地べたにペタンと尻餅を着いてしまいました。

「おや、驚かせてしまったようですね。申し訳ありません。大丈夫ですか？」

気遣わしげな声が、どこからか聞こえました。

少年と少女は怯えたふうに辺りを見回します。

「こつちです、こつち」

という声に合わせて、石の壁の表面にある“光の窓”に“簡略化された二頭身のヒトの絵”が現れました。道化の衣装を着たそれは、

遠くのヒトを呼ぶかのように手を振る動きをしています。

少年と少女は、目の前で起こっている事態が事実であることを確認するように互いの顔を見やりました。そしてこれが事実と承認するようにならずき合ってから、慎重な動きで“光の窓”に視線をやります。

「怪我はありませんか？ 大丈夫ですか？」

ふたりが確かに“自分”を見やっていると認識しているかのよう
に、道化のヒトの絵が念を押すように訊きました。

少年と少女は驚きたじろぎつつ、大丈夫という意味で首肯して見
せます。

「そうですね。それはなにによりです。 が、なにかありましたら
遠慮なく言ってくださいね」

ふたりは再度、首肯して見せます。

「では」

道化のヒトの絵は、仕切りなおすように「コホン」と咳払いする
動作をしてから、本来の与えられている役割を演じます。

「ようこそ我が国へ！ 入国をご希望ですか？」

少年と少女は、力強く首肯して応じました。

「では、こちらへ」

道化のヒトの絵が招き入れるようにうやうやしく頭をたれると、
石の壁の表面にある“光の窓”が静かに形状を変えます。窓が、扉
になりました。

少年と少女はおっかなびっくりしつつ、その輝かしい“光の扉”
へ

白光の暗転。

広がる“純白の闇”。

少年と少女が“光の扉”へと一步を進めた次瞬、ふたりの視界は
眩い光に塗りつぶされました。数瞬を消費して、ふたりの視界は眩

さから解放されます。しかし薄く目を開いた先に見えるのは、遠いのか近いのか不明確な“眩くない光”だけでした。周囲には一面、“純白の闇”が広がっていました。

その不可思議な未知なる体験に、少年と少女は“恐怖/畏怖”に似たモノを懐きました。どちらともなく相手の手を取り、互いにぎゅっと握ります。

「それでは、出入国管理所までご案内します」
至近距離、右のほうから声がしました。

少年と少女は驚き、ビクツと身をすくませました。それから恐々と、声のしたほうへ視線をやります。

顔の高さの辺りに、先ほどの道化のヒトの絵がありました。“純白の闇”の中にあつて厚みも遠近感も正しく認識できないので、その存在はじつに奇妙です。

「どうかされましたか？」
状況に理解がついていけず呆然とする少年と少女に、道化のヒトの絵が言いました。

数泊、呆然沈黙の間を置いてから、はっとしてふたりは首を横に振って応じました。

「そうですね？」
道化のヒトの絵は気遣わしげな表情をして、確認するように訊きます。

少年と少女は、迷いなく首肯して応じました。あの“夢の国”が、もうすぐなのです。ここまで来て、余計な問答をして追い返されたくはありません。絶対に。

ふたりの応えに、道化のヒトの絵は表情を気遣わしげな“それから柔らかな微笑み変化させました。それから満を持するかのよう、その短い手を掲げます。

「では、出入国管理所へ」
パチンと指を鳴らすような音が聞こえ

白光の暗転。

聞こえてくる“楽しげなヒトの声”。

少年と少女の視界が回復するとそこには、“純白の闇”の中にあつて奇妙な存在感ある鋼鉄製の遮断機が下りているゲートがありました。その脇には、高級そうな革製のソファとそれに合わせた繊細そうなガラス製のテーブルが設置されています。ここが“純白の闇”の中でなかったら、ソファもテーブルも雨ざらしです。

少年と少女は、摩訶不思議に直面しているヒトの“形容し難い感覚”に包まれました。そして、ふと訪れた冷静さで、そういえばとひとつ疑念を懐きました。見られないのです。さきほど聞いた“楽しげなヒトの声”の、その音源たる人影が、一切。

「こちらへどうぞ」

いつの間にかソファのところに移動していた道化のヒトの絵に呼ばれ、ふたりは「はっ」と現実離れた現実に意識を引き戻されました。

「どうかされましたか？」

その場から動こうとしない少年と少女を気遣うふうに、道化のヒトの絵が訊きました。

ふたりは慌てて、首を横に振って応じました。ソファのところへ急ぎ足で向かいます。

「では」

道化のヒトの絵が、少年と少女がソファに座つたのを確認してから、

「我が国への入国には“ひとつ”だけ条件がございます。しかし“それ”以外は一切、ございません。年齢、性別、身分、人種、国籍、言語、宗教、犯罪歴を含む経歴、これらは我が国への入国に際しては一切、不問でございます。武器兵器を含む所持品に関しましても、武器兵器は自衛以外の私的使用は原則禁止ですが、持ち込みに制限は一切、ございません」

と、入国に関する説明を述べました。

それを聴いて少年と少女は、はやる気持ちを抑えきれず、前のめりになって訊きました。“ひとつ”だけの条件の、その内容を。

道化のヒトの絵は、じつに丁寧な口調で答えました。

そして。

「お帰りは、あちらの扉からどうぞ」

道化のヒトの絵は満面の笑顔でそう言うと、“純白の闇”へと霧消してゆきました。

少年と少女はソファーに腰を落としたまま、うつむいています。身動きする気配は感ぜられません。

そんなふたりの背後には、空間にポツカリと穴をあけたような“暗黒の扉”が無音でたたずんでいました。

自らの呼吸音がよく聞こえてくる“静けさ”が、場の状況に一切の関心を示すことなく、無表情に横たわります。

そのまましばし“静けさ”は居座り

そしてとうとうに聞こえてきた機械が駆動するときの重たい音によって、この場から追い出されました。

少年と少女は、とくに意もなく、音のするほうに視線をやりました。奇妙な存在感ある鋼鉄製の遮断機が、疲れた中年男性がダルそうに腕を持ち上げるがごとく駆動していました。

遮断機が上昇し終えるまえに、ひとりのヒトが身を少し屈めてゲートの向こう側から出てきました。

そのヒトは、頭に麦わらの帽子をかぶり、その下に耳と首の後ろを覆い隠すようにして白のタオルをはさんでいました。灰色の袖の長いシャツを着て、濃紺のジーンズをはき、足には黒のアサルトブーツがあります。背には、あまり大きなない深緑色のリュックがあり、それを包み込むようにして黒のフード付きロングコートが、伸縮性のあるロープでぐるぐる巻きにされて留めてありました。そ

れぞれでも使い込まれた“汚れ/味”があります。

「おっと、こんにちは」

そのヒトが、少年と少女の視線に気づいて言いました。

少年と少女は、力なく小さく会釈してそれに応じました。

そんなふたりの様子に、

「どうかしたのかい？」

そのヒトは気遣わしげな顔をしてソファアのところまで歩を進め、そう訊ねました。

少年と少女は悔しさを噛み締めるようにつつむき、ポソリと言葉を漏らします。

夢の国に入国するための“ひとつ”だけの条件を、夢の国に入国するための“資格”を、自分たちは有していなかった、と。

そして堤防が決壊するように、その“漏れ”をきっかけにして心音が口から溢れ出てきます。いったいどれほどの想いで自分たちが“ここ”まで歩を進めてきたか。いままさに出国せんとする“あなた”には、この気持ちは理解できないでしょう、と。

そのヒトは、困ったふうな微苦笑を浮かべます。それから言葉を慎重に選ぶような間を置いて、自分は旅人だと述べました。

だから、と経験に由来する断言の口調で言います。

「この国を訪れるまでに様々な国や地域を実際に見て、肌で感じたことのある経験から、あえて言わせてもらっけれど、この国は、キミたちが想っているような“夢の国”ではないよ」

じゃあどのような国なのかと、少年と少女はやつあたりのと自覚しつつ不満と苛立ちを投げつけるふうに訊きました。

旅人は、ファンタジーを信じている子どもに容赦なく“リアルな現実”を教える大人のヒトのように告げます。

「この国は、“娯楽としての夢”をサービスとして対外的に販売提供している国だよ。よそ者からしたらまるで魔法と区別がつかないほどに発展しているこの国の科学技術を活用した、“娯楽としての夢”を、ね」

だからこの国は、と旅人は言い切ります。

「都合のいい優しさある夢の”ではなく、”容赦のない厳しさある現実的な”」

歩き疲れたときにふと見上げた夜空にある星の煌きみたいなの

「いわゆる普通の”国だよ”」

唯一ある入国条件の内容からして、“そう”だろうか？

その旅人の言葉を否定するどころか、むしろ経験に由来する確信として同意している“自分”を認識して、少年と少女は喪失感に襲われました。

まるで燃え尽きた灰のような雰囲気のふたりに、旅人は、

「ところで」

と、声をかけます。

「これから軽い食事をとるつもりなのだけれど、一緒にどうか？」

少年と少女は口を開くことはなく。代わりに、どちらともなく、

「ぐうぐう」とお腹が返答しました。

音もなくたたずんでいた“暗黒の扉”をくぐり抜けると、そこには、雑多な色と雑多な音のある、馴染みある世界が当然のようにありました。

しかし、少年と少女が“純白の闇”へ至るまえに居た場所とは異なっていました。しっかりと整備された道が、いまは背後の石の壁から地平線の先まで真っ直ぐと続いてあるのです。

ふたりはそのことを、旅人に告げました。

食事の準備として火をおこしたりしていた旅人は一瞬、驚いたふうな顔をしてから、自分は“ここ”から入ったのだと述べます。最初に“暗黒の扉”をくぐった自分のほうに、どうやら出口が“寄せられた”らしい、と。

旅人は地図で位置を確認するからと、少年と少女に“故郷”の名を問いました。「それから」「と追加でもうひとつ問います。

「お茶とコーヒー、どっちがいい？」

旅人は地図を見ながら、少年と少女が“故郷”から“この国”に訪れるなら目の前にある整備された道を歩んでくるはずだと述べました。“故郷”から“この国”へ至るには、未開の森を迂回する力タチで、途中にある国を経由してくるのが、一般的な道のりだ、とでなければ未開の森を強行することになってしまう、と。

少年はコーヒーを、少女はお茶を、それぞれ味わいつつ、自分たちは森を抜けて“ここ”に来たと告げました。

それを聞いた旅人は息をのみ、

「……本当に？」

慎重に確認します。

少年と少女は、特別さなど一切ないふうに首肯して応じました。

「その無謀さ無策さ、行動力と実行力、なにより運の強さは」

旅人は硬い黒糖パンをナイフで人数分に切り分け、その上に火であぶってほどよくとろけさせたチーズをのせて、

「もはや尊敬に値するよ」

言葉と共に、ふたりに差し出します。

少年と少女はそれを受け取り、一口。その一口で、まるで目が覚めたかのように、二口、三口と、黙々と食べます。

旅人も一口、食べてから、ふたりに「それで」と訊ねました。これからどうするのか、と。“故郷”に帰るなら、途中の国まで同行してもいいだろうか、と。二日もあれば到着できる距離だし、食料もいまの手持ちで足りるだろうし、と。

自分たちに“帰るところ”はない　小さな音声で、しかしハッキリと、少年と少女は述べました。

旅人は一瞬、責めるヒトの怒り滲む眼差しをしてから、

「……それは、“帰るところ”じゃなくて、“帰りたいところ”だろう」

落ち着きある音声で、“間違い”を気づかせるふう言い、

「ま、どちらにせよ」と、話を続けます。

「この場”に居座ったところで、事態は好転したりしないと思うよ。残念ながら“そこにある国”は、“利益になる奇跡”は起こしても、“善意の奇跡”は起こさない。無利益には無関心だからね。それにそもそも国の外での出来事に、関わらなければならぬ義務はない。だから国の外で誰がなにをしようと、餓死しようが殺されようが、“そこにある国”に“それ”に関わらなければならぬ義務はない。自らに有益な、と判断されたら、もしかしたらなにか動きがあるのかもしれないけれどね」

少年と少女は、“わかつていること”を改めて指摘されたヒトのうんざりとした顔を浮かべました。それから信仰を持つヒトいわく“信仰を持たないヒトが陥る不幸な悩み”に直面したヒトの顔になって、口を開きます。　だとして自分たちに“なにが”できるというのか、と。

「自分の歩く道を、自分の意志で選択できる。なにもないところに道そのモノを拓くこともできる。“そこ”は道じゃあないと指摘されても、“ここ”は私の道だと言い張ることができる。　やろうとすれば、やれることはいくらでもあると思うよ」

言ってから、旅人は「　まあ」と継ぎます。

「その場で立ち止まってなにもしない」ということもまた、選べるけれどね。　“なに”を選択するにしろ、自分で選択した“それ”に“価値／意味”を付ける努力、その“価値／意味”を最大化する努力は、誰にでもおこなえるよ」

だから少なくとも自分は、と旅人は述べます。

「世界を旅する、という自分で選んだ道を、自分の意志で脚を動かして歩んでいるんだ。いままさに、ね」

旅人の言葉を受けて、少年と少女は咀嚼して嚥下するように一度うつむいてから、どうして、と口を開きました。どうしてそこまで、まったくの他者である自分たちに気を遣ってくれるのか、と。

「ただの気まぐれ。見ちゃったのに、見て見ぬふりをしたら、翌朝の目覚めが悪くなりそうだから　なんてね」

旅人はおどけたふうに言うてから、

「ま、正直に告白すれば自分のためだよ」

悪びれたふうは一切なく、

「情けはヒトのためならず、巡り巡って自分のために　」

清々しくすらある態度と口調で告げます。

「自分で歩むと決めた“この道”の“価値／意味”を最大化するために、さ」

* * *

さ。

こ……………ん。

……………い……………さ。

にい……………ん。

「兄さんっ、兄さんってば！」

「……………へ？　はっ！　ん？　どうした？」

「どうしたって……………、どうかしてるのは、さっきからずっと呼んでるのに、ぼーっとしたまま固まってる兄さんのほうでしょっ！」

腰まである長い黒髪をおさげにした、ワンピース姿の若い女性が、語気を強めて指摘しました。

「“今日”が“どういう日”か、ちゃんとわかってるのっ？」

鋭い眼差しが、キツと“兄さん”のことを捉えています。

「もちろん、わかっているよ」

安楽椅子に腰を落ち着けていた、ジャケットにジーンズ姿の若い男性が、静かに応じました。

「わかっているからこそ、“旅人さん”のことを思い出していたんだ」

感慨深そうに述べて、“そのこと”への共感を確認するように、

向けられていた鋭い眼差しをまつすぐ見やり返します。

「あら？ そうだったの？」

若い女性は眼差しから鋭さをすっかりなくして、

「でも、そうね」

と、“兄さん”と同様に感慨深そうに、

「あたしたちが“今日”という日を迎えられるのは、“旅人さん”のお人好しな“気まぐれ”のおかげだものね」

言って、心にある大切な記憶にそっと触れたヒトの温々した穏やかな表情を浮かべます。

「いま、こうして、ぼくたちが文筆家と絵師として“作品/意志”を世に送り出せるのは、歩きたいと思える“この道”を発見できたのは、あのとき“旅人さん”と出逢ったから。本当、“旅人さん”には感謝しても感謝し切れない」

若い男性が述べ、

「本当にそうね」

若い女性が同意しました。

そして、ふたりは、しばし“心にある大切な記憶”を胸の内で見起こします。

とりあえず、という“てい”で一緒に訪れた“夢の国”と“故郷”との途中にある国で、それでも“故郷”に帰るつもりはないと言いつつ、自分たちに、“旅人さん”はわざわざ住み込みで働いて教育も受けられる旅館を見つけてきてくれた。そして旅人としての信頼関係を築く能を発揮して、どこの誰ともわからない自分たちが“そこ”で住んで働けるよう取り計らってくれた。あとから聞いた話だと、旅館の女将さんには、“夢の国”を訪れるまえに“この国”に立ち寄った“旅人さん”に“なにか”恩があるらしく。“よくわからない”自分たちを雇ってくれたのは、“旅人さん”に対するその恩に由るところが大きいしかった。

そして“旅人さん”の計らいで居場所となった旅館で、働き方と

共に叩き込まれた教育の過程で

ぼくは書いて表現することの楽しさを知って、

あたしは描いて表現することの楽しさを知った。

それから、自分たちで歩むと決めた“この道”の“価値／意味”を最大化するために、自分たちにおこなえる努力をした。旅館の仕事をこなして、勉強もして、それ以外の時間は、寝るのも忘れて書いて描いて書き描きまくった。苦しいこともあったし、やめてしまいたいと思うこともあったけれど、最後の一線、ここでやめてしまったら“悔しい”と、どうにも“納得できない”と、そう思えるようになっていたので、小休止をはさむことはあっても、歩む足が完全に停止してしまうことはなかった。

歩みを進めてしばし経てから、いまの自分たちがいったいどの程度なのかを知りたくなった。腕試しに腕がどの程度か知るために、大手の新聞社が主催する文と絵のコンテストにそれぞれ挑んでみた。結果は、ふたりともかすりもしなかった。最終審査なんて程遠く、一次選考で落ちていた。

ぼくは、いままでに味わったことのない“悔しい”を懷いた。

あたしは、いままでに味わったことのない“納得できない”を懷いた。

だから、なにがなんでも一步、また一步を踏み出して、歩みを進めると決めた。

定期的に文と絵のコンテストに挑んで、自分たちがいまどの程度なのかを確認した。挑む回数が増えて二桁に至ったあたりから、一次選考が二次選考になり、二次選考が三次選考になり、ついには三次選考が最終選考になった。

けれど最終選考の壁は高く。それでも挑み続けていたら、いつしか最終選考の“常連”と認識されるようになっていた。

そして不意打ちのように、

いや、まったくの不意打ちで、

文と絵のコンテストを主催する新聞社のヒトから声がかかった

「ぼくたちの“いま”を知ったら、“旅人さん”はどう思うだろう？」

若い男性が、純粹さある疑問を口にしました。自らの“いま”に対する“自信／誇り”のようなモノが、そこから薄っすらと感ぜられます。

「訊かれても、あたしは“旅人さん”じゃないからわからないわよ」若い女性はバツサリと応じてから、「もう一度」と言葉を継ぎます。

「旅人さん”に会いたいわね。それで、あたしたちの“いま”を知ってもらうの。で、“旅人さん”に言うの」
イタズラを思いついた子どもの笑みを浮かべて、口を開きます。

「あなたの“気まぐれ”のおかげで、あたしたちは“こころ”なれました。ってね」

と言い終わった、次瞬。

外から聞こえてきた抗議するようなクラクションの音が、若い女性の述べたセリフの余韻をあっさりとかき消しました。

「あ、いけない。車を待たせていたの忘れてたわ　だから兄さん呼びに来たのにな」

若い女性は“兄さん”が諸悪の根源であるかのように睨みつけて、「ほら、早くっ」

いまだ安楽椅子に尻を置いている“兄さん”の腕を取って急かします。

「わかったわかった」

腕を引つ張られて安楽椅子から尻を浮上させた若い男性は、微笑を浮かべつつ、

「そんなに急がなくなっちゃって　」
と、進言してみます。

「“夢の国”は逃げたりしないよ」

「それはどうかしらね」

腕を引っ張りズンズン歩みを進めようとしていたそのヒトは、じつに愉快そうな笑みを浮かべて言います。

「“夢の国”の“夢ノ商品”がいったいどの程度なのか“極めて厳しく吟味してあげよう”という気が満々のあたしたちが行こうとしているんですもの、いつ逃げ出したって不思議じゃないわ」

小話・其の八拾巻へ困難に直面してもなお気づかない（仮題）へ（前書き）

【己の権利と責任に疎い者ほど自負自称し、他を責める】

小説：其の八拾巻〈困難に直面してもなお気づかない〉（仮題）

《困難に直面してもなお気づかない（仮題）》

悲鳴にも似た金切り音と、勢いを持って地面を擦り引きずる音が、とくになにもなかった昼下がりの平穏さを裂きました。

「ちよつとっ！ どこ見てんのよっ！」

それでもどうにか復元しようとする“昼下がりの平穏さ”を踏み潰すように、女性の憤怒する音声が突き抜けました。

「子どもがいるのよっ！ わかつてるのっ！ ちよつとっ！」

そう主調するように、憤怒する女性は胸に赤子を抱いていました。

「……その、……すみません」

そよ風にすら吹き消されてしまいそうな声量の、まだ幼さを残す男性の音声が、そう述べました。

「……その、考えごとをしていて……すみません」

弱々と詫びる男性は、地面に刻まれた真新しいブレーキ痕の延長線上にある自転車に跨っていました。赤子を抱いた女性の文字通り目と鼻の先で、停止しています。

「今回は、たまたま運良く大事にならなかったけど。ねえ、本当にわかつてるの？ 自分がどれだけのことをしたのか」

我が子を守るための容赦ない本性ある、鋭い睨みを男性に向け、女性は指摘します。

「……はい……すみません」

指摘と平謝りのやり取りをしばし繰り返し

地獄に差し伸べられた慈悲の“蜘蛛の糸”がごとく。やり取りに、ふと切れ間が生じました。

もうここしかない、と確信して、自転車の男性は謝る言葉を口に

しながらペダルに置いた足に力を込めます。

ゆつくりと密やかに、しかし確実に、自転車はこの場から去るために動き出し、男性は謝る言葉を口にしながらすごすごと去って行きました。

「あ、ちよつとっ!」

赤子を抱いた女性は、去り行く背中にそう言葉を投げました。

言葉を投げつけられた背中はより速度を増して遠のいて行き、やがて見えなくなりました。

「なんなのよっ、もっつ」

女性は深い憤りを吐きながら、背中が見えなくなつたほうを睨みつけました。

「ちよつとっ、あなたっ、いったいなにを考えているのっ」

またも怒る女性の声がしました。しかしそれは赤子を抱いた女性のモノではなく、なので彼女は憤りの尾を引いたまま、声が聞こえてきたほうへ訝る視線をやりました。

そこには、眉尻を吊り上げた、とてもわかりやすく怒っている初老の女性の姿がありました。

「あなたっ、いま自分が小さな子どもを抱いているということをおかっているのっ」

初老の女性の怒りは、赤子を抱いた女性に向けられていました。

「……わかっていますけど、それがなにか？」

いまのさつきであることに加え、怒りを向けられねばならない理由が知れず、赤子を抱いた女性は少しムツとして応じました。

その応えに、初老の女性はさらに眉尻を吊り上げて言います。

「じゃあどうして道の真ん中に突っ立っているのっ! いくらこの道が狭くて車の通りが少ないからって」

小話・其の八拾弐へとれんどなふあっしょん（仮題）（前書き）

【隣の庭のモノほどよくよく見えて、欲しくなる】

小説：其の八拾式へとれんどなふあつしよん（仮題）

《とれんどなふあつしよん（仮題）》

とある時代の、とある国を、ひとりの男が知るために訪れました。

「ここが平和ボケと称される　夢の国か」

ひとりの男はテイステイングするように“平和な”空気を吸い込み、

「我が祖国とここまで風味が異なるとは……」

感慨深げに、やわらかく吐き出します。

「我が祖国の空気もこの風味になれるだろうか……」

この男の祖国は、去年の今頃、酷い戦争状態にありました。しかしそれはいまから数ヶ月前、勝者も敗者もなく息切れるに終わり、現在は戦災からの復興とそれに伴うチャンスによくも悪くも湧いています。

「いや、“そう”するんだ。そのために“この国”を知りに訪れたのだから」

そして男は、“この国”のあらゆる最先端がある街へ足を運び

「そんな……これは、どういう……」

そこに平然とある光景に、愕然としました。

兵士の身なりをしたヒトたちの姿が、そこらじゅうにあったのです。

見えるところに武器を携行しているヒトの姿はありませんでしたが、男が懐いていた“平和ボケ”の像とは、まったく一致しません。「あの、なにかお困りですか？」

想像と現実の違いに困惑して固まっている男に、ひとりのヒトが声をかけました。このひとりのヒトも、他のヒトと同様に兵士の身なりをしています。

基本的に礼儀正しく親切、というのが“この国”の国民性だと聞いていたので、男は本当にそうであるらしいと頭の片隅で思いました。が、しかしその礼儀正しく親切なヒトもまた兵士の身なりをしているので、「なぜ？」と困惑が深まってしまいます。

なので男は自分がいま直面していることについて素直に話し、問いました。

「あなたたちは兵士なのですか？ “この国”は憲法で“戦争放棄／戦力不保持／交戦権否認”を定めているはずでは？」

兵士の身なりをした“この国”のヒトは、最高の冗談を聞かされたときの愉快そうな笑みを、平静なふうを装いながら浮かべ、

「あなたのおっしゃるように、“わたしたち／わたしたちの祖国”は“戦争放棄／戦力不保持／交戦権否認”をしています」

と、応じます。

「ですから、わたしは兵士ではありません。他のヒトたちもそうです。ここにいるのは“媒体越し／媒介越し／フィクション”の軍事しか知らない、清き一般市民ですよ」

「では、なぜ、そのような身なりを？」

「いまトレンドのファッションだからです」

「兵士の身なりが、ファッション？」

「ええ。ほら、つい最近まで“とある国”が酷い戦争状態だったじゃないですか。テレビ番組も新聞も雑誌も、ずっとそのことをネタにしています。いまもまだ戦後復興が云々と話題にしています」

まあ、そのおかげで、戦場の映像や写真、兵士の姿を、目にする機会がいつの間にか増えたんですよ。で、ほら、やっぱりカッコイイじゃないですか、祖国のために戦う兵士の姿って。ボケと言われるくらいに平和なこの国ですから、みんなやっぱりそういう刺激に感化されやすくて。まあ、言ってる自分もその感化されたひとりなのですが――

そう話す兵士の身なりをしたヒトの背後では、薄汚れた鳩たちが地べたに散らばるファストフードの食べこぼしのパンくずをせっせ

やじいばあじいまた。

小話・其の八拾参へある意思のあるツール（仮題）（前書き）

【ある意図の代理者は、前向きな変異因子を装って突然に現れる】

小話：其の八拾参へある意思のあるツール（仮題）

《ある意思のあるツール（仮題）》

A国とB国の国境となつてゐる河に架かる唯一の橋の上に、大勢のヒトの姿がありました。彼ら彼女らの前には簡易的な舞台が組まれてあり、皆そちらへ期待する前向きな高揚感と共に意識を向けています。

舞台の、それぞれの国側には、それぞれの国旗が掲げてありました。

国旗の前には高級なスーツに身を包んだふたりの初老の男性の姿があり、大勢のヒトが向けてくる熱い眼差しに、微笑みを浮かべて応じています。ふたりは、A国とB国のそれぞれの、国の運営の最高責任者でした。

「本日は、両国の歴史に刻まれる、とても重要な日となるでしょう」
A国の運営の最高責任者の男性が、舞台上を注視する大勢のヒトに向けて口を開きました。厳かな口調で、噛み締めるように、「そのこと」を表明します。

「互いに“近くて遠い国”であつた我々の関係は」
そこでA国の運営の最高責任者の男性は、B国の運営の最高責任者の男性のほうを向き、

「本日から変わるのです」

最高の笑顔で、握手を求める手を差し出しました。

「ええ、そうですね」

B国の運営の最高責任者の男性も最高の笑顔でその手を取り、応じます。

「“近くて遠い国”であつたA国とこうして握手している。本当に“素晴らしい”です」

その瞬間、“A国のヒトたちは”我が耳を疑いました。

A国の運営の最高責任者の男性は当惑しつつも慎重さを忘れることなく、

「いま、なんと?」

注意深い姿勢で、発言に関して訊き返しました。

「本当に“素晴らしい”です、と」

B国の運営の最高責任者の男性は、空気の性質がガラリと変わったことを敏感に察し、どういふことかと訝りつつ、返しました。

「ぶざけるなっ!」

舞台の下方、A国側から怒声が投げられました。ひとりの青年が、あ然とするヒトの人垣をかき分けて現れます。

青年は期待を裏切られたヒトの刃物じみた眼差しで“そちら”を見やりながら、素早い動きで止めようとする警備をかわし、舞台によじ登りました。そして指摘し抗議するために“そちら”へ歩を進め

パンツ、とパーティー用のクラッカーが発破したときのような音が鳴りました。

転瞬。

B国の要人護衛官は“個人防衛火器／短機関銃に類似した火器”を素早く取り出し、護衛対象者に向かって歩を進める明らかに不審な青年に狙いをつけて構え、一切の躊躇いなく引き金を絞りました。

A国側の周辺警備をしていたA国の軍隊の兵士たちは、突然の発砲から自国民を護るために、自国民に銃口を向けている“B国の人物”に自動小銃の狙いを定め、一切の躊躇いなく引き金を絞り

* * *

A国とB国は河を挟んで隣り合っている近い国であるにも関わらず、個人単位ですら“交流／国交”をおこなっていませんでした。

古文書には、互いに友好国であったという記述が残されています。が、その記述から数行後には、戦争という言葉が記されており、それ以後、友という言葉が出てくることはありません。なによりこの古文書は、史実を記録した歴史書というより、神話に近い解釈のされかたをしているモノなので正確さは保証されていません。そして当然のように、両国の専門家による検証もされていません。

ただひとつ確かなことは、いままで一度も古文書の内容について両国間で検証されたことがない。古文書が記されてから、まったく“交流／国交”がおこなわれていないということだけです。

神話のような古文書の時代から“交流／国交”がおこなわれていないA国とB国ですから当然、言葉が通じません。“交流／国交”がありませんから、あえて言語を翻訳する必要が生じない。生じなかったのです。A国とB国も大多数のヒトは、よくわからない国のことより、自分の暮らしに関する事柄に神経を集中させていますから致しかたありません。

しかしだからといって、未知なる“河の向こう側”に対して好奇心を刺激されたヒトが皆無であったというわけではありません。極々少数ではありますが、“河の向こう側”を知ろうと思いついたヒトはありました。が、その極々少数のヒトたちは、とても声が小さかったり、体力が続かなかつたりして、変化を生じさせるには至りませんでした。これまでは。

それは突然変異のごとく。ある日、ある時、突然に、声が大きく、体力のある、“河の向こう側”を知ろうと働きかけるヒトが現れました。

その突然変異的なヒトは、とても運よく幸いなことに、変化を生じさせるのに必要なモノをことごとく有していました。

ひとつ目は、国の運営の最高責任者に提言することができる立場にあるヒトと親しい関係でした。相手の都合を考慮しつつ、食事を共にする機会を設け、そこで“河の向こう側”と“交流／国交”を持つことに関する考え。それをするることによる“うまみ”につい

て述べました。そして相手から、「検討する」以外の実効性のある返答を引つ張り出すことに成功しました。

ふたつ目は、“河の向こう側”と“交流／国交”を持つためのプロセスにおいて、もっとも高い壁となる言語に関する問題を解決するための考えと手段でした。

突然変異的なヒトの姿は、A国でもB国でもなく、C国の高級ホテルの一室にありました。広い室内に派手さはなく、設えられた調度はどれも簡素ですが、それらすべて庶民が何年も汗水流さなければ入手できないような超一級質の品々です。

そんな庶民の生活臭とは一切、無縁な場所です。

突然変異的なヒトの対面、ソファーに腰を落ち着けてノンカフェインの紅茶を味わっていたそのヒトは、

「なるほど、“そちら”の“考え”はよくわかりました。こちらにとつて、とても“おいしい”お話であるということも」

説明された“考え”に対して、商売人の最高の微笑みを浮かべることに応じました。

「“ご要望するモノ”は、我がC国の技術力。その中にあつてもっとも優れている我が社の技術力をもちいれば、難なく製造できるでしょう」

C国は、A国、B国、双方と悪くない関係を有している大きな国でした。そして、世界でもっとも優れた科学技術を有している国でもありました。C国の科学技術の一端に触れた他の国のヒトは皆、「これは、じつは魔法なのでしょうか？」と大真面目に確認するほどです。

「それにしても」

C国のそのヒトは“そちら”に注意深い眼差しを向け、「同一の筋から紹介されたA国とB国それぞれの方から、同じ“提案／考え”を受けるとは。まったく素晴らしい偶然です」

独り言ぶつを装って言葉を漏らしました。

それに対して

A国から訪れた突然変異的なヒトは、言葉ではなく微笑みを浮かべることで応じました。

B国から訪れた突然変異的なヒトは、言葉ではなく微笑みを浮かべることで応じました。

それから数カ月後

国に戻って各方面との調整をおこなっていた突然変異的なヒトのもとに、C国から荷物が届きました。ヒトが入っても余裕がありそうな、大きな木箱でした。

ボールのようなモノをもちいて開封すると、そこには緩衝材に護られた数多くの“それ”がありました。

突然変異的なヒトは速やかに、国の運営の最高責任者に提言できる立場にあるヒトと食事を共にする機会を設けることにしました。

そして会食のとき、突然変異的なヒトは持参した“それ”を相手に提示しました。

「ほう、これが……」

提言できる立場にあるヒトは目の前に置かれた“豆のようなモノ”を手に取り、吟味するふうに眺め、

「……我々の抱える言語に関する問題を解決する手段？」

真意を確認するように、相手の目の奥に眼差しを向けました。親しい関係でなかったら、バカにするなど怒声を上げていそうな面持ちです。

それに対して突然変異的なヒトは、懐から手帳を取り出して広げると、そこに書き込んだあるモノを“わざとらしいくらい”に睨みながら、

「*****」

と、口から音声を発しました。

「……………」

提言できるヒトは数拍、ポカんと半口を開けて固まってから、

「……いまなんと？」

真意を確認するがごとく相手の目を見て、訊きました。口元には薄っすらと苦い笑みが浮かんであります。

突然変異的なヒトは愉快そうな表情をして、提言できるヒトの手にある“豆のようなモノ”を示し、耳栓を装着するようなくさをして見せました。

「“これ”を耳につければわかる、と？」

提言できるヒトは八割が疑の半信半疑な表情を浮かべつつ、それでもいちおう試してはみまます。好奇心と残り二割の信が、騙されたと思つてと、そつと肩に手を置いて促してくるのです。

「それで？」

耳につけたことを相手に見せ、先を求めました。

突然変異的なヒトはチラリとイタズラっぽい笑みを浮かべてから、

「*****」

と、先ほどとまつたく同じ音声を発しました。

数瞬の間を置いてから、

『こんにちは』

抑揚のない音声がありました。

しかしそれをこの場で聞いたのは、

「なんだっ」

提言できるヒトの耳だけでした。不意のことに驚き戸惑いつつ、

「なんだっ？」

正しい答えを知っているに違いない対面の人物に、説明を要求します。

突然変異的なヒトはイタズラを成功させた子どものような表情をして、話しました。“豆のようなモノ”が、じつはC国製の“言語を瞬時に翻訳してくれる装置”であると。

「なるほど、これはすごい。　　ということは、先ほどの“*****」

“*****”は、“こんにちは”という意味の相手国の言語だったのか」「提言できるヒトは感嘆たる面持ちで、

「“これ”があれば、話し合いを滞りなく進められる。これはすごい。すごいことだ。いま私たちは、歴史書に必ず記載される出来事の当事者なのだ。わかるか、このすごさが？」

熱のある言葉を吐き、共感を求める眼差しを対面に向けました。それに対して

突然変異的なヒトは、言葉ではなく微笑みを浮かべることで応じました。

そして順調に話は進み

「本日は、両国の歴史に刻まれる、とても重要な日となるでしょう。間違いなく歴史書に記載される“その日”は、訪れました。

「互いに“近くて遠い国”であった我々の関係は、歴史の証人たろうと橋の上に乗った人々の耳には、例外なくC国製の“言語を瞬時に翻訳してくれる装置”がありました。

「本日から変わるのです」

A国の運営の最高責任者の男性は最高の笑顔で、述べました。握手を求め手を、差し出します。

「ええ、そうですね」

B国の運営の最高責任者の男性も最高の笑顔でその手を取り、応じます。

「“野蛮で低俗な国”であるA国とこうして握手している。本当に“胸くそ悪い”です」

その瞬間、“言語を瞬時に翻訳してくれる装置”を介して聞こえてきた言葉に、“A国のヒトたちは”我が耳を疑いました。

A国の運営の最高責任者の男性は当惑しつつも慎重さを忘れることなく、

「いま、なんと？」

注意深い姿勢で、発言に関して訊き返しました。

「本当に“胸くそ悪い”です、と」

B国の運営の最高責任者の男性は、空気の性質がガラリと変わっ

たことを敏感に察し、どういふことかと訝りつつ、返しました。

「ぶざけるなっ！」

舞台の下方、A国側から怒声が投げられました。ひとりの青年が、あ然とするヒトの人垣をかき分けて現れます。

青年は期待を裏切られたヒトの刃物じみた眼差しで“そちら”を見やりながら、素早い動きで止めようとする警備をかわし、舞台によじ登りました。そして指摘し抗議するために“そちら”へ歩を進め

歴史的な日を盛り上げるために、と急遽C国から贈られてきた大量のパーティー用のクラッカーが舞台裏に置いてありました。その中のひとつが突然、パンツと発破しました。

転瞬。

B国の要人護衛官は“個人防衛火器／短機関銃に類似した火器”を素早く取り出し、護衛対象者に向かって歩を進める明らかに不審な青年に狙いをつけて構え、一切の躊躇いなく引き金を絞りました。A国側の周辺警備をしていたA国の軍隊の兵士たちは、突然の発砲から自国民を護るために、自国民に銃口を向けている“B国の人物”に自動小銃の狙いを定め、一切の躊躇いなく引き金を絞り

* * *

突然変異的なヒトたちの姿は、C国の首都の官庁街の一角にある交差点に面した喫茶店のテラス席にありました。ひとりはブラックのコーヒーを、ひとりはミルクと砂糖たっぷりの紅茶を、味わい楽しんでいきます。

「号外っ！ ごおーがいですっ！」

お国の動向をいち早く報じるためこの場に居を構えている新聞社のほうから、長方形の紙の束を抱えたヒトが慌ただしく飛び出して

きました。交差点にいたヒトたちの注目を一気に集めます。

「国交正常化の式典をおこなっていたA国とB国が、戦争状態に陥って」

その緊迫した音声を聞きながら、突然変異的なヒトたちは手にあるカップで乾杯をするようなしぐさをしました。

「あの、お客様」

喫茶店の店員が、突然変異的なヒトたちを呼びました。

「お電話です」

突然変異的なヒトたちはさして驚いたふうもなくそれに応じ、テラス席から電話の設置してある店の奥に移動します。ひとりが受話器を耳に当てると、

「今回は、ご苦労だった」

まるで見ているかのようなタイミングのよさで、そう声がかかりました。

「キミたちのおかげで、我がC国の軍需産業は忙しくなる。国内の雇用問題は解消されていくだろう。他人の不幸を利用した戦争バブルだと非難する者も少なからずいるだろうが、自分が美味しい飯を食べられるなら大半の者は黙することを選ぶだろうからその点は問題ない。だが、ひとつだけ問題が残っている。この状況を生むために、C国製の“言語を瞬時に翻訳してくれる装置”に意図的な間違いを仕込んでおいたことや、その他の諸々の事情を知っている者たちの存在なわけだが。なに、キミたちの手をわずらわせることはないよ。解決策はもう実行している。だからキミたちは、しばしコーヒーと紅茶を味わってくれたまえ」

そこで通話は切れました。

喫茶店の外から悲鳴が聞こえました。

一台の乗用車がまったく減速する気配なく一直線に、喫茶店に向かってきていました。

乗用車がテラス席を壊して店内に突っ込んでくると転瞬

大地が揺れ、衝撃が身体を突き抜きました。

いまさつきまで通常営業していた喫茶店があった場所とその周囲には、大きな火柱と悲鳴がごちゃ混ぜになってありました。

小話・其の八拾四へ欲しいのは理想の（仮題）へ（前書き）

【その関係が生ずることには拒否権がない】

小説：其の八拾四〈欲しいのは理想の（仮題）〉

《欲しいのは理想の（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある街の、とある家庭のリビングに、テーブルを囲む複数のヒトの形をした影がありました。いまが夕食時ということもあり、テーブルの上には品目豊かな食事が並べられてあります。

「好き嫌いせず、ちゃんと食べるんだぞ」

テーブルの上座にある影が、下座にある影に向かって、落ち着きある男性の音声で言いました。

「今日は“*****ちゃん”の誕生日だから、“*****ちゃん”の好きなモノしかないものねー、ちゃんと食べられるよねー」
柔らかな女性の音声が、下座にある影に向かって微笑みかけるように言いました。

そこには、至極ありふれた、とある一家の夕食の光景がありました。

が、それは、ドアを無遠慮に開け放つ音と、開け放たれたドアから闖入してきた人物によって一変してしまいます。

「な、なんなんだキミはっ！」

上座の影は突然の出来事に驚き戸惑いつつ、一家の長としての責務として前に進み出、闖入者と家族との間に立ちます。

闖入者は“愁いた／憂いた”眼差しで進み出てきた影を見やっつから、その背後にあるふたつの影に視線を移しました。ひとつの影は先ほどと同様の“愁いた／憂いた”眼差しで見やり、もうひとつの影に対しては、“*****ちゃん”と呼ばれていた影に対しては、憤怒と憎悪と嫌悪の混在する刃物じみた眼差しを向けます。その一点を注視して、闖入者は動きました。それを阻止しようとなつかみかかってきた影を力ずくで投げ飛ばし、“*****ちゃん

”と呼ばれていた影に手を伸ば　そうとしたところで、先ほど投げ飛ばした影に脇から体当たりされて体勢が崩れます。闖入者はすぐに体勢を立て直そうとしますが、脇腹に生じた違和感がそれをよしとせず。手をやるとヌメリとした触感があり、まさかと見やった手には赤い液体が惜しみなく付着してありました。そんな、という意外な眼差しをそちらに向けると、そこには赤い液体を滴らせている果物ナイフを握った一家の長の影がありました。

一家の長の影は“家族を守るため”にいたしかたなく、闖入者が動かなくなるまで果物ナイフをもちいた正当防衛を行いました。

そして。

一家の長の影は“家族を殺した”罪で法により裁かれ、有罪となりました。

これが重大な間違いであることを確信している“唯一残された”家族たる影は、

「夫は、私と我が子を守るためにいたしかたなく」と、潔白を訴えました。

しかしそれがまともに相手にされることはありませんでした。

ただ、新聞や雑誌のキャッチーな見出しにはなりました。

それを見やった不特定多数のヒトは、とりあえずの話のネタとして“このこと”に関して口を開きます。

「自分の子ども」をナイフでめった刺しにしたって」

「自分の子ども」が思い描いた通りに育たなかったからって、ある日を境に“人形”を子どもに見立てていたっていう」

「本当の子どもは、親の思い描いたそれとは違う、自分の夢を実現してその報告に親を訪ねてああなったらしい」

「人形の子ども／理想／虚像」を守るために、「本当の子ども／

現実／実像”を正面から見ずに“排除／否定”してしまっなんて

┌

小話：其の八拾五へたられば（仮題）（前書き）

【些細な違いが大きな違い】

小話：其の八拾五へたられば（仮題）

《たられば（仮題）》

人生の九割九分は嫌な出来事であると、私は経験から思っている。そして残りの微々たるところで気まぐれ的に起こる好意的な出来事によって、“もしかしたら”という淡い期待を懐き、どうにかいまを継続する。

なんて面倒くさい言い回しをしてみたところで、べつに現状が好転するわけでもないのに。無駄で無意味とわかっていてもやっしてしまうのは、ヒトの性というやつか。

まあ、つまるところ、簡単に述べてしまえば、こここのところずっと“ついてない”のだ。なにをやってもうまくいかない。それどころか、まったく身に覚えのないことで責められたり不評を受けたりする。

だから今日も私はまったく心持ちよくなり我が家に戻り、部屋の明かりを点ける気力もなく、リビングのソファーにダイブした。クッションに顔を埋めて、心の底から深々とため息をひとつ吐き出す。クッションは湿っぽい熱を帯びて、けれどすぐに冷たくなる。

しばしクッションに顔を埋め そのまま手探りでソファー前のテーブルに置いてあるテレビのリモコンを取り、テレビを点ける。数瞬の間を置いてから、今日のニュースを読み上げる抑揚のない音声が届いてきた。

そもそも関心がないので右から左に聞き流していたら、不意と“あるニュース”に気を引かれた。クッションから顔を離して、テレビに意識を向ける。

気を引かれた、と言い表すと、ともすれば私が冷静であるかのように受け取られるかもしれないが、実際のところは動揺すらしていた。

そのニュースは、ある凄惨な事件に関するものだった。事件現場の映像や、容疑者に関するパーソナルな情報が、もり立てる効果音と共に繰り返し映しだされている。

私の気を引いたのは、しかし事件そのモノではなく、容疑者に関するパーソナルな情報だった。

生い立ちや境遇や夢やその他いろいろ

私のそれとまったく同じだったのだ。

ギクリともドキリともした。異なるところは“それ”だけだった。

テレビ画面の中に、明日の自分の“もしかしたら”の姿があったのだ。

小話・其の八拾六へこだわり（仮題）（前書き）

【そんないつもの】

小説：其の八拾六へこだわり（仮題）

《こだわり（仮題）》

「いつもそうだよね」

肩口で切り揃えられた黒髪をした女の子が、言いました。いつもは勝ち気な眼光を放っている目が、いまは呆れたふうにジト目です。そんな彼女のジト目の向く先で。

「んー。そだね」

あまりぱっとしない見てくれの男の子が、おぎなりに応じました。
「……………」
女の子は、ちょっとイラツときちゃったときの微笑みを浮かべます。

しかし男の子は、それに気がつきません。

ふたりは対面する形でこたつに収まっているので、普通ならどんなに鈍くても相手の表情の変化くらいには気がつくものです。

が、男の子には、気がつくことができない、それはそれはんごとない理由がありました。

いま男の子は、みかんの実から白いアレを取り除くことに注力しているのです。

女の子はそんな彼を、不満混じりの目でじいと注視し

「……………」

と、驚愕するヒトの顔をして、明後日の方向を指差しました。とても偶然なことに、男の子がみかんの白いアレを綺麗サツパリ取り除き終えたタイミングで。

「なにもないじゃないか……………」

つつい条件反射で明後日の方向を見やってしまった男の子が、抗議の声を漏らしつつ視線を戻すと、

「……あ」

いまさつきやつと処理を終えたみかんの実が、その姿を消していました。皮と白いアレだけが、不要とばかりに残されてあります。

「……」

男の子は黙したまま、確信を持ってみかんの行方の心当たりへ視線をやり、

「……」

もはや諦めたヒトの眼差しで、それでもいちおう非難しました。

女の子は手にある綺麗サツパリしたみかんの実を半分にして、

「じゃあ、はんぶんこ」

しよーがないなあーというふうはその半分を差し出し、けれど相手からの返答を待つことはなく、残りの半分を一口で食します。

「……はあ」

と差し出された半分を受け取りつつ、ため息を吐く男の子に、

「みかんなら、ほら、まだいっぱいあるよ？」

女の子は、お盆に山積みになされたみかんを示して言いました。

「また私のために剥け、って？」

男の子はうんざりしたふうに返しました。

「そんなつもりはなかったけれど、剥きたいなら、どうぞ？ 食べる用意はできてるから」

裏に剥けという意が感ぜられる女の子の言葉に、

「はあ……」

男の子は、いちおうの抗議の声をささやかにあげておきました。

「……いつもそうだよね」

小話・其の八拾七へ説得力(仮題)へ(前書き)

【それ相応のそれが】

小説：其の八拾七（説得力（仮題））

《説得力（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある街に、とある大きな公園がありました。緑豊かな公園で、休日は親子連れやカップル、ご老体やストリートパフォーマーなどで賑わいます。

そんな公園の地図板の前で。

「んんー？」

ひとりの男性が、眉根を寄せて首を傾げていました。

「珍しく難しい顔をして、どうしたの？」

ひとりの女性が、見上げるようにして訊きました。首を傾げている男性と手をつないでいるので、訊く言葉に合わせてちよいちよいと軽く手を引きます。

「ん、んん。いや、まあ、大したことじゃあないんだけど」

そう言つて男性は、目の前にある地図板　の隣にある掲示板の、ある一点を指差します。

「これはなんなんだろう、つて思つて」

女性はその指の示す先を見やり、

「これつて、この張り紙のこと？」

いちおう確認します。

「うん」

「むう……確かに、なんなんだろう」

女性も、男性と同様に眉根を寄せて首を傾げます。

そんな首を傾げているふたりに、

「あの、どうかしましたか？」

ジャージ姿の青年が声をかけました。ジョギングをしていたらしく、頬は上気し、額には薄っすら汗が滲んでいます。

「自分、いつもこの公園を走っているの、道に迷っているのなら、

お役に立てると思いますが」

「あ、いえ、道は地図を見てわかったんですけど……」

青年の好意にお礼を述べつつ、ふたりは首を傾げていた理由を説明しました。

それを聞いた青年もそちらを見やり、

「確かに……これは、なんなのだろう？」

ふたりと同様に首を傾げます。

「昨日ここを走ったときは、こんなモノなかった……はず」

そんな首を傾げるふたりと青年に、

「どうかなさいましたかな？」

初老の男性が声をかけました。犬の散歩をしていたらしく、その足元には中型犬が大人しくしています。

ふたりと青年は、かくかくしかじかと首を傾げていた理由を説明しました。

それを聞いた初老の男性もそちらを見やり、

「ふむ……確かに、これはいったいなんなのだろうか？」

例にならうように、眉根を寄せて首を傾げます。

そんな彼らの首を傾げる光景は、公園を訪れている大多数のヒトの好奇心と目を惹き

大多数のヒトが、眉根を寄せて首を傾げることになりました。

時は経過し

ヒトの姿が減った夕暮れの公園。

昼間、多数のヒトの首を傾げさせた掲示板の前に、作業服を着た男性の姿がありました。不機嫌そうに目尻を釣り上げています。

「まったく、最近のヒトの頭の中はどうなっているんだ」

男性は多数のヒトの首を傾げさせた掲示板の張り紙を剥がしながら、そう口から漏らしました。そしてその張り紙を見やりながら、「ゴミはポイ捨てしないでっ！ みんなの公園は、みんなでキレイに使いましょっ」の言葉が理解できないのか、まったく「

落胆したふうに、深々とため息を吐きます。

男性の手にある張り紙には、油性のマジックペンで、シミズがのた打ち回っているような文字らしきモノが書かれてありました。

そんな文字らしきモノが書かれた張り紙が貼ってあった掲示板の周囲には、数多くのヒトが群れていた証明のごとく、多数のゴミが散らばってありました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1986e/>

名も無き小話（掌編 / 短編集）

2011年10月19日09時16分発行